

第8章 栄光と失意——都

[第8章その一]

げんほう げんしよく
元豊8年 [1085年]、蘇軾50歳。

げんゆう
元祐元年 [1086年]、蘇軾51歳。

■ 【08-1-001】 次韻趙令鑠

【解題】12月上旬、蘇軾は都に到着した。都での日々は3年間余り、その多くの時間を政争に費やすことになる。朝廷内の抗争について詳しく見るのは労力の浪費であろうと訳者は考えるので、ごくあらましかを最初に記し、あとはその都度必要最小限の顧慮を払うだけとする。蘇軾が帰還したときの朝廷には、王安石と神宗皇帝が始めた改革政治を堅持しようとする改革派 [後世の用語で新法党という] として蔡確 [宰相]、章惇 [副宰相] らがいて、高太后によって召された保守派 [旧法党] として司馬光 [副宰相]、呂公著 [副宰相] らがいて、両者の主導権争いが激化しつつあった。その間に韓縝 [宰相] がいて、無難に振る舞おうとしていた。章惇は改革派の一番の切れ者で、保守派の重鎮である司馬光をマークして激しく攻撃した。そのころの様子を『宋史』の「蘇軾伝」は以下のように記している。

【訳文】

蘇軾はもともと司馬光とも章惇とも親しくしていた。このとき司馬光は門下侍郎 [副宰相に相当] で章惇は枢密院 [副宰相に相当] で、二人は相容れない関係にあり、章惇はいつも司馬光を侮ったり皮肉な言葉を投げかけたりしていた。司馬光はそれに苦しめられ、蘇軾に助けを求めた。

蘇軾は章惇に会うとこのようにいった。

「司馬光殿はいま世の中の人々からはなはだ重く見られています。昔、許靖きよせいに対して、蜀しよくの劉備りゅうびは『実態のない虚名でしかない』と、見下した態度をとりました。そのときに、法正ほうせいは劉備にいいました。『許靖は浮ついた誉れではあっても、そのことが世間に広く知られています。もし許靖を礼遇しなければ、天下の人々はあなたさまは賢者をないがしろにしていると見て、よくないことになりましょう』。劉備はその忠告を入れ、許靖を高い地位に就けました。許靖であっても侮蔑してはいけなかったのです、まして司馬光殿はどうなのでしょうか」。

章惇はその通りだと受け止め、司馬光はそれから少し安心できるようになった。

【補足】 [(1) 蘇軾しよくじけんが章惇しょうてんにアドバイスしたときに引いたのは、三国時代の劉備りゅうびが蜀しよくの地を手に入れた直後の出来事きよせい。許靖は蜀の前の主人に仕えて、賢者として評判が高かった。しかし、前の主人を見限って劉備のもとに投降しようとしたことから、劉備は不誠実であるとして許靖を用いようとしなかった。劉備の参謀を務める法正ほうせいは、蜀の統治を始めるに当たって賢者を重んじる姿勢を示すべきだと劉備に助言したのである。(2) 『宋史』に引かれているこのエピソードは蘇軾の姿勢を象徴的に示すものと見てもよいであろう。改革派と保守派の権力抗争こうたいこうたいごうは高太皇太后の強力な後押しを受けた保守派が勝利をおさめ、翌年になると改革派の主力メンバーは1人残らず都から追放され、司馬光しよくこうが宰相になり、王安石おうあんせきが考案した新法は次々に廃止されるようになる。蘇軾は司馬光とは少しばかり考え方が異なり、実効性がすでに証明されている新法は廃止する必要はないし、急な制度変更は社会に混乱をもたらすとして、実情に応じて柔軟に政策を選択するよう主張した。しかし、流れは白か黒かをはっきりさせる方向で加速し、保守派の一員でありながら蘇軾の立場は次第に難しくなっていくのだった]

【解題】 この項の表題に掲げたのは、趙令鑠ちようれいしやく あざな はくけん [字は伯堅] の詩に次韻した詩。趙令

鑣は保守派の官人である。遡れば、都において改革を正面切って批判するほとんど最後の1人となった蘇軾こうが杭州副知事として出て行ったのが14年前。その後、密州知事みつの任を終えてから都に入ろうとしたものの、門の外で止められたのが8年前。そして、6年前の秋から冬にかけて、都にいたことはいたのだが、そのときは獄中に置かれた。かくて、長年の苦難を乗り越えて都に戻った蘇軾は、都に着くやいなや、その帰還を待っていた大勢の人々と矢継ぎ早に詩の贈答を繰り返すことになるのは自然の流れで、ここから見るのは次韻詩の進行である。

【訳文】

六年のあいだ、私は東の坡で豊作の報せを聞いていた。
いま恥じらうのは、白髪頭しら が あたまになって都の紅塵こうじんの中このこ出でてきたこと。
いまも、枕につとぎに田舎の谷や山を夢に見る、
しかし、我が門前には、早くも公務の使いが続々と訪れる。
かねてからの年少の友ちやうれいしやく [趙令鑣]は、まことに瓊たまのように美しい樹きといってよく、
筆を執ると、文字から風が生じて垣根がそよぐほどである。
礼部郎れいぶろうとなった私の仕事しごとを貴君が見よと思ったならば、
甕かめの間を探してみるのがよいのかも知れない。
晋しんの時代りぶろうに吏部郎ひつたくとなった畢卓が、
酒の匂いにつられて隣家に忍び込み、甕の脇で酔いつぶれてしまったように、
私は老いてもつばら酔いの境地こそが郷里だと思っているのだから。

【補足】 [(1) 趙令鑣ちやうれいしやくは神宗皇帝しんそうと同年、同月、同日、同時の生まれであったとする
言い伝えがあり、だとすると38歳で、確かに「年少の友」である。(2) 都には、蘇軾
が黄州こうでどのような日々を送ったのか知りたいと思う人がたくさんいたであろう。詩

を作れば、それを読むのは例えば趙令鑠一人に留まるわけではない。多くの人の目に触れるようになることを意識してこの詩を作ったのだろう。黄州で辛い思いをしたなどとはいわず、また朝廷に戻ってきての抱負を述べるようなこともしない。斜に構えたポーズと見せて、実は用心深くこの詩を作ったのだろう。(3) 蘇軾はこの詩にあるようにれい ぶ ろうじゆう 礼部郎中 [官位を表す称号] として都に召され、たちまち昇進する]

■ 【08-1-002】 次韻趙令鑠惠酒

【**解題**】 上の詩に見たちようれいしやく 趙令鑠が酒を贈ってくれ、それに詩が添えてあったので、次韻して返した。

【訳文】

しんざん 神山は、五百年に一度だけ大地を開いてせきずい 石髓を現わし、
それを食らうと寿命が天と同じになるといふ。
石髓がない限りは、我らは悲しいことに、
生まれてしまふ世に寓するだけの身である。
あるいは、ぎょくれいせん 玉醴泉の水が流れてくるのを座って待って汲むと、
千年もあらずか一日のような長寿が得られるといふ。
そのようなものよりも、「せいしゅうじゆうじ 青州従事」[極上の酒の代表]があればよい、
ただし、普段から町で買い求めているのは安酒ばかりで、
さすがにへいげんとくゆう 「平原督郵」[下劣な酒の代表]ばかりは御免蒙りたいと、
とかく面白くない思っていると、
貴君はそれを知ったのか、
有難いことに「従事」の顔を拝ませてくださった。

自分で蓋さかづきを洗い自分で瓶かめを開いて、
できれば、肴さかながあって、誰か相手をしてくれる者がいないものかと思っていたら、
貴君はまたしてもそれを知ったのか、
門こつこつを剝啄と叩く音がして、
なんと、煮た魚が届き、その腹の中に手紙があった。

【補足】[最後は、鯉を煮たところ、腹の中から手紙が出てきたという伝説に基づいて、趙令鑠ちやうれいしやくの詩をその手紙になぞらえたのである]

■ 【08-1-003】次韻王定国得穎倅

【解題】蘇軾が朝廷に帰還したのと同じころに、王鞏おうきやう [字は定国] [→作品番号 07-2-024 など] は穎州えいの副知事に任命された。蘇軾に連座して遠く流された王鞏も、政權交代に伴い官員としてのエリートコースを歩み始めることになった。穎州は、歐陽脩おうようしゆうが隱棲の場として選んだところで、かつて蘇軾は杭州副知事として赴任する前に弟とともに訪ねていた [→作品番号 03-4-024]。

【訳文】

其の一

仙界の風が貴君の骨にまで入り込んだのだらう、
すでに雲しのを凌ぐばかりの気概が具わっている。
貴君の文章は秋の水のように清らかで、
塵一つ受けることがない。
貴君が一声発すると、
大地が呼応して、その余波が天の神の帯をも震わせる。

鼠を射るのに大弓を引くまでもないとの喩えの通りに、
 あちらに赴任したなら実直に仕事に励むのがよろしかろう。
 それと、百花潭には行かないほうがよいであろう。
 酔翁[欧陽脩]はもはやおられないのだから、
 貴君が親しめる相手はそこにはいないのだ。

【補足】[前半で王鞏をやたらと褒め、後半でさりと訓戒を垂れている。「実直に仕事に励め」と訳した原文は「買牛但自捐三尺」[牛を買うに但だ自ら三尺 [の劍] を捐てよ] で、平和な時代には無用になった武器を売って牛を買い耕作に励むという故事を詠んだもの。ともすると放縦に流れることがある王鞏を戒めたのであろう。そして、末の句は、隱棲後の欧陽脩を表面的に真似するようなことがないようにと注意したのだろう]

其の二

この広い四海[世界]にある渡し場を、
 もう知り尽くしたように思ったものの、
 杖を立てて無言で歩む先生[張方平]の前に身を置くと、
 いつも己を恥じなければならぬ。
 私は若いころからやたらに言葉が多く、
 道についてきちんと聞くのが遅かった。
 いまからは口を閉じ、とやかく書かないようにしよう。
 宮中より下される銘酒には艶やかな波が立つ、
 それでも、私は蜀の地に帰って芹を煮て食べたいと思う。
 老僧たちが説く仏教の神髄を聴きたいのに、

ベッド
牀で聞こえるのは耳鳴りのざわざわした音だけである。

【補足】 [この第二首は何がほしいのかさっぱりわからない。この訳文は訳者による捏造作品である。ただし、中間にある「自少多言晚聞道、従今閉口不論文」 [若いころからやたらに言葉が多く……] の二句は、己自身を戒めるものとして興味深い。都にきてどのように振る舞うべきか、まだ手探り状態だったのだろう]

■ 【08-1-004】 次韻王定国謝韓子華過飲

【解題】 この詩の題は、「王鞏 [字は定国] が韓絳 [字は子華] のところで飲み過ぎ、そのことを謝った詩に次韻した」。韓絳は、王安石が宰相を一度辞めた後で宰相になった人。しかし、韓絳はそのときに副宰相だった呂惠卿らと対立して何も決められず、呂惠卿を抑えつける奥の手として王安石を呼び戻すよう画策した。かくて王安石が宰相に復帰すると、韓絳の思惑は完全にはずれてますます居場所がなくなり、地方官として転出した。このころにはすでに都に戻り、宰相の韓縝かんしんの兄であることもあって官界の長老格として遇されていた。韓絳の父は王鞏の祖父の娘の婿で、そうした姻戚関係があることから、韓絳が王鞏を家に招いて副知事に任命をされたことを祝ったところ、王鞏が飲み過ぎたために、詩で反省文を作って提出したのである。蘇軾は上の詩で王鞏をやんわりと戒めたのだが、その程度ではどうやら糠に釘であったようだ。

【訳文】

昔、楚国の大臣に孫叔傲そくごうがいて、
国を守る千里の長城のようだと賞賛されていた。

その息子は絹の衣に包まれて育ちなから、
哀しいことに、父が死ぬと、(父は何も財産を残さなかったために)

破れた履くつをたきぎはいて薪を背負って売らなければならない境遇に陥ってしまった。
 孫叔敖と親しくした友人がいなかったわけではないのに、
 水をひっくり返したように皆が態度を一変させた。
 たた役者の優孟ゆうもうだけが違って、
 王の前で、笑い話の中に、孫叔敖の子が困窮状態にあることを伝えた。
 代々続たの名家として恃みとなるわけではなく、
 足の折れた机に寄り掛かるようなものなのだ。
 真宗皇帝しんそうの世に賢相けんしょう [王旦おうたん、すなわち王翬おうきゅうの祖父]がいて、
 天下の柱をしっかりと支えていた。
 その子の懿敏公いひんこう [王素おうそ、すなわち王翬の父]も名立たる大臣で、
 孟子もうしがいう三つの貴いもの、すなわち徳、爵しやく [地位]、齒し [年齢]を備えていた。
 これらの方々が亡くなって幾日になるのか、
 いま誰がその子を教え導いているのか、
 その子を教え導ける者は誰なのか。
 私はその子に説こうとしたけれど、
 止めることにしよう、
 止めることにした。
 親戚の宰相かんこう [韓絳た]は民衆のために起つこと久しく、
 老いに臨んでの別れであるからと、
 貴君のために御馳走を並べたのは何のためだったのか。
 親類縁者を引っ張り上げたりするのはよいことではない、
 たた清々すがすがしく顔を向き合わせればよいのだ。
 新しい詩は弾丸のようなもの、

手を離れたならば、知らぬところまで勝手に飛んで行ってしまふ。

私もまた詩を作る者であるからして、

苦い言葉を絹の上に書きつける。

私の言葉に耳を塞がないでほしい。

孔子こうしもいわれたではないか、

「天下に道あるときは、貧賤おひやくを恥おこず」[公の仕事に就くべきたとの意味]と。

【補足】[(1) この詩で蘇軾そうしやくは王鞏おうきやうに向かってかなり厳しいことをいっている。韓絳かんきやうへの苦言も兼ねているようだ。(2) 王鞏が名家の生まれであることは『三槐堂の銘』

[→作品番号 05-5-004]で見ている。祖父おうたんの王旦おうたんは名宰相として歴史に名高く、その娘婿かぬくとなった韓億かんいは副宰相にまで昇った。韓億の子が韓絳である。つまり、王鞏も韓絳もはなはだ血筋がよい。蘇軾はこの詩の冒頭で、血筋など何の頼りにもならないと喝破している。(3) ここに引いた孫叔傲そんしゆくごうの故事を、蘇軾は時折引いている [→作品番号 02-2-020 など]。(4) この詩を詠んで、たぶん王鞏は冷や汗を流し、韓絳は気分をいささか損ねたであろう]

■ 【08-1-005】送范純粹守慶州

【解題】12月18日、蘇軾そうしやくを起居舎人ききよしゃにん [皇帝の近くにあつて文章を起草するなどの仕事を務める職] に起用するとの辞令が出された。都に戻ったばかりでそのような大役を受けるわけにはいかないと固辞したが許されなかった。これは、そのころはんじゆんすいに范純粹はんじゆんすいが慶州知事けいしとなつて赴任するのを見送つた詩。范純粹は、作品番号 05-4-050 で見たように、蘇軾が8歳で憧れた4人のスーパースターはんちゆうえんの1人范仲淹はんちゆうえんの子。慶州かこくは西の夏国との国境に近く、かつて范仲淹もその地の知事となっている。そのときに夏国との間に緊張が高まり、武力衝突にまで発展し、范仲淹はその後始末に奮闘した。范純粹は

范仲淹が58歳のときに生まれた子で、父が慶州知事であったのはそれより数年前だった。

【訳文】

昔から、大きな才能は用いられ難いとされ、

高所に立った議論はいつも迂遠なもののように見られる。

こうし
孔子が次のようにいったのを、貴君も知っておられよう、

ちようぎろう
「趙魏老は大国の大臣になるべきであるのに、

とう
滕のような小国の役人では力を発揮できない」

浮き雲には根がなく、水たまりはわずかな時間しか保たれない、

幾つもの変転を経て後に、真の賢愚が現れる。

手に持ったはこ銚の飾りが辺境の地の町々を照らし出し、

談笑のうちにそこに安寧をもたらしたのは、

かの年のかの知事はんちゆうえん[范仲淹のことをい]で、

素手で猛虎を降参させたのだった。

その息子たちは、幼いころから厳しく育てられたのだから、

貴君は漢代の鄧平叔かん どうへいしやく[やはり名臣の子]のように、

闘うまでもなく西方諸国を帰服させるであろうと、

私は確信している。

【補足】〔(1)『論語』にある趙魏老ちようぎろうの故事をここに引いたのは、范純粹はんじゆんすいがかつて実際にとう滕県で官職に就いていたからで [→作品番号 05-4-050]、今回、慶州知事になったことで大きく飛躍すると期待したのである。(2) 范仲淹はんちゆうえんは慶州知事となって西方に行く、先住民である羌族きやうのもとに単身乗り込んで信頼関係を築き、夏国かこくの動きを牽制

した。息子の范純粹にも、直接的に武力を行使することなく、夏国に対する優位を築くことを期待したのである。その背景には、^{しんそう}神宗皇帝のもとで夏国との戦争を起こして大敗した対外政策の過ちをいかにして正すかが保守派の課題となっていたことがある]

■ 【08-1-006】 次韻王震

【^{おうしん あざな しはつ} 解説】王震 [字は子発] の詩に次韻した。王震は^{おうきょう}王鞏と同族で、王鞏の一代代下に当たり、このとき朝廷の高官であった。作品番号 06-5-014 で見たように、蘇軾を^{こう}黄州から汝州に^{じょ りょうい}量移するとの皇帝の命令書は王震 [あるいは王震の父という説もある] が起草したものだったという。そのことがこの詩に詠み込まれている。

【訳文】

^{じ へい}治平年間[先々代の皇帝である^{まいそう}英宗の年号]に、貴君は文を携えて私を訪れた。

^{ひょう}豹は食を断って七日間雨に当たると^{まだら}体に斑模様が生じるといけれど、

そのときの貴君はようやく一つの斑を得たばかりであった。

聞くところでは、貴君等が推薦の言葉を発してくださったお蔭で、

私は流落の身から生きて還えることができたのだった。

清らかな一篇の文章[^{りょうい}量移の命令書]が月の光を帯びて霜の夜に届くと、

そこに記された^{みょうご}妙語[量移の命令]は、病んだ顔を春に先んじて明るくしてくれた。

私はすでに暮年に至り、それでも詩と酒はなお用いることができている。

貴君等と^{ちくりん しちけんじん}「竹林の七賢人」のような交わりを結ぶことも、

時には許していただけようか。

■ 【08-1-007】 次韻馬元賓

【解題】^{ばげんひん}馬元賓の詩に次韻した。馬元賓がどのような人であるのか未詳。詩の内容からして、馬元賓はどこか遠くへと赴任するのであろう。

【訳文】

私は長らく^{こうこ}江湖に流落して万里の彼方から帰ったばかり、

逢ってすぐにまた遠く離れなければならない。

初めて貴君から人を驚かせる好句を聞き、

これまでにお近づきになれなかったのが残念でならない。

^{とう}唐の時代に、^{がちしやう}賀知章は^{りはく}李白と初めて会うと、

「君は^{たくせんじん}謫仙人である」

と、いきなりその非凡な才能を認めた。

人を知り、深く絆を結ぶのは、

瞬時になされることであるだろう。

いま^{おおどり}鴻[^{ばげんひん}馬元賓]は天空高く飛び去ろうとしている、

古い身の私はそれを追うことができない。

■ 【08-1-008】 次韻周邠

【解題】^{しゅうひん}周邠 [^{あざな}字は開祖] の詩に次韻した。周邠は同じ年の科挙に合格した^{どうねん}「同年」の間柄で、^{こう}杭州副知事時代にさかんに交流があった [→作品番号04-3-079など]。周邠は長く都にいて久しぶりに再会した。

【訳文】

私は南[常州]に遷^{うつ}って、

農地において力を尽くそうとしていた。

隱棲の地に親しい友だけが来る道を開き、

楽しいことがたくさんあるはずだった。

まさかこの老年に至って、都の地を踏むとは思ひもなかった。

疲れ切った馬が丘の前で畏れるのと似た思いがある。

羨むのは、同年の貴君が、心まさこ^{さか}はんであること。

貴君は笑うだろう、

憂いのために私の鬢^{びん}の毛がすでに真っ白になっているのを。

いつの日にか、かつてともに遊んだ西湖を尋ねようではないか。

漁師の蓑をまとい、そぼ降る雨に暗く包み込まれるのである。

【補足】[周邠^{しゅうひん}とともに西湖を再訪する願いは叶わず、2人の間の詩の贈答はこれが最後であったという]。

■ 【08-1-009】 祭石幼安文

【解題】この年、石康伯^{せきこうはく} [字は幼安^{あざな} 幼安^{ようあん}] [→作品番号 06-1-108] が亡くなり、この祭文を作った。

【訳文】

嗟、私は蜀を去って十八年。夢に故郷に還り、親しい人々が目の前に居並び、はっと目覚めると、誰もいない……、涙が滝のようにこぼれる。罪を得て江湖[黄州]に流され、自分の影を自ら憐れみ、たまに人が蜀音^{しよくおん} [蜀の地の方言]を話すのを聞くと、首を回らせ、ふっと微笑むのだった。

先生[石康伯]は親戚であり、さらに賢人であって、憂樂を同じくする間柄で、義として私を捐て先に逝く

よな人ではなかった。私がかつて宿州しゆく よぎを過ったとき、先生はすでに病にまわりつかれていた。それでも、私を顧みて笑い、「これで少し癒えてきているのだ」といわれた。私は先生が仁人じんじんであり、寿骨じゅこつ[耳の後ろの頭骨]を見れば長生きすることを示しているので、「いつか必ず手を携えて郷里に帰り、白髪頭になった皆と会おうではありませんか」といったのだ。それがついにこのようになるとは。胸を叩き、天に向かって泣き叫ばずにはられない。

時は俯仰ふげうする間に遷りゆき、誰もが人生を馳せ進み、行き先は後も先もなく結局は一つである。人というものは哀しく、ただ徳ある行いだけは世々に伝えられ、大勢の優れた子孫が残ってゆく。そのことでは天は我等を欺かない。無憾むかんのところへと永久に帰られた先生をここにお祀りする。嗚呼ああ、哀しかな。

【補足】[宿州しゆくで石康伯せきこうはくに会ったと記しているのは、これより5年前に蘇軾そしが湖州に赴く途中でのことなのだろう [→作品番号 05-3-025]。その翌年に書いた文章 [→作品番号 06-1-108] にはその記述はなく、石康伯は都にいて62歳であると記していた]

■ 【08-1-010】 惠崇春江晓景二首

【解題】蘇軾の詩の一般的な選集では、次韻詩の大作は敬遠され、この時期の都の詩は多くても数首が収録される程度で、そのほとんどが画に関連するもので、特に有名なのがこの詩である。惠崇ゑそうが描いた『春の江の曉の景』の画に寄せた作品。惠崇は北宋の初めの頃の僧で、詩や画に巧みであった。都にきてこの画を見る機会を得たのだろう。

【訳文】

其の一

竹の外へと、桃の花の枝が二、三飛び出す。

春の江の水のぬくもりを最初に知るのは鴨。

しろよもぎ 萋蒿が渚を満たし、あし 蘆の芽が短く伸び始める。

これはまさしく河豚が上ってこようというとき。

【補足】〔画には、川と鴨、しろよもぎ 萋蒿と あし 蘆、竹と桃が描かれていたのだろう。そこから蘇軾は想像をふくらませ、描かれてはいない ふぐ 河豚を詠んで、春の季節感を強めた。河豚はこの時期に肥えて美味であるという。俳句のように取り合わせの妙が詩を味わい深くしている〕

其の二

おおどり 帰り行く鴻の一群、

その群れを破るかに見える二羽、そして二羽。

それは北に帰ろうとしてなおためらう人に似ていようか。

遙かに知るのは、

北方の砂漠にはなお風雪が多いこと。

もう半月ばかり、こうなん 江南の春の内に過ごすのがよいであろうに。

【補足】〔画の上空には、北に帰る おおどり 鴻の群れも描かれていたのだろう。群れから離れる鳥に、蘇軾は自身の思いを託した。蘇軾は、先の詩で見たように、丘を前にした疲れた馬の畏れを抱き、なお こうなん 江南 [じょう 常州] に留まっているべきではなかったろうかと思うのである〕

■ 【08-1-011】 次韻胡完夫

【解題】ここからは年が改まって げんゆう 元祐元年の作品。年が明けてすぐに改元された。新元号の元祐は、3代前の じんそう 仁宗皇帝の治世下の最後の元号である かゆう 嘉祐のころを一つの理想の時代として捉え、そこへ回帰することを宣言したものである。つまり、しんそう 神宗皇帝

のもとで行われた改革政治を全否定したのだ。蘇軾が科挙に合格したのは嘉祐 2 年 [1057 年] であったように、政権の中核を担う世代の人々にとっては、若かりし良き日々へのノスタルジーも伴う改元であったのだろう。この年、蘇軾は閏 2 月に中書舎人ちゅうしょしゃにんに、9 月に翰林学士かんりんがくしになり、それに伴って、階位 [九品から一品まであり、最上位の一品は皇族だけに贈られる] は都に来た当初の七品から四品にまで急上昇する。この頃に掲げたのは、胡宗愈こそうゆ [字は完夫] の詩に次韻したもの。胡宗愈はかつて王安石おうあんせきが李定 [蘇軾を目の敵にして罪に陥れた張本人の 1 人] を御史 [官僚の不正を取り締まる役] に抜擢しようとしたことに反対して左遷され、皇帝の代替わりに伴って都に戻った。胡宗愈が蘇軾の朝廷復帰を記念する詩を贈ったので、それへの返しでこの詩を作った。

【訳文】

かつて知事として着ていたいわざ衫あはぎには、
 (都の人々との)別れの涙の跡がいまもまだらに残っている。
 それから十年の間、
 私は江湖いなかにあって名ばかりの小吏の身として苦しんできた。
 老いて、我が意がお上に通じたものか、都みやこに還ることができ、
 毎朝しやく、笏しやくを捧げて宮殿に臨むこととなった。
 貴君しがらみとは、形骸の外に出て杯をかわし合い、
 酔った夢の間に、笑いながらこれまでのよもやまを語り合う。
 昔から、こせんせい「胡先生に問えば万事うまゆく」といわれているのだから、
 白髪頭になった私なんぞは、
 その横で閑をつぶしていればよいのである。

【補足】[終わりのところに「胡先生」と訳したのは、後漢の時代の胡広のこと。「おさまらないことがあったら胡広に問え。そうすれば、天下は中庸を得る」といわれた。同じ胡姓である胡宗愈をなぞらえたのである]

■【08-1-012】次韻錢穆父

【補足】上の詩のもとになった胡宗愈の詩に錢勰 [字の穆父] が和し、その詩に蘇軾がさらに次韻した。錢勰は五代十国時代に杭州に都を置いた呉越国の王族の末裔で、長く朝廷にあった。この後、錢勰とは親密な関係になる。

【訳文】

私は老いてまた都に入り、かつてのように朝廷に並ぶ身となった。

それでも、髭を黒く染めて、若者ぶって歌を唱えるようなことはいない。

知人たちは金鑾殿[皇城の宮殿]の上を舞い飛び、

いずれも飯顆山[神聖な山]から来たような方々ばかりである。

貴君の堂々の筆は漢の世の力があがり、

私がまるで当時の劉向、劉歆父子の間に立つかのようにいってくれる。

そうまでしてくれたのでは、

同僚を呼び集めて貴君のために酒宴を開かねばと思っています、

貴君がお上より賜った竜のような馬に跨って出で立つのが見えた。

【補足】[(1) これは、華やかな文字で社交辞令を飾っただけの内容の乏しい詩。訳はそれなりに意味が通るようにしただけのもの。(2) 題に「次韻」「和」「用韻」といった文字のある詩、つまり他人の詩に唱和した作品を続けて読むと、さすがに辟易するというのが正直な感想であろう。訳者が最も頼りにしている岩垂憲徳・釈清潭・久

保天随訳『蘇東坡詩集』（1927年）には「応酬おうしゆうの作さく、如何いかに苦辛くしん経営けいぎやうするも、言うべき事ことに局限きやくげんがある。公こうの如ごとき大才だいさいと雖も、手ての下くだしよう無なく、従したがって其その詩し平々へいへい凡々ぼんぼん、瓦礫がれきの如ごときものなと為なる」との評があり、さしずめこの詩あたりが「瓦礫の如き」作品であろう。それでも、「平々凡々」の内にも蘇軾の本心を垣間見ることでもできなくはない。応酬の詩は公開された書簡のようなものだと思って読むなら、少しは興味を繋ぐことができるのかもしれない（3）胡宗愈こそうゆの最初の詩を起点として、蘇軾を中心に次韻リレーが展開され、錢勰せんきやうに加えて李之儀りしぎ [字は端叔]、満中行あざな たんしゆく [字は思復]も参加し、蘇軾は少なくとも6首の次韻詩を作っている。あまりにも煩わしいので、李之儀の詩に次韻したものを次に読んで、その他は割愛する]

■【08-1-013】次韻答李端叔

【解題】時折接点のあった李之儀りしぎ [字は端叔] [→作品番号 06-1-104] は都で官職に就いていて、蘇軾とごく近くで話ができるようになった。そのことがここに読み込まれている。

【訳文】

人がしも後漢ごかんの名将ぼえん、馬援ほんちやうや班超はんしやうのようであったなら、
 笑ことうって壺頭ことうの難所ざくもんを超え、玉門ぎよくもんの関からも出て、
 西羌せいきやう [西方の異民族]の地ちに入いって、沙漠さつぼくを自由じゆうに渡り歩き、
 たちまち東の海に移うつって、山なみのような濤たうを見るであろう。
 貴君こそは、千人のなかにあってたった一人の、
 そのように異なる人物であると、私は知っている。
 私は貴君の詩文に慰められること十年、

ついに西省^{せいしやう}[宮城の西側の役所]で貴君と隣り合わせになり、
閑を偷^{ひまぬす}んで会うという、最も味わいあることができるようになったのだ。

■【08-1-014】正月八日招王子高飲

【解題】1月8日に王迥^{おうけい} [字は子高^{あびな しこう}] を招いて杯を交わした詩。王迥は俗世間の外に出て遊ぶ人で、蘇軾^{じよ}が徐州知事であった元豊元年^{げんほう}に一度会っていて、王迥のために詩を詠んでいる [→作品番号 05-4-020]。蘇軾は多忙な中にあっても王迥のような「異人^{いじん}」と会っていたのである。なお、この詩は翌年に詠まれたとの考証もある。

【訳文】

風が叫び、雪が屋根を覆って、
苦しも貧乏と戦っていたとき、
紙の窓に日が射れてきてようやく春になったと知った。
いまは梔子^{くちなし}の花の香る中にあるような気分、
まして芙蓉城^{ふようじやう}[仙界]の人とこりて向かい合っている。
昨日は玉堂^{ぎよくどう}[宮中の執務室]で空しく静かに過ごし、
銀の盃に美酒を盛って贈ってくれる人でもまいかと想った。
海山^{かいざん}[海の彼方の仙界]は東南の方向にあって、
そこへと帰る鴻^{おおとり} [王迥を指す]がわずかにこにっと笑った。

■【08-1-015】送戴蒙赴成都玉局觀、将老焉

【解題】この詩の題は、「戴蒙^{たいもう}が成都^{せいと}にある玉局觀^{ぎよくきやくかん}の管理人として晩年を過ごすことになったのを見送る」。戴蒙は呉興の人で、慶暦6年 [1046年] に科挙に合格したとあ

るから、蘇軾より10年ほど先輩である。キャリアを積んだ官僚は、道観^{どうかん}〔道教の寺院〕の名目上の管理人となつてわずかばかりの俸禄を得て隠退することがあつた。成都是蘇軾の故郷である蜀^{しよく}の中心都市であり、かつて杜甫^{とほ}が浪々の身を寄せていたところでもあるので、そのことがこの詩に詠み込まれている。

【訳文】

杜甫^{とほ}が酒をきこしめして歌いつつ歩いたのは、
 野の梅が開き、官道の柳^{せいと}が揺れる成都西郊外の道であつた。
 聞^きくところでは、成都^{かよう}の華陽県の域内に、
 いまも杜姓^との人が集まり住むところがあるとか。
 私もいつか成都^{ばんりきやう}に帰って万里橋を尋ねたく思ふ、
 それも、水辺に花が咲き、風^{しやうしやう}に蕭蕭と葉が下る秋のころに。
 蜀^{しよく}の魁^{おお}さいい芋は径が一尺もあつて食べ尽くせる人は誰もいない、
 蜀^{はんのき}の榿木は三年も経てば十分すぎるほどの薪を供給できるよくなる。
 人生百年^{ふうきやう}を風狂に生きて何があるのか、
 貴君^{がびさん}がこつてついに峨眉山の翁となるのを羨ましく思ふ。
 貴君^{ほこ}の後には、たとえ戟を執つて立つ將軍が生まれなくとも、
 車輪が土に埋もれるまで勉学に励んで立派な君子になる者がきつと出るだらう。
 私は老いて病みなから、また帰ることのできない身、
 それでもいつかは貴君^{どうかん}のように道観^{あるに}の主となれるのだらうか、
 そのよになつたら、昔^{おうきし}の王徽之のように、
 雪降る夜に興味^きが湧くに任せて貴君のところをきつと尋ねるだらう。

【補足】〔(1) 万里橋は、三国時代の諸葛孔明に由来する橋で、いまも成都観光の名

所になっている。(2) 詩の終わりは、王羲之の子の王徽之の故事に基づく。王子猷は雪の夜にふと思立って友人の戴安道を訪ね、しかし、門にまでくると興が尽きたとしてそのまま帰った。戴蒙と戴安道が同じ姓であることからこの故事を引いたもの。

(3) ある考証によると、弟の蘇轍が戴蒙を見送るのに合わせて、蘇軾がこの詩を作ったという。そうしたことなどから、蘇轍は1月中頃に都に帰還したと推測されている。ならば、弟との再会を喜ぶ詩があつてしかるべきであるように思うのだが、そのようなものは残っていない。また、流謫の日々にさんざん苦勞をかけた家族をねぎらうような詩文も残っていない]

■ 【08-1016】 与楊元素

【解題】 楊絵 [字は元素] [→作品番号 06-4-047、06-5-032 など] に宛てた手紙。

【訳文】

(1) お別れてからたちまち二年になろうとして、いまもって住居が定まらずにいます。都にきてからは、何かと衰衰して、お手紙を差し上げることもなく深く取じ入っております。ここのところお変わりありませんでしょうか。聞ところでは、つまらない連中が貴君についてとやかかいつているとか、いったどのような者が敢えてそのようなことをするのでしょうか。根も葉もないことで、道眼をもってこれを観るならば、ただ蚊がぶんぶんしているだけと、笑うべきなのでありましょう。旧知の人々は挙って朝廷に還りきており、貴君だけかなお江湖にありますのを慨嘆するばかりであります。……

【補足】 [ここに記されているように、楊絵を弾劾する動きがあつたようだ。そのためなのか、楊絵が中央に帰還するのは翌年のことである]

(2) 忝くも過分な使命を授かりましたのも、皆様の御推奨によるもので、何らそれに応えることもできず、

日々憂いと愧しさの中にあります。弟はたまたま赤目を患い、またお手紙を差し上げることができずにおります。また、郷里からの手紙を見ると、従兄が亡くなったとあり、悲痛の思いしております。そのようなことから筆を十分に尽くすことができません。どうぞお許しください。

【補足】[ここに従兄が亡くなったとあるのは、蘇不疑 [字は子明] [→作品番号 06-3-079] のことである]

■ 【08-1-017】 定風波

【解題】王翬 [字は定国] は蘇軾からお小言を食らわねばならないような人物だったようで [→作品番号 08-1-004]、多くの女性を抱える奢侈な生活を改めていなかった。侍女の中に歌を得意とする柔奴という少女がいて、これはその柔奴に与えた詞。序文がある。

【訳文】

王翬の歌児を柔奴という。姓は宇文である。眉目娟麗で、受け答えが上手で、代々都に住んでいたという。王翬とともに南方に行って帰ってきた。

私は柔奴に、

「あちらの風土はどうであったかな。よろしくなかったであろう」

と、尋ねたところ、

「この心を安んじられるところ、それが吾が故郷でございます」

と、答えた。それでこの詞を作った。

常羨人間琢玉郎、[常に羨むのは人間世界の琢玉郎[玉のような好男子＝王翬]

天心分付点酥娘。[天は乱れかも点酥娘[ヨーグルトのような少女＝柔奴]を分け与えました]

自作清歌伝皓齒、〔(柔奴が)自ら清らかな歌を作って白い歯からそれを発すると〕

風起、〔風が起こり〕

雪飛炎海変清涼。〔雪が飛び、炎が立つような海が一変して清涼になったのでした〕

万里归来顔愈少、〔万里の彼方から帰って来ると、(柔奴は)ますます若くなっていて〕

微笑、〔その微笑みときたら〕

笑時猶带嶺梅香。〔笑うときには、嶺の梅の香りをいまでも帯びているのです〕

試問嶺南応不好、〔試しに嶺より南は大変だたてしうねと問うと〕

却道、〔かえっていらのです〕

此心安処是吾郷。〔この心を安んじられるところが吾が故郷なのです、と〕

【補足】〔(1) 王鞏が流されたのは「嶺南」の地。「嶺」とは大庾嶺で、そこを超える
と燃えるような熱帯というイメージであった。蘇軾に連座した人々の中で王鞏が最も
重い処罰を受け、一見すると理不尽なようであるが、名家の生まれであったことに加
えて、日頃の素行があまり芳しくなかったことが量刑の判断に影響したのかもしれな
い。(2) 柔奴の言葉は、黄州で熟成された蘇軾の人生観にぴったり合うものだった。
それを若い歌妓から聞かされたことに深く感動したのだらう〕

■ 【08-1-018】 東林第一代広恵禅師真贊

【解題】このころに廬山の東林寺の長老の常総〔→作品番号 07-1-022〕に送った手紙
が残っていて、都は他所よりもごたごたが十倍も多く、廬山でのような落ち着いた会
話ができないことを嘆いたり、東林寺の碑に刻む文章を書くよう依頼を受けたけれど
も、公私ともに忙し過ぎて少しの猶予をほしいと詫びたりしている。蘇軾が常総のこ
とを都の人々に伝えたことで、にわか^{みことり}にその評判が高まり、皇帝の詔をもって常総

を都に呼び寄せようとした。常総は固く辞退したのでそれは許され、^{こうえぜんじ}広慧禅師の号が贈られた。この項の表題に掲げたのは、広恵禅師の肖像画に添えた賛。蘇軾が都にいた間に作られたものである。

【訳文】

忠臣は死を畏れない。だから、天下の大事を為すのである。勇士は生を顧みない。だから、天下に立派な名を立てるのである。これらの人は、^{みち}道に関していならまたしもであろう。これらの人は、義の大切さに比べて我が身を軽いとすののだが、それでも為そうとすること、立てようとするところのものはある。

^{さんがい}三界[衆生が輪廻する全世界]より出て、万法を了解して、不生不老、不病不死の境地に至って、外界に应じて無情である者と比べたらどうであろうか。

^{どうどう} 堂堂の常総公は僧中の竜である。^{あくび}呼吸は雲になり、^{あくび}噫欠は風になり、それはほんの戯れでしかない。坐より起たずして手を打って談笑する間に仏法を説くのである。常総公は^{ろざん}廬山の下にあって、^{ほんしょくりゅう}梵釈竜天之宮[仏法の守護神]となるべきお方である。

■ 【08-1-019】 次韻王覲正言喜雪

【解題】^{おうてき}王覲 [字は明叟] が「雪を喜ぶ」詩を作り、それに次韻した。王覲は前年12月に^{うせいげん}右正言 [皇帝を諫める職] になった。雪は豊作を呼ぶ吉祥とされ、王覲は新皇帝 [哲宗] のもと新たな年に幸あるべしと言祝いだのである。

【訳文】

^{てつそう} 聖人[哲宗]は天と通じておられ、獄中にある者の罪を減じるよう^{みことり}ことの詔を出された。それを受けて、喜びの聲が夜の街にさかんに聞かれ、

朝には湿り気を帯びた雲が宮中の階段を覆った。

朝儀を終えて退くろに、雪が盛んに降り出し、

えんじゆ
槐の並木に微笑みかけるようにして、雪は美しく映えた。

雪は己が美麗であるのを誇るのか、

ことさらに大官の朱や藍の袂へと上ろうとした。

私は筆を執って皇帝にお仕えする職にあるけれど、

瑞祥を記して申し上げることをいまだしていない。

貴君は陛下の膝元に伏して議論を争う職にあり、

その高邁な論は私の心を少なからず慰めてくれる。

さかんに降る雪は一度やんでまたおこり、

風と寒気は激しいものとなった。

しんりゅう
神竜が久しく潜伏して後にひとたび怒るときには、

その勢いは何倍にもなるという。

ゆゆさんぱくは「三白」[三回の雪は豊作の吉祥という]を見て、

朝臣は拝舞して万歳を歡呼することになるであろう。

私は退朝後は貴君の家に行って、

古代の『既醉』[太平の歌]を追想しつつ、

酒を飲み、貴君の詩を詠みたいと思う。

【補足】 [この詩は、雪を吉祥として手放しで礼賛しているのではなく、何らかの寓意が籠められているとする注釈もあるが、その寓意なるものを訳者は読み取ることができない]

■ 【08-1-020】 元祐元年二月八日、朝退、独在起居院読漢書儒林伝、感申公故事、作

小詩一絶

【**解題**】この詩の題は、「元祐元年二月八日、朝廷から退いて独り起居院〔中書舎人になった蘇軾の執務室のあったところ〕において『漢書』の「儒林伝」を読んだ。申公の故事に感じ、一篇の絶句を作った」。この詩の訳文を読んでも、申公の事績を単に略述しただけのもので、何ら面白味がないと感じるだろう。やや長くなるけれども、以下の説明文を読んでから味わっていただきたい。『漢書』は漢代の歴史を記した書物。「儒林伝」は儒者の伝記を集めた巻。申公は申培のことで、漢代の最初のころの学者、とくに『詩経』の研究で知られた。申公は若い頃に劉交〔高祖皇帝の末弟〕や穆生と一緒に学び、穆生とともに劉交の学友として遇され、劉交の息子を指導した。ところが、劉交の孫の代になると扱いがやや粗略となり、穆生は「いまが去る機だ」といって、病気を理由に立ち去った。劉交の孫は年々振る舞いが粗暴になり、それを諫める申公を嫌って囚人と同様に扱ったので、申公もようやく郷里に帰り、それから弟子の育成に努めた。武帝の時代になって儒学が盛んになり、武帝は申公の弟子の趙綰や王臧を呼んで明堂〔王族の学問所〕を建て、さらには、すでに80歳を超えていた申公を都に招いた。ところが、皇帝の祖母は儒学を嫌い、趙綰と王臧に少々の落ち度があったのを咎め、2人は役人の取り調べを受けた。それを恥じた2人は自殺し、明堂は廃止され、申公は失意の内に郷里に帰った。

【訳文】

申公が最初に郷里に帰って、
門を閉ざして客人とも逢わなくなったときに、
申公は、
「穆生は早くから機がわかっていたのだ」

と、己に向かっていた。

(しかし、それに懲りることなく、都にまたのこのこ出て行き)

弟子の趙綰ちやうけんが王臧おうそうが獄吏のもとに下され、明堂めいどうは廃止となって、

老いさらばえて免職となって郷里に帰ったのだった。

【補足】 [題に「二月八日」と明記してあることから、この詩に込められた蘇軾の真意を読み取ることができる。この前々日に朝廷は差役法さえきほうを復活させることを決定した。差役法は民衆を肉体労働に駆り立てる古い法律で、時代に合わず、民衆の大きな負担になっていた。王安石おうあんせきと神宗皇帝しんそうは労役の代わりに銭を納める募役法ぼえきほうを作り、改革の大きな目玉として施行した。募役法は大いに効果があがり、国家にとっても民衆にとっても非常によい制度であることが実証されていた。ところが、高太皇太后こうたいこうたいごうと司馬光しぼこうは、改革政治を一切の痕跡を残さぬまでに消し去ってしまおうとし、募役法を廃止して差役法をそっくりそのまま復活させようとした。改革派の生き残りの章惇しょうじゆんは無論強く反対し、蘇軾も反対したのだが、強引に押し切られてしまった [後に金陵きんりやうでこのことを聞いた王安石おうあんせきは、この法ばかりは残しておいてほしかったと非常に落胆した]。蘇軾は朝廷に復帰してまだ 2 カ月ほどであったにもかかわらず、このまま都にいていいのかどうか非常に悩ましく感じ、その思いをこの詩に託したのである。一度で懲りずに、皇帝に招かれて都に出たために、より大きな辱めを受けなければならなかった。申公しんこうの立場にいまの自身が重なると蘇軾は思えたのだ。なお、司馬光が保守派の指導者として活躍すべきだと蘇軾が考えていたことは作品番号 05-3-031 にもあった通りで、司馬光への尊敬の念はいまも変わらなかった。しかしながら、司馬光はこのとき 68 歳で、改革政治をストップさせた後の政治のビジョンを描く構想力に欠け、単なる反動政治家となってしまったのだった]

■ 【08-1-021】 与范蜀公

【補足】 范鎮^{はんちん} [蜀公^{しよくこう}] [→作品番号 06-4-048] に宛てた手紙。范鎮は政界の大大物で、許州^{きよ}に退いていて、蘇軾^{そく}が黄州^{こう}にいたときには、我が屋敷の隣に住んではどうかと誘ってくれたこともあった。その范鎮を都に招く動きがあり、皇帝からの招聘状を蘇軾が起草した。それが2月10日のことで、この手紙はそれより数カ月後のもの。范鎮は都に行くことを辞退し、完全に政界から身を引いたのだった。

【訳文】

日々蜀公^{しよくこう}がお出ましになるのを望み見ておりましたが、敢えてまたお上の前に出られないとのこと、超然^{おそ}と高く懷われ、世事をつまらないものと見て、退隱の意志を堅持されたとはいえ、多くの人々が残念がっております。……

■ 【08-1-022】 送陳睦知潭州

【解題】 陳睦^{ちんぼく}が潭州^{たん}知事として赴任するのを見送った詩。詩は昔日の交遊の回想から始まる。

【訳文】

華清宮^{かせいきゆう}の高い棟^{ひょうびよう}が縹緲^{ひょうびよう}として浮び、
 山の上の林のそのまた奥^{せきおう}に石甕寺^じがあった。
 そこで貴君と初めて知り合って一杯酌み交わし、
 夜には馬を飛ばして一千の巖^{いわ}を昇った。
 そのとき、貴君は若く、顔は玉のように輝いていた。
 ひとたび飲んだからには、百の觚^{さかづき}を開けないと気がすまなかった。

はくるくせん
白鹿泉の上の山に出た月からの冷たい光に、

川は水銀が流れるかのように見えた。

酒が醒めたのは華清宮ちやうげん かくの朝元閣の上で、

おおどり
鳳の形をした鉄の鈴が風に鳴るのを、

寝転がったまま聞いたのだった。

かつて遊んだところはそのままであろうとも、

そのときの人々はいまどこにいるのだろうか。

あれからの二十三年、

それは真に一つの夢だ。

私は生きて都に還ることができたけれど、

髯は雪が満ちたように真っ白で、

貴君もまた老いて、

高官が身に付ける金の帯の重みを嫌うようになった。

春に飛び来る燕おおどりと秋に飛び去る鴻のように、

私と貴君は逢ってゆっすり話もできないうちに送別の時がきてしまった。

貴君がこれから通ることになる洞庭湖どうてい こも青草湖せいそう こも際限なく広がり、

てんちゆうほう し がいほう
天柱峰も紫蓋峰もいまにも動き出しそくに聳え立っているであろう。

こなん いにしえ
湖南の地は古より長く嘆息させる絶景の地、

詩人が弄んで笑って言葉を発するためのところだ。

【補足】〔(1) 冒頭にある華清宮かせいきゆうは長安ちやうあんの東にある温泉地とう げんそうで、唐の玄宗皇帝が楊貴妃やう き ひと遊んだところとして知られる。そこで陳睦ちんぼくと初めて知り合ったのである。詩の途中に「二十三年」とあり、これより 23 年前には蘇軾ほうしやうは鳳翔府ほうしやうにいた。鳳翔での任期中に公務で長安周辺を巡ったこともあるので、その折に陳睦に会ったのだろう。(2) 春

の燕と秋の鴻おおとりのように別れるとあるのは、政変によって入れ替わりとなったことを示していて、陳睦は本意ながら遠く洞庭湖どうていこの南の潭州たんに赴任して行くのである。(3) この詩に同輩が和したので、蘇軾がまた次韻している。ぐちゃぐちゃと故事を用いただけの作であるので、訳は割愛する]

■ 【08-1-023】 和蔣発運

【**解題**】真州しんにいる蔣之奇しょうしき [字は穎叔あぎな] [→作品番号 07-1-059] から詩が贈られてきたので、それに和して返した。

【訳文】

かつて夜に語り合ったとき、

貴君は千の偈げ[仏教の真髓を要約した韻文]を瞬間につくった。

手紙が来ると、またしても一つの偈があった——

此の身は、真ぶつだに仏陀だるまにして達磨、

いずれのところも、義皇ぎこうの世けんえんにして軒轅の世である。

遥かに知るのちようこうは、長江に臨む貴君の姿——

前方に船が穏やかに停泊、

誰もいない楼閣におもむるに風が吹き込み、

月の光だけが盃に差し込む、

そして私を思っ墨を書き散らし、

そのまま酔い崩れるのである。

■ 【08-1-024】 与陳季常

【**解説**】^{こう}黄州にいる^{ちんぞう}陳慥 [^{あざな}字は^{きじょう}季常、^{ほうさんし}方山子] [→作品番号 07-2-029] に宛てた手紙。本文から推測するに、陳慥からの手紙への返信であり、^{しばこう}司馬光が^{さぼくしゃ}左僕射 [宰相] になった閏2月2日の直後に書かれたものである。

【訳文】

私の執務室は清潔で簡素ですが、都には閑な人は一人もいないので、とにかくばたばたしているうちに日が過ぎ去ってしまいます。苦労ばかりが多く、それを補ってくれるものがないので、顔は青く、髪は白くなるばかりで、それを御覧になったらきっとお笑いになるでしょう。ただ、弟も同じ役所に勤めていて、毎日会えるのは幸いであります。

貴君は少し病んで平癒されたとのことですが、ゆるがせにはなりません。「善い言葉は口から離さない。善い薬は手から離さない」。これは昔からいわれている大事な諺です。^{ことわざ}ぜひともこれを書いて座右に置いてください。薬でそちらでは手に入れにくいものがありましたら、遠慮なさいませんように。

もし貴君に上京のお気持ちがありましたら、いつでもお越ください。お会いできたらこれほどうれしいことはありません。

^{りゅうに}柳二君 [^{りゅうしんれい}柳真齡] はすでに都に来ています。一度訪ねてみましたが、外出して会えませんでした。浦池寺に滞在していて、ここからは少し遠いところです。

ここ数日で新しいことがありました。宰相であった^{さいかく}蔡確が^{ちん}陳州に出され、^{しばこう}司馬光が代わって宰相になりました。^{けんしゅう}寒周輔は和州に出され、その息子も降格となりました。^{こうり}黄履も越州に出されました。全てはとも書き尽くすことはできませんが、^{りゅうし}劉摯は職務としてこした人事を日々行っています。

貴君が雑事に関係しないのは、まことに結構であります。^{さいみょう}最妙、最妙。

【**補足**】 [(1) ^{ちんぞう}陳慥には上京の意思があつたらしい。陳慥は後で見ると実際に上京するが、詳しい事情はわからない。(2) ^{りゅうしんれい}柳真齡は^{こう}蘇軾が^{てつちゅうじょう}黄州にいたときに鉄拄杖を贈ってくれた人 [→作品番号 06-1-086]。(3) この手紙には幾人かの官員の出入りが

記されていて、それには弟の蘇轍うかんかんが関係している。蘇轍は2月に右諫官じぎよになり、侍御史しりゅうしの劉摯とともに、官員として不適切な行為のあった者を次々に弾劾し、その結果、蔡確さいかく、蹇周輔けんしゅうほ、黄履こうりといった改革派の人々が次々に都を去った。真直ぐな気性の蘇轍にぴったりの職務であったのだが、後に改革派が政権に返り咲くと、激しい報復を受けることになる。なお、劉摯あざな しんろう〔字は莘老〕とはかねてから交流があった〔→作品番号03-4-037〕。劉摯はこのころに科挙において以前通りに詩賦を課すことを提議している。保守派はあらゆることを元に戻そうとしたのである〕

■【08-1-025】書子由夢

【解題】弟の蘇轍〔字は子由〕がかつて夢の中で詩を作った。兄にそれを話し、兄がその詩を書いて蘇轍の長男の蘇遲そちに渡した。それだけのことを記した短文。蘇遲はこのとき27歳だった。

【訳文】

元豊八年正月旦日、蘇轍は、夢で李士寧りしねいに逢った。

急いで酒食を用意し、絶句一首を贈った。

先生惠然肯見客、〔先生はここにこと私に会ってくださったので〕

旋買雞豚旋烹炙。〔急いで鶏や豚を買って煮たり焼いたりした〕

間飲酒未須嫌、〔人間世界で酒を飲むことを嫌わなくていいから〕

歸去蓬萊卻無喫。〔蓬萊境ほうらいきょうに帰ったならこういうものを口にすることはないだろうから〕

明くる年の閏二月六日、蘇轍がこのことを私に話したので、書いて蘇遲に渡した。

【補足】〔蘇轍が夢で会った李士寧はなかなかの有名人で、司馬光の随筆『涑水記聞』に以下のように記されている。司馬光は『資治通鑑』という巨大な歴史書を編集した経験から、後世の歴史家のために自身の生きた時代の証言を集めて記録した。それが『涑水記聞』で、その記事は信頼性が高いとして後世の史家に活用された。〕

【訳文】

司馬光:『涑水記聞』より

李士寧は蜀の蓬州の人で、自分では道を学んだといい、運勢について怪しげなことを告げ、巧みに的中させた。しかし、書物の知識はなかった。上手に詩を唱え、すこぶる知恵があるように見え、その言葉の意味は奇妙に大きすぎて、お御籤の言葉のようで、妖しく妄りに人を惑わせるものであった。全国各地や都を巡り歩き、大勢の公卿、貴人に重んじられた。誰も李士寧がどうやって稼いでいるのか見たことがなく、李士寧は荷物を持っていなかった。ところが、いつでも資金が潤沢にあり、十数人の客を集めて珍しい食べ物を前に並べてもてなし、金を支払った。李士寧を最も重んじたのは王安石で、熙寧年間に宰相になると、李士寧のために東府〔都の東側〕に住まいを用意した。半年の間、李士寧は王安石やその子弟と交流があった。王安石が都を出て金陵に行くと、李士寧は蓬州に帰った。

【補足】〔司馬光は、王安石に対して皮肉を込めた書き方をしている。王安石は周囲の猛反対を押し切って改革を断行しただけに、精神的に異様なまでの緊張にさらされ、李士寧のような人物との付き合いに救いを求めたのかも知れない。最も頼りにしていた長男に先立たれ、金陵に隠棲してからは、王安石の知性は甚だ鈍り、独りごとをつぶやきつつ出歩く姿が見られたとの証言が残っている〕

■ 【08-1-026】 書章警詩

【解題】上の短文に記されていた李士寧は、蘇軾の別の文章にも登場する。これは同

じ年か翌年に記されたと推測されている。これは作品番号 01-2-010 として先にすでに読んでいるが、もう一度ここで引いておこう。

【訳文】

章^{しょう}警^{きやう}、字^{あざな}は隱^{いん}之^しは、もとは閩^{びん}州^{しゅう}の人^{ひと}で、数^{せい}代^と前^{ぜん}に成^{せい}都^とに遷^{せん}った。文^{ぶん}章^{ちやう}が得^{とく}意^いであ^あったが、官^{くわん}には仕^しえな^なか^かった。晩^{ばん}年^{ねん}に成^{せい}都^と知^ち事^じの王^{おう}素^その推^{ちゆう}薦^{ぜん}で、冲^{ちゆう}退^{たい}処^{しよ}士^しの号^{ごう}を賜^みった。

ある日^ひ、夢^むに人^{ひと}が来^きて、手^て紙^しを^を示^しし、章^{ちやう}警^{きやう}を^を招^{まね}いた。それは東^{とう}嶽^{がく}道^{どう}士^しから^から^の手^て紙^しだ^だった。

そ^のの^の明^{めい}る^る日^ひ、章^{ちやう}警^{きやう}は李^り士^し寧^{ねい}と青^{せい}城^{じやう}山^{ざん}に遊^{あそ}んだ。水^{みづ}辺^べで足^{あし}を洗^{せん}いつつ、章^{ちやう}警^{きやう}はに^にや^やに^にや^やし^しな^なから李^り士^し寧^{ねい}に^にい^いった。

「さて、西^{せい}の溪^きの流^{りゅう}れ^れを踏^ふんで、水^{みづ}と^とも^もに^に行^いく^くこ^こに^にし^しま^ます^すか^かな」

李^り士^し寧^{ねい}はそれ^{それ}に^に応^おじ^じて^てい^いった。

「東^{とう}嶽^{がく}道^{どう}士^しから^から^のも^もら^らった^た手^て紙^しを^を持^もっ^つて^てし^しょう^うか^かな」

章^{ちやう}警^{きやう}はひ^ひど^ど驚^{おど}ろ^ろき、李^り士^し寧^{ねい}が^がど^どう^うして^{して}夢^むの^のこ^こと^とを^を知^しら^らな^なか^かった。

それ^{それ}か^から^ら間^まも^もな^なく、章^{ちやう}警^{きやう}は果^{くわ}た^たして^{して}亡^なか^かった[昇^{しやう}仙^{せん}した]。

章^{ちやう}警^{きやう}の^の子^{しよ}章^{ちやう}禪^{ぜん}も^もた^た隠^{いん}遁^{とん}者^{しや}であ^あった^たが、小^{せう}さ^さな^な官^{くわん}の^の仕^し事^じに^に就^{しゆう}いて^て死^しん^んだ。

李^り士^し寧^{ねい}は蓬^{ほう}州^{しゅう}の^の人^{ひと}で、普^ぷ通^{とう}で^では^はな^ない^いこ^こと^とを^をい^いい、道^{みち}を^を得^{とく}た^た人^{ひと}だ^だとい^いう^う者^{しや}も^もい^いた。百^{ひやく}歳^{さい}で^で死^しん^んだ。

私^{わたし}は^はか^かつ^つて^て成^{せい}都^とで^で李^り士^し寧^{ねい}と^と会^{かい}っ^つた^たこ^こと^とが^があ^あり、

「君^{きみ}に^には^はな^なは^はだ^だ貴^きい^い相^{さう}が^があ^ある^る。き^きつ^つと^と科^か挙^{きよ}で^で首^{しゆう}席^{せき}に^にな^なる^る」

とい^いった。果^{くわ}た^たして^{して}そ^その^のよ^よう^うに^にな^なった^たの^のだ^だった。

【補^{せい}足^と】 [成^{せい}都^と知^ち事^じの王^{おう}素^そと^とあ^ある^るの^のは^は王^{おう}鞏^{きやう}の^の父^ふであ^ある [→作^{さく}品^{ひん}番^{ばん}号^{ごう} 08-1-004]]

■ 【08-1-027】 題^{だい}別^{べつ}子^し由^ゆ詩^し後^ご

【解^{かい}題^{だい}】 2年^{にん}前^{ぜん}に蘇^そ轅^{えん}は筠^{いん}州^{しゅう}に^に弟^{てい}を^を訪^{ほう}ね、10日^{じつ}間^{かん}ほ^ほど^ど滞^{たい}在^{ざい}し、別^{べつ}れた^た後^ごに^に弟^{てい}に^に詩^しを^を送^{そう}

っていた [→作品番号 07-1-010]。その詩を書いて短い文章を書き添えた。

【訳文】

先君昔愛洛城居、[先君[父]は昔、洛陽に住みたいと考えたことがあった]

我今亦過嵩山麓。[僕はいま嵩山の麓に行こうとしている]

水南卜築吾豈敢、[周公が洛陽の地を卜って都を築いたような大げさなことは考えていないけれど]

試向伊川買修竹。[ために伊川のほとりに姿のよい竹林でも買ってみようかと思っている]

又聞緱山好泉眼、[また、緱山には泉眼というよい泉があって、氷の玉のような清らかな水が]

傍市穿林瀉水玉。[町に沿い、林を穿って流れていると聞いている]

想見茅檐照水開、[遙かに想像するのは、その水に照らされる茅葺の庵があり]

両翁相對清如鵠。[二人の翁がそこで向き合っているありさま、その姿はあたかも白い鵠のようである]

元豊七年、私は黄州から汝州に遷ることになり、筠州に往って弟と別れた。数篇の詩を作って弟のもとに残した。これはそのうちの一篇である。その後、洛陽には行かなかったけれど、この思いはいまも忘れていない。康師孟君が洛陽に帰るので、これを書いて贈ることにした。

元祐元年三月十六日、軾書く。

【補足】[康師孟は当時名医として知られ、康師孟が調合した「四神丹」は万病に効く薬として、洛陽の人々に非常に珍重された。蘇軾は遙か後になって「四神丹」についての短い文章を書いている]

■ 【08-1-028】送表弟程六知楚州

【解題】この詩の題にある「表弟の程六」とは誰なのか。「表弟」とは姓の異なる従兄弟、「程六」とは程の家の同世代で上から6番目の者。ここにある程の家とはすなわ

ち蘇軾の母の実家である。蘇軾の姉は、母の兄の子の程之才のもとに嫁ぎ、虐待されて死んだ [→作品番号 01-2-008]。そのころ蘇軾の父の蘇洵は、官人を輩出する土地の名家の程氏に対して全く頭が上がらず、娘の非業の死も黙って耐え忍ぶしかなかった。後に、息子 2 人が科挙に合格し、自身も都の人々に認められると、蘇洵は程の家に対して絶縁を宣告した。「程六」は、姉の夫であった程之才 [程二] の弟の程之元 [字は徳濡] である。その程之元が楚州知事となって赴任するのを見送ったのがこの詩。

【訳文】

炯炯と明るく輝いてあたりを照らす二つの壁、
それは程家の兄弟[程之元とその弟の程之邵]。
かつて我らが故郷には三人の老人がいた。
それは蘇氏[蘇軾の祖父]、程氏[程之元の祖父]、石氏で、
三老人が杖をついて歩くのを見かけると、村人は道から下りて挨拶し、
三老人が訪ねてくると、県知事も慌てて履を逆さまに置いて門に出て迎えた。
そのころ私も貴君も皆かごともで、
やたらに走り回って、三老人に梨や栗をせがむばかりであった。
牛のように頑健な体とていつまでも恃むことはできず、
馬がわずかの隙間を過るようして歳月は惜しむ間もなく流れ去る。
醜泉寺もいまや古びて、橘や柚の木が大きく枝を垂れているだろうし、
石仏山は変わらずに高く、松や櫟に暗く覆われているだろう。
郷里から万里の彼方で三老人の孫が逢い、
ひとたび笑い合って、

積み上がった千の憂いをもう解こうではないか。

貴君は古の山陽郡を治める人となり、

練達の筆から風が立つ勢いに乗って、小官の境遇から脱してゆくのだ。

私は皇城の紫微閣で筆を舐める身で、

病んだ眼にはちらちら花が飛んで書類を見るのは楽ではない。

我が残りの歳月を印綬[官員のしるし]に繋いでおことは思わない、

都を去って先祖の墓を掃除する日がきつとくるはずだ。

貴君も功績を挙げて、頭が白くなったならば、

早々に帰り来るがよい。

一緒に梨の花を活けて、寒食の日々を過ごそうではないか。

【補足】〔(1) これは程家との 27 年ぶりの和解の詩なのだろう。姉の夫であった程之才やその父は許せなくても、弟たちにまで怨恨を及ぼし続けることはないとしたのである。(2) 程之才の父を暗に排除する意味で合い、それより一世代上の「三老人」の時代に遡ってかつての友愛をここでは歌っているようだ。「三老人」の 1 人として挙げられた石氏は誰なのか。先にその死を悼んだ石康伯 [→作品番号 06-1-009] の父の石揚休のそのまた父である。蘇軾の父の蘇洵には、石揚休が朝廷の使者として遼国 [契丹] に行くのを見送ったときの有名な文章があり [→作品番号 08-3-031]、そこに「自分がこどもで父のそばで遊んでいたときに、石揚休もきて一緒に棗や栗を食べた」といった句がある。(3) 醴泉寺も石仏山も故郷の眉州にある。(4) この詩の終わりの部分から、寒食節の頃にこの詩が詠まれたことが知れる]

■ 【08-1-029】送王伯敷守虢

【解題】王廷老 [字は伯敷] が虢州知事として赴任するのを見送った詩。蘇軾には、

徐州知事であったときに王廷老に送った詩があり [→作品番号 05-4-090]、それによると事情があつてしばし官職から離れていたようである。そしていま新たに知事職を得たのである。

【訳文】

かつて華山の東の麓には、
 秦の暴政を避けて山に逃げ込んだ人々の子孫が住みつき、
 今に至るも、その土地の風俗には古い時代のものが伝えられている。
 柔らかな桑、緑の水は、旅ゆく人を招き寄せようとするのだが、
 人は首を回らすこともなく、腕を振って通り過ぎ、
 囊の口のような函谷関へと急ぎ通り過ぎてしまう。
 ただ一人知事殿だけは、千里の彼方からこの地に来て、
 執務室で、「無事の酒」[何事もなくよく治まっている地で飲む酒]を飲み、
 日かな一日、起きては眠るなかにあって、人々が遊ぶ声を聞くのである。
 枕元には、雲から出た月のように輝く硯を置き、
 ときに谷底の松の根元で、雪腴[靈妙な菌類]を切り取る。
 山賊どもは知事殿を畏れて消え去り、
 人々は安心して眠りにつき、
 知事殿は、牛を買って農耕に励むよう民を導き、
 官の倉を開いて貧者に食べ物を配る。
 瓠州での任を終えて帰ってきたならば、
 これからは微官に甘んじて暮らそうとする貴君のもとに酒樽を携えて訪れ、
 「無事の酒」を一緒に飲みたいものだ。

【補足】〔(1) 詩の前半はかく虢州の歴史と地理を踏まえて詠んでいる。都から西に官道を行くと、虢州は昔のかんこくかん函谷関の手前にあり、多くの人はちょうあん長安、ほうしやう鳳翔方面へと急ぎ通過してしまう。(2) 中頃の句は、虢州は「げつせきけん月石硯」という硯の産地であることをいい、「せつゆ雪腴」は松の根に生える菌類の茯苓の中でもとくにぶくりやう靈妙な薬効があるものだという〕

■ 【08-1-030】 道者院池上作

【解題】都のていしゆうもん鄭州門から五里のところにどうしやいん道者院という有名な寺院があった。そこを訪ねての詩。鄭州門といえ、ほうしやう鳳翔府に赴任する際に、この門を出て弟に別れの詩を詠んだことが思い起こされる [→作品番号 02-1-013]。それは 25 年前であった。この詩はそのこととは全く関係のない、穏やかな小品である。

【訳文】

馬を下ると、
よい客人に出逢ったので、
酒を携えて小さな池のほとりて飲む。
すがすが清々しい風がはす荷の葉を乱し、
細やかな雨に魚が顔を出す。
井戸の水は好く、氷のように齒に当たる。
茶は甘く、眉を緩ませてくれる。
帰りの道でさらに静かな風に吹かれ、
詩を作るよう、ほんとう真個に促されたのたと知った。

【補足】〔「チェンク真個」とは口語で、現代中国語の辞典を見ると、方言として「確かに」という意味があると記されている〕

■ 【08-1-031】 次韻子由送千之侄

【解題】甥の蘇千之^{そ せん し}が郷里に帰ることになり、蘇轍が送別の詩を作り、蘇軾がそれに和した。蘇千之は従兄の蘇不欺^{そ ふ き}の子で、作品番号 07-1-113 で見たように、2年前に都で科擧の地方試験を受けて落第していた。何らかの事情で、ついに帰郷することになったのだろう。蘇千之の母の蒲氏^ほは、先に見た蒲伝正^{ほ でん せい} [→作品番号 07-2-008] の妹で、その縁で蘇千之は兄の蘇千乗^{そ せん じょう}とともに都に滞在していたのかもしれない。この詩の前半では、蒲と蘇の家を松と楠に喩え、ともに末永く栄えてゆくようにとの願いを詠んでいる。

【訳文】

江のほとりの松と楠は、深く繁った上に、さらにまた深まる。

年を経た幹に菌が生え、

下から孫の枝が出て、林のより高くへと飛び出す勢いで伸びる。

山全体に吹きわたる風は、竜が歌うかのような音を響かせる。

白髪になった私はまた帰郷する算段が立たないのだが、

青い衫^{あざな}[無官の象徴]の君は天下を濟おうとの心をなお持っている。

門を閉ざして三千の文章を書かよい。

才能ある人を求めて、席を蹴っても探しにゆく人がいまの世にもきつっているのだから。

■ 【08-1-032】 題文与可墨竹、并叙

【解題】親友の亡き文同^{ぶんどう} [字は与可^{あざな よ か}] が墨で描いた竹の画にこの詩を添えた。文同の墨竹^{ぼくちく}の画については作品番号 07-2-093 でも見ている。文同は気が向くともつぱら竹を

描いたので、多数の墨竹の画があった。

【訳文】

叙

亡きの友の文同ぶんどうは道師どうしの王執中おうしつちゆうのために墨竹ぼくちくを描いた。そして、王執中に、「この画に添える字を他の者に書かせてはならない。蘇軾君がぐるのを待って、この傍らに詩を書いてもらうように」と、いった。文同は亡くなって八年、蘇軾は始めて朝廷に還ってきた。これを見て一首の詩を賦す。

【補足】 [(1) 文同ぶんどうは元豊2年の初めに亡くなり [→作品番号05-5-013]、その直前までは都みやこにいた。一方、蘇軾はそのころは地方知事であった。(2) 王執中おうしつちゆうについては不詳]

【訳文】

この人ぶんどう [文同] は、いったいどのような人であったのか。

道みちの深いところで自在に遊び戯れた人であった。

詩名は高く鳴り、草書は書聖といわれた人に迫り、

竹を描いて三昧の境地に至った。

竹は、木や石の間より出て、

世の条理を超えた荒怪なさまを見せ、

世を挙げて人々はそれを珍品であるとしている。

それでも、最もよく知る者は私をおいていないであろう。

古いにしへより知己となる者とは会い難く、

会えたとしても、時は待たずにたちまち過ぎ去ってしまう。

しかし、貴君と私とは死生を隔てたとはいえないのだ、

貴君の言葉通りに、ここにきて詩を書き添えているのだから。

【補足】[最後の句は、晋の時代に、^{しん}隗という人が死に際して、5年後に自分に借りのある^{きょう}龔がやってくると言い残し、確かに5年後に龔がきて、龔には借金はなかったが、占いによって金を見出し、困窮していた隗の妻を助けたという故事を用いている。このことを知っている、原文の「相見如龔隗」[相い見て龔と隗の如し]の句は面白く読めるのだろうか、我々には難度の高いパズルである]

■ 【08-1-033】次韻錢舍人病起

【解題】^{せんきやう}錢^{あざな}勰^{ぼくふ} [字の穆父] [→作品番号 08-1-012] が病氣から回復して詩を詠んだので、それに次韻した。これは故事でんこ盛りの詩で、何が面白いのかさっぱりわからない。このような詩を贈り合うのは時間のひどい浪費ではなからうかと思うのだが、朝廷に居並ぶ者はこのようなことができるだけの教養と余裕がなければならぬということであったのだろう。そのことに敬意を払いたいところだが、訳者の能力を超えた作であるので、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳『蘇東坡詩集』（1927年）から読み下し文をそのままここに写してお茶を濁すことくらいしかできない。

【訳文】

^{しょうか} 牀下^{きかんかつさき}に^た龜寒且支ふるに耐へたり、

^{はいちゆう} 杯中^{ださ}蛇去る未だ^{いま}たに^{まさ}衰ふべからず、

^{でんもん} 殿門^{みょうにち}明日^{ちゆう}王傳に逢ひ、

^{らいぐさき} 櫺具^{あんそ}先を争ひ^ふ不疑^ぎを見る、

^{あなが} 坐ら^{おぼ}覚ゆ^{こうえん}香煙^{そで}を袖^{たづ}に携ふる^{まれ}の^{まれ}少なるを、

^{ただうれ} 独愁^{くわえい}ふ^{ろう}花影^{のほ}の^{おそ}廊^をに上る^{おそ}遅きを、

^{なん} 何ぞ^{きま}妨げん^{いっしやう}一笑^{せん}千^あ疴^{きん}散じ、

ほなはだ まさ そうこう じょう ち の
絶た勝る倉公が上池に飲むに。

【補足】 [これを一読して意味のわかる人はいないであろう。この詩を受け取った^{せん}銭^{きょう}に^せも、あれこれ頭をひねって、そうかと膝を叩きつつ、時間をかけて味わったの^{らう}だろう]

■ 【08-1-034】 次韻和王鞏

【^{おうえい}解題】 ^{あざな ていこく}王鞏 [字は定国] [→作品番号 08-1-017] の詩に次韻した。王鞏は^{えい}潁州副知事に任命されたはずなのだが [→作品番号 08-1-003]、なぜかまだ都^いにいた。

【訳文】

^{り はく}李白が讒言によって南方の僻地に流されたとき、
^{と ほ}杜甫は町から東に離れた小さな村で自ら耕していた。
造物者は、李白と杜甫の才能を惜しまなかったのではなく、
苦^{たぐみ}勞させることでその言葉をより工にしようとしたのだ。

^{おう}王君は年少のときから、
^{かめ}瓶から水をぶちまける勢いで文を作っていた。

王君と鋒先を争って脅かそうとした者もいたのだが、
太鼓を鳴らして踏み出すような王君の勢いに驚いて走って逃げ去った。

そのような王君の才能を成就させようと、
天はい^{おひつじ まがき}わゆる羴羊が藩に突き当たる困苦を与えたのである。

(王君が南方に流されていたときには、)

王君の孤独の光かかの地の片隅を照らし、
盆中に映る月のように輝き続けた。

都に帰り来ると、

瓶かめどころか五石ごこくを容れる樽を傾けて注ぐほどの勢いで千首の詩を詠み、

あたかも陶淵明とうえんめいがいまも生きているかのようで、

陶淵明とうえんめいを学んだ唐代とうたいの韋応物い おうぶつをも超えるものがある。

昔のある人は、琴を奏でて、音に春の温もりを感じさせたというが、

それとて必ずしも人の理解を得られたわけではなく、

壊れた壁にしし琴を立てかけておかなければならないこともあったのだ。

【補足】〔(1) 詩の冒頭では、王鞏おうきようを李白り はくに、蘇軾と ほを杜甫おうようしゅうに喩え、歐陽脩おうようしゅうがいうところの「愈いよいよ窮きゆうすれば則すなわち愈いよいよ工たくみなり」を課すために、造物者が試練を与えたといっている。(2) 結びの部分は、たぶん王鞏が世間から十分に認められていないのを不満とするようなことを口にしたのでたしなめたのだろう。蘇軾と王鞏の関係はなかなかにおもしろい]

■ 【08-1-035】用王鞏韻、送其侄震知蔡州

【解題】王鞏おうきようの甥おうしんの王震あざな [字は子発し はつ] [→作品番号 08-1-006] に贈った詩。上の詩と同じ韻を用いて、蔡州さいしゅうの知事として赴任するのを見送った詩である。

【訳文】

九門山きゅうもんざん [皇城]は天へと聳え立ち、

一万の馬が朝一番に集まり来る。

紅い塵の中で私は鞭を挙げて先を急ぎ、

顔を見ても互いに声を掛け合うことはない。

夜になってから、王鞏君おうきようきんの清虚堂せいこどうへと急ぎ、

門を叩けばかきかき鶉が驚いて翻り飛ぶ。

貴君等の住まいは旧家の大邸宅、

その前で来客の車がひっきりなしに雷のような音をたてている。

貴君等に会うのは、月世界の楼閣のようなところ、

ひさし檐に金の飾りが垂れる部屋で、燈火の前で酒樽を開いて語り合つと、

あたかも夢の中にいるかのようだ。

貴君等の家の人はぎよくちゆう玉牒[家の歴史を記したものを]編集していて、

王鞏君も貴君も昔の名臣を継ぐような人であるから、

次々に新たな事績を加え続けなければならない。

私は二君とは交際させていたたいしているけれど、

さらに他の方々を尋ね歩く気はさらさらない。

【補足】〔(1) 贈答用の詩であるから、ことさらに誇張しているのだろうけれど、王鞏おうきゆうたちの家は確かに立派だったのだろう。(2) 最後の部分は、蘇軾は家柄のよい人を好んで付き合っているのではなく、王鞏おうきゆうと王震おうしんは特別なのだといっているようだ。(3) 同じ韻を用いて王震に贈った詩がもう一首あるが、訳は割愛する〕

■【08-1-036】跋歐陽寄王太尉素詩後

【解題】かつておうようしゆう歐陽脩がおうそ王素 [王鞏の父] に寄せた詩の後に記した短文。歐陽脩の七言律詩を最初に掲げた後に、蘇軾の文章が続く。

【訳文】

豊楽坡前ほうらく おか一醉翁、[豊楽の坡の前にいたかの醉翁[欧陽脩自身を指す]も

余齡有幾百憂攻。[余齡あとわずかとなって百の憂いに攻められている]

平生自恃心無愧、[日頃から心に恥じることはないのを自負してきたのだが]
 直道誠知世不容。[自分はなかなか世間には容れられないのをつくづく知った]
 換骨莫求丹九転、^{たんやく}[丹薬]によって骨を仙人のものに入れ替える気などはないし]
 榮名何待祿千鐘。[栄えある名も莫大な俸祿も求めたりしない]
 明年今日如尋我、[来年の今日、もしも私を訪ねよと思つたなら]
 潁水東西問老農。^{えいすい}[潁水のあたりで、老いた農夫の居所を問うがよい]

これは欧陽脩が王素に寄せた詩である。

私は王素の子の王鞏、王鞏の甥の王震、それに張彦若とともに宝梵に遊んだ。王鞏がこの詩を誦し、
^{さいちゆうたつ}載仲達に贈った。載仲達はかつて欧陽脩に従っていた者である。

^{げんゆう}元祐元年四月、欧陽脩の門下生の蘇軾書く。

【補足】[(1) ここにある欧陽脩の詩は治平4年 [1067年] に都で作ったもの。そのとき欧陽脩は種々の批判を受け、かねて用意していた潁州の住まいに隠棲することを心にほぼ決めていて、そのことが詩に詠み込まれている。(2) 詩の冒頭にある「豊楽坡」は潁州にあり、欧陽脩は一時期、潁州に左遷され、豊楽坡に豊楽亭を建てた。そのころに「醉翁」と号したことは作品番号06-3-073などで見ている。(3) 「換骨」は骨を仙人ものに入れ替えて不老長生の身になること。「丹九転」は丹薬を九回煉って靈薬を作ること。「祿千鐘」は莫大な俸祿。「潁水」は潁州の近くを流れる川。(4) 欧陽脩はこの詩を詠んだ後、短期間だけ地方官を勤めたのを最後に、熙寧4年 [1071年] に政界を引退して潁州に隠退した。蘇軾が杭州副知事として赴任する前に、弟とともに潁州に欧陽脩を尋ねたことは作品番号03-4-024以下で詳しく見ている。(5) 王鞏は作品番号08-1-003で見たように潁州で職に就くことになったのだが、何らかの理由で赴任しなかったようだ。王鞏が欧陽脩の詩を唱えたのは、そのことと関係があるのだ

ろうか。(6) 蘇軾と同行した者として名が挙げられている張彦若ちやうげんじやくは王彦若おうげんじやくの誤記ではないかともいう。王彦若は眼科医で [→作品番号 07-2-018]、張方平ちやうほうへいの門下生であることから、王鞏の親族なのではないかとの説もある]

■ 【08-1-037】法雲寺鐘銘、并叙

【解題】上の詩で「宝梵ほうぼんに遊んだ」とあるのは、都の法雲寺ほううんじのことであろうか。蘇軾は法雲寺に新しい鐘が完成したのを記念してその銘を作った。序文だけを訳し、銘の本文は省略する。

【訳文】

元豊七年十月、詔みことりをもって大長老だいちやうらうぜん圜通じ禪師ほうしゆう法秀ほうしゆうが法雲寺ほううんじに住まわれることになった。圜通じ禪師は新たな堂を開き、また鐘ふがなかつた。駙馬ふ都尉ぶ武勝ぶ軍節度かんきつりゆうご觀察ちやうどんれい留後はいこくだいしやうこうの張敦礼ちやうどんれいと、冀国はいこくだいしやうこう大長公しやう主だいだんえつが大檀越だいだんえつとなって鐘しやうを寄進きしんしようと唱え、それに従いしやう和す者が何人げんしゆうもいた。元祐元年四月、鐘が完成し、重さが万斤まんきんあった。東坡居士とうぼこじ蘇軾そしがそのために銘を作る。

【補足】[冀国はいこくだいしやうこう大長公だいちやうこうは先々代えいしやうの英宗皇帝えいしやうの娘で、張敦礼ちやうどんれいはその夫である。皇族の肝かんいりて圜通えんつうぜんじ禪師ほうしゆう法秀ほうしゆうは法雲寺ほううんじにおさまったのだろう。そうした人々に蘇軾そしは銘の作成を依頼されたのである]

■ 【08-1-038】用旧韻送魯元翰知洺州

【解題】洺州めい知事として赴任することになった魯有開ろゆうかい [字は元翰あざな げんがん] に贈った送別の詩。題に「旧韻を用い」とあるのは、かつて魯有開えいが衛州知事として赴任するときについた送別の詩 [→作品番号 05-3-019] の韻をそのまま用いたからである。魯有開とはこう杭州副知事時代からの長い交流がある [→作品番号 04-2-079 など]。

【訳文】

私は東の坡たかまのもとで、
 わずか三畝ぼの畑を自ら耕していた。
 貴君は尚書郎しょうじょうろうの高官として、
 百人の役人に対して頻繁に指示を出していた。
 そのころは、蛙のような俗物どもが、太鼓を叩いたり笛を吹いたり騒ぎまわっていた。
 私は永いよしみのある人々とも交わりを断ち、
 三軒しかない村で老いて死ぬばかりであった。
 訪れる者もなく閑散としている我が門へと、
 貴君だけが友情厚く手紙を届けてくださった。
 遥かに友人こうごの意を思っ、
 落ちぶれた私には熱く感じられるものがあった。
 年改まって私は皇城に来て、
 白髪ながらもお上に代わって文章を作成するようになった。
 かつての先輩について尋ねると、
 逢うのは多くが後輩たちである。
 貴君はしばし道親どうかんの管理を務めていた[窓際族になった]けれど、
 知事として遠く旅立つ車に乗ることになった。
 貴君も老いたとはいえ、自慢の髭がまたちゃんとある。
 位つを嗣がれたお上はまことに生れながらに聡明で、
 民を救おうとのお気持ちは、火から人を救うばかりに強いものがあり、
 囚われて遠くに追いやられていた魂[蘇軾ら流罪となった者をいう]もいまやことごとく返ってきた。

貴君はかつて東郡の知事であったときに、
あらかじめ洪水を恐れて備えを為したので、
大河が北流して桑畑を沈め、濁流が塵埃を翻して古い河道に入り込んで、
町は守られたのだった。

貴君の一寸の心は千歩の堤防に匹敵することを民衆は知り、
老人も幼い子も逃げ走ることなくすんだ。

めい
涪州に行かれて、ときに閑を得たなら、扉を閉ざして座り、

どうがん
道眼を濁らさないよう努めるのがよいであろう。

おうしゃぼつ
応捨筏[己を捨てて他者を助ける筏]に乗って、

むしゅうげん
無生源[仏教の真理の湧き出る源]へと遡るのだ。

貴君が帰ってきたなら、

夜にいす榻を並べて二人で仏の教えを論じ合おうではないか。

■【08-1-039】次韻朱光庭初夏

【解題】蘇軾と同じ年に科挙に合格した朱光庭しゅこうてい あざな こうせん [字は公掞]が初夏の詩を詠み、それに次韻した。このとき朱光庭は皇帝を諫める職務にあったので、もっぱらそのことが詩中に詠まれている。

【訳文】

朝廷から貴君がさがる時、

その足音だけで人々は貴君であると知る。

なぜなら、そこに皇帝へ直言する声が籠っているからである。

私は、あおざり梧桐がさわさわと雨のような音を立てているのを臥して聞いていると、

貴君から、宮中に吹く涼やかな風を詠んだ詩が届いた。

皇帝を諫める職務に就く貴君は、

世に名高ずいちょうい隋朝がくろんの楽運の道を受け継ぎ、

私はいずいきょうつも醉郷しゅきょうにあって、

世に名高どうちやうい唐朝おうせきの王績の隠遁の地を訪おうと思っている。

私がどうぜん酔後の陶然とした思いのうちにあって、

貴君の詩によってはつきりと呼び覚まされ、

あたかも耳鳴りがひびたりと止んで、聴覚が鋭くなったかのような気がした。

【補足】[同じころにしゅこうてい朱光庭が雨を喜ぶ詩を詠み、蘇軾が次韻している。訳は省くが、二人の関係が良好であったことを示すものである。ところが、これから半年後に朱光庭は蘇軾を攻撃する急先鋒に変じる。誰とどのように付き合うのか、権力抗争の渦巻く都ではすこぶる微妙な問題であった]

■ 【08-1-040】 奉敕祭西太一和韓川韻四首

【解題】これは皇室の公式行事を詠んだ詩。我々にとっては特に面白味のない作品であるが、都で高い地位にあればこそこのような詩も詠むという一例として訳出する。

都の西郊外にある西太一せいたいいつきやう宮で、皇帝の勅令によって祭事が行われ、蘇軾も参加した。

その祭事を韓川かんせんという人が詠んだ詩に次韻した。4首のうち1首だけを訳す。

【訳文】

其の一

聖主[皇帝]は新たに秘祝[祭官]を任命され、

臣下の代表者が豊年を神に乞い願う。

聖主の祈りに応えようと、

神君^{じゅきゆう}が寿宮にお出ましになるのだらう、

夜中^{しゆくぜん}に肅然と靈風が吹いてくる。

【**解題**】[もとの詩を詠んだ韓川^{かんせん}も、後に朱光庭^{しゆくこうてい}とともに、蘇軾を激しく批判する1人となる]

■ 【08-1-041】西太一見王荊公旧詩、偶次其韻

【**解題**】西太一宮^{せいたいいつきゆう}には王安石^{おうあんせき}が作った詩が残されていて、蘇軾はそれにも次韻した。

王安石はこれより少し前の4月6日に他界しており、そのことを詠み込んだ第2首を訳す。

【訳文】

其の二

樽の中にいくら名酒があっても、

墓に注がれたのでは虚しい。

聞くところでは、

金陵^{きんりやう}の烏衣巷^{ういこう}のあたりも、

いまは草深く埋もれているとか。

【**補足**】[金陵^{きんりやう}の烏衣巷^{ういこう}はかつて南北朝時代には天下第一の繁華街であった。それがさびれてしまっていると詠むことで王安石^{おうあんせき}の死を暗示している。蘇軾が金陵に隠棲する王安石を訪ねたのはこれより2年前のことであった [→作品番号 07-1-046]]

■ 【08-1-042】王安石贈太傅

【**解説**】これは蘇軾が草稿を書いて哲宗が下した勅書。勅書の内容は、亡くなった王安石に皇帝より太傅の官〔皇帝の補佐役〕を追贈するというもの。

【訳文】

朕は、古の初めから観てきて、そこに灼かに天意があるのを見て取った。

非常の大事がまさにあるとするとき、天は必ず世に希な異人を生み出す。その名はその時代において高く、その学問は千年にわたる価値を貫く。その智は道の真髓を究めるのに十分で、その弁舌はその言ところを実行させるのに十分であり、その瑰瑋た文章は万物を藻飾するのに十分であり、その卓絶した行為は四方を風動すのに十分である。そして、その能力が用いられるや、天下の風俗は一年の間に風に靡はうに変わってしまうのである。

王安石は年少のころに孔子や孟子を学び、老いてからは釈迦や老子を師とした。六芸〔儒家の古典〕の遺された文章を全て網羅し、己の意で解釈を下し、諸子百家の陳べた跡などは糠粃たとして、民衆のあり方を一新した。

熙寧のときに為すこと〔政治の改革〕があるのに遇うと、群賢の冠として最初に用いられ、信任の篤いことは古今に比べられるものかなかった。いまにも功業が成就しようとするときに、遽に山林に住もうとの興が起り、富貴などは浮かぶ雲のようなものたとして、履物を脱ぎ捨てるようにして大臣の職を捨て去った。漁師や樵とも分け隔てなく交わり、山野を歩いて鹿も群れを乱さなかった。進退の美しさ、雍容さは皆が見習うべきものがあつた。

朕は政に臨み天下を御める初めにあたって、(先帝を喪つた)哀しみは極まらないものがあつた。三朝に仕えた老臣〔王安石〕を眷みよとしたのだが、邈く大江の南に行つてしまつた。(王安石が作つた)規模を究め観て、その人の風采を想見したのであるが、まさかその終わりを告げる知らせが、朕が喪に服している間に届こうとは思つてもいなかつた。どうして百年の寿命を満たさなかつたのか、涙を流さずにはいられない。

於戲、死生、あるいは用いられるか捨てられるかの際においては、誰も天に逆らうことはできない。
贈賄をし、哀みつつ榮譽を与えるための文章を朕は作らずにはいられない。

特に寵することをもって師臣の位[太傅]を贈り、蔚しも儒者の光となるように。庶幾のは、このことを知って、我が休しい命令に服してくれることだ。

【補足】 [(1) これは蘇軾が内発的に記したものではないものの、いくら皇帝の命令であっても、心に思ってもいないことを蘇軾は書いたりしないので、ここに示されている王安石の評価は、蘇軾自身の考えをかなりの程度反映しているといつてよいだろう。(2) 途中で「己の意で解釈を下し」[原文は「断以己意」[断じるに己の意をもってす]]とあるのは、王安石が経典に独自の解釈を下し、それに基づいて科挙の解答を書くよう求めたことをいっていて、蘇軾は王安石の独断的なやり方を強く批判していた。ここは読みようによってはかなりの皮肉であるとして取ることもできる。(3) 蘇軾の文集には、このような詔勅の草稿が多数収録されている。実際に詔勅を書かなければならなくなった者にとっては手本となり、またどこかしらに蘇軾の個性を見出すことができもして、後世に伝えるべき文化遺産として大切に扱われてきたのだろう。我々にとってはあまり興味をひくものではないので、訳出することはほとんどしない]

■ 【08-1-043】 答張文潜県丞書

【解題】 3月に、咸平県の役人であった張耒 [字は文潜] が都の太学の教官になるために上京してきた。このとき 33歳で、20歳のときに科挙に合格し、23歳のときに『超然台の賦』に和して蘇軾に送っていた [→作品番号 05-2-017]。張耒は上京する前に自作の詩文を蘇軾に送って教えを請い、それに応じて蘇軾はこの手紙を書いた。なお、手紙は独特の文体で書かれていて、訳者にはそれを十分に味読するだけの力がなく、これまで訳してきた手紙の多くはいつも「ずっぱ訳」であった。張耒に与えた

この手紙は非常に有名で、清水茂『唐宋八家文』朝日文庫（1979年）に詳しい解説があり、これに限ってはかなり正確な訳文となっている。手紙文の雰囲気をはほんの少しでも見ていただけるように、冒頭の部分だけ妙な読み下し調で訳してある。

【訳文】

ぶんせんけんじょう ちやうくん き ま こんにはは
文潜県丞の張君足下に頓首。

ごぶさた こころ かけ みやこ き ことごと ながみ しましあげ いとま
久別して思に仰てはいるのですが、京に到てからは公私ともに紛然して、書を奉る暇がありませんでした。忽と辱くも手教をいただきまして、且ず起居の佳勝を審り、至に慰であります、至に慰であります。文編を恵示り、三復感嘆しております。甚するの、君がわが子由に似ていることです。

弟の文章は実は私より優れているのですが、世間の人はわかっておりません。弟は私には及ばないと思っております。弟の性格として、他人に深く知られることを願っておらず、弟の文章もまた同じです。とらえどころなく広く、あっさりとしていて、一度読んで三度繰り返すと成る程と思えてきて、秀てた傑作であることがようやく隠れたままではなくなります。弟が『黄樓の賦』を作りましたときは、自分でも張り切ってほんくらどもを驚かせてやろうとしたようでした。ところがそれは私が代作したのだという者がいたのには、笑ってしまいました。これはきっと私の文章の最もよいところだけを見てのことなのでしょう。

今日ほど文学の衰えたことはありません。その原因がどこにあるかという、実に王氏[王安石]なのです。王氏の文章は善くないものではありません。問題は、人にも自分と同じにさせるのを好んだことにあります。孔子であっても、人を自分と同じにしようとはしませんでした。弟子の顔淵は仁に優れ、子路は勇に優れ、それを入れ替えるようなことはしませんでした。ところが、王氏は自身の学問をもって天下の学問を一つにしようとした。地味の肥えたところはどこも同じように作物が成長しますが、できるものはどこも同じというわけではありません。荒れて痩せた土地、塩分の多い土地は、見渡す限りただ黄色い茅と白い葦があるだけです。王安石が同じにしようとしたのはまさにこの「黄茅白葦」なのです。

しょうじゅん
近ごろ章惇君に会いましたところ、このようにいっていました。

「先帝は、晩年のころに、文学がさえなくなったのを非常に残念がられ、士を採用する方法を少し変化させようと考えておられました。しかし、その時間がありませんでした」

いま意見を申し述べる者は、科挙で詩賦を課すことを復活させようとか、太学で『春秋』を講義するようにはしようとかいっております。非常に結構なことです。

私は老いました。後世の人々も、古の人の完璧な文章と同じようなものを読めるようにできるとしたら、黄庭堅君、秦觀君、晁補之君、陳師道君と貴君等数人に頼るしかありません。聞くところでは貴君は太学の教授になるとのこと。ますます努力を重ねていただきたく思います。

『詩経』にこのようにあります。

徳輶如毛、[徳は毛のように軽くて誰もがができるはずのもの]

民鮮克举之。[しかし徳を實踐する者は実に少ない]

我儀罔之、[私は友人とそれを行おうとするのだが]

愛莫助之。[残念なことに手伝ってくれる者がいない]

このほかにもいろいろありますが、まずはよく御自愛ください。たまたま朝酒を飲んで酔っておりましたところ、お手紙を持って来た人に返事を求められ、詳しく書くことができませんでした。

【補足】〔(1) 蘇軾が徐州知事であったときに、大洪水の惨禍の後で黄樓を築いたことは作品番号 05-4-065 などで見ている。その黄樓に寄せたのが弟の『黄樓の賦』で、傑作とされている。(2) 王安石が科挙を改革しようとしたときに、蘇軾が反対したことは作品番号 03-2-006 以下で詳しく見ている。かつて歐陽脩が科挙を改革したことで蘇軾の名が天下に知られたように、科挙と文学の潮流は強く連動していた。王安石は科挙の採点に主観が入らないように、詩賦を課すことをやめ、また古典の解釈を一つに統一しようとした。それで、受験生は王安石が編集した参考書さえ学べばよいとい

う傾向が生まれ、文章も画一化された。そのことは先に見た勅書にも記されていた。

(3) 孔子が編集したといわれる『春秋』は最も重要な歴史書として重んじられてきた。しかし、記述が簡潔すぎて、本文を読んだだけでは何を意味するのかほとんど理解できない。王安石はそれを「官報の切れ端のようなものだ」として、学ぶに値しないと切り切った。王安石の考えは極めて合理的なものであったが、文化全般を肥沃にするものではなかった。(4) 章惇と会って話をしたとあるのが興味深い。章惇は改革派の中核的存在となっていたが、もともと蘇軾と章惇は親友で、蘇軾が獄に入れられたときには罪が赦されるよう諸方面に働きかけ、蘇軾が黄州に流されてからも手紙のやりとりがあった。蘇軾が都に帰還してからも、作品番号 08-1-001 で見たように司馬光との間を取り持つような助言をしたり、ここにあるように文学観を共有する会話を交わしたりしていたのだった。なお章惇は新法が次々に廃止されることに強く抵抗して朝廷での地位を失い、この手紙より少し後の閏 2 月下旬に汝州知事として都を去っている。そのとき蘇軾は職務として章惇を厳しく弾劾し、それが起因となったのか、章惇は次第に蘇軾兄弟に対して憎しみを抱くようになる。(5) 蘇軾の門下生で特に優秀であったとされるのが、いわゆる「蘇門四学士」で、黄庭堅、張耒、晁補之、秦觀の 4 人である。これに陳師道と李廌 [→作品番号 07-2-020] を加わえて「蘇門六学士」といわれることもある。蘇軾のこの手紙には「六学士」のうちの 5 人が挙げられている。蘇軾は、黄州の東の坡で自ら耕す罪人から、一国の文化をリードする立場に大きく変わったのである]

■ 【08-1-044】 与滕達道

【解題】 親友の滕元発 [字は達道] [→作品番号 07-2-051] に送った手紙。滕元発はこのとき湖州知事から鄆州知事に移っていた。

【訳文】

孟震君は黄州で親しくしていた人で、ともに歓びを極めた間柄でした。いまは引退し、貴君の治下の人です。どうか探してみてください。孟震君は真の君子です。

【補足】〔(1) 孟震について詳しく記した文章を作品番号06-4-070で見ている、そこに孟震は鄆州の人であった。かつて同じく滕元発に賈収と会うよう勧めていたことと合わせると〔→作品番号07-1-054〕、蘇軾が「君子」との交遊関係を大切に思っていたことがわかるであろう。なお、孟震とは常州で再会したことを作品番号07-2-039で見ている〕

■ 【08-1-045】次韻子由送陳侗知陝州

【解題】6月10日、陳侗〔字は成伯〕が陝州知事に任命されて都を出て行くことになり、蘇轍が送別の詩を作り、蘇軾が次韻した。

【訳文】

昔、四頭の鉄製の牛を黄河に沈め、その上に橋を渡したという。

その牛のように、

天に漲るばかりの流れの中でもしっかと踏ん張り、鞭で打たれてもびりとも動かない、

それは誰なのか。

昔、徐邈は常に同じ生き方を貫いていただけだったのに、

世俗がいつも変化し続けたために、

徐邈の評判は上かたり下かたりした。

貴君とかつて別れてからのことはいまさらいうまい。

世間の事は空に浮く雲のようで、
 数限りない人が、即墨阿いつわりの毀誉褒貶の内に置かれ、
 かつての良い評判は実のじつない虚声ばかり、
 促織こゑるぎのように音を立てるだけで実際に機を織はたりしなかった。

貴君と会って笑い合うのは、
 どうしようもなく白髪だらけになったこと。

いまや天を駆ける勢いの馬はみな大空の雲を踏み、
 飽きるほどのまくさを得て長く嘶ないている。

皇城の庭には天下の宝、種々の武具がみな集まっている。
 貴君だけが手を振って都を去る……

粗末な衣服でやってくる貴君を、
 歓迎する民衆の歌をかの地で聞くことになるだろう。

陝州せん いにしほ せきこくは古の楽国で、金の盃さかづきに酒を注ぐような奢侈せうぎの地とされているが、
 貴君が赴任したなら、
 統治の仕方はすぐに全く新たなものとなるだろう。

それによって怒る者もあれば、喜ぶ者もあれば、長く怨む者もあるだろう。

これ以上のことは申すまい、

評価は後の人に委ねればよいのだ。

【補足】〔(1) この詩は、蘇軾の次韻の詩によくあるように、韻に合わせて数々の故事を力づくで並べている。そのため、散漫かつ難解な作品となっている。全体としては、政治の大きな変動の中にあっても己を貫く生き方を賛美し、陳侗ちんどうを励ましたもので、そのことが伝わる程度に大まかな訳し方をした。(2) 詩の中ほどにある「即墨阿そくぼくあ」
 「「いつわり」とルビを振った」について説明を加えておく。昔、斉せいの威王いおうが即墨そくぼく

知事を都に呼び、「君が即墨に赴任して以来、わしは君のことを悪くいう報告ばかりを聞いた。そこでわしは人を派遣して即墨の実態を調査させたところ、よく治まって民が豊かに暮らしていることがわかった。君の評判が悪かったのは、君がわしの側近に付け届けをしなかったからだ」といって、大いに褒めた。威王は阿あの知事を都に呼び、「君が阿に赴任して以来、わしは君のことを良くいう報告ばかりを聞いた。そこでわしは人を派遣して阿の実態を調査させたところ、全く治まっておらず、民衆が苦しんでいることがわかった。君の評判が良かったのは、君がわしの側近に付け届けをしたからだ」といって、即座に死罪を言い渡した。地方官の業績が正しく君主に報告されないことをこの詩では「即墨阿」の3文字に籠めたのである。つまり改革政治の弊害としてそのようなことがあったといっているのである。(2) このころに蘇軾の長男の蘇邁そまい とくこうは徳興県の役人を辞めて [→作品番号 07-1-029]、別の任務に就いたようだ

■ 【08-1-046】 呂惠卿責授建寧軍節度副使本州安置不得簽書公事

【りょけいけい 解題】 呂惠卿の名をこれまでも何度か見てきた。改革の実行部隊の指揮官として王安石おうあんせきが抜擢した人物で、呂惠卿の辣腕がなければ改革の実行はもつとのろのろしたものになっていたであろう。呂惠卿は己の力を過信して次第に増長し、王安石が上にいるのがうとうとしくなり、策略によって王安石を失脚させた。呂惠卿にとっての改革は、自身が権力を握るチャンスを与えてくれるものであって、理念などは二の次だった。皇帝が代替わりして保守派が朝廷に復帰すると、呂惠卿は厳しく断罪され、誅殺を求める声も大きかったが、6月23日に都からの追放が言い渡された。これはそのときに呂惠卿に示された勅書で、蘇軾ほんしゅうあんち ふとくせんしやうこうが起草した。題名にある「本州安置不得簽書公事じ」と全く同じ字面を蘇軾が黄州こうに流されたときにも見ている [→作品番号 06-1-001]。指定された場所で軟禁状態に置かれ、公務に関わることを禁じるものである。この勅書

には、呂恵卿のさまざまな罪状が故事を踏まえた字句の中に籠められている。ここでは大意が通じるよう、上辺をざっと撫ぜるだけの訳文とした。ここで注目すべきは、呂恵卿を用いたのがそもそもの誤りだった〔≒そもそも改革を推進したことが誤りだった〕とするのは神宗〔つまりこの勅書を言い渡す哲宗の父〕を貶めることになるので、そのようには決して言わないよう格別の配慮をしていることだ。

【訳文】

敕書にいう。

大悪人が高位にあると、民衆は安らかに暮らせない。法の番人がてたらめな刑の裁量をする、人々は異論を唱え出す。天に漲るそのような罪を正すことができるのなら、永く後世の模範となるであろう。

汝〔呂恵卿〕はちっぴけな升のような才能と、細かいところをひっかくだけの知恵でもって、宰相〔王安石〕に諂い仕えて朝廷の高官に昇った。禍を樂しみ功を貪り兵を好み殺を喜び、民衆から収奪することをもって仁義と置き換え、法律をもって儒学の經典と置き換えた。初めに青苗法を建て、次に助役法を行い、さらには均輸法で国が商人と利益を争うような政策を実施し、民衆は飼っている鶏や豚に至るまで目こぼしなく取り立てられるようになった。国を蝕み民を害するような連中が我先にと腕まくりしてそこに加わった。

先帝〔神宗〕は賢者を用いるのが十分ではないことを恐れ、円が転がるように人々が善に向かってゆくことを望まれた。古の堯が罪人も試みに用いたように、先帝は汝を採用したのだが、孔子が弟子の宰予を「おまえは終生からくたでしかない」と叱りつけように、汝が生来の奸を露わにしたときには都から厳しく追放した。それでもう過ちを改めたであろうと（先帝は）考えられて、また少し重い職務に戻された。ところが、皇帝をたぶらかすようなことを陳上したために再び地位を落された。先帝は反覆して教戒されたのだが、汝の悪心は改換することがなかった。先帝が、汝が軽々しく事実を捻じ曲げることを戒めたお

言葉はいまもありありと残っている。

汝は仲間^に引き入れた者とともに君主を欺いた。汝は仲間とした者とは初めは足を摩^{さす}ってやるほどまで親しくしながら、ひとたび反目して怒ると、噛みついて次々に大獄を起し、私的な手紙まで暴いて罪に陥れ、一党を率いて攻撃し、天下の半分までを罪人にし、汝に賄賂を贈るものが全国に及んだ。しかも、再び用いられた年には西辺で紛争があり、汝は妄りに新たな戦略を立て、旧来の枠組みを変えようとした。どち狂った謀^{はかりごと}を無理やりひねり出し、結局を大敗北を喫してしまった。大きな口を叩いたことがここに及んで、いまさら涙を流しても、もう遅いのだった。

朕が皇位を継いだ最初に、辺地を安んじる詔を出した。朕の号令は汝の謀が偽りであったことを明らかにし、賊人を戒めるためのものであった。汝が国を迷わし、不道を行ったことは古から稀にしか聞かないものだ。それでも誅殺することを赦し、遠く流すだけとする。国は常に法があり、朕が敢えて私の処罰をするのではない。

■ 【08-1-047】 答湖守呂景純

【**解題**】湖州知事の呂希道〔字は景純〕への手紙。かつて呂希道には送別の詩を贈っていた [→作品番号 03-3-012]。

【訳文】

……呉興〔湖州〕は晋の時代から、風流を具えた賢人の太守〔知事〕が続きました。ところが、私だけが不肖な太守で、罪をもって去ることになり、湖州の溪山を垢で汚してしまったのでした。貴君は深く湖州と私を思っ、その垢を洗い落してくれましたので、その意は忘れることはありません。私は湖州には長くはいなかったのですが、数十首の詩を作りました。それらはずっとすっかり忘れていて、ただ四首だけを憶えておりましたので、それを録して謹呈いたします。どうぞ笑ってください。賈収君は老いて病み、しかも貧乏です。お心配りをいただければ、甚だ幸いです。

【補足】〔(1) 呂希道^{りよきどう}は、蘇軾^こが湖州知事であったときに詠んだ詩や書画を集めて、版に刻んで広めようとしていた。(2) 終わりで賈収^{かしゅう} [→作品番号 07-2-045] について記している。友人を大切にする蘇軾の気持ちが伝わってくる〕

■ 【08-1-048】 与楊元素

【解題】楊繪^{ようかい} [字は元素^{あざな げん そ}] [→作品番号 08-1-016] に宛てた手紙。楊繪^{じよ}は徐州知事となったので、かねてそこにいたことがある蘇軾が町のまわりの名所を記して知らせた。

【訳文】

城南^{はんぞう}に范増の塚があるとされていますが、それは誤りで、本当の塚は居巢^{きょそう}県にあります。城北^{りゅう}には劉向^{りゅう}の墓があり、私はそこに祠堂を建てようと考えましたが、洪水のために果せませんでした。貴君にもも余力^{こく}があって、それを作られたなら、まことに結構なことです。城西^{せきんおう}には楚元王の墓があり、かつて私は獵^{せきぶつざん}に出て、そのあたりに行きました。石仏山もまた眺めのよいところです。

【補足】〔(1) ここに名を挙げられている3人は漢^{かん}の始まりのころに人物である。(2) 蘇軾^{じよ}が徐州で獵をしたことは作品番号 05-5-001 で見ている。(3) 石仏山^{せきぶつざん}は、雲竜山^{うんりゅうざん} [→作品番号 05-3-047] の別名であるという。とすると、作品番号 05-5-028 に詠まれていた石仏山は、蘇軾の故郷の山として解したのだが、徐州の石仏山も兼ねていたのかもしれない〕

■ 【08-1-049】 与親家母

【解題】これは亡き親友^{ふんどう}の文同の妻に宛てた手紙。表題に「親戚の家の母」とあるのは、文同の息子^{ぶんむこう}の文努光と蘇轍の娘が夫婦となっていたからである。文努光は父の棺^{こくわん}を携えて蜀^{しよく}の郷里に帰り [→作品番号 06-1-055]、足掛け3年の喪が終わった後に上京

し、都に帰ってきた蘇軾や蘇轍と久しぶりに会った。ところが、その直後に急死しまったのだった。故郷にいる文努光の母に、今後のことについて蘇軾が報せたのがこの手紙である。

【訳文】

……弟の娘^{ぶんむこう} [文努光の妻]は文君が亡くなってからは、ひどい悲しみのなかりにあって、病に陥ってしまうのではないかと心配しているところです。……息子の蘇邁^{そまい}を帰郷させて、十一郎君を都に迎えようかと考えています。弟の娘はいまは帰郷できる状況にはないので、少し落ち着くのを待ちたいと思います。いずれおそばに参ってお仕えてきるであります。……

【補足】 [この手紙から推測するに、若くして亡くなってしまった文努光^{ぶんむこう}を惜しむとともに、その葬儀をどのように行うべきかを思案していたのだろう。長男の蘇邁^{そまい}は徳興^{とくこう}県での任務を終えたので、一度帰郷させて、文努光の弟と推測される十一郎を都に連れてきて、葬儀を行わせようと考えたであろう。実際には蘇邁^{そまい}は、酸棗^{さんそう}県での職務を授かって赴任するので、故郷には帰らなかったようである]

■ 【08-1-050】 和王晋卿、并引

【解題】 蘇軾と連座して罰せられた者の中に王詵^{おうしん} [字は晋卿^{あざな しんけい}] がいた。王詵は皇帝の婿として特別に恩遇されていながら不埒な行いがあったとして他の人よりも重い処分を受けた。かつて蘇軾は黄州^{こうしゅう}にいたときに、王詵が赦されたとの誤った情報に接し、そのことを手紙に記していた [→作品番号 06-2-027]。実際に都に帰還したのはこのころのことであった。これは王詵の詩に和したもの。

【訳文】

いん
引[序]

駙馬都尉ふばとゐの王誼おうしんは、宋初そうしよの功臣おうぜんひん王全彬の子孫である。

元豊二年、私は罪を得て黄州こうしに貶められた。王誼にも累が及んで、遠く流され、互いに音信がないこと七年に及んだ。私はすでに召されて朝廷に用いられ、王誼もまた朝廷に帰還し、宮殿の門の外で出会った。感嘆の余り、王誼は詩を作り、私に渡した。その詩は、悲しい感慨を物に託し、窮阨きゆうやくに陥ったことを怨まず、泰然として、驕るところがない。貴公子の志がこのようであるのを憐れみ、その韻に和す。

【補足】[冒頭に「駙馬都尉」とあるのは、昔、皇帝の娘を娶った者に駙馬の職を与えたことから、「駙馬」は皇帝の婿の別称となった。その別の例を作品番号08-1-037で見っていた。王全彬おうぜんひんは宋の天下統一に顕著な功績のあった人。そうしたことから王誼を貴公子と呼んでいる]

東坡先生とうはは、かのとき東の坡で、独りたかざりで飲み、独りで舞い、

何にも身が属するところなかった。

明るい月に対して酒を酌み、

月と景と先生と三者で楽しみは十分に足りた。

酔ったまま草むらの間で眠り、

毒虫に噛まれることもなかった。

醒めて、帰り行く雁を見送り、

千里の彼方へと目を寄せ、

そのとき、悵焉ちやうえんとして公子おうしん[王誼]のこゝを懐おもった――

旅の間の食事に、玉のように輝ぎよくけいおしいものなどはないだろう、

加餐かさん[食事しょじに気を付けて養生せよ]の字を書いて、飛ぶ鳥に托して遠く送ろうとした。

しかし、

干からびた魚が泡ぶくをかけあうようなことをしたところで、

牛ほどもある己の大きな罪[王誅を巻き込んだこと]を救うことはできないと知った。

吾が生は寄せるがこときのみ、

何者かが禍福を我が身に与えるのではない。

禍も福も忘れるのがよい、

昨日の夢を追うようなことをしても何もならない。

その後、私はお上に願い出て、自ら農耕することを許され、

湖と山の間で老いの日々を送ることとなった。

二頃の田を開き、十年後に実が成る木を植えようとした。

まさか、この老いた眼で、宮殿の金の燈火を見ようとは思いませんでした。

公子もまた生きて還り、知事の職を授かることとなった。

人の賢と愚にはもとより定まったものがあり、

職務にもまた各々守るべきものがあるのだらう。

文章を作るのは特別なことではなく、

医術や卜術と同じように一つの技であるのだ。

朝廷はいま西方に注意を払わなければならない、

羌虜[外敵]は驕りたかぶっていてまたに宋に伏さずにいる。

遥かに知るのは、あちらでは、重陽の節句の酒も、

白い羽の矢で菊の花を杯に落して飲んでいるとか。

羨むのは、貴君がまことに將軍の家の生まれであること、

顔には武人としての意気が浮かんでいるではないか。

朝廷から長い纓を与えてもらって、

一戦して、敵将を捕らえ、失った地を回復して払い。

【補足】〔(1) この詩には、しばらく見ていなかった蘇軾の得意のセリフ「吾生如寄耳」〔^わが^{せい}は^よ寄せるが^{ごと}の^{のみ}耳〕が詠み込まれている。王誥に自身の人生哲学を伝えようとしたのだろう。(2) 詩の終わりの部分は、将軍の子孫として西方の前線で手柄を挙げよと、叱咤激励している。蘇軾は西方で再び戦火を交えることを望んでいるのではない。王誥が罰を受けたにもかかわらず、貴公子としての豪華な暮らしぶりを必ずしも改めようとしていないので、詩文にうつつを抜かしたりしてはいかんと突き放したのだろう。先に王鞏に^{おうきやう}苦言を呈したのと同様である]

■ 【08-1-051】 司馬温公神道碑

【解題】9月1日、^{し ぼ こう}司馬光が亡くなった。^{こうたいこうたいごう}高太皇太后によって朝廷に呼び戻され、国政を指揮することわずかに1年であった。皇帝は^{おんこくこう}司馬光を温国公に追封し、その勅書を蘇軾が起草した。北宋の二大巨頭というべき^{おうあんせき}王安石と司馬光に皇帝がそれぞれ追贈、追封した勅書を続けて蘇軾が起草したのは偶然とはいえ巡り合わせのようなものを感じないわけにはいかない。蘇軾は司馬光の伝記の基礎資料となる『^{し ぼ おんこうこうじょう}司馬温公行状』も執筆し、さらに^{げんゆう}元祐3年〔1088年〕1月に司馬光が埋葬されたときに、墓所に通じる道に建てられた碑に刻む文章『^{し ぼ おんこうしんどうひ}司馬温公神道碑』も書いた。ここでは、蘇軾の個人的な見解が比較的強く出ている『神道碑』を見ておこう。これは『^{とうそうはつ か ふんどうほん}唐宋八家文読本』にも採られ広く読まれてきたものである。

【訳文】

皇帝陛下^{てつそう}〔哲宗〕が即位されて三年、朝廷は清明で、百般の政務は時に合致し、民衆は安心して暮らせるようになり、風俗は一変した。〔司馬光が亡くなった後にもその徳が及んでいることを以下に述

べる]かつては軽薄であった人々も皆が心を洗って身のあり方を改め、務めて忠に厚い人となり、それぞれ己の行動を自重し、人の過ちを言い募るのを取じるようになった。中国は太平無事で、四方の諸民族は頭を下げて中国に指示を仰ぐようになった。ただ、西羌と夏国だけは叛したり服したり一定することなく、毒心を懐いて中国のことを悪く疑い、入寇を繰り返した。皇帝陛下は諸将に武器を備えたまま戦うことなく、中国の姿勢を示すよう命じられた。数カ月足らずで、西蕃の大首領の鬼章青宜結が都にやってきた[宋朝の号令に服した]。夏国は十数万で涇原に寇をなし、鎮戎の城下にまで至った。五日経っても得るところがなく、遁れ去った。西羌の首長の兀征声延は族人一万人とともに中国に降った。また、黄河はかつて曹村で決壊し、靈平に堤防を築いたのだが、今度は小呉で決壊して五年の間はあたりに溢れたままとなり、朔方は騒然となった。しかし、今年[元祐二年]の秋は長雨が一月にわたったものの、黄河はあまり溢れることなく、冬に及んで水が地に入ることますます深く、北に流れて、大昔に禹が通した旧河道に戻るばかりの勢いとなった。

こうして皇帝陛下が望むところのものは、求めずして獲られ、逆に憎むところのものは、掃うまでもなく去っていったのである。それで天下の人々は皇帝陛下の意が天の意と一致していると知ったのである。いまや最高の統治が実現し、家に不足がなく、人が十分にいて、刑罰を用いる必要がなく、咸平、景德年間[先帝の治世]のようになるのを期待するまでになった。

ある人が私に尋ねた。

「皇帝陛下と高太皇太后陛下がどのようなことをなさってこのようになったのでしょうか」

私はこう答えた。

『易経』の「大有の章」にこうあります。「上九。天よりこれを祐く。吉にして利にあらざるなし。孔子はこの文章についてこういっています。「天の助けるところのものは順なり。人の助けるところのものは信なり。信を履み順に思い、また賢を尚ぶ。ここをもって天よりこれを祐け、吉にして利にあらざるなしと」。二聖[皇帝と高太皇太后]は身をもって信と順を天下に先んじて実践され、司馬公を用いて天下の士を招き寄せられました。信と順と賢の三徳をまさに具えられているのです。まして私が観るに司馬公は仁人で

ありますから、天はこれを助けたのであります」

「どのようなことからそうだと知ったのでしょうか」

「司馬公は文章をもって世に名を知られ、忠義をもって君主と結ばれたお方です。朝廷の人々がそのことを知っているのはよいとしても、四方の人々は何によってそのことを知ったのでしょうか。士大夫がそのことを知っているのはよいとしても、農民も商人も兵士も何によってそのことを知ったのでしょうか。中国の人が知っているのはよいとしても、九夷八蛮[外国]の人々は何によってそのことを知ったのでしょうか[そこには天の不思議な働きがあることを暗示している]。司馬公が退いて洛陽に住んでいたとき、孔子の弟子の顔回が路地裏にいたのと同じように小さく暮らし、屈原が沼地に追放されたときと同じように疲労したありさまで、長らく人々から忘れられていました。しかし、その名が再び天下に聞こえると、雷が鳴るかのよう、あるいは銀河が流れるかのよう、どの家にもそのことが響きわたり、日差しがそそぐように人々の目に見えたのでした。司馬公の名を聞いた者は、いかに愚かで無知な婦人や子供であっても、あるいは獐猛で御し難い兵士や夷狄の者でも、さらには奸邪の小人、己を害する仇敵を激しく憎むような者であっても、袷を収めて顔色を変えて、深く嘆息し、そして涙を流さない者はいなかったです。私は元豊の末に登州から入朝し、八州を通過して都に至りました。民衆は私が司馬公と親しいのを知ると、行く先々で数千の人が集まってきて、馬の首の前で叫んでこのようにいいました。「司馬宰相にお伝えください。謹んで朝廷から去らないでください、厚く自愛されて百姓[全人民]を活かしてください」。このような者が千余里の間、絶えることがありませんでした。都に至って士大夫のいうことを聞くと、司馬公が(先帝の国葬に参加するために)初めて入朝したときに、民衆がその馬にすがって、前に進むことができなくなりました。都を守る兵士たちが司馬公が来るのを見て、お辞儀をしたり跪いたりして涙を流す者がたくさんいました。司馬公は驚き、(国葬がすむとすぐに)洛陽に帰ってしまいました。また、遼国や夏国が入朝する使者を派遣するときや、我が朝の使者が向こうに行くときには、向こうの人は必ず司馬公の様子を尋ねたものですが、司馬公が朝廷に招かれたと聞くと、遼国では敕令で国境を守る役人に、「中国では司馬公が宰相になる。慎んで国境での紛争を起こさないように」と命じまし

た。

その後、司馬公が亡くなると、都の民は市を止めて、弔意を表しに行き、衣服を売って香典を用意し、
 哭しながら車で行く者が千ないし万で数えるほどでした。皇帝陛下は趙瞻と馮宗道に命じて棺を護っ
 て洛陽に帰って葬儀を行わせました。趙瞻らが還ると、皆がいうには、「民は司馬公のために哭し、甚
 だしく哀しみ、哭すのは肉親を喪ったかのようにであった。四方から葬儀に集まった者は、数万人に及ん
 だ。また嶺南の封州の父老が司馬公の御霊を祭り、仏事を行って司馬公に哀悼の言葉を捧げたの
 が最も哀しいものだった。手に香を焚いて捧げて司馬公が葬られるのを見送った者はおよそ百余人で、
 天下の人々は皆が司馬公の像を画いて祀った」と。

このようなことは人の力によってできるものなのでしょうか。天が相けたのです。一人の人間が天を動か
 すには必ず道に拠らなければなりません。「至誠一徳」[最上の誠と純粋な徳]でなければ誰もそのよう
 なことはできません。

『礼記』にはこのようにあります。「ただ天下の至誠だけが人に本来具わっているものを全て発揮し尽くす
 ことができる。人に本来具わっているものを全て発揮し尽くすことができるのなら、物に本来具わっている
 ものを全て発揮し尽くすことができる。物に本来具わっているものを全て発揮し尽くすことができるのなら、
 天地の化育を賛ることができる」

『尚書』にはこのようにあります。「君臣の皆に一徳があるのならば、天心を享けるであろう。またこのよう
 にあります。「徳が一[全てにして純粋]ならば、動いて吉でないことはない。徳が二三[不純で乱れて
 いる]ならば、動いて凶でないことはない」。

ある人が千金を与えても受け取った者は喜ばず、逆に、ある人が一言いっただけでそれに従って死をも
 厭わずに行動します。その違いは、誠があるかないかによります。天まで満たすように降る雨も速やかに
 乾いてしましますが、一筋の糸のような雨たれは石を穿って穴を開けます。その違いは一であるか一
 でないかによります。誠にして一であるならば、古の聖人といえどもそれよりわずかでも優れているとい
 うことにはなりません。まして司馬公はどうであったのでしょうか。

こうして司馬公の徳を論じてきた結論として、人心を感じさせ、天地を動かしたことがこれほどまでに大きかったのは、二つの語でいうことができるのです。つまり、誠と一です。[以上が、天が宋朝の統治を助けることになった理由として、蘇軾が考えついたこと]

司馬公の諱は光、字は君実、その先祖は河内の人で、晋の安平献王の司馬孚の後裔で、その子孫の征東大將軍の司馬陽が今の陝州夏県涑水郷に葬られ、その子孫がそこに住むようになった。

曾祖父の司馬政は五代十国時代の乱れに遇って官に仕えず、祖父の司馬炫は宋朝の進士に及第し、秘書省校書郎となり耀州富平県の知事で終わった。父の司馬池は宝元、慶暦の年間の名臣で、兵部郎中天章閣待制にまでなった。曾祖母は薛氏、祖母は皇甫氏、母は聶氏である。

司馬公は初め進士を甲科の成績で合格して仁宗皇帝に仕え、天章閣待制知諫院にまでなった。

そのときに大議を提出して、皇族の子を皇太子に立てて、宗廟を安んじられるように申し上げた[仁宗には男児がなく、その後継者を誰にするのか、仁宗はなぜか決めるのをずっと拒んでいた]。宰相の韓琦等はその提言によってついに大計を定めた。(それによって皇位に就いた)英宗皇帝に仕えて諫議大夫竜閣閣直学士となり、陝西で募った義勇兵に入れ墨するのは人道に悖ることを論じ、また内侍の任守忠が皇室を乱したことを明らかにし、それを斬って天下に謝るべきだと主張し、任守忠にはついに死を賜った。また、(英宗皇帝の実の父の)安懿王を(皇帝がいかなる礼法で祀るべきかで大論争となったときに)先朝の故事に準ずべきことを論じて、天下の人々はそれが正論であると。神宗皇帝に仕えて翰林学士御史中丞となり、夏国の武將である崑名山と横山の衆が宋朝に降ろうとしてきたときに、後に必ず紛争を引き起こすものとなるので納れてはならないと強く論じ、果たしてその通りになった。神宗皇帝に勧めて生前に尊号を受けるのを止めることにし、それが万世に伝わるべき法となった。

王安石が宰相となって、青苗、助役の制度を定め、農地や水利の開発を行うために新法を定めようとしたときに、司馬公は真っ先にその害をいい、身をもって争った。当時の士大夫で、王安石に付かずして新法に利便がないとする者は、みな司馬公に依拠して自分の議論を重くした。神宗皇帝は司馬公を枢密副使に任命しようとしたが、司馬公は自身の主張が行われないのを見てその命令を受け

た。王安石が宰相となって、青苗、助役の制度を定め、農地や水利の開発を行うために新法を定めようとしたときに、司馬公は真っ先にその害をいい、身をもって争った。当時の士大夫で、王安石に付かずして新法に利便がないとする者は、みな司馬公に依拠して自分の議論を重くした。神宗皇帝は司馬公を枢密副使に任命しようとしたが、司馬公は自身の主張が行われないのを見てその命令を受け

た。王安石が宰相となって、青苗、助役の制度を定め、農地や水利の開発を行うために新法を定めようとしたときに、司馬公は真っ先にその害をいい、身をもって争った。当時の士大夫で、王安石に付かずして新法に利便がないとする者は、みな司馬公に依拠して自分の議論を重くした。神宗皇帝は司馬公を枢密副使に任命しようとしたが、司馬公は自身の主張が行われないのを見てその命令を受け

た。王安石が宰相となって、青苗、助役の制度を定め、農地や水利の開発を行うために新法を定めようとしたときに、司馬公は真っ先にその害をいい、身をもって争った。当時の士大夫で、王安石に付かずして新法に利便がないとする者は、みな司馬公に依拠して自分の議論を重くした。神宗皇帝は司馬公を枢密副使に任命しようとしたが、司馬公は自身の主張が行われないのを見てその命令を受け

た。王安石が宰相となって、青苗、助役の制度を定め、農地や水利の開発を行うために新法を定めようとしたときに、司馬公は真っ先にその害をいい、身をもって争った。当時の士大夫で、王安石に付かずして新法に利便がないとする者は、みな司馬公に依拠して自分の議論を重くした。神宗皇帝は司馬公を枢密副使に任命しようとしたが、司馬公は自身の主張が行われないのを見てその命令を受け

た。王安石が宰相となって、青苗、助役の制度を定め、農地や水利の開発を行うために新法を定めようとしたときに、司馬公は真っ先にその害をいい、身をもって争った。当時の士大夫で、王安石に付かずして新法に利便がないとする者は、みな司馬公に依拠して自分の議論を重くした。神宗皇帝は司馬公を枢密副使に任命しようとしたが、司馬公は自身の主張が行われないのを見てその命令を受け

なかつた。端明殿学士たんめいでんがくしとなつて都を出て永興軍の知事えいこうぐんとなり、留司御史台りゅうしぎょしだいおよび提挙崇福宮の肩書ていぎょしゅうふくぐうをもつて洛陽らくやうに退き、十五年を過ごした。今上陛下が即位されるに及んで、太皇太后が攝政となり、司馬公もんかじろを呼んで門下侍郎もんかじろとし、正議大夫せいぎたいふに遷し、左僕射さぼくしや[宰相]とした。司馬公は最初に皇帝の詔をもつて言路を開き、邪正を分別し、甚しはく邪なる者十余人を入れ替かへさせた。保甲法ほこうほう、保馬法ほばほう、市易法しえきほう、塩鉄茶法えんてつさほうを廃止し、最後さいごに助役法じょえきほう、青苗法せいびょうほうも廃止した。また士を採用する方法を議論ぎろんし、守令監司かんしを選んで民を養い、民を富ませる方策を建てた。こゝして最良の治世へと素早く向かつて行つたのだった。

しかし、司馬公は病げんゆうに臥し、元祐元年九月一日に宰相の位にあるまま亡くなった。享年は六十八であった。太皇太后はその知らせを聞いて慟哭めいされ、皇帝陛下も涙を流されて止まらなかつた。時に明堂めいどうを祀る儀礼が宮中で行われることになっていたのだが、式は行つたものの賀することはなかつた。二聖は葬儀に臨まれて哭ないで哀あはれまれること甚しく、朝儀をしばし止めることとなった。太師温国公を贈り、一品官いっぴんかんの礼服で亡骸おひなを包み、謚を文正ぶんせいとした。その親属十人を官員に取り立てた。司馬公は張氏ちやうを娶り、礼部尚書張存の娘で、司馬公より先に亡くなった。男子は三人で、司馬童しぼどうと司馬唐しぼどうは若年で亡くなり、司馬康しぼこうは現在秘書省校書郎である。孫は二人で司馬植しぼしよく、司馬桓しぼかんは承奉郎しやうほうろうとなっている。

元祐三年正月辛酉、陝州せんしゅうの夏県かの涑水南原そくすいなんげんの晁村ちやうそんに葬った。皇帝陛下はその墓道に碑を建て、「忠清粹徳之碑」と名付け、そこに刻む文を私に書かけよう命じられた。私はすでに司馬公の行状記を作り、また端明殿学士たんめいでんがくしの范鎮はんちんがそれを要約して墓誌を作った。そのために詳細をまた書かけようなことはしないで、概略をここに論じることとした。

人々は皇帝陛下と太皇太后が司馬公を速やかに昇進させて十二分に活躍するようになされたことは見たけれども、神宗皇帝が司馬公を深く知しっておられたことはわかつていない。士庶人しじゆじんから卿大夫けいたいふに至るまで、師として敬い友と交わるときには、力としては互いに依存し合あひ合あひは足りなくても、道義として信じ合あひ合あひことができ、己と同じであるのなら親しみ合あひ、異なるならば疎んじるものである。師や友の過ち

を聞いて喜ぶ者はいないし、侮られて怒らない者はいない。まして君臣の間であるのならなおさらである。熙寧年間に朝廷の政事は司馬公のいうところと一つも相違するところはなく、数十回も書を提出し、十分に議論し尽くして憚るところがなく、政敵はそれに堪えられなかったのだが、先帝は安んじてそれを受け入れ、怒らなかつただけでなく、左右の輔弼の臣として用いようとした。さらに、その著わすところの書物[[資治通鑑]]に序文を与え、邇英閣において自らそれを読まれた。司馬公を深く知らずして、そのようなことになるものだろうか。二聖が司馬公を知ることは、自身と同じ考えであるところからくるのであって、先帝が司馬公を知るのは、自身と異なる考えでありながらだった。だから私は先帝は最も難しいことをされたというのである。

昔、齊朝の神武皇帝は病気になったときに、その子の世宗にこういった。「侯景が河南を自分勝手に統治すること十四年、もろもろの將軍でそれに敵う者はいない。ただ慕容紹宗だけがそれを制制することができる。わしが慕容紹宗を重く用いなかったのは、そなたのために遺しおいたからなのだ」。また、唐朝の太宗皇帝はその子の高宗にこういった。「そなたは李勣には何らの恩を与えていない。いまわしは李勣を遠ざけて朝廷から出すから、そなたは李勣を大臣にして用いるがよい」。そして李勣を出して兗州都督とした。齊の神武、唐の太宗はその隆盛をもたらした点において先帝に比べて足りないものがあつたけれど、昔の君主も子孫のために遠慮した点では皆類似している。つまり、自分自身はむしろその人のことを知らずにといたといわれようとも、その子が賢者を得る利を享受できるようにしたのである。先帝が司馬公を知るのも同じで、十分にそれを用いることがなかつたのは、このような理由からだったのである。

私は以上のように司馬公の事を書き、揮手稽首して詩を作るものである。

於皇帝、[於皇なる上帝]

子恵我民。[我が民を子として恵む]

孰堪顧天、[孰れか天を顧みるに堪えん]

惟^た聖^{せい}与^{じん}仁。[惟だ聖と仁と]

聖^{せい}子^し受^{めい}命^う、[聖子 命を受ける]

如^{ぎやう}堯^{ほじ}之^{ごと}初^{ごと}。[堯の初めの如し]

神^{しん}母^ぼ詔^{これ}之^{みことり}、[神母 之に 詔す]

匪^{すみやか}亟^{あら}匪^{おむる}徐^{あら}。[亟なるに匪ず 徐なるに匪ず]

聖^{せい}神^{しん}無^{こころ}心^な、[聖神 心無し]

孰^だ左^{これ}右^さ之^{さゆう}。[孰れか之を左右する]

民^{たみ}自^{みずか}択^{しよう}相^{えら}、[民自ら相を択び]

我^{われ}興^{おこ}授^{これ}之^{さず}。[我 興りて之に授く]

其^そ相^{しよう}惟^こ何^{なん}、[其の相は惟れ何ぞ]

太^{たい}師^し温^{おん}公^{こう}。[太師温公]

公^{こう}来^{にし}自^よ西^き、[公 西自り来たる]

一^{いち}馬^ば二^に童^{どう}。[一馬二童]

万^{ばん}人^{にん}環^{これ}之^{めぐ}、[万人 之を環る]

如^{かつ}渴^{せん}赴^{おむ}泉^{ごと}。[渴の泉に赴くが如し]

孰^だ不^{こう}見^み公^み、[孰か公を見ざらん]

莫^わ如^{さき}我^し先^な。[我が先に如くは莫し]

二^に聖^{せい}忘^{おのれ}己^{わす}、[二聖 己を忘れ]

惟^こ公^{こう}是^こ式^{のつ}。[惟れ公に是れ式とる]

公^{こう}亦^{また}無^{われ}我^な、[公も亦我無く]

惟^こ民^{たみ}是^こ度^{はか}。[惟れ民を是れ度る]

民^{たみ}曰^{いわ}樂^{たの}哉^な、[民曰く「楽しいかな」]

既^{すで}相^し司^ば馬^{しよう}。[既に司馬を相とす]

爾賈於途、なんじ みち あきない〔爾は途に賈せよ〕

我耕於野。われ の たがや〔我は野に耕さん〕

士曰時哉、しいわ とき〔士曰「時なるかな」〕

既用君実。すで くんじつ もと〔既に君実を用う〕

我後子先、われ おく し さき〔我は後れん子は先んぜよ〕

時不可失。とき うしな べか〔時失う可からず〕

公如麟鳳、こう りんほう ごと〔公は麟鳳の如く〕

不驚不搏。し はく〔驚せず搏せず〕

羽毛畢朝、うもう ごとごと ちょう〔羽毛畢朝〕

雄狡率服。ゆうこう ひき ふく〔雄狡率い服す〕

為政一年、まつりごと な いちねん〔政を為す一年〕

疾病半之。しっぺいこれ なか〔疾病之に半ばす〕

功則多矣、こう ずなわ おお〔功は則ち多く〕

百年之思。ひゃくねん おも〔百年の思いあり〕

知公於異、こう い し〔公を異に知り〕

識公於微。こう び し〔公を微に識る〕

匪公之思、こう こ おも あら〔公を之れ思に匪ず〕

神考是懷。しんこう こ おも〔神考を是れ懐う〕

天子万年、てん し まんねん〔天子万年〕

四夷来同。し い き どう〔四夷来たり同ず〕

薦於清廟、せいびょう すす〔清廟に薦む〕

神考之功。しんこう こう〔神考の功〕

【補足】〔(1) 終わりの詩の読み下しは笹川種郎訳註『国訳唐宋八家文』(1920年)に

依拠した。古めかしい四言詩で『神道碑』に重々しさを加えたもので、意味は気にせずには眺めていただきたい。(2) 司馬光は王安石が立案した新法を全て廃止する方針を執り、それに対して蘇軾はしばしば異なる意見を述べ、司馬光が不快感を露わにしたこともあり、蘇軾は地方官として外に出ることを願い出たりもした。しかし、この『神道碑』では司馬光に最大級の賛辞を贈っている。(3) 余論ながら、「四方の諸民族は頭を下げて中国に指示を仰ぐようになった」とあるのは、いわゆる中華意識が露骨に出た過大な自国礼賛の虚言である。この文章の性格として、司馬光および宋朝を賞揚することが求められているので、このようにならざるを得ない面もあるのだが、蘇軾にしても時代の偏見から免れることができなかったのは事実である。当時の宋国を巡る国際情勢を先入観なしに眺めるなら、どこかの国において「中国に指示を仰ぐ」といったことはなかった。遼、西夏、羌といった国々との多国間関係のバランスの中で、むしろ宋にとっては不利な条約を結ぶことによって、唐代よりもかなり縮小した領土を保っていたのだった。ただし文化的には宋は圧倒的な先進国で、日本も含めて宋から懸命に学ぼうと努めていたので、その点では「四方の諸民族は頭を下げて」という言い方をしてもおかしくはないのだろう。(4) 司馬光という求心力を働かせることのできる人がいればこそ、蘇軾のように異論を唱える者も内に含めて保守派はまとまりを保っていた。しかし、司馬光が亡くなった途端、保守派内に亀裂が生じた。その一因となったとされる一つのエピソードが伝えられている。いろいろな書物にいろいろに書かれているが、ここでは、これまでも何度か見てきた邵博の随筆『邵氏聞見後録』[→作品番号 07-1-083 など] の記事を引用しておこう]

【訳文】

邵博：『邵氏聞見後録』

司馬光し ば こうが宰相の位に就いたまま亡くなったときに、程頤てい いが葬儀を取り仕切り、もっぱら古いにしえの礼法に基づいて行おうとした。折しも宮中の明堂めい どうで式典があったので官僚はそれに参加し、蘇軾はその後で司馬光の家に弔問に出かけた。

すると、程頤が引き留めて、

「あなたはお目出度い式典に参加されました。孔子こう しは『哭すればすなわち歌わず』[悲しみと喜びは両立しない]とおっしゃったではありませんか。ここから中に入ってはなりません」

と、いった。

蘇軾は顧みることなく入り、程頤にこゝろをこらした。

『論語ろん こ』に『哭すればすなわち歌わず』とあるのは聞いています。しかし、『歌えばすなわち哭さずとは聞いておりません』

程頤は反論できなかつた。

【補足】程頤てい いは兄の程顥てい こうとともに、宋代そう だいの儒学研究の礎を築いた大学者。それを基盤として、後に朱熹しゅ きがいわゆる朱子学しゅ し がくを樹立する。程頤は長らく官職には就かず、学問に専念していたのだが、司馬光の推薦てつ しょうで哲宗皇帝の家庭教師となった。程頤は極度に厳格かつ非妥協的な性格で、融通無碍なところのある蘇軾とはもともとそりが合わなかつた。程頤は、黄州こうに流されている蘇軾の羽目をはずした振る舞いを耳にしてはなはだ憤慨していたように [→作品番号 06-5-035]、とにかく蘇軾のすることが全て気に食わなかつたようだ。上に引用した記事によると、程頤が司馬光の葬儀を遠い昔の礼法通りに厳粛に行おうとしていたところへ、蘇軾が大勢の人々を引き連れて、たぶんがやがやと弔問に訪れたので、むっとなつて、『論語』の言葉を引いて、「音楽が演奏されるような晴れやかな儀式に参加した後で弔問にくるのはけしからん」と難癖を付けた。それに対して、『論語』にあるのは、(人情の自然な流れとして) 悲しみのあまり泣いた後で歌って楽しむことはできないといっているのであつて、その逆では

ない」と蘇軾が即座に応じたので、程頤は次の言葉に詰まり、悔しい思いをした。さらに、ある書物によれば、蘇軾は「田舎教師がごちゃごちゃうるさいことをいう」というような意味の上品なことをつぶやき、それを耳にした程頤は非常な恨みを抱いたという。このあたりのエピソードの真偽のほどは必ずしも明らかではないが、蘇軾が当意即妙の皮肉交じりの言辞を吐いてしまうことはよくあり、それが後々までも尾を引くこともあった。原因はそれだけではなかっただろうが、司馬光の死後、保守派は程頤等の保守反動派と、蘇軾等の革新的保守派と、そのどちらにも属さない一派の三つに分裂してしまうのだった]

■【08-1-052】題王晋卿詩後

【解題】王詵おうしん あざな しんけい [字は晋卿] [→作品番号 08-1-050] の詩の後ろに記した短文。

【訳文】

王詵おうしんに私の罪の累かさねが及び、私が黄州こうに謫居たくきょとなったとき、王詵おうしんは武当郡ぶとうに流された。飢寒に迫られて困窮きんきゆうするのは、もとより書生したいふ [士大夫] には常にあることで、私自身はそれをよしとしてよくすることはなかった。しかし、王詵おうしんが貴公子でありながらこの憂患ゆうわんに患あはれられたことを非常に心配した。王詵おうしんは正しさを失うことなく、詩詞たかはますますエミになり、超然たかとして世の外たかにあって楽しむようになった。

孔子こうしはいった。

「不仁ふじんの者は久ひさしく約やく [窮乏] するところにいることはできないし、久ひさしく楽しむところにいることもできない」

この言葉は王詵おうしんとは真逆まぎやくのことをいったのであろう。

元祐げんゆう元年九月八日。

【補足】 [この短文では『論語』の一節ろんごを引いて王詵おうしんを褒めている。実はかくありたいものだとの激励げきれきの文なのだろう]

■【08-1-053】与仏印

【解題】9月12日、蘇軾は翰林学士知制誥かんりんがくし ち せいこうに任命された。翰林学士というのは皇帝のブレーン集団の中でも特に将来を嘱望される優秀な人が任用されるポストで、多くの者がここを経て大臣、宰相へと昇るようになる。これは栄えある新しい職務に就いたことを金山寺きんざん じの仏印大師了元ぶついでん しろようげん [→作品番号 07-1-061] に報告した手紙。

【解題】

塵の世の労苦が後から後から続く中、お手紙を頂戴し、拝見しましたところ、金山寺きんざん じへの奥ゆかしい道を歩みつつ、禪師殿ぜん じのお声を聞くような気がし、言葉にならないほどの慰めと悦びが湧き上がってまいりました。このところ安らかにお過ごしであることも知られ、まことに結構に存じます。私は御恩を蒙り、翰林学士かんりんがくしに抜擢されて、陛下のお近くにお仕えすることとなりました。これは儒者として栄誉の極みであります。これも禪師殿のお導きによるものであります。暑さが残るなか、千万自重されますように。

【補足】[蘇軾が就いた翰林学士知制誥かんりんがくし ち せいこうの職は、皇帝に代わって各種の詔勅の原稿を書くことを求められる。中国の官僚政治は徹底した文書主義であったから、皇帝は常に大量の文書を発しなければならず、従って知制誥はなかなか多忙である。蘇軾がそれをどのように務めたのか、興味深いエピソードが伝えられている。ただし、それを記録して後世に伝えたのは周密しゅうみつの随筆『齊東野語』せいとう や こで、その書名は「片田舎のよた噺」という意味の成句で、しかも周密は蘇軾より200年後れて生まれた人であるから、真実であるとの保証はない。ただし、周密は宋末期の代表的な知識人であるから、少なくとも当時は事実であるとして語り継がれていたことを記録したのだろう]

【訳文】

しょうみつ せいとう や こ
周密：『齊東野語』より

こうまい かんりん がく し
洪邁が翰林学士であったときのこと。ある日、詔勅の執筆に当たって、朝早くから夕方までにおよそ二十余篇を書いた。仕事が終わりに、庭に出て歩くと、老人が花のもとで日向ぼっこをしていた。

誰かと問うと、老人は、

かいほう げんゆう
「開封の者で、代々翰林院の小間使いをし、いま八十歳を超えました。幼いころに、元祐年間のもろもろの学士様のお姿を拝見しました。いまは孫がここで御用を勤め、こうして老いの日々を過ごしております」

と、いい、そして、

「聞くところでは、近頃は書類がはなはだ多くなりまして、学士様もさぞ御苦勞をなさっておられましょう」

と、いったので、洪邁は喜んで、

「そうなのだよ。今日は二十篇以上も書かなければならなかった。しかし、もうすでに全部終わったのだ」
老人は感心していった。

「学士様は目から鼻に抜けるお方、二十篇ありましても、学士様にとってはそれほど多くではないのでございましょう」

洪邁は誇らしげに、

そ 蘇
「蘇学士〔蘇軾〕だって、たぶんこれほど速くはなかったと想うぞ」

老人はうなずき、

「さようでございますなあ。蘇学士様もお速くはありましたけれど、そこまでではございませんでした。ただし、決して書物を調べたりはなさいませんでした」

洪邁は顔を赤らめ、自分の失言を取った。

その後、客人に向かってこの話をし、

「人間は自慢してはならない。このときは本当に穴があったら入りたかった」

と、いった。

【補足】 [(1) 洪邁^{こうまい}は蘇軾^{そうしつ}よりも 100 年ほど後の人で、非常に博識で、『容齋隨筆』や『夷堅志』^{いけんし}といった巨大な著作物を遺した。南宋^{なんそう}の朝廷に仕え、そのときの都は臨安^{りんあん} [杭州] にあった。それで老人は開封^{かいほう}の人間だといって、北宋^{ほくそう}の時代から朝廷に仕えていたことを明かしたのである。老人が 80 歳をかなり超えていけば、年代的にぎりぎり嘘ではない範囲におさまる。(2) 詔勅は、その内容に合致した古典を縦横に引用し、含蓄ある堂々の文章に仕立てるの必要があり、洪邁といえどもあれこれ書物をひっくり返して調べなければ書くことができなかつた。蘇軾は、詔勅であれ詩であれ、古典からびつたりの故事を引いてくるのはお手のもので、書物を参照することなく正確に引用するのはまさに神業であつたのだらう]

■ 【08-1-054】 自題臨文与可画竹、臨篔簹図並題

【解題】 親友の亡き文同^{ぶんどう} [字は与可^{よか}] [→作品番号 08-1-032] の竹の画を見てこの詩を詠んだ。蘇軾自身による跋文も残っているので、それも合わせて訳す。

【訳文】

石室先生^{せきしつ} [文同^{ぶんどう}] の内面で清らかな興味が湧き出すと、

筆が縦横に動き、

あたかも鳳^{おおとり}が舞い飛ぶかのようになる。

先生はいう、

「君 [蘇軾] の風雅な心を借りて篔簹谷^{うんどうこく}の竹を写してみたのだよ」

その画がここに留まって、

詩人 [蘇軾^{そうしつ}] に吟諷を発せしめるのである。

跋

蘇軾は、石室先生のこの墨の戯れに臨み、この日、李廷珪の墨を試してみた。元祐元年十月二十三日。

【補足】〔(1) 石室先生は文同の号である。(2) 文同は篔簹谷の竹を好み、画に描いたことは作品番号 05-5-086 などで見ている。画師は亡くなっても画はそのままにある。そこに微妙な違和感があって、この詩が生まれたという解釈で訳してみた。(3) 李廷珪の墨は当時最高級品とされていた [→作品番号 07-1-067]〕

■ 【08-1-055】 送賈訥倅眉二首

【解題】蘇軾の故郷は蜀の眉州である。賈訥という人が眉州の副知事として赴任することになり、この送別の詩を贈った。

【訳文】

其の一

かの年に私は蜀の地に空しく入ることを嘆いた。

あれから峨眉山を見ることはなく、

再び帰るのはいつであろうか。

遙か遠くにいても知るのは、

質素な衣服で赴任してくる貴君を歓迎する歌を童子たちが歌い、

李知事が先祖を敬ってよくその地を治めているということ。

貴君は道すから鹿頭関に昇って、都の方へと飛ぶ雁に逢うであろうか。

人日の節[一月七日]に、眉州の人々は町の東に出て蟆頤山に遊ぶ、

きっとそこには私が見た梅がまだあるだろう。

その昔、王褒^{おうほう}は詩を歌って才能のある人を募ったといけれど、
私は老いてもうそのようなこともできないので、
王褒の子^{おうえん}に比すべき貴君のような人を求めるのである。

【補足】〔(1)「かの年に蜀^{しよく}に帰った」とあるのは、父の喪に服して帰郷したことをいう。喪が明けて上京してからすでに18年、蘇軾は一度も帰っていない。(2)李知事とあるのは、李琪^{りき}という人物であろうとされる。(3)終わりの部分の王褒^{おうほう}云々は、昔の著名人を引いて賈誼^{かいつ}のような優秀な後輩に期待したいとの思いを述べたもので、王褒についての解説は特にいらないだろう〕

其の二

我が父の墓所^{ぼくいざん}は蟆頭山^{ろうおうせん}の東二十余里の老翁泉。

王淵^{おうえん}のような貴君がそこに行ってくれたなら、

私が植えた三万本の松が青々と繁っているのを見るであろう。

眉州^びの父老はこの詩を見て私がまだ生きていることを知り、

貴君のために水に臨む部屋を開いて招き入れてくれることだろう。

そこから見てほしいのは、

松の一本一本がまるで竜のように生き活きとしているありさま。

そして聴いてほしいのは、

蕭蕭^{しょうしょう}と降る雨の哀しげな音。

昔、召公^{しょうこう}を慕った民は、かつて召公が雨宿りした甘棠^{かんどう}の木を切らなかつたという。

それと同じく、眉州の人々は我が父の墓所の松を切らずに、

いつか我が父が蒼髯^{そうぜん}白髪^{はくはつ}の姿で帰ってくるのを待っているのである。

【補足】〔(1)蘇軾が父母の墓所に松を植えたことは作品番号 03-1-007 や作品番号 05-

1-029 などで見ている。(2) 召公しょうこうは周しゅうの時代の伝説的な賢者。立派な君主を後々まで慕うことを意味する「甘棠かんとう之愛のあい」という成句がある]

■【08-1-056】送程建用

【解題】これも故郷眉州びに関わる詩。眉州ていけんようの人の程建用は、かつて蘇軾の父と交流があり、科挙に合格して長らく官職にあった。このたび職を退いて帰郷することになり、その送別の詩。程建用は蘇軾の母方ていの程氏と同族なのだろうが、詳しいことはわからない。

【訳文】

先生ていけんよう〔程建用〕は元来舌耕ぜつこうの士し〔言論に生きる士〕、

文章を作るなら、千頃けいの湖のようにその言説は広がってゆく。

ところが、先生の倉の方はいまでも空っぽ、

菘のうぜんかず 穎の花が自ずと開く〔子孫の繁栄〕のを待っている。

この十年、世の中は新説おうあんせき〔王安石が経典の解釈を自説で統一したこと〕に苦しみ、

児女は影のような拠り所のないものを捕えようとしてきた。

垣根を崩してわざわざ雑草だらけにし、

穀物のよい苗を誰も顧みなくなってしまった。

父に孝行を尽くす心は虚しく放り出され、

母を大切にする人は冷え冷えとした部屋で嘆息するばかりとなった。

昔は、履くつを織り、薪を采って、子を導いた母がいて、

辛勤して一つの道を守り、いかなる御馳走よりも真心から捧げる水がまさるとした子がいた。

今年聞くことになったのは、

過ちを廃し、正しきを起こすということ、

しゅんじゅう
『春秋』もまたかつての光を取り戻すことになった。

ここに先生は官職を改め、馬を飾って帰路に就く。

帰郷して晴れ晴れと笑うなら、

さつと襟のあたりを爽やかな風が撫ぜるであろう。

必ず都から金の花をあしらった詔書が届き、

名誉官職が授けられるであろう。

天は我らを欺くことはなく、

先生の寿命は亀や鶴のように永く続くのだ。

【補足】おうあんせき [王安石が独自の解釈で経典の読み方を統一しようとしたことは08-1-042で、王安石が「官報の切れ端のようなものだ」と断じたしゅんじゅう『春秋』を再び太学で講義するようになったことは作品番号08-1-043で見ている]

■ 【08-1-057】 次韻李修孺留別二首

【解題】やはり蜀の人である李修孺しゅうじゆが帰ることになり、その送別の詩。李修孺がどのような人であるのかわかっていない。

【訳文】

其の一

私は十年流落の歳月を過ごし、

帰郷するとは、敢えて口から出していないようにしていた。

ただ、こうこ江湖の魚や鳥が私の心を知っているのだった。

思いがけず、雲や霧が掃われて晴天が現れ、

人々は白髪の老人たちを呼び集めてこの先の安危を託すこととなった。

貴君の風流はまことに我らの先導として仰ぐべきで、

時代を済すくう人物としてかねてから人々の記憶に刻まれていた。

私は何としても貴君を都に留めたく思う。

孔子こうしが賢者を希求する詩を歌ったように、

誰かこの人を讃える詩を作ってくれないだろうか。

其の二

この人生において、何度別れの袖を振ればよいのか。

私は夢の中で、いまも黄州にあるかと疑うことがある、

この老いを託す山はどこにもなく、

一緒にいてくれるのは明るい月だけ……

窮迫きうぱくのときも栄達えいだつのときも、家を思う意は同じ、

衰病さいびやうのなかで人を見送るのは堪え難く悲しい。

さあ行いくがよい、

劍南けんなん[成都せいと]への帰路きりくには、

孝婦きやうふがいたことで知られる姜師鎮きやうしちんがある、

その孝婦が母に差し上げた魚を、

故郷の水で煮て食べるのがよろしかろう。

【補足】 [最後の部分は、子や孫に囲まれて平穏な余生を過ごすことをいうのだろう]

■ 【08-1-058】 次韻黃魯直赤目

【解題】 蘇軾そうしつは時に黄州での日々を懐かしみ、我々もその時期の作品群をよかったと

思うのだが、都には都ならではのよさもあった。その一つは、蘇軾のまわりに気を許せる人々が大勢集まってきたことである。これまでに何度かその名を見た黄庭堅こうていけん [字は魯直ろちよく] [→作品番号 06-4-015 など]はこの年の始めに都に来ていた。黄庭堅が蘇軾の門下生を自任する一方で、蘇軾は黄庭堅を友人として遇し、たびたび詩を贈答し合ってきた。意外なことに、実際に会うのはこの年になってからだったようだ。さらに意外なことに、都において黄庭堅と詩を和したとして残っているのは、この年も終わろうとするころのこの詩が最初であった。赤目を患ったことを詠んだ黄庭堅の詩に蘇軾が次韻した。

【訳文】

詩を誦ずる者は、誰もが孔子こうしの弟子しの子夏しを見習わずにはられない、
子夏が『詩経』の序文を書いたからだ。

子夏は子を喪った悲しみのあまり失明したといけれど、

貴君は目を患うことまでも子夏に学ぼうとしたのか。

歴史を記述する者は、誰もが孔子が讃えた左丘明さきゅうめいを見習うべきである、
左丘明が立派な歴史書を作ったからだ。

左丘明は失明してもなお史書を書き継いだというのだから、

いま史官の任にある貴君はまさしく左丘明を学ぶのがよいだろう。

天公てんこう[天の擬人化]は悪ふざけを好んで人に辛い運命を授けるのか、

優れた人々の明るい珠たま[眼]に幻の醫かげを生じさせたりもする。

頼りとなるのは、

このところずっと貴君が魚や肉を斥けて食わずにいること、

それに、わずか一つの燈火も、百の燈光、千の燈光に等しいという仏教の真理を貴君が得ていること

だ。

蠅の頭のような小さな文字がまだまだ書けるのなら、

郷里に帰ることを願ひ出る表うきげずみを書いて差し出すのも悪くはないだろう。

【補足】〔(1) 黄庭堅とは親しい間柄であることから、失明という最悪の事態をも想定して、孔子に関連した故事を引いて励ましの言葉を与えたのだろう。(2) 蘇軾自身も赤目を患ったことは作品番号 06-4-004 で見ている。その経験を踏まえて、魚や肉を食べることが目によくないというアドバイスをしている〕

■ 【08-1-059】 書黄泥坂詞後

【解題】 黄州の臨臯亭から東の坡たかまりに行く途中に黄泥坂こうでいはんという坂があり、その坂を詠んだ『黄泥坂の詞』があった [→作品番号 06-3-081]。これはその詩の顛末を記した短文。

【訳文】

私は黄州こうにいたとき、大いに酔って『黄泥坂の詞』を作った。子供らがそれを草稿の束の中に納め、酔いから醒めた後でまた見ることはなかった。

昨夜、黄庭堅こうでいけん、張耒ちやうらい、晁補之ちやうほしが我が家に集まった。三客は机案つくえをひっくり返したり、篋はこ笥こをひっかきまわしたりしたあげく、たまたまその草稿を得た。字の半分は読むことができなかったが、意味から推測して、その全貌をまた得た。

張耒は非常に喜び、自分で写したものを一つ作って私に遺し、元本を持ち去った。

その明くる日、王誥おうしんからの手紙を得たところ、

「私は毎日毎日飽くことなく先生の書しょを買い集めています。近ごろ三匹の絹で先生の二枚の書と交換しました。最近先生がお書きになったものがありましたら、少々恵んでいただけませんか。そうす

ることで、私の手元にある絹がどんどんなくなってしまうのを止めてほしいのです」

とあったので、澄心堂紙ちようしんどうしを用い、李承晏りしやうあんの墨でこの詞を書いて王詵おうしんに遺るものである。

元祐元年十一月二十一日。

【補足】〔(1) この短文は、王詵〔→作品番号 08-1-052〕のために『黄泥坂の詞』を書き、その後書きとして添えたものである。(2) 蘇軾を師と仰ぐ門下生はたくさんいたが、その中で最も優秀であったとされるいわゆる「蘇門四学士」のうちの黄庭堅、張耒、晁補之の3人が集まり、蘇軾が書き散らかしたものをあちこち漁ったとあるのは、厳格な師弟関係とは無縁の、気の置けない友人のような仲であったのだろう。「学士」とあるのは、この4人がいずれも皇帝のブレーンである館職〔学士院のメンバー〕を授けられたからで、特にこの年は、次の詩で見るように蘇軾が学士の選考に関わり、張耒と晁補之が館職を授かっている。なお、「四学士」の残りのもう一人、秦觀〔→作品番号 07-2-026 など〕は、このころは蔡州の学校の教授を務めていた。(3) 王詵は貴公子で、蘇軾の書を買集めるだけの財力があつた。ここに絹三匹で蘇軾の書二枚を得たとあるが、それはどれくらいの価格だったのだろうか。程民生『宋代物価研究』、人民出版社（2008年）によると、宋朝は絹一匹＝銅錢一貫〔1000文〕を基準として物価を安定させようとしていたが、次第に物価が上昇して、哲宗皇帝の頃は絹一匹が銅錢1貫300文程度であったという。一方で、同じところに一人の人間が最低の生活を維持するには1日に20文を必要としたという試算がある。とすると、20文が5000円に相当すると考えても極端な誤りにはならないであろう。ならば、絹一匹は約32万5000円となり、蘇軾の書は1枚約50万円ということになる。王詵にとっては買える価格帯であっても、数多く集めるのは厳しいということなのだろう。ついであるが、蘇軾の詩に、ある人が高級な硯を40貫で買ったという記述があり、ここでの計算に基づくと、それは200日分の最低の生活費、約100万円ということになる。(4) 最後に

ある「澄心堂紙」は南唐時代から作られるようになった上質の紙。李承晏は宋代前期の著名な墨工である。このころ蘇軾は都の高官であったから、このような高級品も使えたのだろう】

■【08-1-060】武昌西山、并叙

【解題】11月、蘇軾は学士院〔皇帝所属のブレーン集団〕に新たに加えるメンバーを選抜する試験の委員となり、同じ役に就いた鄧潤甫〔字は聖求〕とこの詩を詠み合った。序文がある。

【訳文】

叙

翰林学士承旨の鄧潤甫は、嘉祐年間〔二十数年前〕に武昌県知事となり、いつも寒溪、西山に遊んでいた。山中には今でもこのことを言い伝える者がいる。私は黄州に謫居となり、武昌をいつも向こうに望み、しばしば寒溪、西山の間を往来した。

元祐元年十一月二十九日、私は学士院の試験官となり、鄧潤甫とともに玉堂に宿直し、たまたま昔話をした。鄧潤甫はかつて『元次山の窪樽の銘』を作り、西山の岩にそれを刻んだといった。そこでこの詩を作り、鄧潤甫に和するよう求めた。武昌に我等の二詩を送って、先の銘の脇に刻ませようと思う。

【補足】〔(1) 黄州の対岸に武昌があり、蘇軾がその西山にしばしば遊んだことは、作品番号 06-1-045 などで見ている。(2) 唐の時代の元結〔字は次山〕は西山に遊び、窪んだ石を杯として酒を飲んだ。鄧潤甫の『元次山の窪樽の銘』はそのことを記したものである〕

おも
憶い出す――

春の長江ちやうこうに漲るのは漉した葡萄酒、
 誰が栽うえたのか武昌ぶしやうの官道の柳、
 私は、樊口はんこうから春の酒を携え、歩いて西山せいざんの野の梅を尋ねた、
 西山を上り始めて十五里、
 両腋りやうわきの風に乗って険しい頂いただきへと飛んだ、
 共に遊ぶ者は疲れ果てて九曲嶺きゅうきよくれいで倒れ伏したが、
 私は独り衣かかを褰ごがずて呉王台おうたいに至った、
 北を望み、中原ちゆうげん〔中国の中心地〕はどこかと見た、
 あるのは、夕陽が落ち行くなかの黄色い埃だけだった、
 解劍亭かいけんていの前の路へと帰り来ると、
 蒼い崖は、雲の波のうずくまるなかに半ば埋もれていた、
 かつて唐の浪翁ろうおう〔元結の号〕が、石を杯として酔ったという場所はなおあっても、
 その古い意こころを嗣つぐ者はもはや誰もいないだろうと思っていると、
 山の隈くまに公こう〔鄧潤甫〕の妙語が留められていた。
 好事の者は、その碑が覆われてしまわないよう草や棘を除き、
 ゆかりの蒼い苔が野火に焼かれてしまわないかといつも恐れていた、
 そのとき、公に会ってみたいと思っても見ることはできなかった——
 まさか、金鑾殿きんらんてん〔仙宮＝皇居〕に向かうこ玉堂ぎよくどうで、
 白髪頭を並べて夜直をし、
 蠟燭が短くなってゆくのを臥してともに眺めようとは。
 暁の夢に、長江のほとりほとりにいると見て、
 春の雷のように鳴る銅環どうかん、玉鎖ぎよくさの音〔宮中の建物を開く音〕に驚かされる。
 山中にあるべき我等は帳の内とばりで空しく目覚め、

山の猿や鶴は我等がいのないのを怨んでいるだろう。

江かわや湖おほりは水が増えて鴻や雁が渡り来る季節、

せめて公よ、詩を作って武昌の父老に寄せようではないか。

その詩は万壑ばんがくの松風の哀しい響きと和すであらう。

【補足】〔(1) 冒頭で長江ちやうこうの水を葡萄酒に見立てているが、同じことを黄州で作った詞でも詠んでいた [作品番号 06-1-062]。〕(2) 樊口は武昌側にある長江の渡し場で、潘一家の営む酒店があった。そこで酒を誂せいざんえて西山に登ったのだろう。(3) この詩には鄧潤甫とうじゆん ぽだけでなく 30 人余りが和し、それらに応じて蘇軾もまた和した。その詩は「波瀾はらん仕闊しこつの至りいた」であるとの古い評がある。しかし、難しい語句を並べてひどく理屈っぽく、蘇軾の才力にぐうの音も出ないという感じにさせられるだけのものである。ここで割愛する。ともあれ、こうした詩のやりとりによって武昌の西山は一躍有名になった。(4) 学士院の新メンバーを選抜する試験の結果は 12 月 7 日に発表され、蘇門六学士そもんろくがくしの張耒ちやうらいと晁補之ちやう ぼしを含む 13 人が選ばれた。これは蘇軾が当時の知識人の頂点に立つことを示すような出来事であった。なお 13 人の中に劉安世りゆうあんせい [字は器き之] がいた。劉安世については作品番号 01-2-007 ですすでに触れたように、蘇軾の晩年に親しい関係になり、様々なエピソードを後世に伝えてくれた。(5) 目立った活躍をすれば嫉妬や憎しみを呼ぶもので、学士院の選抜試験の問題には神宗皇帝しんそうや仁宗皇帝じんそうを誹謗する意図が隠されていたとして、蘇軾を非難する声が俄かに沸き起こった。その先鋒となったのが先に名を挙げた朱光庭しゆこうていであった [→作品番号 08-1-039]。朱光庭は程頤てい い [→作品番号 08-1-052] の弟子で、師匠が恥をかかされた仇をとろうとしたのか、激しく蘇軾を攻撃した。すぐに蘇軾は弁明べんめいし、高太皇太后はそれに理があるとして不問に付すとしたのだが、その後もしばらく尾を引くのだった]

■【08-1-061】記虜使誦詩

【解題】12月8日の興^{こうりゅうせつ}竜節、すなわち哲宗^{てつそう}皇帝の誕生日を祝う遼^{りょうこく}国[契丹^{きつたん}]の使者がきて、蘇軾はその接待役として食事をとりにした。これはそのときのことを後にな
って書いた短文。

【訳文】

昔、私は北使^{ほくし}[遼^{りょうこく}国の使者^{しや}]の劉霄^{りゅうせう}と会食をした。

劉霄は、詩を誦した。

痛飲従今有幾日、[貴君と痛飲できる日々はあと幾日あるのか]

西軒月色夜来新。[西の軒端にさす月の光が、いよいよ冴えてきている]

それは私がかつて作った詩であった。そして、

「貴公がお飲みにならないはずはありませんでしょうに」

と、いった。

虜^{りょ}[異民族]もまた私の詩を喜ぶのであろうか。怪しむべきことである。

【補足】〔(1) 推測をするに、元来酒が強くない蘇軾は、大事な役目の最中に酔ってはなるまいと酒量を控えたのだろう。相手は、蘇軾自身の詩を唱えて、もっと盃を重ねましょうと勧めたのである。友好の使者であるから、歡を尽くすのが役目で、そのために遼^{りょうこく}国の使者は周到な準備をしてきたのだろう。ここで使者が誦した詩は、作品番号 05-2-018 で見ていて、酒を飲もうと蘇軾が友人を招いた詩であるから、まさにその場にぴったりであった。(2) 末の句の「虜も亦た吾が詩を喜ぶ、怪しむ可き也」は、異民族を見下した書き方であるが、あけすけな自慢にならないようこのような表現に

したのかもしれない]

■【08-1-062】徳威堂銘、并叙

【解題】これは6年後に書かれた文章であるが、遼国りょうこくの使者を迎えたときのことが書かれているので、ここで読んでおこう。

【訳文】

叙

元祐年間げんゆうの初めに、詔みことりをもって太師路公たいし ろ こう [文彦博ぶんげんはく]を洛陽らくようから呼んで、国の重大な任務に就くう命じた。公は仁宗、英宗、神宗の三代の皇帝のもとで重職を努め、老いをもってすでに退居していた。しかし、詔を受けると、辞退することなく杖をついて朝廷に赴いた。それから一年を経て去ることを求めた。……[皇帝によって引き留められたことを記す]……公はその詔しゅうぜんを読んで聳然として、もはや去るとはいわなくなった。さらに四年の間都に留まり、天下は無事に治まり、朝廷は安らかであり、それでまた強く帰ることを願い出たのだった。

公が朝廷きってんにあるときに、契丹やの使者として耶律永昌りつえいしやうと劉霄りゅうせうが来た。私は詔を奉じて接待役となり、使者を宮中へと案内した。門の外に公が立っているのを使者は望み見て、立ち止まって身なりを改め、「あれは路公様でありましょうか。徳をもって人を服させるお方であると同っております」

といい、公の年齢を尋ね、

「何ともお元気でありますな」

と、感心した。それで私はこのようにいった。

「貴君はお姿を御覧になっただけで、まだそのお話を聞いておられません。公が全ての条理に通じて、あらゆることに即座に応答することでは、学問に鍛錬した若い者でも及ぶものではありません。さらに、古今を貫く博覧強記で、それぞれの専門の学者でも敵わないのです」

「まことに天下の異人でありますな」

と、使者はいつて、公に丁寧^{せいきよう}に会釈をした。

公がついに洛陽^{せいきよう}に帰った後に、西羌^{せいきやう} [西方の異民族] の首領^{おんじゆうしん}の温溪心^{おんじゆうしん}という者が、国境の役人に、公に良馬を献じたいと願い出た。役人がそれを朝廷に伝えると、詔をもってそれを許可した。公は天下の人々を心服させ、それが四方^{えびす}の夷 [外国] にも及んだのである。……[古典を引用して、文彦博が「徳の威」を具えていることを述べる]……公の子の文及甫^{ぶんきやうほ}が河陽^{かやう}の知事になると、公はその地を見に行くことになり、人々は甚だ歡び、洛陽から河陽まで歡呼の声に溢れた。文及甫は堂を作って公の到着を待ち、堂の銘を作るよう私に頼んできた。そこで「徳威」の名を付けることにした。……[銘の本文は省略]……

【補足】 [文彦博は政界の大長老で、蘇軾とも縁が深かった [→作品番号 06-2-017]。]

司馬光^{しばこう}の政界復帰に伴って、朝廷に呼び戻された。この時代の人としては驚くべき長寿で、遼国^{りやうこく}の使者を迎えたときは 81 歳、この銘が書かれたときには 87 歳で、なお息子の勤務地を視察しに行くほどに元気であった]

■ 【08-1-063】 書狄武襄事

【解題】 宋朝^{そうちやう}は文官を武官の上に置いて文民統制を徹底したために、歴代の王朝の中でも軍事的に特に弱体で、名のある武将はほとんど出なかった。例外は狄青^{てきせい}で、一介の兵士から目覚ましい軍功^{かうみつき}によって枢密使 [国防大臣] にまで昇り、死後は武襄公^{ぶじやうこう}の諡^{おくりな}を皇帝から賜った。これは狄青の若い日のできごとを記録した短文。

【訳文】

武襄公 [狄青] はもとは農家の子であった。十六歳のときに、兄の狄素^{てきそ}が、姓名はわからないが同じ村の鉄羅漢^{てつらん}と号する者と水辺で喧嘩をし、兄はその男を溺死させた。村の自警団が狄素を捕縛しよ

うとしたときに、武裏公はたまたま畑に食事を届けようとしていてその様子を見た。

武裏公はいった、

「鉄羅漢を殺したのは僕です」

人々は狄素を釈放して武裏公を縛った。

武裏公はいった、

「僕は死から逃れようとは思いません。ただ、僕は鉄羅漢を救うことができます。生き返らせたいのです。

もし僕をどうしても死罪にするのなら、その後で縛っても遅くはないでしょう」

人々はそれに従った。

武裏公は黙って神に誓った。

「もしも僕が貴人になるのなら、鉄羅漢を蘇らせてください」

そして、^{しかばね}屍を挙げ、数斗の水を吐き出させると、鉄羅漢は生き返った。

その後、このことを知る者はいなかった。武裏公が亡くなり、その子の^{てきし}狄諮と^{てきえい}狄詠が棺を護って故郷の

^{さいが}西河に帰って葬ったときに、土地の父老がこのことを話した。

^{げんゆう}元祐元年十二月五日、私は狄詠と同じ官舎に勤め、夜に話をしてこのことを聞いた。

^{びざん}眉山の蘇軾が記す。

■【08-1-064】狄詠石屏

【解題】上の文にあった^{てきせい}狄青の^{てきえい}三男の^{あざな}狄詠〔^し字は子雅〕が^{せきびよう}所蔵する石屏を詠んだ詩。

石屏は屏風のような形状の石で、硯の脇などに置いて、風除けにしたり、見て楽しんだりする。この詩は、石の表面の模様から画を想像して詠んだものであるのだろう。

【訳文】

^{ひひ}霏霏として軽やかな^{しろ}素〔雪〕が点々と散りかかり、

重なる陰くらさの中に、渺渺びょうびょうとした光景が開ける。

風に舞う花[雪]は紫翠しすいへと乱れかかり、雪の外しに煙る林がある。

近こころくの雪は勢いきいが盛んで、遠こころくの林は意いきが殊ことに深い。

たまたま無事の人[俗世よこに煩わづらわされない人]が顎あごを支えてこの石に見入るなら、

私の心こころを識しってくれるであろう。

■ 【08-1-065】 雪林硯屏率魯直同賦

【**解説**】上の詩によるのか、狄詠てきえいの石屏せきびょうは「雪林硯屏せきりんけんびょう」の名を持ち、それを黄庭堅こうていけん

[字あざなは魯直ろちよく] [→作品番号 08-1-058] とともに見てこの詩を賦した。

【訳文】

西山せいざん [石屏せきびょうの中の山]には春という時がない。

切り立いせおった巖いわは頑がん々な陰かげに鎖くわされている。

くつきりと天あまに倚より立つ壁かべには、林はやしのかけらもない。

物はもとより人のために生なじたときれる。

しかし、ここから誰たれがいったい深い興きょうを発はするのか。

奇きがあまりに窮きゆうまると、心こころを轟とどろんでしまう。

だから、心こころを娛たのませる詩句しごがあるのだらう。

■ 【08-1-066】 虢国夫人夜游园

【**解説**】『虢国夫人游春図かくこくふじんゆうしゅんず』という画えが、現在、中国の遼寧省博物館りょうねいにある。虢国夫人かくこくふは楊貴妃ようきひの3人の姉あねの1人で、同じ時代の画家えいの張萱ちやうけんが、馬上ばしやうに乗る男装おんなぎの麗人れいじんと

してその姿すがたを描えき、その画えが北宋ほくそうの皇室てうしやうに伝えられ、北宋ほくそうの最後さいごの皇帝てうていである徽宗きそう

模写したのが現存するその画であるという。一方、蘇軾そうちょうは宋朝そうちょうの高官である劉有方りゆうゆうほうが所蔵する『虢国夫人夜游図』を見て、劉有方の求めに応じてこの詩を詠んでいる。

『夜游図』も『游春図』と同じく張萱が描いたものとされ、五代十国時代の南唐の皇室に伝えられ、後に宋朝の宰相を務めた晏殊あんしゆの手に渡り、劉有方を経て徽宗の元に帰したという。この詩の冒頭に「佳人自鞚玉花驄」[佳人自ら玉花驄 [馬の名] の鞚をとる]と、虢国夫人が馬の轡くつわを手にはしているありさまを詠んでいるのは、現存する『游春図』の図柄「麗人たちが馬に跨って画面左から右へと歩み行く」と一致するので、『游春図』の原画が『夜游図』であったのかも知れない。

【訳文】

玄宗皇帝の愛馬、玉花驄、

佳人[虢国夫人]は自らその手綱を取る。

走るありさまは、

燕が竜にまたがって翻り飛ぶかのようなようである。

金の鞭を挙げ、

誰が最初に明光宮[玄宗皇帝の宮殿]に入るかと道を争い、

宝玉の付いた釵かんざしが落ちても気が付かない。

宮中では、玉奴[楊貴妃の小名という]が琴を奏し、

花奴[女官の名]が羯鼓[西方伝来の鼓]を叩くと、

花が開き、柳の若葉が萌え出てくる。

座中に待ち受ける秦国夫人[楊貴妃の姉]こそはまことに貴い人、

そこに、馬を走らせて虢国夫人が現れ、

塵一つ動かすことなく到着する。

このときに居並んだ明眸皓齒[美女の喩え]の誰をまた見ることができるのか、
ただ丹青[画]の中に涙の痕を残すだけである。

人間世界の出来事は、俯き仰ぎ見る間に、今がすでに昔となる。

かつて、陳[南朝最後の王朝]の最後の皇帝に張麗華[宮女の名]が微笑みかけたときは、
すでに隋の猛将、韓擒虎が門外に迫っていた。

かくて天下統一を成し遂げた隋の煬帝も、

揚州で遊宴に耽る間に臣下に殺害され、

呉公台の下、雷塘の路に葬られたのだった。

【補足】[この詩の後半に詠まれている陳朝の最後の皇帝の陳叔宝は一国の君主としては最低、最悪の人物であった。それだけに皇帝という存在がいかにも愚劣であるかということ徹頭徹尾具現化した点である種の壮快感を漂わせている。すなわち、皇位にあったときは、国政を愚昧な大臣に任せ、自身は張麗華を始めとする美女たちとの遊びにうつつを抜かし、隋に攻め込まれて張麗華は殺され国は滅ぼされたけれども、己は生き延び、その後は、隋の皇帝の幫間となって15年余りのアル中生活を送った。蘇軾は陳叔宝や煬帝や玄宗皇帝のようになってはならない戒めとしてこの詩を作ったのだが、『游春図』を模写した徽宗皇帝が数十年後に陳叔宝とよく似た運命をたどることになるとは、むろん知る由もなかった]

■ 【08-1-067】 如夢令二首

【解題】 黄州知事の楊案 [字は君素] [→作品番号 06-4-083] に送った詞。

【訳文】

其の一

為向東坡伝語、[東^{たかまり}の坡^{ことづて}へ言伝して(ださい)]

人在画堂深处。[かの人は皇城の奥深いところにいるのです]

別後^{わか}有誰来、[坡と別れてからそこに誰が来たのでしょうか]

雪庄小橋無路。[小さな橋は雪に埋もれてしまいませんか]

歸去、[歸^ゆり去こ]

歸去、[歸^ゆり去こ]

江上一犁春雨。[江^{かわ}のほとりへ、春雨のもと、一本^{すき}の犁へ]

【補足】[都にあつてあらぬ非難にさらされ、黄州^{こう}の東^{たかまり}の坡を耕す日々に戻りたいと、切に懐うこともあつたのだらう。いまは冬、すぐに帰れば春の耕作に間に合うであろう]

其の二

手種堂前桃李、[私^{せつじ}が植えた雪堂^{すもも}の前の桃と李]

無限緑陰青子。[緑の蔭は無限に広がり、青い実がついたりしているでしょうか]

簾外百舌児、[簾^{すだれ}の外の百舌^{もす}鳥たちが]

驚起五更春睡。[春の午後の眠りを驚かすのです]

居士、[居^こ士よ]

居士。[居^こ士よ]

莫忘小橋流水。[忘れてはなりません、小さな橋の流れる水を]

【補足】[蘇軾^{たかまり}は東^{せつどう}の坡の雪堂の春を思い起こしている。その雪堂を蘇軾が去って86年後に訪れた陸游^{りくゆう}の紀行文 [→作品番号 06-5-026] に、「堂の真南に橋がかかっている、札に「小橋」と書いてある。「小橋 流水を忘るる莫かれ」の句から名付けられたものである」とあつたのは、この詞のことである。詞の終わりは、黄州の百舌鳥が「居士

よ、居士よ、忘れるなかれ」と鳴いている声を、都にあって聞いているのである。それがすなわち、第一首で東の坡へ送った伝言に対する返事である]

■【08-1-068】跋鄧慎思石刻

【**解題**】鄧忠臣 [字は慎思] [→作品番号 06-4-058] が石に刻んだ文章の写しを見てこの跋文を記した。それは亡き母を悼む文章であった。

【訳文】

私は黄州こうにいたときに、先太夫人せんたいふじん[母]の棺くわんを守って長沙ちやうさに帰る鄧忠臣とうちゆうしん学士がくしに会った。飲食、起居、そして哀慕を表す礼節はどれも古からの礼法の通りで、先人が行いうのがよいとしてきたものはすべて全力で求め、服喪の期限が満ちてよくやく止めたのであった。嗚呼あゝ、まことの孝というべきである。今この石に刻んだ文章を見ると、かつて感心したのは全く不十分だったのだ。

元祐元年十二月、眉山びざんの蘇軾そく書く。

【**補足**】[鄧忠臣が母の棺を携えた郷里に帰る途中で黄州こうに立ち寄ったことは作品番号 06-4-058 で見ている]

■【08-1-069】上呂相公

【**解題**】呂公著りょこうちよ [→作品番号 07-2-033] への手紙。このとき呂公著は宰相となっていた。

【訳文】

昨日、御前において議論げいぎした刑夔けいきの一件ではありますが、その後で私は次のように考えました。

刑鼻けいびは善良な庶民で、刑夔けいきは刑鼻が盗みをしたと妄りに思い込んでこれを殺してしまったものでありま

た。もしも犯行時に正常な判断ができない状態にあって、何をしているのかわからぬままに為してしまった場合には、その者に対しては普通の法の裁きを用いないとなっているわけですが、それに従って刑夔を赦してしまいますと、今後、人を殺そうと考える者は、皆がその真似をして死罪を免れようと、「盗人だと思ったのです」と証言するようになってしまうのを、私は深く恐れたのでした。公[呂公著]は、だからといって、今後は人を殺した場合に、どのような事情からそれを行ったのかを勘案しないとされたならば、そもそも取り調べる必要さえなくなってしまうだろうといわれました。

私は帰ってから公のお言葉をよく考えてすっかり納得しました。近ごろ西京からの報告によりますと、秦課児がひどく酔って前後不覚となった中で南貴を打ち殺し、逮捕された後で酔いから醒め、人々の証言によってそのときの状況が認定され、憐憫を加えるべきとの奏上があつて、すでに命は赦すとの判断が下されたのですが、門下省は断じて死罪にすべきであると主張しました。その議論を聞きますと、今回の件で命を赦すのは奸計を開くもとなり、人を殺しても酔いをもって免れようとする者が続出して大いに害をなすということであります。私も最初はそのように思い、すでにその旨で書類が整えられました。しかし、公の昨日のお言葉を再び考えますと、酔って醒めていないときに殺人を犯しても、その事情を酌んで死罪を赦すとなった場合に、酔いに託して殺したことにしようと自ら謀って殺すこともあり得るでしょうけれど、それは取り調べによって知れるはずです。刑夔は犯行時には盗人であると思ひ込み、秦課児は酔って意識がなく、それぞれに酌むべき事情があります。結果として、刑夔は杖打ちの刑ですみ、秦課児は死罪となるのは、刑罰の軽重の判断が相違して、心に納得できないものが残ります。人命は至って重いものです。公ももしもそのように思われるならば、秦課児に関する書類はなほ尚書省にありますから、追って改めるべきではないでしょうか。

【補足】〔極刑を課す場合には、最終的に宰相がその罪状認定に関わることもあつた。事情を勘案して刑を軽くする方向性で判断を下すべきだとする考え方は、蘇軾の名を一躍天下に知らせることになった科挙での論文、『刑賞は忠厚の至り』を想起させるものがある。蘇軾は議論した翌日に、一人の命を救うために急いでこの文章を記して

宰相のもとに提出したのである]

■ 【08-1-070】 与王慶源

【解題】 郷里おうらいにいる王淮奇き [字は慶源あざな けいげん] [→作品番号 07-2-089] に宛てた手紙。

【訳文】

……私わたくしが北扉かんりんがくし [翰林学士] の職に進みしたのは皆様の御推薦と御加護こうこによるものです。江湖に流落したころには、郷里に帰って貴君の後ろに従い、川べりの草の上に座って遊ぶことを思い、夢の中でそのようにしているのを見たのでした。今は深く重い国恩を受けて、責任の重さを憂うことが特に大きく、恩に報いることがいよいよ難しく、郷里に退居できるのはいつの日になることやら、西を望んでもんちゆう 惋悵として、その懐おもいにほとんど耐えることができません。……

■ 【08-1-071】 与李方叔

【解題】 李廌り たい [字は方叔あざな ほうしゆく] [→作品番号 07-2-020] への手紙。

【訳文】

重ねてのお手紙、感謝の念に堪えません。雪の降る寒さのなか、いかがお過ごしでしょうか。お手紙から孝心のまことに深く切なることを知りました。しかし、私わたくしはかねてから銘めいや志しの類たいていばかりでなく、子や孫が先祖のことを追慕して記す文章の類にも手を染めたことはありません。近ごろ温公おんこう しばこう [司馬光] のために行状記や墓誌を書きましたのは、かつて温公には亡き母の墓誌銘を作ったいたいたことがあって、その恩に報いないわけにはいかなかったからです。その他の人の依頼には決して応じないようにしています。私に希望する者が多くいるなかで、貴君のお望みにだけ応えるわけにはいかないのです。…

…

【補足】^{り たい} [李廌が父の葬礼を行うために苦勞していたことはこれまでに見た通りで、厚く葬るために墓誌の執筆を蘇軾に依頼してきたのを、この手紙にあるように断ったのである。蘇軾にはひっきりなしに執筆の依頼があったようで、全てに応じるわけにはいかないの、断りの手紙も多数残っている。特に墓誌の類は固く断り、事実残された作品を見ると、^{し ば こう} 司馬光のような特別な人か、個人的に深いつながりのある人に限られている。李廌は再三懇願したようで、断りの手紙が複数残っている]

■ 【08-1-072】 与章子厚

【解題】^{しょうじゆん あざな しこう} 章惇 [字は子厚] に宛てた手紙。

【訳文】

先に少しお尋ねしましたところ、重ねての御返事を煩わせ、御健勝でありますことを審らかにし、安堵いたしました。故郷の園に帰ることは、私もともに若いころから願っていましたので、貴君が独り先にそれを得ましたのは、羨まないわけにはまいりません。しかし、世の縁は深いものがありますから、果たしてそれから脱せられるのかいまはまだ知れません。お会いするのは叶いませんので、まだまだ書きたりないのですが、使いの者がすぐにも帰ると申しておりますので、これにて失礼いたします。……十二月二十七日。

【補足】^{しょうじゆん} [章惇はこの年の初めまでは、改革派の主要メンバーとして副宰相の地位にあったが、政争に敗れ、閏二月に^{じよ}汝州知事として都の外に出され、さらに11月にはそれも免職となった。蘇軾は新法の一部を残そうとしたことでは章惇と共闘もしたので、このときもまだ友人であるとの意識を持ち続けていた]

第8章 栄光と失意——都

[第8章その二]

げんゆう
元祐2年 [1087年]、そしよく蘇軾52歳。

■ 【08-2-001】和周正孺墜馬傷手

【解説】この年もまた、次韻の詩、送別の詩、謝礼の詩、哀悼の詩など、社交上の詩を次々に見て行くことになる。それぞれの詩には蘇軾らしいところもあり、興味を繋いで読み進むことは可能ではあるのだが、うんざりするのが正直な感想であろう。この詩などは、「周尹しゅういん [字は正孺] あざなが、酔って馬から落ちて手を傷つけてしまったことを詩に詠み、それに和した」という題を見るだけで、読む気がそがれてしまうであろう。周尹せいとは成都出身の官員で、同郷ということもあってかなりお気楽な応答をしている。

【訳文】

貴君みちは道を学び、

平生から完全な精神を有しているのであるからして、

酔って墜ちたからといって、

子供のように自分のことを可哀そうに思ったりはしないし、

そもそも内に守っているものが傷つけられたりするようなことはない。

憂い顔であるのは、

父母から与えられた身体を損なうのは最大の不孝であると思うからなのだろう。

嘆く余り、中空に文字を書いた後には、

新しい詩はもうさっぱりとしている。

昔の人の文句ではないけれど、

右手に酒杯、左手に蟹があればいいことなした。

貴君を落した馬を売り飛ばして酒代に換え、

郷里の友人を呼び集めて新年を祝って大いに楽しもうではないか。

【補足】[次韻詩の通例として、幾つもの故事が散りばめられている。真面目腐った顔でそれらを詮索したのでは、せつかくの楽しい気分がぶちこわしになってしまうだろう]

■ 【08-2-002】 戲周正孺二絶

【解題】これも落馬した周尹しゅういん [字は正孺あざな せいじゆ] に戯れた詩。二首のうち一首を訳す。

【訳文】

其の一

昔、臂を折って後に高位に昇った人がいた、

——落馬した貴君の将来はさてどうであろうか。

昔、大金をお偉方に貢いで高官に就いた人がいた、

——貧乏な貴君はそのようなことは決してしない。

貴君に馬を売り飛ばすことを勧めたけれど、

もともと腸はわたが裂けるくらいに辛いのは、

楊柳枝ようりゅうし[愛妾の代名詞]を手放すことなのかも……。

【補足】[周尹しゅういんは身近に置いている女性を放つかどうか迷っていたようである]

■ 【08-2-003】 玉堂栽花、周正孺有詩、次韻

【解題】 翰林院^{かんりんいん}の中心的な建物である玉堂^{ぎょくどう}のまわりに花が植えられたのを、周尹^{しゅういん}
 [字は正孺^{あざな せいじゆ}] が詩を詠み、それに次韻した。これは真面目な詩。

【訳文】

郷里の山は半ば荒れて、
 桃や李は藪に埋もれてしまっているだろう。
 君恩にはまぼ報いられたなら、
 すぐに退隱を願おうではないか。
 竹の簾^{むしろ}の上を吹く風は、
 老いて帰るのをひたすら招くかのようだ。
 我らがいなくなってしまうなら、
 玉堂^{ぎょくどう}の花は誰のために春に咲くのだろうか。
 薄い緑の葉は、人に詩を詠ませるために、
 真っ白な花びらを次々に開かそうとするのだが、
 そのときには私たちはいないので、
 我らの詩をここにあらかじめ残して、
 後の学士たちのためとしようではないか。

■ 【08-2-004】 潘推官母李氏挽詞

【解題】 詩の題にある潘推官^{はんすいかん}とは潘鯁^{はんこう}のことであるという。潘鯁は、黄州^{こう}で親しくした潘丙^{はんへい}の兄である [→作品番号 07-2-078]。その母の李氏^りが亡くなったので、この挽詞^{ばんし}を詠んで寄せた。

【訳文】

長江^{ちやうこう}の岸^{きし}に流^{なが}された者^{もの}がいた――

その者が住^{たか}む東^{あづま}の坡^{かみ}に行^いき来^きするの^のは趣^{おもむき}豊^{あま}かな人^{ひと}ばかりだ^だった。

かくて貴^き君^{きん}とも次^{つぎ}第^だに杯^{はい}をと^ともにす^するよ^ようにな^なった。

貴^き君^{きん}の母^{はは}君^{きん}は、

息^{こゝろ}子^こが客^{きやく}をもてな^なす酒^{しゆ}をあ^あつら^つえるた^ために髪^{かみ}を売^うった陶^{とう}侃^{かん}の母^{はは}のよ^ようであ^あり、

息^{こゝろ}子^この教^{きやく}育^{いく}た^ために三^{さん}度^ど引^ひつ越^こした孟^{もう}子^しの母^{はは}のよ^ようでもあ^あった。

今^{いま}度^どまた貴^き君^{きん}の母^{はは}君^{きん}の世^よ話^わにな^なるとの約^{やく}束^{そく}は、

い^いまは^はさ^さぎ^ぎりと覚^さわ^わてい^いるの^のに、

真^ま新^{あたら}しい土^{つち}がこ^こん^んも^もり^りとお墓^{はか}に積^たま^まれよ^ようとは思^しい^いも^もよ^よら^らな^なか^かった。

今^こ年^{ねん}のう^うち^ちには江^{かう}湖^こに去^さろ^ろうと私^{わたし}は考^{かんが}えてい^いる。

た^たか^から、次^{つぎ}の春^{はる}には、

山^{やま}に連^つな^なつて降^ふる夕^{ゆふ}暮^{ぐれ}の雨^{あめ}の^のも^もと、

母^{はは}君^{きん}の墓^{はか}所^{ところ}へ^へと導^{みち}く^く並^{なみ}木^きの^の下^{した}を歩^あん^んでい^いるこ^ことだ^だらう。

【補足】[学士の選抜試験を巡って理不尽な批判にさらされた蘇軾は、都での高い地位に執着することなく、江湖 [田舎] に去りたいと本気で思い、意思表示もした。しかし、そう単純に個人の希望通りに事が進むわけではなかった]

■ 【08-2-005】 与范子豊

【解題】蘇軾が地方に出るのを願^{ねが}い出^でてい^いたこ^ことは、范^{はん}百^{ひやく}嘉^か [字^{あざな}は子^し豊^{ほう}] [→作品番号 06-4-041] に宛^あて^てたこ^この手^て紙^しにも記^きさ^されてい^いる。

【訳文】

……私の日々は相変わらずであります、地方に出ることを願っていて、何度も却下されています。
私は堅くその願いを通して、煩わしい物言いを終わらせたい一心です。……一月六日。

■ 【08-2-006】 杜介送魚

【解題】 杜介〔字は幾先〕が上京し、魚を贈ってくれた。その謝礼の詩。杜介は揚州
の平山堂の近くに住む友人である [→作品番号 07-2-053]。

【訳文】

新年には、お上から黄封酒を賜った。
するとすぐに旧友が瀬尾魚を分けてくれた。
狭い路地の奥にある門にも朝日が差し込み、
小さな庭でも雪を除くと、春の野菜も少しだけなら得られる。
魚と聞いて、病みがちの妻も起き出して、
銀の糸のように魚を刻んでくれた。
子供らは喜び、
昔の物語のように魚の中から手紙が出てくるのではないかと待ち受ける。
酔ううちに眼は朦朧としてきて、
自分が帰る道はどこかにあるのかと尋ねると、
夕暮れの雨かしと注ぐ松江の流れがぼんやりと見えてくる。

【解題】 [(1) 「黄封酒」は黄色い紙で封をした官製の酒。「瀬尾魚」は赤い尾の魚。
頂いたばかりの二つの品を並べるとちょうど対句になる。(2) 終わりの部分は、都か
ら去ろうという思いを抱いていることを詠んでいる。松江は蘇州のあたりを流れる川。

有名なその川の名を借りて、常州じょうに用意した隠棲地をいうのであろう [→作品番号 07-2-041 など]

■ 【08-2-007】 送杜介帰揚州

【解題】 杜介と かいが揚州ように帰るのを見送った詩。

【訳文】

私も貴君も、

再び都の門より入って、万事は空しいものだと知った。

春風のもと、二人して川の流れを見つめる。

かつての同輩はいま幾人が残っているのか、

目を皇城へと転じれば、ただ夢の中のよう。

山で薬草を摘むなら、薊先生けい せんせい [漢代の隠者]に逢うたろし、

寺で禅を問うなら、龐翁ほう おう [唐代の禅僧]と知り合いになるだろう。

そうだ、都から帰ろう——

近所の人々が笑って出迎えてくれ、

馴染みの木立はさらに高く繁りかくであらう。

【補足】 と かい [杜介]もかつては官員として都で仕事をしたことがあるが、いまは自由の身である。だから、蘇軾は心の思いをそのまま言葉にしているのである]

■ 【08-2-008】 題憩寂園詩、并魯直跋

【解題】 蘇軾そう せきが杭州こうにいた間に親しくした者に柳瑾りゅう きん [字は子玉 あざな し ぎょく] がいた [→作品番号 04-1-003 以下、すでに故人]。その息子が以下の文に記されている柳子文りゅう し ぶん [字は仲 ちゆう]

遠]である。柳子文の妻は、蘇軾の伯父の蘇渙の娘であるから、姻戚関係にある [→ 作品番号 04-3-009]。柳子文がこのとき都で何をしていたのかはわかっていないようだ。

【訳文】

元祐二年正月十二日、蘇軾と李公麟は柳子文のために『松石図』を描いた。

柳子文はさらに杜甫の詩から次の数句を取って、李公麟に画を求めた。

松根胡僧憩寂寞、[松の根もとで外国の僧が寂寞の内に憩うている]

龐眉皓首無住著。[長い眉、白髪の頭、それは住まうところのない僧である]

偏袒右肩露双脚、[衣がはだけ、右肩と両の脚が露わになっている]

葉裏松子僧前落。[僧の前に、葉の裏から松ぼっくりがぽとりと落ちる]

その画が『憩寂図』で、それに蘇轍が詩を添えた。

東坡自作蒼蒼石、[兄は蒼い岩を描き]

留取長松待伯時。[李公麟が松を描くのを待った]

只有兩人嫌未足、[二人はそれでは満足できず]

兼收前世杜陵詩。[前世に杜甫であったときに詠んだ詩も画にした]

そこで私はそれに次韻した。

東坡雖是湖州派、[私の画風を湖州派というのだが]

竹石風流各一時。[竹や石の風流は時に応じて変化するものだ]

前世画師今姓李、[前世も画師であった者の姓は李]

不妨題作輞川詩。[王維の詩こそ画にするのがよいだろう]

文同はかつてこのようにいった。

「私の墨竹の一派が近ごろは徐州にいる。私の竹には及ばないとしても、石ならより優れているようだ」

この一つの公案については、黄庭堅に一句吐いてもらわなければならないだろう。

ある人はこのようにいった。

「蘇軾は、李公麟の前身は画師であったといったところ、俗な連中は賛同せずに、詩の上だけでいい加減なことをいったのだとした。李公麟が一丘一壑の人[自然の中で楽しむ人]であることは、古の人と比べても劣るものではなく、蘇軾は愚かしいことをいったのではない。蘇軾の語は真実をそのままであるのだ」

黄庭堅、書く。

【補足】[(1) 最後の段落は黄庭堅 [→作品番号 08-1-065] による書き込みで、「ある人」としているのが、もちろん黄庭堅自身の見解である。(2) ここで画を描いた李公麟 [字は伯時] は北宋を代表する画家で、その名は作品番号 07-2-016 ですで見ている。このとき都で官職に就いていて、蘇軾兄弟と親密な関係になり、この後、頻繁に登場する。(3) 竹を得意とした文同とその親友の蘇軾に始まる文人画の流れを湖州派という。2人とも湖州に縁があったからだ。文同の言葉で「一派が徐州にいる」とあるのは、蘇軾が徐州知事であったときのことで、当時は都にいた文同は画を求められると、「吾が一派が徐州にいるからそちらに頼むがよい」といって断っていた。(4) 王維は自分の前世は画師であったといていた。それで李公麟には杜甫より王維の方がぴったりくると詩に詠んだのである]

■ 【08-2-009】 和黄魯直焼香二首

【解題】黄庭堅^{こうていけん} [字は魯直^{あざな り ちよく}] が香を焚いて詩を詠んだのでそれに和した。

【訳文】

其の一

貴君の香を焚く詩の四句は、

さなから仏法を説く偈^げであって。

香りとともに我が心の内を満たしてくれる。

観世音^{かんぜおん}を悟りへと導いた教えにも優るかのようで、

私は鼻の端^みを観る法を試みるのであった。

【補足】[蘇軾^{そうていけん}も黄庭堅も古典を縦横に引いて晦渋な詩句を吐く詩風であるので、二人が詠み合った詩はおおむね訳者には理解不能である。これはかなり無理した「ずっぱ訳」で、出鱈目を続けるのは気が進まないの第二首は割愛し、同じ理由で、さらに和した二首も割愛する]

■ 【08-2-010】 与張太保安道

【解題】昨年^{しゆこうてい}の12月に朱光庭が先鋒となって始まった蘇軾攻撃 [→作品番号 08-1-060] は、年が改まってから傅堯俞^{ふぎょうゆ}、王巖叟^{おうげんそう}といった人々が加わってさらに激しさを増し、蘇軾は弁明に努めるとともに都の外に出ることを朝廷に求めた。呂陶^{りようとう}や王覲^{おうてき}等が蘇軾を守ろうと弁護すると、傅堯俞と王巖叟^{こうたいこうたいごう}は高太皇太後の前を出て蘇軾批判を繰り返した。朱光庭等の言い分は我々から見たら言葉尻を捉えた言いがかりでしかないのだが、とにかく蘇軾を追い落とすことが目的で、決して口を閉ざそうとしなかった。1月の

終わりに高太皇太后は当事者である蘇軾、朱光庭、傅堯俞、王巖叟の4人を呼び、副宰相の范純仁はんじゆんじんから、蘇軾に罪はなく、この問題はこれで終わりにせよと言ひ渡した。ここに見るのは、ちょうどこのころに張方平ちやうほうへいに送った手紙。張方平はこれまでに何度も見てきたように蘇軾の大恩人でこのときは政界を引退して南京応天府なんけいおうてん ふうにいた [→作品番号 07-2-022]。

【訳文】

私は自分を俯仰コントロールするのが下手で、しばしば紛紛ごたごたを引き起こしてまいりました。今回のこともきっと詳しく聞かれておられることであらう。

このところ地方を出ることを四度ほど願ひ出て、門を閉ざしてお上の御指示をお待ちすること二十日ばかりになります。

文母ぶんぼ [高太皇太后]様は英聖こうたいこうたいごうであられ、深く真実を御覧とくおとになっておられ、德音とくおと [高太皇太后のことば] が瑯然ろうぜんと発せられるや中外は聳服しょうふくし、あまねく御指示やわらびが行き渡り、諸公は變和やわらびのであります。

これまで物を申してきた数人の者はそのまま職に留まるとの御沙汰があると数日来聞こえ、明日皆が御前にまかり出ることとなりました。門を閉ざして家に籠ることはこれではなくなりましょうが、都の外に出ることを願うのは変わらないであらう。

私を深く知って下さっておりますので、筆を尽くすようなことは敢えていたしません。お察しただければ幸いです。

不肖の私をお許しください。かねてからお教えいただきながらいまだこのようでありますのが恥ずかしく、手紙を前に心苦しくなりません。

【補足】 [(1) 大恩人に対して、少しばかりながらも、己の心情を漏らしている。手紙の冒頭で「不善俯仰ふぜんふぎやう」 [自分を抑えることが不得手である] と記している。程頃ていけいに向かつて不用意な言辞を吐かなければ [→作品番号 08-1-052]、このようなことにはな

らなかったかも知れないと反省したりしたのだろうか。腹の内にあるものを包まず出すのが蘇軾の持って生まれた個性であり魅力でもあった。ほぼ1年前に、司馬光が改革以前の法を復活させようとしたときに、蘇軾はあまりにも時代錯誤であるとして強く反対し、2人の間で大激論になった。蘇軾が何をいっても司馬光はどうしても聞き入れようとしないので、蘇軾は席を立って帰る際に、「司馬牛め、司馬牛め」と何度も叫び続けたという。「司馬牛」とは『論語』の中に出てくる人物で、それを借りて、音が通じる司馬光を牛のように動きの鈍い奴だと罵ったのである。17歳上で日頃から尊敬する人物に対してさえも、こういう皮肉な言葉を発してしまうのである。そのようなことがあっても、司馬光と蘇軾は互いに敬意を払い合う関係であることに変わり

はなかった。なお、不用意な発言が原因で蘇軾批判の嵐が起こったと見るのは、朱光庭等からすると問題の矮小化であって、蘇軾は本質的に不屈きな人間であることが根本問題で、だからこそあちこちでちょいちょい檻糶を出すといいたいのであろう。(2)

上に見た高太皇太后の裁きによって一件落着となればよかったのだが、蘇軾に対する攻撃はこの後何度も繰り返される。宋代から元代までの歴史を編年体で記した『続資治通鑑』という書物は、この年の8月の記事で、この時期の政治情勢を次のように概括している。「時に呂公著一人が宰相で、群賢が朝廷にありながら、類をもって集う

ということを制止できず、ついに洛党、蜀党、朔党の名称が生まれた。洛党は程頤をもって首として、朱光庭、賈易らが集まり、蜀党は蘇軾をもって首として、呂陶等が集まり、朔党は劉摯、梁燾、王巖叟、劉安世をもって首として、ここに集まる者が最も多かった。このときに、熙寧、元豊年間に実権を握っていたかつての大臣たちは職を停止されて遠くに置かれ、怨みは骨髓に入り、秘かに隙を狙っていた。朝廷にある者はそれを悟らずに、それぞれ党を作って互いに批判し合っただけだった。ただ、

呂大防は真正直で無党であり、范祖禹、司馬康は党を建てることはなかった」。つま

り、改革派〔新法党〕^{しんぽうとう}を追放した保守派〔旧法党〕^{きゅうほうとう}は司馬光^{しばこう}のもとでは一つにまとまっているように見えていたのだが、たちまち三派に分裂して足の引っ張り合いをするようになってしまったのである。ここに列挙されている人々は、すでにその名を見ているものが多く、特に呂公著は作品番号 08-1-069 で、劉摯は作品番号 08-1-024 で、劉安世は作品番号 08-1-060 で、范祖禹は作品番号 05-4-058 でそれぞれ見えていて、司馬康は司馬光の息子である。蘇軾は元来党派を作って政治運動をするような人間ではなく、たまたま同郷の人々を中心に蘇軾を慕う人々が集まっただけであったのだが、あたかも地域政党を率いる党首として見られてしまったのだ〔蘇門四学士とか六学士とかいわれる人々は必ずしも蜀の人ではないし、郷里の人々に示す親愛の情は、政治的なこととは無縁である〕。出身地を異にする者が政治的に対立する構図ができてしまったのは蘇軾の本意ではなく、地方官となってこうした抗争から抜け出ることをこれから 2 年にわたって再三願い出るようになる。(3) ついでながら記しておく、宋王朝は北中国に興り、南中国の様々な地方政権を武力で征服した経緯から、当初は南北間の地域対立をいかに解消するかが大きな課題とされていた。すでに見てきたように、南中国は武力では劣ったものの文化的には先進地であったために、科挙で優秀な成績を修めるのは南中国出身者が多く、北中国の人々は科挙の合格者が政権の中枢部を占めるようになってゆくのを歓迎しなかった。そうした南北対立は数十年かけて一応は解消されたはずだったが、ここに至って地域間対立が別の形で生じてしまったのである]

■ 【08-2-011】 跋画苑

【解題】君厚^{くんこう}という人のスケッチ帖『画苑』^{がえん}を平叔^{へいしゅく}という人から借りて、この跋文を記した。君厚も平叔も字^{あざな}であろうが、どういう人であるのかは不明。

【訳文】

君厚くんこうの『画苑がえん』はしまっておくときには箱をいっぱいりしてしまわずにすみ、持って出るときには牛や馬に汗をかかせたりしないで済む。明るい窓辺の片付いた机の上に載せてもよし、くつろいで座ったり横になったりする友としてもよし、書齋の壁に立てかけてもよい。巻軸をいちいち広げる面倒はない。それでいて、人物、鳥、魚が変化するありさま、山、川、草木の勝れた姿さんぜんが、粲然として前に繰り広げられるのである。好事の者の心に適ったのだ。

元祐二年二月八日、平叔へいしゆくより借りて観て、蘇軾そしつが書く。

【補足】[この跋文はそのまま『北斎漫画ほくさいまんが』に当てはまるかのようでもある]

■ 【08-2-012】 富鄭公神道碑

【解題】蘇軾そしつが8歳のときに憧れた4人のスーパースターふひつ ていこくこうのなかに富弼ふひつ [鄭国公ていこくこう] がいた。富弼ふひつは4年前の元豊6年 [1083年] に亡くなっていて、この年の2月、神道 [墓に至る道しんどう] に建てる碑に刻む文章を書くよう蘇軾は朝廷から命じられた。これは富弼の子の要望を受けて朝廷が蘇軾を指名したもので、墓誌の類の執筆は基本的に引き受けないと決めていた蘇軾であっても [→作品番号 08-1-071]、さすがにこの場合は辞退するわけにはいかなかった。富弼と蘇軾はそれほど親しい関係ではなかったようだが、さすがに書くとなったら、蘇軾ははっきりと自身の富弼観を描き出している。なお、富弼の墓ちくようは洛陽郊外に造られ、長い間地下に埋もれて隠れていたのが、周辺の開発に伴って2008年に再発見され、発掘調査が行われた。

【訳文】

宋朝そうが興おこってから百三十年、いまや四方に虞れがなく、人も物も年々増加し、秦、漢以来これほど

盛んなことはない。このようになった理由は一つではないにしても、その要は兵^{かなめ}〔兵器、軍隊〕を用い
ないことにある。用いても長期にわたらないのなら、智者が繁栄を謀り、仁者がそれを守ることで、無窮に
伝えてゆくことが可能である。

遼国^{りょうこく}〔契丹^{きつたん}〕が晋^{しん}〔五代十国時代の王朝^{ごだいじゅっこく}〕の天福年間に幽州^{てんぷく}、薊州^{けい}を占拠してから、北方の国境
地帯では警戒を怠ることができず、安心してできない歳月が六十九年にわたって続いた。

宋^{そう}の景德元年、遼^{ていぶ}は国を挙げて来寇し、定武^{ていぶ}を攻撃し、高陽^{こうよう}を困んだ。宋は勝つことができず、つい
には徳清^{とくせい}が陥落し、天雄^{てんゆう}も攻め込まれてしまった。真宗皇帝^{しんそう}〔宋の第三代皇帝^{そうじゅう}〕は宰相寇準^{こうじゅん}の提案
を用いて、親征^{せんぜん}の策を決った。皇帝が澶淵^{せんえん}に出向き、諸道^{しよどう}の兵が行在所に大集結したことで、敵
は動揺した。戦いが始まると、遼国の猛将^{じほんこくおうたつらん}、順国王^{じゆんこくおう}撻覽^{たつらん}を射殺し、そのために敵は懼れ、ついには和
睦を求めてきた。そのとき諸將^{しよが}は黄河のほとりに兵士を集め、敵が帰るのを待ち受けて、精兵をもってそ
の背後を突いて全滅させようとした。敵は怯え、哀を皇帝に求めた。皇帝はいった。「遼国にして
も、幽州、薊州にしても、その人民は皆が吾が民である。どうして多くを殺せようか」。かくて諸將に対し、
兵を留めて攻撃しないよう命じた。遼国は帰国を許され、これより好を通じ、約束を守って、国境を犯さ
ないことが三十九年続いた。〔この部分は、宋側にひどく傾いた記述になっている。実際には、和平は
かなり際どく成立し、宋から毎年多額の金品〔歳幣^{さいへい}〕を贈ることで遼国は国境を守ることを約束したのだ
った。これを澶淵の盟^{せんえんめい}〕といい、長く遵守された二国間の和平条約として世界史上特筆されるもので
ある]

その後、夏国^{かこく}の趙元昊^{ちやうげんこう}が宋に叛し、西方で戦争が何年も続き、長く勝敗が決まらなかった。遼国の
大臣の中に貪欲で勲功を喜ぶ者がいて、我が方が臆病かつ戦争を嫌っているとみて、我が方を動
揺させて、晋の高祖^{こうそ}がかつて与えたことのある関南^{かんなん}の十県を獲得し直したらどうかと、その主をそそのか
した。慶暦二年、遼国は国境線に厳重に装備した兵を集めた上で、その臣である蕭英^{しやうえい}と劉六符^{りゅうろくふ}を我
が方によこした。兵が国境で圧力をかけ、通常の往来とは異なるかたちで使者がきたことで、朝廷の
内外は憤ったが、仁宗皇帝^{じんそう}はこういった。「遼国と吾等らは兄弟の国である。和平を棄てるべきではな

い。冷静に相手をなためようではないか」。宰相に命じて遼国の使者を迎える接伴使を選ばせた。ときに遼国が何をしてくるのか予測がつかなくなかったので、群臣は誰もが敢えて行こうとしなかった。

宰相は右正言知制誥の富弼公の名を挙げた。公はすぐに便殿で皇帝にお会いし、叩頭していった。「主の憂いは臣の辱にございます。臣は死をも恐れるものではありません」。皇帝は感動し、公を接伴使とした。遼国の蕭英等は入国し、皇帝は中使を派遣して道中を勞った。蕭英は足の病気にかこつけて中使を(皇帝の代理人として)拝する礼をしなかった。公はいった。「私がかつてそちらの国に使者として参った折に、私は病気で車の中で臥せておりましたが、貴国の皇帝のお言葉を聞かためこは立って拝しました。いま中使がきていてあなたが立たれないというのは、いかなる礼儀なのでしょうか」。蕭英はすぐに立って拝した。公は胸襟を開いて語り合い、夷狄の人間を見下すような態度はとらなかつた。蕭英等はしはしば公と行き来し、その内心を隠さず、ついに左右の者を退けて、その主の望むところのものを公に告げ、このようにいった。「当方の要望に従えるのなら従いなさい。従えないのなら、代替となるものを出しなさい」。公はそのことを朝廷に伝えた。

皇帝は御史中丞の賈昌朝に交渉を命じ、遼国が要求してきた十県の割譲は許さないけれど、歳幣の増額は許すとし、さらに公を先方に派遣して交渉を続けるよう命じた。公が遼国に行くと、劉六符が接待役となり、十数回にわたって交渉し、公は領地の割譲はできないことを毎回主張した。かくて公は遼国皇帝に会って、直接問答をした。

遼国皇帝はいった。「宋が約束を破つたのだ。雁門の関を塞ぎ、塘水の堀を増設し、城壁を修理し、民兵を集めた。これは何のつもりなのだ。我が群臣は兵を挙げて南に行くことを寡人に要望した。寡人はそれよりは使者を派遣して土地を求める方がよいと考えた。要求しても得られなかったならば、そのときに挙兵しても遅くはないからだ」。公はいった。「貴国は我が真宗皇帝の偉大な徳をお忘れになったのでありましょうか。澶淵の役のときに、真宗皇帝がもしも諸將の言に従っていたならば、貴国の兵は誰も無事には帰れなかつたでありましょう。また、貴国と我が国との通好は、君主がその利を占有し、臣下の者は獲るところがありません。もしも兵を用いたら、その利は臣下の者に帰し、君主はその禍を専ら

被ることになります。貴国の諸大臣が争って兵を動かすことを勧めるのは、その身のためになると思うからで、国のためになることではないのです。遼国皇帝はいった。「それはどういう意味なのだ」。公はいった。「晋の高祖こうそ〔石敬瑭〕は天を欺き主君に謀反した者で、助けを貴国に求めました。その息子の末帝せきじゅうき〔石重貴〕は愚かで国を乱し、神にも人にも見棄てられました。このときに晋には狭い領土しかなく、上下は離反し、貴国は何の損害もなしにやすやすと晋に打ち勝つことができました。いま貴国が戦争を起こし、財産を獲得してきたならば諸臣の家々にそれを与えることはできません。しかし、たくさんの壮士や健馬を失ったならば、その禍はどのようにして補うのでしょうか。いま中国は広大な領地を保有し、精兵は百万を数え、法令は明確で、上下は心を一つにしています。貴国が戦をしようとして、必ず勝つとの保証があるのでしょうか。」「難しいだろうな。」「勝負の行く末は誰にもわかりません。たとえ貴国が勝つとしても、兵士や軍馬は失われましょう。その損失を補うのは群臣のすることなのでしょうか、それとも君主のすることなのでしょうか。もしも、貴国との通好が絶えなければ、歳幣はことごとく君主のもとに歸し、臣下が得るものといったら、使者となった者が与えられる褒美ほうびのものです。群臣に何の利があるのでしょうか。これを聞いて遼国皇帝は大いに悟ることがあり、何度もうなずいた。公はまたいった。「雁門の関を塞いだのは夏国の趙元昊に備えたものです。塘水かしょうくの工事はもともと何承矩が始めたもので、それは貴国との通好が定まる以前のことで、地が低く、水が集まるために、堤防を高くしなければならぬのです。城壁はどれも修理したまでのことで、民兵もまた欠員を補っただけです。いずれも和平の約束に違反するものではありません。かつて晋の高祖が盧竜ろりゅうの一道を貴国に贈ったのも、周の世宗が戦で関南かんなんの地を取ったのも、皆過去の王朝の時代のことで、我が宋朝が興ってからすでに九十年が経ちます。お互いに過去の王朝が保有していたことのある土地を求めたならば、貴国にとってそれが必ず利益となるのでしょうか。我が朝の皇帝が私に命じられたときにこのような言葉がありました。『朕は祖先のために国を守らなくてはならない。我が土地を人に与えることは断じてできない。遼国が本当に欲しがっているのは租税を増やすことであろう。朕が土地を巡って争うことを望まないのは、両朝の多数の民衆を死なせることをしたくないからだ。だから己を屈して、歳幣を増やし、遼国の租税の増加に

代えようと思うのだ。もし遼国がどうしても土地を欲しいというのなら、その志は和平を破棄することにあつて、上辺だけそうではないようにいっていることになる。そうであるなら、朕もまた戦いを避けるものではない。澶淵の盟[宋遼間の和平条約]は天地鬼神も見ろなかくて結ばれたものだ。いま遼国から先に兵端を開くのなら、過ちは朕にはない。天地鬼神を欺けることができようか』と。遼国皇帝は大いに感悟し、皇室との通婚を求めた。公はいった。「婚姻はそもそもひびが入りやすいものです。人の命の長短は知ることができません。それよりも歳幣が確実にしかも長く続くことの方が間違いありません。本朝から皇帝の息女が嫁入りしても、持参金は十万緡びんにもなりません。歳幣が無窮に続くのとどちらが多いのか明らかであります。遼国皇帝はいった。「卿あなたは一度帰ってまた来るがよい。婚姻か歳幣かどちらかを選せいしよび、誓書を持ってきて差し出すがよい」

公は帰国して報告し、再び遼国に派遣された。皇帝の国書[手紙ことば]と、口頭で申し述べる詞を政府から授けられた。すでに出発して樂寿で宿泊したとき、公は副使にいった。「私は使者として国書を見ていない。万が一にも、国書に書いてある詞ことばと、口頭で述べる詞ことばとが異なっていたならば、今回の交渉は失敗してしまう。公は(禁を犯して)国書を開いて視ると、果して同じではなかった。すぐに都に馳せ帰り、夕方ではあつたが宮中に入って皇帝にお会いし、学士院で一夜を過ごし、書き替えられた国書をもって発った。

遼国に至ると、もはや婚姻を求められることはなく、もっぱら歳幣の増額を求めてきた。遼国側はいった。「貴国が我が方に差し出す書に『献』とあるが、それではだめだ。『納』に改めよ。[「献」なら兄弟間のプレゼントであり、「納」なら下から上に差し出すというニュアンスになる]。公はそれはできないと争った。遼国皇帝はいった。「貴国は我が方を懼れておる。わずかな字のことで何を渋っておるのだ。もしわしが軍団を率いて南に向かったら、後悔するところではあるまいに」。公はいった。「本朝の皇帝は我が方の民も貴国の民も等しく愛され、鋒のもとに踏みこじめるようなことはできないと考えております。だから己を屈して、歳幣を増額するのです。懼れてなどいません。やむを得ずして戦うことになるのなら、南北は互いに敵国となり、どちらが正しいか勝負で決めることになります。そうなれば、私はもはやこの交渉に心を碎

かずにすみます」。遼国皇帝はいった。「卿あなたはそういぎりたつてない。『納』という字は昔から使った例があるではないか」。公はいった。「昔からといわれましても、唐の高祖皇帝が突厥から兵を借りたときに、へりだつて『臣しん』と称した例があるだけです。その時に与えた文書に『献』とあったか『納』とあったか、それは知りません。その後、突厥の王の頡利けつりは(高祖の息子の)太宗皇帝によって擒ないそうとなったのですから、それがかつてのよい事例となりましょうか。そういつた公の声と顔色は高ぶっていた。遼国皇帝はその勢いに押され、「貴国に人を派遣するから、よく協議するがよい」といった。

ここにおいて、歳幣を増額するとの誓書を遼国に留め、耶律仁先と劉六符が遼国の誓書を持って宋に来ることとなった。そして、「献」か「納」かの交渉をした。公は朝廷に申し上げた。「臣は死ぬ覚悟でこれを拒み、先方の勢いを折りました。ここでまた許してはなりません。相手はどうすることもできないはずです。皇帝はこれに従い、歳幣を増すこと二十万で遼国との和平は成り立った。これによって北方は何事もなく、それから四十八年が過ぎたのだ。遼国の君臣はいまも公の語ったことを顧みて、その約束を守って破らないようし、通好と用兵の利害がどこにあるかを心の内でははきりと確認しているのである。

このようであるから臣わたし[蘇軾]はかつてこのように論じたことがある。百余年の間に兵を大きく用いることがなかったのは真宗皇帝、仁宗皇帝の徳により、また寇準と公の功績によるものであると。

……[以下略]……

【補足】〔(1) 以上は『神道碑』の冒頭部分で、この後に、富弼の伝記が続き、終わりにこの文章を書くことになった経緯と富弼を称える詞が添えられる。碑文の本体である伝記を記す前に、建国以来 130 年にして直面した一大危機を富弼がほとんど 1 人で回避したエピソードを掲げたのが蘇軾の工夫である。(2) 富弼はこのときまさしく命がけで遼国 [契丹] との交渉に臨んだのであって、この文章はこれでも実は少し抑え気味に書いている。富弼が 1 回目の交渉で契丹に向かったのは慶曆 2 年で、そのとき蘇軾は 7 歳であった。その 6 年ほど後になって、蘇軾は父の蘇洵とこの件について

論じ合ったことは作品番号 01-2-007 ですで見ている。(3) 富弼自身は理不尽な遼国の要求は断固退けるべきであると考えていた。しかし、国のために自身の信念を曲げて交渉に臨んだのであって、そのことについて朱弁しゅべんの随筆『曲洧旧聞』きよくい きゅうぶん [→作品番号 05-5-086] は次のように伝えている。

【訳文】

朱弁しゅべん：『曲洧旧聞』より

晁説之ちやうせつし先生せんせいが崇寧すうねいの初めの頃に私にこのようにいった。

「富弼ふひつは晩年ばんねん、遼国りやうこくに使者として行ったときの功績を客人が褒めるのを聞くと、首まで顔を赤した。人々はその理由がわからなかった。子弟がある暇な日に富弼に尋ねると、このように答えた。『北に使者として行ったときに、かつての元勳や名將は皆ずっと前に老いて死んでしまっていて、その後の者は戦争の仕方を知らないし、兵士は実戦で習ったことがなかった。ただあれこれ口でいって、うましのごとくとするだけであった。我が方に非はなくても、相手と比べたなら、何しろ向こうは心の内に何年も悪さを抱いてきているのだから、どうなるか知れたものではなかった。恥を忍んで歳幣を増したのは、私の意ではなかったのだ』。

このことを聞いて、私は兄弟で論じ合った。そして、蘇軾しんどうひが『神道碑』を書いたときに、富弼の本心を知らずにいたのを残念に思った。

【補足】朱弁しゅべんは、ここに記してあるように、富弼のエピソードを師の晁説之ちやうせつしから聞いている。晁説之は作品番号 05-5-086 ですすでに触れたように、蘇軾と同じ年の科挙で合格した晁端彦ちやうたんげん [→作品番号 05-1-051] の息子で、晁説之自身もこの年の終わり頃に蘇軾に会っている。だから、『曲洧旧聞』に記されている蘇軾やその時代の人々に関する記事は信憑性が高いとされる。ただ、富弼の本心を知らずに蘇軾が『神道碑』を書いたとするのは必ずしも妥当ではないだろう。己の信念を貫くよりも、当時の状況

下で最善の選択をして、命を賭してそれを成就させ、長期にわたる平和をもたらしたことを蘇軾は高く評価したと思われる。蘇軾は年齢とともにより総合的、多角的に物事を考え、文治主義をより求める方向に思索を深めていったようだ]

■【08-2-013】 呂公弼招致高麗人

【解題】外交問題に関連して、高麗国こうらいこくに関するこの文章を見ておこう。宋国そうこくは北から圧力をかけてくる遼国りょうこく [契丹きつたん] を常に警戒しなければならず、その脅威を取り除くために、改革派は、朝鮮半島にある高麗国との友好を深めて挟撃態勢を作ろうとした。その政策に対して蘇軾が強い懸念を抱いていたことは作品番号 07-2-070 で見ている。これはその政策がそもそも何が発端で始まったのかについて記している。

【訳文】

元祐五年二月十七日、王伯虎おうはくこに會つて、このようなことをいった。

「かつて枢密院礼房すうみつゐんらいぼう検詳文字けんじやうもんじであったときに、高麗こうらいに関する公文書くもんじゆを見たことがあります。それで、張誠一ちやうせいが契丹きつたん [遼国りょうこく] に使者として行ったことから事が始まったとわかりました。契丹の宮廷きつたん の帳とばりの中に高麗の人がいるのを見て、張誠一は私的にその人と語り、高麗の本国には中国そうこく [宋国] を慕う意があると知り、帰国するとそのことを奏上しんそうしました。先帝 [神宗] はそれで初めて高麗の人を招致しようと考へ、枢密使すうみつし の呂公弼りやうこうひつ がその意向に迎合して、自ら招致する議案を書いて奏上し、その結果として、発遣はつせん 使し の羅丞らじやう に命じて商人を高麗に派遣して、高麗の人を招くにいたしました」

いま天下の人々は羅丞に罪があるのを知っているが、呂公弼に罪があったのは知らない。張誠一については言うに足りないことだ。

【補足】 [王伯虎おうはくこ について詳しいことは知られていないが、国家の機微に関する文書に触れることができた官員であった。呂公弼りやうこうひつ は仁宗皇帝時代じんそう に長く宰相職しやうさう にあつた呂

夷簡い かんの息子で、そのまた息子の呂希彦りょ ぎげんに贈った詩を作品番号 03-3-025 で見ている。このときはすでに呂公弼は他界していた]

■【08-2-014】書鬼仙詩

【解題】鬼き [亡霊] や仙人が詠んだ詩を集めた一巻の後ろに記した短文。

【訳文】

忽然湖上片雲飛、不覚中流雨湿衣。……[八首の詩を記す]……

元祐二年二月二十一日の夜、黄庭堅こうていけん、孫安そんあん、蔡啓さいけいとともに李公麟りこうりんの書齋に集まった。この一巻に記したのは、仙鬼せんきが作ったものか、夢の中で作ったものである。

『太平広記』の中にこのような話がある。

ある人[崔書生さいしよせい]が鬼物きぶつによって墓の中に連れて行かれた。見るとまわりは立派な建物で、豪華な広間へと引かれて行った。たちまち墓を荒らす者の侵入に遇い、驚いて逃げ出ると、何もかもなくなっていた。ただ、あたりは「芫花半落、松風晚清」[芫ふじもとぎの花が半ば落ち、清らかな松の風が夕暮れに吹いている]というありさまであった。

私はこの両句が気に入っているので、巻末に合わせて書いておく。

【補足】 [(1) 集まった四人がそれぞれに珍しいものを披露したのだろう。黄庭堅こうていけんの名は作品番号 08-2-009 で、李公麟りこうりんの名は作品番号 08-2-008 で見ている。孫安そんあんについてはこの5年後に37歳で亡くなったことが知られている。蔡啓さいけいは不詳。 (2) 『太平広記』は宋そうの初めに編纂された巨大な書物で、それまでに記録された怪奇談を網羅しようとしたものである。蘇軾はそのようなものも丹念に見ていたのである]

■ 【08-2-015】 記鬼詩

【**解題**】^{きせん}鬼仙の詩に関連してこの短文を見ておこう。^{さんりょう どうせん}参寥 [道潜] [-→作品番号 07-1-016] が^{しんかん}秦観から聞いた話を人々に披露したのを蘇軾が記録した。これを書いたのは、^{こう}参寥が黄州にきていたころのことであろうか。

【訳文】

^{しんかん}秦観がかついてこのようなことをいっていたという。

^{ほうおう}宝応県の民が嫁を迎えたので、客人を招いて酒宴を開いたところ、その半ばで客の一人が急に立ち上がって門から飛び出して行った。主人が追いかけると、客人は激しく酔っていたためなのか、そのまま水の中に入ってしまうとした。主人は急いでそれを止めると、客人はいった。

「女の人が詩でもって私を招いたのです。その詩は、

長橋直下有蘭舟、[橋の下にきれいな舟がありますのよ]

破月衝煙任意游。[おぼろ月の下で気ままに遊びましょう]

金玉満堂何所用、[宝物もお屋敷もいらぬわよね]

争如年少去来休。[くずくずしていると若さはなくなってしまうのよ]

それで急いでここにきたのです。ここが水辺があるとは気づきませんでした」

結局その客人の身には何事もなくすんだ。

夜に集まって鬼について語り合っていると、^{さんりょう}参寥がこのことを話したので、いさか記したまでである。

【**補足**】 [インターネットもテレビもない時代であるから、人々が話を持ち寄って語

り合うのが楽しみであったのだろう。そうしたものを文人が記録すると後世に伝えられ、先に掲げた『太平広記』^{たいへいこうき}に収録されたものをいまの我々は読むことができる]

■【08-2-016】次韻子由送家退翁知懷安軍

【解題】この詩に添えた蘇軾自身の注に、「吾が州の同年の友は十三人、今存する者は六人のみ」とある。「同年」とは同じ年の科挙で合格した仲間、蘇軾の故郷眉州^びはさほど大きくもないのに、その年の全合格者 877 人中に眉州出身者が 13 人もいたとはかなり驚きの数字である。「今存する者は六人のみ」の中に、蘇軾、蘇轍の兄弟と、家定国^{か ていこく}、家安国^{か あんこく}の兄弟がいた [→作品番号 01-2-008、05-3-053]。その家定国^{あざな} [字は退翁^{たい} おう^お かいあんぐん^{かいあんぐん}] が懷安軍 [軍は行政単位の呼称] の知事として赴任することになり、弟の蘇轍が送別の詩を作り、兄がその詩に次韻した。詳しい考証によるとそれは3月10日のことであったという。

【訳文】

吾が州の同年^{どうねん}の友は、

十三弦の琴の上に並ぶ星のように燦然と輝いていた。

そのときに功名を立てよとする意の先は、

朝廷に居並ぶ者になろうとするのに止まるものではなかった。

事は願いと異なり、あるいは天が寿命を貸し与えなかったために、

いまでは、画題によくある「六羽^{いっさい}の鶴^ふが一庭で俯仰する」のと同じ図柄になってしまった。

貴君は昔の約束を守り、

霜を経て後になお香りを放つ菊のような存在である。

あちらの地に着けば、

宮中で奏せられるような玄妙な曲を聴くことはないだろうが、

貴君は天をも破るすばらしい詩を詠むであろう。

遠く西南の地はまさに春の日照りのときに当たり、

沼は干上がって枯れた水草が泥にへばりついているであろう。

貴君が身を翻してその地に至れば、

たちまち恵みの雨がしたり落ちるのだ。

かの李白^{りはく}は宮中の沈香亭^{ちんこうてい}で皇帝のお召しを待って立派な詩を作ったけれど、

私にはその才もなくたまたま都にいるだけで、

糸筋一本たりとも国家に貢献するところとてなく、

お上より馬を賜わり、雲の上の人々に空しく付き従っている。

貴君ばかりが遠い地の知事であるのはなぜなのか。

私は郷里の山^{おきな}の叟^{すい}に対し、恥ずかしくも面目なく思い続けなければならない。

どうか貴君から丁寧に言葉を寄せていただきたい。

【補足】 [(1) 最後にある「山の叟」とは、蘇^そ兄弟も家^か兄弟も師事した劉^{りゅう}巨^{きょ} [字は微^{あざな}之^び] を指す。家定国が赴任する懷安軍^{かいあんぐん}は蜀^{しよく}に属するので、劉巨への挨拶を家定国に託すといったのである。(2) 同じ3月10日に、郷里にいる従兄の蘇^そ不^ふ危^き [字は子安^{あざな しあん}]]

[→作品番号 06-3-015 など] に宛てて手紙を書いていて、地方官として外に出ることを再三願っているけれども叶わないことや、遼国からの使者の接待役を務めたことで遼国の織物をプレゼントされたので、その一段を送ることなどが記されている]

■ 【08-2-017】 送楊孟容

【解題】 これも郷里の人に贈った送別の詩。楊孟容^{ようもうよう あざな れいせん} [字は礼先^{び りぜん}] は眉州眉山^{びょうしゅう}の先輩で、このとき広安軍^{こうあん}の知事として赴任することになった。広安軍は同じく蜀^{しよく}の地であ

る。黄庭堅こうていけんが作った送別の詩に次韻した。

【訳文】

我が家は峨眉山がびさんの北にあって、

先生くにと邦を同じする。

隔たること六十里、

同じ玻璃江はりこうの水を飲んで育った。

そこでは江も山も人と親しく、

一千の家の窓を遍く青色で満たしてくれる。

それでも窓の内ようもうようにある人[楊孟容]は、

心を安らかにすることはなかった[天下のために身を役立てたいと思っていた]。

先生しよくは蜀に帰って小さな町を治めることになり、

大きな鐘を自在おせに鳴らせないのを嘔び泣くのだろうか。

私は玉座の近くに侍っているとはいえ、

よろよるとやと歩いているだけだ。

若い人には高い才能の持ち主がいて、

漢代かんだいに天下無双と称えられた黄童こうどうに並ぶ者もいる。

先生は帰郷してからもう州の役所に入ることもなく、

山の隠者と遊ばれるのかはろしいのではないだろうか。

丁寧にお尋ねするのは、

黄童の詩と私の詩のどちらがよるしかろうか。

追って私も帰郷するはずだが、

冬に仕込んだ酒がよい香りを発する春を待つのがよかるかと思っている。

【補足】[「^{こうどう}黄童」とあるのは、^{ごかん}後漢時代の^{こうこう}黄香のこと。ここでは同じ^{こう}黄姓の^{こうていけん}黄庭堅になぞらえている]

■【08-2-018】見子由与孔常父唱和詩、輒次其韻。余昔在館中、同舍出入、輒相聚飲酒賦詩。近歳不復講、故終篇及之、庶幾諸公稍復其旧、亦太平盛事也

【^{こうぶんちゆう}解題】^{こうぶちゆう}孔文仲、^{こうへいちゆう}孔武仲、孔平仲は当時有名な三兄弟であった。孔文仲の名は作品番号04-1-061で、孔平仲の名は作品番号06-3-062ですで見ている。孔武仲[字は常^{あざな}父^{じゆう}]はこのとき蘇軾と同じく学士館の職にあった。この詩の題は、「弟と孔武仲が唱和した詩を見たので、それに次韻する。私が昔[34歳の頃]館中にあったときには、職を同じくする者が自由に出入りし、酒を飲み詩を賦し合った。最近はそのようなことがないので、詩の終わりでこのことについて言及した。諸公が以前と同じようにすることを願うものである。それもまた太平の盛事であるのではなからうか。」

【訳文】

貴君の先祖は魯^ろの東^{とう}の家の人[孔子]、
その門戸の光は千古より天下を照らしてきた。
であるから、貴君の文章はもとより立派であり、
風貌もまた似たところがあるのだらう。
孔子の顔は鬼の面を付けたようだといわれたこともあったが、
貴君の顔には各地を經てきた労苦が刻まれている。
書を誦するときには口から波が翻るかのよう、
鳩^{ほととぎす}と杜鵑が一緒に鳴き続けるかのよう、
滑らかな弁舌は止むことがない。

十年の間、困難の中を走りまわり、
 風で髪をとかし、雨に沐浴する苦勞をした。
 「私の道は間違っているのか。私は野の獣ではないのだから」
 と、孔子も困難な日々には嘆いたことがあった。

貴君等三兄弟が都に帰還してからは、
^{かなえ}鼎の脚のように互いに補い合うところがある。

^{ほうざん}蓬山[朝廷]にかつて集っていた老人は皆いなくなり、

そのころのことは削り去られてしまったのだが、
 貴君を迎えてからは、おいおい故事も甦りつつあり、
 私もまた先輩たちの振る舞いをかろじて知っているので、
 館職の同輩とともに詩酒を盛んにしたいと思っている。

願わくは、貴君も盃を挙げてこの風雅を楽しむことを唱導してほしい。

【補足】[原詩では後半に漢代かんたいの様々な人の名を挙げている。それによって孔武仲こうぶちゆうのような人にとっては含蓄のある作品として深い味わいを得られるのだろうが、我々にとってはひどく煩わしいだけであるので、おおまかな意味を酌んで訳した]

■【08-2-019】黄魯直以詩饋双井茶、次韻為謝

【解題】^{こうていけん}黄庭堅 ^{あざな} [字は魯直] ^{ろちよく} [→作品番号 08-2-009] が詩を添えて ^{そうせいちゃ} 双井茶を贈ってくれたので、その詩に次韻して謝礼とした。

【訳文】

^{そうせい}双井には天下無双といわれる茶が栽培され、
^{ろくいち}六一居士[欧陽脩]がかつてそのことを誇らしげに記した。

磨き上げた技で作られた茶は僮僕に任せるのではなく、
自ら湯を沸かして泡が立つのを看るのだければならない。
この茶を好む貴君は、痩せてあかたも仙人のよう、
この茶を飲みたがる私は、喉がからからの病人のよう。
来年は東南の地に去ろうと思っているので、
太湖たいこに浮かべた舟の上でゆったりと茶を味わえるのだろう。

【補足】 [退隱の地として用意してある常州じょうの陽羨ようせんは太湖たいこのごく近くである]

■ 【08-2-020】 次韻張昌言給事省宿

【解題】 給事きゅうじ中の職にある張問ちやうもん [字は昌言あざな] が省中しょうげんに宿泊したときに詠んだ詩に次韻した。張問は新法に反対して不遇の日々を送り、この 2 月に給事きゅうじ中になり、8 月に退職して 11 月に 75 歳で亡くなった。

【訳文】

貴君は長く同じ地位に留め置かれ、
白髪を風に靡かせるまでになった。
眼光ゆうひは鋭く、落暉らくいに向かっても目が眩んだしらない。
飢えた民を救うためならと、遠く北の地へも喜び勇んで出向き、
いま省中しょうちゆうで目を閉じて座っているときには、仙界を飛ぶことを想っている。
貴君の自慢は、年少の者ともわけへたでなく一緒にいられること、
もし酒樽の前で闘うならば、勝てる者は世に稀であろう。
貴君が故郷こきやうの松陽しょうやうに隱棲する日を待って、
煙る雨の中、私も近くで土を耕しくたく思う。

【補足】〔原詩にある第三句と第四句の対句「朔野按行猶雀躍、東台瞑坐覚鳥飛」〔朔野や あんこうに按行して猶なほ雀躍じゃくやく、東台とうだいに瞑坐めいざして鳥飛うひを覚おぼえる〕は、「雀」と「鳥」のペアが面白いのだがうまくそれを生かして訳すことができなかった。飢民救済のために張問が北方に向かったのは前年のことで、高齢にもかかわらず意気盛んであったことを「雀躍」と言い表した。一方で、「鳥飛」は意味が取り難いだろうと、蘇軾自身の注が付されていて、「道家の説で、鳥は飛んで兔宮とぎゆう〔仙宮〕に入るといふ」とある]

■ 【08-2-021】 和三舎人省上

【解題】3月30日、皇帝は景靈宮けいれいきゆうにおいて祭事を行った。その前日に曾肇そうちやう、劉攽りゆうはん、孔武仲こうぶちゆうの三人の舎人しやじん〔官僚集団のトップクラス〕が省舎で詩を詠み合い、蘇軾がそれに和した。曾肇は先に亡くなった曾鞏そうきゆう〔→作品番号 06-4-016〕の弟、劉攽は作品番号 05-1-064などで、孔武仲は作品番号 08-2-018 でその名を見ている。

【訳文】

世上の榮枯ふんぷんは紛紛として長く保てるものではない。

雲と雨が手を翻すようにして入れ替わり、

あるいは、枕の上でぼんやりとして夢に落ちるのと同じ。

一つだけはっきりしているのは、

江右かうゆうより起った三人そうちやう りゆうはん こうぶちゆう〔曾肇、劉攽、孔武仲〕が揃って賢者であることで、

諸賢は、宗廟で祭祀に用いる器のように本来的に優れているのだ。

この私はときたら、星空の箕や斗のように見かけたけ大きくて役に立たない。

明日の朝は、貴人が正装して大勢居並び、

天子の御車こじゆうに扈従せんこうでんして宣光殿より出発する。

陛下は白雲郷[神聖な場所]において成長され、
もろもろの帝王と竜馬を並べて駆けるまでになられた。

しかも、明堂[皇帝の学問所]においては、
杞梓[良材＝三賢人にたとえる]の扶けを得ているのである。

【補足】 [(1) 詩の前半に「江右より起った三人」とあるのは、蘇軾自身の注によると、曾肇、劉攽、孔武仲がともに江右、つまり長江の右側のいまでいう江西省の出身であるからだ。(2) この詩に続いて、天子の行幸に従った曾肇が詠んだ詩に次韻した蘇軾の詩があり、さらにもう一度それに和した詩がある。いずれも朝廷に仕える者にふさわしい典雅な作品で、同様の詩を詠む必要に迫られた場合には手本とすべきものであるのだろうけれど、我々には特に興味を覚えるものではないので訳さない]

■ 【08-2-022】 送銭承制赴広西路分都監

【解題】 銭暉が広西路に赴任するのを見送った詩。銭暉は五代十国時代に杭州に都を置いた呉越国の王族の流れを酌む者。蘇軾が呉越国に特別な思いを懐いていたことはしばしば見えて、特に『表忠観の碑』[→作品番号 05-3-066] に詳しく記されている。この詩では呉越国の文化の遺風が自然物にも宿っているとして「江山の気」と表現している。

【訳文】

かつて私は『表忠観の碑』の文章を作ったときに、
銭氏の遺した「江山の気」がいまも衰えずにあるのをまざまざと感じた。
天目山[杭州の西湖のほとりの山]からはなお鳳が舞いつつ下り、
水辺には時に神々しい駿馬が姿を現す。

どこもが貴君が床几を置いて笛を吹くに適した場所であり、
 勇ましくも槩^{はこ}を横たえて、誰も及ばない詩を詠むのである。
 かつてある寺で仏像が動く異変を現したときに、
 貴君は仏像を砕いて川に投げ入れた。
 そのような人であるから、
 貴君が赴任すると聞いただけで、
 もろもろの悪者どもはすでに震え上がっていることだろう。

【補足】〔仏像を川に投げ入れたエピソードは、^{せん き}錢暉が実際にそのようなことをしたと蘇軾自身が注記している。人を惑わすような怪異を見せるのなら、仏像といえども棄てるべきだとするのが、宋代官僚の合理主義であった。この部分は、原詩では丹霞^{たん か}禪師の故事を引いているのだが、訳では割愛した。ただし、丹霞禪師の話はなかなか面白いので、ここに記しておこう。丹霞禪師はある寒い夜に暖を取るために木の仏像を焼いた。ある人がなんてひどいことをするのかと詰ると、禪師がいうには「焼いて仏舎利^{ぶつしゃり}〔釈迦の骨〕を得ようとしたのだ。」「木を焼いたら何も残らないぞ。」「だったら焼いてしまってよいではないか」。——いかにも蘇軾が好みそうな話である〕

■ 【08-2-023】次韻劉貢父省上

【解題】先に見た三舎人^{さんしゃじん}の一人の劉敞^{りゅうはん}〔字は貢父^{あざな こう ふ}〕が雨を喜ぶ詩を役所で詠み、蘇軾が次韻した。常に干害が心配される北中国では、春の雨は特に喜ばしいものであった。

【訳文】

厚い雲が西の郊外から破れ、

ばらばらとまばらな雨が降り出した。

土はまだ泥になるほどではない。

官の仕事にあっても、ここは閑を得て、

雨が降る歓びを笑い合って語ろうではないか。

行く行くは病み衰えてしまう身なのだから、

いまは花の前で、雲から落ちてきたような美しい酒を傾けようではないか。

貴君は兄と一緒にではないことを詩中で嘆いているけれど、

貴君の家では竹林のように俊才が次々に出てきているではないか。

【補足】 [(1) 蘇軾自身の注で、劉攽^{りゅうはん}は兄の劉敞^{りゅうしょう} [字は原甫^{あざな げん ぽ}] とともに朝廷にすることができないのを詩中で嘆いていて、その一方で、兄の子がいま朝廷にいと記している。劉攽としては蘇軾と蘇轍が兄弟で朝廷にあるのには及ばないということで自身の兄について言及したのだろう。(2) 劉攽の兄の劉敞との楽しい交遊を回顧した文章を作品番号 02-1-016 ですで見ている。それは元祐^{げんゆう}4年、つまりこのときより2年後に書いたものである。それによれば劉敞はすでに亡くなっているので、劉攽が嘆くのも無理はないとわかる]

■ 【08-2-024】 再和

【解題】 上の詩にもう一度和した。詩の始めに劉攽^{りゅうはん} [字は貢父^{あざな こう ふ}] とのかねてからの縁が詠み込まれている。すなわち、蘇軾^{みつ}が密州知事であった時期には、劉攽^{そう}も曹州知事として地方に出ている [→作品番号 05-3-067]、盜賊を教導する功績があった。

【訳文】

かつて貴君は曹州に、私は密州にあって、

顧臨君は一つ笑う間に万事を解決してしまう。

十年の間、^{こうかい}江海に臥し[地方で不遇の日々を送り]、

一度も怒りや喜びの感情を表に出すことがなく、

刀を磨いて自ら豚や羊をさばいて、近隣の人々と酒を酌み交わした。

都に帰り来れば、一つの夢のようで、

ふくよかな頬はますます豊かに輝き、

^{しょうちやく}詔勅の文案を吟味する役を担って、手心を加えずにひしはし書き改め、

^{こうし}黄紙[勅書用の紙]に黒々と清書した。

ここに急遽、^{かさく}河朔に向かって行くことになったのだが、

顧臨君こそは必ずや辺境の地で勲功を挙げ、

剣を帯びたまま皇帝の前に立つのを許される人である。

思うのは、^{かん}漢の時代に^{ゆう}勇をもって聞こえた^{おうそん}王尊のこと——

王尊が^{とうぐん}東郡の太守となったとき、

^{こうが}黄河が決壊して洪水が押し寄せた、

人々は逃げようといったのだが、

王尊は^{きつりつ}屹立して去ることがなかった[防水に務めて町を救った]。

顧臨君はまさしく王尊と並ぶ勇の持ち主である。

【補足】^{じゅうい}「十围」というのは、腹回りが両腕を伸ばした長さの 10 倍もあるということとで、人間の腹はさすがにそこまで大きくはならない。昔の中国にメタボなどという概念はなく、でっぷりとした体型を理想とした。蘇軾の肖像画もふくよかに描かれている]

■ 【08-2-026】 諸公餞子敦軾以病不往復次前韻

【**解題**】4月30日、顧臨〔字は子敦〕を見送るために范祖禹〔→作品番号08-2-010〕等大勢の人々が都の外にまで出て送別会を開いた。蘇軾は病気のために欠席したので、上の詩と同じ韻を用いて詩を作って贈った。

【訳文】

貴君は江南の俊英であり、
 その容貌は河朔の魁偉である。
 唐の時代に則天武后が人間界第一の好漢を求めるといったときに、
 狄仁傑は張柬之を勧めたのだが、
 貴君こそはまさしくそのような人物である。
 私は上書して貴君を懸命に引き留めようとした、
 しかし、言葉が拙劣であったために結果が出せなかった。
 それはもういわずにおこう、
 大人物たる貴君は、
 出処がいかなることになっても喜んで受け入れるのであって、
 皇帝が英豪に与える六尺の輿に坐し、
 大いに肉を食らいつつ万里の彼方へと飛び行くのである。
 都から近いとか遠いとかは取り立てていようなことではないのだらう、
 天下の内はどこでも等しく朝廷の美德の及ぶところであるのだ。
 遥かに想うのは、
 送別の宴で諸公が争って紙に墨を滴らせているであろうこと。
 私は病気のために門を閉ざして籠り、
 諸公が貴君を讃える歌を聞くことができない。

この後、貴君と会えるのはいつであろうか、
覆った水が再び戻るようにきつと歡びをまたもにできるだろう。
善く千金の身を保たれよ、
前言はすべて戯れであった。

【補足】 [(1) この詩の冒頭に、江南＝俊英、河朔＝魁偉と並べてあるところが面白い。江南〔南中国〕の特色は文に優れ、河朔〔北中国〕の特色は武に優れ、顧臨はその両者を合わせ持っているというのである。(2) 一説によると、顧臨は前の詩を読んで喜ばなかったということを蘇軾は聞き、この詩を作って言い訳をしたという。どこが気に入らなかったのか訳者には理解できなかった。それがわかったならば訳を改めたい]

■ 【08-2-027】和張昌言喜雨

【解題】張問〔字は昌言〕〔→作品番号 08-2-020〕が雨を喜ぶ詩を詠んだので、それに和した。

【訳文】

二聖〔皇帝と太皇太后〕は憂いのあまり寢食を忘れ、
その御心に百神も奔走して風と雲が会うこととなった。
宮中に宿直していた私は、
夜の間、川の流れの音が高鳴るのを聞き、
朝になって、清らかな流れが水かさを増しているを見た。
夢から覚め、歡びの酒を酌み、その酔いから醒めたところに、
貴君からの好句を聞き、その余薫が我が部屋を満たしてくれた。

秋になればきっと豊年の喜びがあるだろう。

そのときに備えて、

貴君に先を越されぬよう新しい詩をいまから用意しておくしよう。

■【08-2-028】次韻劉貢父西省種竹

【**解題**】^{りゅうはん あざな こう ふ}劉攽〔字は貢父〕〔→作品番号 08-2-023〕が^{せいしやう}西省〔皇城の西側の官舎〕に竹を植えて詩を詠んだのでそれに次韻した。仲間内で楽しく詠み合っただけの詩で、訳すまでもないのだが、敢えて太平の勝事であるかのような振舞いをしているのが面白いので、一応読んでおこう。

【訳文】

太平のときの西掖〔西省＝中書省〕の故事は何かといったら、
 何はともあれ、^{りゅう}劉君が竹を種えたこのことを思い出すべきだろう。
 ゆかしい徳は本名の他にも立派な称号を与えられるようになって、
 劉君が作ったあの笑い話を語り続けてあろう。
 ゆくゆくは空を遮るまでに竹は成長するだろうが、
 劉君の心づもりは、まさか、
 筍を取って台所に持っていくということではないだろう。
 そのころには、私はすっかり白髪頭になって、
 竹の彼方の遙か天の上を望んで、
 劉君たちがいまも太平の世を支える仕事を続けている報せを聞くのである。

【**補足**】〔(1)「あの笑い話」とは、この詩に添えた蘇軾自身の注に記してある。かつて^{りじやう}李常〔^{り ふんせいこう}後世の人は、これは李文正公が手ずから

植えたものだというだろうね」といった。「文正」は、文官として顕著な功績にあった人に死後に贈られることのある号で、李常は若干の自負心からこれから大いに活躍する気概を冗談交じりに示したのだろう。ところが、そのときに、本名がまさしく李り文正ぶんせいという筆作りの職人がいたので、劉攽りゆうはんが笑って、「ほう、李文正先生は筆職人かと思っていたら、植木職人でもあったのかね」と、李常に戯れた。李常は蘇軾と親交が厚く [→作品番号 06-4-040]、劉攽は蘇軾と並んで諧謔の士として当時有名であった。この詩はいわゆる楽屋落ちで、千年後の我々がその楽しさを共有するのは難しい。なお李常とは黄州時代にさかんに手紙の往来があり [→作品番号 06-3-048 など]、このころ都にいたようなのだが、なぜかここまで交遊の痕は残されていない。(2) 同じころに、「たまたま客人と酒を飲んでしていると、孔文仲 [字は常父] [→作品番号 08-2-018] が訪ねてきたので、席を設けて招き入れようとする、たちまち馬に乗って走り去ってしまい、詩が残されていた。戯れにその韻を用いてそれに答えた」という題の詩があって、当人たちは大いに楽しんだのであろうが、訳者としては、英語のジョークを聞いてまわりに合わせて笑っているふりをするようなことしかできないので、訳は割愛せざるを得ない。また、同じころに、劉攽が宿直中に詠んだ詩に次韻して、太平の盛事を演出するように「君恩」を称えた作品もあるが、それも割愛する]

■ 【08-2-029】 答李方叔

【解題】 5月20日に、蘇軾と深い縁があった鮮于侁せん うしん あざな ししゅん [字は子駿] [→作品番号 06-1-110、05-5-090 など] が亡くなった。鮮于侁の伝記を李廌り たい あざな ほうしゆく [字は方叔] [→作品番号 08-1-071] が書き、蘇軾はその文章を賞賛した。

【訳文】

新たに書かれた文章を見せて(たざり)、とりわけ鮮于君の行状記は内容も文体も立派で、甚だ貴ぶべきものです。このような文章が書けるのですから、大成しないことを心配する必要はありません。……
[以下、李廌を励ます文言が続く]……

【補足】 [5月25日に范百嘉 [→作品番号 08-2-005] が亡くなり、その父である范鎮 [→作品番号 08-1-021] に宛てて慰めの手紙を記している。荘重な文体で書かれた手紙で、訳者の手には負えないので割愛する]

■ 【08-2-030】 答龐安常

【解題】 黄州で親しくした医者ほうあんじの龐安時あざな あんじょう [→作品番号 06-3-034 など] に宛てた手紙。龐安時が幾つかの医学書から傷寒 [発熱を伴う疫病の類] についての記事を引いて整理した書物を編集していたことは作品番号 06-4-065 で見ていて、その完版が送られてきたので、それに対する返事である。

【訳文】

久しくお尋ねすることもなく、日に日に思いが深まります。……見せてくださいました『傷寒論』はまことに古の聖賢せいけんが人を救った意いを得ていて、不朽の書として世に伝えられて行くだけでなく、その意義いぎは幽明界めいがいにまで貫くものでありましょう[いわば閻魔大王も感心するというような意味]。これに寄せる文章を謹んでお作りたしましょう。ただ、事の多さに苦しんでいて、いまはまだ人に託してお送りすることができません。きっと久しからず書けるでありましょう。私は倦むこと甚しく、秋の初めには必ず都から去るのを求めるつもりです。いつまたお会いできるかと思うと、手紙を前にしてぼんやりしてしまいます。時節柄万万自愛されますように。

■ 【08-2-031】 次韻子由書李伯時所藏韓幹馬

【**解題**】^{り こうりん あざな はくじ}李公麟 [字は伯時] [→作品番号 08-2-008] が所蔵する^{かんかん}韓幹の馬の画を見て、弟の蘇轍が詩を作り、それに蘇軾が次韻した。韓幹は^{とうだい}唐代の画家で、特に馬を描くのを得意としたことは作品番号 05-3-015 などで見ている。

【**訳文**】

垂れこめた雲の下、

皇城の奥深くにある古びた建物、

公文書が絡み合った糸のように乱雑に置かれている。

不意に目に飛び込んできたのは、

^{り こうりん}李公麟が所蔵するところの天馬の画。

そこからは北の風が吹き出し、

ばらばらと砂漠の砂が降り落ちてくる……。

天馬は西のまた西の果てから来て、

その勢いは落ち行く日と速さを争う。

竜の^{むね}膺、豹の股、頭の高さは八尺、

奮迅するありさまは人間界の羈を受けるものではない。

^{かん ぶてい こせき}漢の武帝のときの虎脊[馬の名]だけが友としてどうにか並ぶことができ、

^{とう げんそう きょくか}唐の玄宗のときの玉花[馬の名]などは物の数ではない。

^{みち りいん}李公麟は道を得て、真に吏隠というべき人。

山の雉は、たとえふんだんに飲みかつ^{つば}啄むことができるとしても、

人に飼われるのを好まない。

李公麟が絵筆を弄するのはただの戯れにすぎず、

^{こころ}意は万里の彼方にあるのを、誰も知らない。

韓幹かんかんの画は肉を描いて骨を描いていない、

実質を失って皮相だけを留めている。

我が弟は、李公麟りこうりんの腹中にあることを詩にして巧みに説いた。

その妙語こうせんを黄泉の下[死者の世界]に眠る韓幹に知らせてやりたいと思う。

それでも韓幹はこういうであろう――

「自分は誰かに学んだのではない、

一万匹の馬、それが吾が師なのだ」

【補足】 [(1) この詩は、韓幹かんかんと李公麟りこうりんが画に向かう姿勢の違いを詠んでいるのだらう。李公麟はあたかも韓幹が描いた天馬のようであり、なおかつ李公麟は韓幹が及ばなかった高みに到達しつつあると蘇軾りいんはいっているのだらう。(2) 「吏隠」とは公職に就いてはいても、心の本質は隠者と同じであるような人。(3) 「韓幹の画は肉を描いて骨を描いていない」とは、杜甫とほの韓幹評 [→作品番号 05-3-015] である。韓幹の画は、杜甫がいうように最高水準のものではないのだらうけれども、それでも、画師としての姿勢は確かに優れていたというのがこの詩の終わりの部分であるのだらう。

(4) 蘇轍そたくのもとの詩にはいろいろな人が次韻しているが、蘇軾のこの詩がやはり最も躍動的である]

■【08-2-032】 軾以去歲春夏、侍立邇英、而秋冬之交、子由相繼入侍、次韻絕句四首、各述所懷

【解題】 この詩の題は「私は去年の春と夏の境から邇英殿じえいでんに侍立するようになり、続けてこの秋と冬の境に弟も入侍することとなった。弟が絶句四首を詠んで懐おもうところを述べたので、それに次韻する」。邇英殿は、皇帝に学問を講義する場で、兄弟揃って若い皇帝を教育する大役を授かったのである。2人が左遷されていた時期からする

と、夢にも思わぬ栄誉ある任に就いたのである。

【訳文】

其の一

瞳^{くらきら}と暁^{ひあし}の日脚^{ひあし}が清らかに射^さしくる。

暖^{ほらほら}かくなるにつれて細細^{えんじゆ}と槐^おの花^{はな}が零^おちてくる。

邇^{じえいでん}英^{えい}殿^{でん}に坐^まして思^{おも}い見^みるなら、

かつてここで講義を行^{おこな}った人の多くはいま国家の重職にあるのだ。

かくてして皇城の庭にはいつしか黄昏の色が起^{おこ}る。

【補足】[邇英殿で過ごす一日の流れを厳かに詠んだ]

其の二

御進講の前に上尊^{じゆうそん}[酒]を賜^{たま}り、早朝の寒さを破^{やぶ}る。

御進講の半ばで茗碗^{めいわん}[茶]を賜^{たま}り、乾^{かわ}いた舌^{うぶ}を沾^ぬす。

護衛の兵士は雨のなかでも階^{きざし}のもとにひたすら立ち続け、

学問を修めなかったことを定めし残念がっているのだらう。

其の三

二羽の鶴は、病み疲れ、声も出せないほどであった。

二羽の鶴は、近頃あい継いでまた軒に昇るまでになった。

高雅な音楽を聞きつつ舞い飛ぶのは何かの間違いであろうか。

果たして自由に動き回^{ついで}って啄^{つば}むことがまたできるのだらうか。

【補足】[二羽の鶴はもちろん蘇軾、蘇轍兄弟のことである。皇帝に向かって講義を

する身になったことを手放しで歓ぶような詩、まして自慢するような詩を蘇軾は詠まない。邇英殿じえいでんの外で雨に打たれている護衛兵は蘇軾を羨み、蘇軾は何物にも束縛されない鶴はつを羨むのである。かつて書いた『放鶴亭ほうかくていの記き』[→作品番号 05-4-106]を思い起こすなら、蘇軾の心情をより理解できるであろうか]

其の四

ささやかな人生を生きるこの身は、

風波ふうはの地からたまたま脱することができ、

老いてなお鉄や石のように堅固な心かここに存在している。

私は香山寺こうざんじの老居士らうこじ〔白居易はくきょい〕に似ていたりするのだろうか、

世間との縁はついに浅くも、道みちに根ざすものは深いのである。

【補足】〔白居易〔白居易〕と蘇軾が似ているとする論は昔から今に至るも多く、蘇軾自身もかなり意識している。この詩には蘇軾自身の注があつて以下のように記されている。「白居易は（左遷されて）江州司馬かうしゅうしばとなり、次いで忠州刺史ちゅうしゅうししとなつて、（その後中央に呼び戻されて）たちまち主客郎中知制誥しゅきゃくろうちゅうせいこうとなり、ついに中書舎人ちゅうしよしゃじん〔朝廷の大官〕となつた。私は敢えて比べるわけではないけれど、黄州こうに謫居し、登州とう知事に起用され、都に召されて儀曹ぎそうとなり、かたじけなくも侍従じじゆうとなつた。出処の流れはほぼ似ているといえるだろう。できれば白居易のように晩年の閑適の楽しみを享受したいものである」。一方、これまで見てきたように、白居易に対する蘇軾の評価には微妙なところがある。蘇軾が8歳で憧れたスーパースターの1人、韓琦かんきを大いに讃えた文章を書いたときには[→作品番号 05-1-067]、白居易にいろいろケチを付けるようなかたちで韓琦と比較し、結論として白居易よりも韓琦がずっと立派であつたとしている。二者の最大の差は、韓琦が「晩年の閑適の楽しみを享受」しようとはし

なかったことにあった。果たして、蘇軾の晩年が白居易に似るのか韓琦に似るのかはこれから見てゆくことになる]

■【08-2-033】送宋構朝散知彭州迎侍二親

【そうちゆう解題】宋構という人がほう彭州知事として赴任するのを見送った詩。都にいと官員の出入りがひっきりなしにあつて、求められるままに送別の詩を作っていたら、それこそ日々詠んでいなければならぬであろうから、蘇軾といえどもさすがに詩を贈る相手にはある程度の制限をかけていたのだろう。結果として故郷の蜀しよくに関連する詩が多くなる。宋構は成都せいとの人であり、彭州は成都から比較的近い。

【訳文】

知事殿の車が東から来た、
その車で誰を迎えようとしているのか。
車の到着を最初に知るのは、
屋上の鳥、
そこは知事殿の老親の家。
二親は今年初めて白髪が生じたばかりであるから、
楼閣に登るのも馬にまたがるのも人の助けを必要としない。
それでも知事殿が弓を負って前触れとなり、
老親を乗せた車ほうを彭州へと案内するのだ。
そのありさまを、蜀人しよくじんはこれから長く語り草とするであろう。
いまからは彭州では老幼ともに知事殿の教化に服し、
何事もなく平穩に治まるであろう。

昔、罪人を罰するのに鞭の代わりに蒲の穂がまを用いた賢知事がいた。

知事殿はそれすら使わないのだ。

春の波が天みんぞに漲るかのように平らな湖面に広がる、

——そこは彭州せいこの西湖、

花の光が一座を照らし、花の香りが膚からも生じる、

——彭州は牡丹の名産地、

ここに知事殿は白玉はくぎよくの壺を捧げて老親の長寿を祝い、

たくさんたぐさの孫が集ってまわりで笑い合い、

古くゆかしい歌を皆が踊りながら歌う。

そうしたありさまを画にして蜀人は後世に伝えることだろう。

■【08-2-034】郭熙画秋山平遠

【解題】中国の山水画の歴史を概観したときに必ず名を挙げられる人物として宋代そうだいの郭熙かくきがいる。郭熙しんそうは神宗皇帝によってその画才が認められ、自由に活動する場を与えられた。神宗皇帝は郭熙のために翰林院かんりんいんのもとに特別なポストを設け、画業に専念できるようにし、翰林院の中心的な建物である玉堂ぎよくどうの壁や扉には郭熙の画が飾られた。これは『秋山平遠』と題した郭熙の画に添えた詩。この詩から推測するに、蘇軾は政界の大長老〔このとき83歳〕で宰相である文彦博ぶんげんはくと、郭熙自身とともに玉堂で、春の山と秋の山の2枚の画を見たようだ。『秋山平遠』の画には文彦博が記した跋文が添えてあった。

【訳文】

玉堂ぎよくどうは、春の日差しのもと、昼も門を閉ざして静かである。

中の扉かくきに郭熙の画いた春の山の画がある。

鳩の雛ねむも燕の雛も睡りから起きたばかり、

白い川波、青い峰は人間世界のものではない。

『秋山平遠』はまんの小さな画幅でありながら、

遠く広大な景色が開け、

漠漠ぼくぼくとしてまばらな林に秋は終わろうとしている。

あたかも江南こうなんの地で旅人を見送るところなのか、

川の中こうべほどで頭を回らして雲の頂きを望み見る人がいる。

その人はあるいは伊川いせんの長老ぶんげん [文彦博]か、

鬢の毛は霜のように真っ白で、

いつもは臥しつつ秋の山を眺め、故郷らくようの洛陽を想っている。

長老は郭熙のために画の隅に草書をしるし、

その墨の痕すうざんは、嵩山らくすいと洛水に浮かぶ秋の光と同じように輝いている。

私は長老に従ってここに遊ぶ……、

これまでに過ぎ去った歳月もわずか一日のよう、

すでに白髪まじりとなった頭に山の青さが映るのを覚える。

洛陽せんとくに行つて泉石を臨む地を買おうかと思う、

そこで長老のために竜門りゅうもんの八節灘はちせつたん [洛陽の景勝地]の図を描くのだ。

■ 【08-2-035】 次韻張昌言喜雨

【**解題**】張問ちやうもん [字は昌言] [→作品番号 08-2-027] が雨を喜ぶ詩をまた詠んだので、それに和した。

【訳文】

かつて黄河こうがの水が千里にわたって流れ出て、
 大勢の人々が家を失ったところでも、
 いまは、逆に赤裸の土地が広がっている。
 皇帝よりそのような地の民を慈しむ詔みことのりが下ると、
 あたかも天子が六尺の輿に乗って巡られるかのように、
 陛下のお声が遙か遠くまで聞こえ、
 その一言は天をも動かし、
 雲が湧き、谷にも溝にも靈妙な水がほとばしるのである。
 貴君は雨を喜ぶ詩を作ったかと思うと、
 たちまちお上を諫める書を奏上し、
 まことにかつての名臣のようである。

■ 【08-2-036】 和穆父新涼

【解題】 銭勰せんきょう [字の穆父あざな ぼく ちち] [→作品番号 08-1-033] の「新涼しんりょう」の詩に和した。これは
 相手を楽しませるために珍奇な対句を並べた戯れの作で、それに応じた訳し方をして
 みた。

【訳文】

働かないしていると、家では妻や子がぎゃあぎゃあうるさい。
 官に仕えると、山では猿や野の鶴が寂しがつて恨みことをいう。
 利潤は一割という商売の佞ねいもわかっていないし、
 俗世を離れて九万里の彼方に飛んで行くことなどもとよりできるはずもない。

自分が独活の大木であることは百も承知だが、
この大木にまどわりつる蔓が冠かんむり [官員のしるし]の紐であるのはどういわけなのか。
お上の御恩を受けるのは巨大な借金を背負うようなもの、
さっさと返済して証書を焼いてしまいたいものだ。
貧乏のあまり、たとえ牛小屋で眠るようなことになったとしても、
お偉いさんを喜ばせるためならと、虎とダンスをするようなことはしない。
貴君の詩にあるように、折よ雨あめが降り、涼しい風が吹いてきた。
稲は稔り、飯を炊くよい香りがもう漂ってくるかのようだ。
紫の蟹は肥えたたろし、白い新酒を勧めてくれる人だっているだろう。
貴君ときたら、文章を生み出す手は昔の文豪に等しく巧みで、
政事をとりおこなう腕は昔の名臣と同じ力強い。
いずれはきっと三公さんこう [政界のトップスリー]に昇るはずであるから、
私がいまからイの一番に祝いの言葉を献じておこう。
その返礼として、
江湖こうこに帰って魚や鳥とともに過ごすという我が願いを叶えてくれたまえ。

■ 【08-2-037】 晁補之所藏与可画竹三首

【解題】 昨年に学士院の新メンバーに選ばれた晁補之ちやうほし あざなむきゆう [字は無咎] [→作品番号 08-1-060] は、文同ぶんどう あざなよか [字は与可] [→作品番号 08-1-054] が描いた竹の画を所蔵していた。それに書き添えた詩。

【訳文】

其の一

ぶんどう
文同が竹を画(え)くとき、竹を見て、人を見ない。

人を見ないだけではない、

うんぜんり わず
嗒然としてその身を遺(わす)れる。

その身は竹に化し、

窮(きゆう)まることなく新しいものが出てくる。

そうし
荘子がすでにいないこの世において、

誰がこの「凝神」[ぎようしん 眞実の精神]を知るのだろうか。

【補足】 [これまでにも文同ぶんどうの竹の画について記した蘇軾の詩文を幾つも見てきた。

ここでは、文同が竹に化して描き、無限に新味が生まれ出ると詠んでいる。竹と文同との区別がつかない状態、それは精神が完全「凝神」ぎようしんであることを意味し、そのときに最高の芸術げうじゆつが生まれるのである。そのようなことは、古く荘子の哲学が指し示すところであった]

其の二

このような人は今はすでにいない。

このような竹はもう描かれることはない。

(俗な画工びやくが)春の蚯蚓むみずのようなたどたどしい墨痕すみあとで描くのは、

風の中に揺れる柳のような竹。

見るがよいこの画の竹を、

断崖だんげの上で、痩せた節は竜りゆうが走るようではないか。

いつの日かこの竹は、

湖うみで釣つりりをする隠者いんしやが手にする竿さしになるのであろう。

其の三

ちやう
晁君は世渡りに拙く、

一家は粥を啜っているとのこと。

今朝聞いて笑い転げたのは、

人に媚びて墓誌を記した謝礼でこの竹の画を買ったのだと。

先生の食卓はますます衰れなことになって、

朝日に照らされるのは馬が食らううまごやし苜蓿だけ。

もともと、私はかつて詩にこう詠んでいた。

「食うに肉はなくてもよいけれど、

竹がなくては住むことができない【高潔な精神を養えない】」

晁君がそれを真に受けてしまったとは。

【補足】 [(1) 「墓誌を記した謝礼」という記述がある。昔の中国では、平和な時代が続くと墓を立派にしようとする傾向が強まり、名文家に墓誌の執筆を求めるようになり、その潤筆料は結構な収入になった。蘇軾が墓誌の類の執筆を極力避けていたことは作品番号 08-1-071 で見ている通りで、蘇軾にとってはむしろ潤筆料が執筆の妨げになったのかもしれない。(2) 晁補之は元豊2年 [1079年] に科挙に合格して官員になっているので、少なくともそれ以降はまぐさを食べなければならないほど貧乏であったわけではないだろう。(3) 蘇軾はかつて詩に詠んだとして「食うに肉はなくても…」 [可使食無肉、不可居無竹] という句を挙げているが、現存する蘇軾の詩集に同一の句を見出すことはできない。同じ趣旨のことは書いているので、いまは伝わらない詩に詠んでいたのかもしれない]

■ 【08-2-038】 戯用晁補之韻

【**解説**】^{ちようほし}晁補之の詩に戯れに次韻した。内容は上の詩につながる。

【**訳文**】

私^{すいおう}はかつて^{おうようしゅう}醉翁[歐陽脩]に御相伴して酔ったことがある、
 貴君^{ばいぎょうしん}はいま詩老[梅暁臣]の詩をもっぱら吟じている。
 よい詩はいくら咀嚼しても飽くことないが、
 瘦せた竹はいくら瀟灑^{しょうがい}であっても人の飢えを救うものではない。
 試^{ほうおう}しに鳳凰に問うなら、飢えたら竹を食らうと答えるだろけれど、
 そこの駄馬^{うまごやし}が首蓐を食らって肥えているのとどちらがましなのだろうか。
 とにかく貴君は飢えを忍んで空しく詩を誦しているのだから、
 貴君の口はそのうち鳴き続ける布穀^{かっこう}のようになってしまふのではなからうか。

■ 【08-2-039】 書皇親画扇

【**解説**】 皇族の誰かが扇に描いた画に寄せた詩。

【**訳文**】

私はこの十年の間、
 浮き沈み^{こうかい}の身を江海に寄せ、
 いまも夢では、江南^{こうなん}の黄色くなった葦の原を巡っている。
 風流を知る貴公子の筆の端から、
 まさにかの地を思う心が描き出されようとは……。

■ 【08-2-040】 書李世南所画秋景

【**解題**】これも画に添えた詩。李世南^{り せいなん} [字は唐臣^{あざな とうしん}] は北宋^{ほくそう}を代表する画家の一人。その李世南が描いた『秋景^{しゅうけい}』の画に詩を記した。このとき李世南は都で官職に就いていた。

【**訳文**】

其の一

あちらこちら

参差に野の水が流れ、

水かさが落ちた痕が残る。

まばらな林は斜めに倒れかかり、

霜の落ちる根が露わである。

小さな舟が一艘……

「どこに帰って行くのかい」

こうなん
「家は江南、黄葉する村にあります」

其の二

人間世界では斧がふるわれ、

山林は日に日に傷を受ける。

百尺の竜が躍るような大木は誰が見られるのか。

溪でも山でも独り往く者でなければ、

枝に掛かる猿の姿をこのように知ることはできない。

【**補足**】 [政争の渦巻く都にあつて、蘇軾は画の中に遊ぶことで精神のバランスを取っていたのかもしれない]

■ 【08-2-041】 与李方叔

【解題】李廌^{り たい あざな ほうしゆく} [字は方叔] [→作品番号 08-2-029] に宛てた手紙。始めの部分は先に見た手紙と内容が重なっていて、李廌の文章が上達してきているのを誉めている。しかし、途中からは一転して李廌をかなり強い調子で戒めている。李廌は再三手紙を蘇軾に送って、自分を引き上げてくれるよう懇請していたのだろう。それに対して蘇軾は、己に真の力が付けて自ら名を挙げるように努めよと諭している。これは蘇軾の一貫した姿勢である。もちろん蘇軾は冷たく突き放すのではなく、機会があればちゃんと周囲に李廌の名を広めるようなことはするのである。

【訳文】

しははお手紙を頂戴しながら、くずくずとどれにもお答えておらず、何とも恐縮の限りです。このごろは秋とはいえなお暑いなかで、いなかお過ごしでしょうか。

送ってくださった『子駿行状』^{し しゅん こうじょう} 『鮮于侁の伝記』^{せん う しん} と数篇の詩は、言葉の意味も文章の整い方も以前よりも前に進んでいて、拝見して極めて喜ばしく感じます。……君子が人を知るの^{みち}は、道において勉めることをとすためであって、利においてともに引き上げ合おうとするためではありません。……[以下に、李廌^{り たい}の文章を批評しつつ、より勉学に励むべきことをいう]……

古の君子には、^{いにしよ} 賤位の者が貴位の者によって名を得たり、先に顕れた者が後から来た者を助けたりすることは、もとより多くありました。私も敢えてその道を廃する者ではありません。普段から知る相手で、心の内で賢者であると思えば、大勢の人に向かってそれを誉めるであります。その誉めた言葉とその人の実質を合わせ見て、実質がその通りであるならば、名声は自ずと現れて、覆い隠そうとしてもできるものではなく、自ずから世に用いられるようになるのは、理の勢いとして当然で、それは誰かの力によるものでありません。陳師道君^{ちん し どう} [字は履常^{あざな り じょう}] は都に何年もいて、一人の貴人もその家を訪問する者はなく、^{しょうじん} 章惇君が会って朝廷に招こうとしたところ、陳師道君はついにその誘いに応じませんでした。傅堯俞^{ふ ぎょう ゆ}

君〔字は欽之〕と孫覚君〔字は莘老〕が推薦し、私もそれに関わり、たまたま朝廷の中に陳師道君を知る者が増えていき、かくて一つの官職を授かったのです。私一人の言葉などは軽いもので、かねてから私独りだけで人を推薦したことはありません。人臣に爵禄を与えて世を砥ぐのは人主だけが行いうることであって、宰相であっても思うようにすることはできません。私が責められることではないのではないのでしょうか。……[さらに重ねて、蘇軾の推薦を期待するのではなく、自力で名を成すように努めるべきことを述べる]……

【補足】[ここで一例として挙げられている陳師道は後に李廌とともに「蘇門六学士」の一人として称せられる人で [→作品番号 08-1-043]、傅堯俞や孫覚の推薦によって徐州の学校の教授になったのだった。なお、傅堯俞は作品番号 08-2-010 で見たように、いまや蘇軾を批判する急先鋒の一人であり、孫覚とは作品番号 07-2-002 などで見えたようにかつては非常に親しい間柄であったのだが、都ではほとんど交遊の痕が残されていないのは、やはり政治的立場を異にしたからなのだろう]

■ 【08-2-042】 書鄴陵王主簿所画折枝二首

【解題】王という主簿の職にある人が描いた『折枝』の図に詩を添えた。王主簿については、この詩の題から鄴陵の人であることがわかるだけで、その名も知られていない。

【訳文】

其の一

形が似ているかどうかで画を論じるのは、

児童の見方と変わるところがない。

詩を賦して、詩は必ずこうでなければならぬと主張するのは、

きと詩を知る人ではない。

詩と画は本源的に同じ調べて、

大切なのは天工てんこうと清新せいしんである。

唐とうの辺鸞へんらんは雀せうの生きてせいいるありさまを画えに写し、

宋そうの趙昌ちやうしょうは花はなの神こころを画えで伝つたえたといいわれている。

王君おうのこの両幅りやうはくはそれと比ひべてどうでああろうか。

王君の画えは疎そ[空間的くわんてき不均一ふくごういつ性]せいに淡たん[空間的くわんてき拡張かくちやう性]せい、そして精せい[固有こゆう性]せいと勻いん[普遍へんぱん性]せいを含こんでいる。

見るがよい、

画えに加くえられた一点いってんの紅こうは、

無限むげんに広ひろがららいいく春はるに寄よせられたものなのである。

【補足】〔(1) この詩の冒頭に蘇軾の芸術観が端的に示されている。一つの単純な基準で優劣を測ることはできない。(2) 詩も画も書も音楽もその根源は同じであるとの蘇軾の主張はこれまでも何度も見ている。3句目、4句目の「詩画本一律、天工与清新」〔詩画しがもと一律いちりつ、天工てんこうと清新せいしん〕はその考えをみごとに10文字に凝縮している。天の工たくみを常に清く新らたなものとして表現するのが詩と画なのである。(3) 後半の疎そ、淡たん、精せい、勻いんは訳しにくい。カッコ内に添えた説明はあくまでも理解のためのヒントでしかない。言葉では言い表すのが難しい概念を、蘇軾はこの4つの漢字に託して伝えようとしたのだろう。(4) 最後に置かれている、一点から無限が広がるという見方も、蘇軾はしばしば提示している〕

其の二

瘦しゆうせた竹ちゆうは幽人ゆうじん[底知れぬ深みのある人]のようで、

ゆう か

幽花は汚れなき乙女のようにある。

枝の上を低くためらいがちに飛ぶ雀、

花の間に揺れてたまたまいつ降る雨。

二羽の鶺鴒せきれいがいまこそ飛び立つとき、

あまたの葉がそれに先んじて跳ね上がろうとする。

愛らしくも花に集まる蜂、

二本の脚に蜜をせっせと引き寄せる。

天の巧たくみの豊穰とよむらさを知る貴君であるから、

春のこのありさまを筆と紙に捉えることができたのだ。

貴君は詩もよくするとかねてより聞いている、

私が寄せるこの声は、

貴君の妙語を求めるものなのである。

■ 【08-2-043】 和張耒高麗松扇

【**解題**】蘇門四学士そもんし がくしの一人の張耒ちやうらい [字は文潜] [→作品番号 08-1-043] が、高麗国こうらいこくで作られた松扇しょうせんを詩に詠んだのでそれに和した。松扇は、松の細い枝を削って編んだ扇だという。

【訳文】

昔のとある人が夢に松を見た――

「松という字は、分けると『十八公』である、

ならば、わしは十八年後こうに公の地位に昇るであろう」

と占い、その通りになったのは御同慶に堪えない。

昔のとある皇帝が豪華な宮殿を建てた――

山で老死した巨大な松は、その建築材料にならずにすんだ、

というも、たとえ我が身を皇帝に献じようとしても、

一万頭もの牛に曳いてもらわなければならなかったからだ。

ところが、この松ときたら、

なんと細かく刻まれ、手の内に納まる扇にされ、

人前で身を屈する恥辱をこらわってしまった。

それでも、張耒君ちようらいの詩集にその名を掲げられたことで、

いささか屈辱を洗い流すこともできたのではなからうか。

ともあれ、昔、皇帝の愛を失った班婕妤はんしやうよが嘆きのあまり、

我が身をたとえて詩に詠んだ秋の扇よりはずっとましてあろう。

■ 【08-2-044】 故李承誠之待制六丈挽詞

【**解題**】李師中りしちゆう [字は誠之]の挽歌。李師中の名は作品番号05-3-007や07-2-080で見
ていて、蘇軾と李師中の間にはそれほど深い関りはなかったようだが、改革派によつ
て冷遇されても信念を貫き通した点で、蘇軾は李師中に尊敬の念を抱いていた。李師
中はこれより8年ほど前に亡くなっていて、この時期に挽歌を作った経緯はわからな
い。

【訳文】

青く芽生えたわずか一寸の松、

その中にすでに立派な梁はりや棟むなぎになる姿が具わっている。

天の馬は地上に落ちたなら、

すくに走って、万里の向こうへと楽々駆けて行く。

松が支えなければ、五丈の旗を振れるような大建築はできないし、

駿馬がいなければ、西方遙かな地で遊ぶこともできない。

しかし、大きな才能は古から用いるのは難しいとされ、

多くの場合に虚しく老死してしまう。

大才の人はそうした定めからは免れられないのを知っているので、

己が世に埋もれたままであってもとりたてて悪いはしない。

李公りこうりしちゆう[李師中]はまことは松であり天の馬で、

若いときから偉奇いきと称えられ、

すくに朝廷に並び立つこととなり、

笑って話すうちに辺境の脅威を消し去りもした。

しかし、朝廷は公の才能を十分に用いることができず、

公は老齡に及んでも時世を憂い続け、

自ら前線に出て敵将を斬ることを願い、

あるいは、不正を為す役人どもを自ら処罰することを願った。

公の願いは省みられたわけではなかったが、

公の気概は悪事を企む者たちの気を挫いたのだった。

私は公のかなりの後輩で、

江湖こうこに漂う間に鬚が白くなり、

都に帰ってくると、長老たちはほとんどいなくなってしまう、

わずかな人々だけが残っているのだった。

公は昔の誰に比すればよいのだろうか、

竜のような素質は並みの人間の遠く及ぶどころではなく、

堂々の言葉を並べた文章は慷慨極まるものであった。
 かつて五人の名士の非遇を悼んだ『五君詠』とか、
 八人の名臣の非遇を悲しんだ『八哀詩』とかの詩があり、
 それらを見るなら、
 久しい時間の後には必ず邪正は明らかになるのであって、
 公もまたやはり人々がいっまでも思いを寄せるようになるのだ。
 それでも、九原[冥界]に去った公を再び興すことはできないのであるから、
 悲しみは千年にわたって続く。

■【08-2-045】送張天觉得山字

【解題】張商英 [字は天覚] [→作品番号 06-3-015] が河東提刑となって都を出てゆくことになり、幾人かで韻を分け合って送別の詩を詠み、蘇軾には「山」の字が当たった。張商英はかつて改革派によって左遷された時期に蘇軾と黃州で会っていて [→作品番号 06-3-015]、その後、中央に呼び戻され、今回は新法が続々と廃止されてゆくことに強く反対して地方に出された。張商英は、新法党 vs 旧法党という単純な二項対立の図式には収まらない人で、独自の道を歩んだ。

【訳文】

貴君はこれから西に進んで太行山の嶺を登り、
 北に清涼山[五台山]を望むであらう。
 晴れた空に山が五つの髻のように浮かび、
 雲の間に瑞気が宿され、
 岩石の中にまで靈妙な光が入り込み、

茅や菅からも仙草が生え出てくる。

太行山では、かつて寒さのために、兵士が指を落として苦しみ、

ある人がその仙草を人々に与えて兵士を喜ばせたとか。

貴君は同じように、民衆の窮状を救うことだろう。

私は老いてしかも病んでいる、

目は利かないし腰も足も不自由である。

かとう
河東のあたりの人は昔から物惜しみをするというけれど、

貴君はそれに染まることなく、

己の才能を惜しまず使うであろう。

【補足】〔(1) 五台山 [清涼山] は古来有名な霊山で、現在ではユネスコの世界遺産に登録されている。張商英は 6 月 27 日に清涼山に至って詩を詠み、それは当時の人々に広く知られた。(2) 同じときに、孔武仲 [→作品番号 08-2-018] が張商英を送る詩を詠み、蘇軾が次韻している。それは難しい典拠を駆使した作品で、蘇軾自身もわかりにくいとの自覚があったのだろう、幾つもの自注を付けている。そのような詩であるから訳は割愛する。さらに、蘇軾は都にいる間に張商英に宛てて幾つかの詩を送っていて、いずれも道教に関連する内容でかなり難解なので割愛せざるをえない〕

■ 【08-2-046】 贈李道士、并叙

【解題】李道士 [李得柔] に贈った詩。序文がある。

【訳文】

叙

李宗固は誠実な役人であった。景祐年間に漢州知事であったときのこと、仙薬を作り画をよくする道

士の尹可元いんかげんが火事をおこし、死罪に当たるとされた。李宗固は尹可元を獄中に置き、しかし刑の執行を見合わせていたところ、たまたま大赦だいしやうがあって尹可元は放免された。そのとき八十一歳であった。

尹可元は、自分は間もなく死ぬけれど、必ず李氏の子として生まれてこの恩に報いると誓った。

尹可元が死んで二十余年後、李宗固の子の李世昌りせいしやうの妻は、夢で尹可元が部屋に入ってくるのを見た。そして生まれたのが李得柔りとくじゆうで小名を蜀孫しよくそんといった。李得柔は幼いときから画が上手で、成長すると莊子そうしや老子ろうしの書を喜び、ついに道士みょうおうになり、妙応みょうおうの号を賜った。母に仕えて孝謹であると聞こえ、その母を画に写したものは絶妙であるとの評判である。

世間の人は画の名人というと、

とかく唐の時代の曹覇そうは將軍ばかりを挙げて、

晋の時代の顧愷こがいし之などはおつむがおかしかったかのよういいう。

曹覇は、腰に大きな羽団扇をはさんだ武将を描いたのだが、

顧愷之が、頬にあえて三本の毛を加えてより真実味を増したのには及ばない。

顧愷之は普段から諸公子を侮り、

宮中きゆうちゆうにいるべき人物を深山の巖石の上に載せて描いてみせたところ、

その子孫は代々道士となり、旅装束で雲水の間を巡り歩いた。

道士一千年の始まりといったら門番をしていた尹喜で、

老子ろうし[李耳りじ]は尹喜の求めに応じて書物を書き置いた。

その尹喜の子孫いんかげんの尹可元は最後の一念によって、

李耳りしよくこの子孫りしよくこの李宗固りしよくこの孫りしよくこ[李得柔りしよくこ]となって生まれた。

香火の旧縁きゆうえん[道家の縁]は尽きることがなく、

画によるつながりもまた今に伝わっている。

私は五十歳を二年過ぎたところだ、

かくも衰えた我が顔を李道士が描いてくれるなら、
後々の人はそれを見て、

これは白居易の晩年の画であるというであろうか。

【補足】〔(1) 曹覇、顧愷之、尹喜、老子と、昔の人物を次々に挙げて、主題の李道士を導き出す知的技法を面白いと思うか、煩わしいと思うかは表裏一体の関係であろう。(2) ここでも蘇軾は白居易との類似を意識している [→作品番号 08-2-032]]

■ 【08-2-047】次韻張舜民自御史出倅虢州留別

【解題】御史台の任にあった張舜民〔字は芸叟〕が虢州の副知事として出て行くことになり、別れの詩を詠んだのでそれに次韻した。張舜民は蘇軾より 8 年後れて科挙に合格し、蘇軾が黄州にいたときに、改革派に嫌われて左遷の身となり、任地に赴く途中で蘇軾を訪問していた [→作品番号 06-4-052]。そのことがこの詩の中に詠まれている。皇帝の代替わりに伴い、張舜民は司馬光によって中央に召されたのだが、司馬光の死後、宰相等と意見が合わず、地方に出された。

【訳文】

貴君が詩を記した紙には氣迫が漲り、
雲が湧き立つばかりである。
貴君は初め湘累の地に流され、
貴君とともに遊んだ樊口は遠い思い出の地となった。
後に貴君は朝廷の官員として銀印を佩びる身となり、
御史台において聳え立つばかりの長身の姿を見た。
江湖でのかつての日々はすでに夢、

いづれ鄠杜〔張舜民がこれから行く地〕で隣同士に住むことになるだろう。

都を去ってともにもまた嘯くことがあるならば、

主人も客人もみな(俗世を離れた)詩人だけとなるであろう。

■【08-2-048】書黄子思詩集後

【解題】黄孝先〔字は子思〕の詩集の後ろに添えた文章。黄孝先は黄寔〔→作品番号 07-1-101〕の祖父で、黄寔の娘と蘇轍の息子が結婚していたことから、蘇軾にとって黄寔は姻戚関係にあつて、その縁からこの文章を書くことになった。このころ黄寔は都にいたようである。

【訳文】

私はかつて書について次のように論じたことがある。

(三国時代の魏の)鍾繇、(晋の)王羲之の墨の跡は蕭散簡遠で、その妙は筆画の外にあつた。唐の顔真卿、柳公権に至って、古今の筆法を集めて、その全てを使いこなせるようになり、書の変化を極め尽くしたので、天下は揃って一斉にそれを宗師とした。それからは鍾繇、王羲之の法はいよいよ廃れてしまったのだつた。

詩もまた同様である。

(漢の時代の)蘇武、李陵の詩は天成のもの、(魏の時代の)曹植、劉禎の詩は自ら得たもの、(晋の時代の)陶淵明、謝靈運の詩は超然として至上のものであつた。(唐の時代の)李白、杜甫の詩は英瑋にして絶世の姿を得て、百代の詩を凌ぎ、古今の詩人の全てを超えたのだつた。そして詩においても、魏、晋以来の高風絶塵のありさまは少しく衰えたのである。李白、杜甫の後も詩人は作り続け、ときに遠韻のあるものがあつても、才が意に及ばず、韋応物と柳宗元だけが素朴な中にも細やかな美しさが、淡泊な中にも至味があつて、ほかの人の及ぶものではなかつた。唐の末の司空図は兵乱

の間に辛苦しつとも詩文は高雅で、なお承平の遺風があった。司空図は詩を論じて、「梅はただ酸く、塩はただ鹹しおい。飲食は塩と梅がなくてはならないが、料理の美は常に鹹かん、酸さんの外にある」といい、自らそれを実践した二十四篇の詩を作ってみせた。残念なのは当時はその妙所を誰も理解できなかったことで、私は再三それを悲しむものである。

閩びんの人の黄孝先こうこうせんは慶曆から皇佑の間に能文家として知られた。私はかつて先輩方が黄孝先の詩を誦しているのを聞いて、その佳句、妙語を得るたびになんども繰り返し、まことにそれが聖人の言葉を表して、鹹かんと酸さんの外に美があつて、一唱するたびに三嘆すべきものであると知ったのだつた。私はその子こうこうけんの黄好謙あきな〔字は幾道きどう〕やその孫こうしよくの黄寔し〔字は師是しぜ〕と遊び、その家集を窺い見ることができ、また、黄孝先どうこうこうしが篤行高志の人であつて、役人として異材であつたことをその墓誌から詳しく知ることができた。私はだから黄孝先についてそれ以上に論じることはしないが、詩について司空図に対するのと同じ思いを抱くことを書いておくのである。

【補足】〔前半は唐代までの書や詩の歴史を俯瞰して、同じ内容のことをこれまでに何度か見ている。司空図について特に取り上げているのは、当時はあまり司空図の詩が読まれていなかったのもそれを顕彰しつつ、黄孝先こうこうせんの詩も合わせて忘れてはならないものであると強調しようとしたのだろう。なお、司空図について記した短文を作品番号 07-1-019 で見ている〕

■ 【08-2-049】次韻王定国倅揚州

【解題】揚州副知事となる王鞏おうきやう〔字は定国あきな、ていこく〕から詩が届き、それに次韻した。王鞏は前年えいに潁州の副知事に任命されていたが〔→作品番号 08-1-003〕、潁州に赴任したのか、あるいは都に留まっていたのかは不明。これまでの詩やこの詩から察するに、身の振る舞いにわがままなところがあつたようだ。

【訳文】

この身は天の遊びに任せ、^{こうかい}江海に置もつのであるのだが、
 ひとたび^{こうじん}紅塵[俗世のごたごた]の内に落ちてしまうと、もどに戻るのは容易ではない。
 私は^{し ばしやうじや}司馬相如のように^{しよく}蜀への道を帰ることができないし、
 貴君は^{かそん}何遜のように^{よう}しは揚州で花をめでる詩を詠んでいなければならない。
 驚くのはすでに菊がもう黄色くなったこと、
 なお喜ぶのは貴君の顔が朱く髪が黒いことだ。
 たとえ意に染まないことがあっても、
^{ぐけい}虞卿はむしろそれを糧として歴史書を編んだのであるから、
 厭うべきことではないのだ。

【補足】[この詩は、^{し ばしやうじや}司馬相如、^{かそん}何遜、^{ぐけい}虞卿という 3 人の才人の名を挙げて、^{おうきやう}王鞏に心構えらしきものを説いたのであろう。訳者が回避した煩わしさを厭わずに 3 人の事績を研究するなら、王鞏に何をいいたかったのかがわかるであろう]

■ 【08-2-050】次韻米黻二王書跋尾二首

【解題】^{べいふつ}米黻 [字は^{あびな}元章] [→作品番号 07-2-090] が^{におう}二王 [王羲之とその息子の^{おうけん}王献之] の書の後ろに記した詩に次韻した。米黻は自由で不羈な文人で、蘇軾はその人柄を愛し、それをからかうような口調でこの詩を詠んでいる。

【訳文】

其の一

虫の害を防ぐために^{さんかん}三館[宮廷の図書館]で^{ばくしよ}曝書を行ったところ、
^{おうぎし}王羲之の『^{らいきんじやう}来禽帖』と^{おうけんし}王献之の『^{せいりじやう}青李帖』を見ることができた。

草書みみずといと、このころは秋の蛇やら春の蚯蚓みみずやらがやたらとのたくるだけで、
野の鷺あひると評された王羲之と家の雞にわとりと評された王献之のどちらが美しいのかさえ、まるでわかっていな
い。

天の上[宮中]から持ち出された函はこは玉ぎよくで飾られ、
紫の衣を纏った敕使が見守る中で金の鑰かぎが開かれた。

現れ出た二帖は、
ちらりと眼を過よぎっただけではまだ十分に識しることができず、
ばざりと壁に掛けて雲に委ねられた。

三館から帰り来て、その妙意を一人で追求しつつ、
思うのは、私がかつて朝廷にいたのは二十年前も、
そのときにこの二帖はなかったのだから、
一体どこから得たのかと怪あやしまさずにはいられない。

巧ねずみに偷んだり、無理やり奪ったりすることは古来よくあることで、

顧愷こがいし之[著名な画家]が厨くりやに掛けていた画を、

桓玄かんげん[当時の権力者]はその厨の壁を穿って盗み取り、

その後も顧愷之とはよこやかに笑いながら会っていたというのだが、
よもや貴君は桓玄に似ていたりするのだろうか。

唐代の王涯おうがいは書画の収集家で、塙を廻らして嚴重に守っていたのだけれど、

死罪に処せられたとたん塙は破壊されて書画は四散してしまったとか。

そのときの穴がきつとまた塞がっていないのだろう。

【補足】[この詩は、米黻べいふつが二王におうの書しよを禁断のルートから入手したのではないかと、
疑ってみせたのである。それだけ貴重な品だということであろう]

其の二

貴君は一日に千枚の紙に書を記すとか。

それだけ努力して得た美を誰に与えるのか。

地面に書いた餅はいくらそっくりでも食えない。

知恵の足りない子供が見てよたれを流すくらいのものだ。

錦ふくらの囊ふくらに収められ玉の飾りを施した軸は、

見かけが立派だからといって本物であるかどうかはわからない。

粲然さんぜんと輝いて、正しい知恵さえごまかしかねない。

耐えがたき飢えの中でも書を見て涙を流した人もいた。

顔真卿がんしんけいの米を乞う書こそが今に至る最高のものではないだろうか。

【補足】[蘇軾とうだいは唐代の顔真卿がんしんけいの書しよを高く評価していることはすでに何度か見ている]

■【08-2-051】次韻宋肇そうちよう澄心紙ちようしん し二首

【解題】官員仲間の宋肇そうちようが、澄心紙ちようしん しという貴重な紙を贈ってくれたので、その謝礼にこの詩を詠んだ。二首のうち一首を訳す。

【訳文】

其一

詩老しろう[梅堯臣ばいぎょうしん]は貧乏で、囊ふくらの中はいつもからっぽで、

歐陽公おうようこう[歐陽脩おうようしゅう]は、一枚が百金に値する澄心紙ちようしん しを、

詩老に百幅もぼんと贈ったのだった。

貴君がこの紙を分けてくれたのは、

やはり物に拘泥するのを嫌うからであろう。

思えば、この紙には江南の愁こうなんいがたっぷり籠かごっているのかもしれない。

【補足】〔澄心紙ちやうしんしは五代十国時代の南唐国ご だいじゅうこく なんとうこくの最後の皇帝が作らせた紙で、当時の製紙技術の粋を集めたものであった。南唐国は文化の先進地であったが、最後は政治が乱れ、武力によって宋朝そうちやうに屈服したので、澄心紙には愁こうなんいが籠かごっていると蘇軾は見たのである〕

■ 【08-2-052】 郭熙秋山平遠二首

【解題】先かく きに郭熙が描いた『秋山平遠しゅうざんへいえん』の画を詠んだ詩を見た〔→作品番号 08-2-034〕。再び同じ画を詩に詠んだ。二首のうち一首を訳す。

【訳文】

其の二

葉が落ちゆくとき、

心が騒ぎ、人は秋を怨む。

遠く眺めやるのはむしろ堪え難く、

詩の愁こうなんいが生まれる。

ああ、一万の谷に争う流れを見たい……

だから貴君を煩わしてこの画を描いてもらうのだ。

■ 【08-2-053】 送欧陽弁監澶州酒

【解題】欧陽弁おうようべんが澶州せんで酒税を管理する役人として赴任するのを見送った詩。欧陽脩おうようしゅうは欧陽脩の末の息子である。

【訳文】

千里を走る汗血馬も、
 荷車を引っ張ったのでは存分に動けない。
 酒粕の臭いの中に抛り込まれるのは、
 賢公子を試そうとするものであろう。
 貴君の家は江南の英俊、
 清き流れに身を洗っていたのだが、
 かえって黄河の濁流を渡って、
 馬の耳までも漲る砂に埋もれてしまうようなところに行く。
 もともと人の運命は造物者に任せるまでのこと、
 禍も福も始めから窮まっているわけではない。
 孔子が子文を褒めた言葉を思えば、――

「三回用いられても、三回放たれても怒ることも喜ぶこともなかった」

■【08-2-054】九月十五日、邇英講論語、終篇、賜執政講読史官燕於東宮。又遣中使就賜御書詩各一首、臣軾得紫薇花絶句、其詞云、糸綸閣下文書静、鐘鼓楼中刻漏長。独坐黄昏誰是伴、紫薇花对紫薇郎。翼日、各以表謝、又進詩一篇、臣軾詩云
 繡裳昼袞雲垂地、不作成王剪桐戲。

【解題】長い詩の題は次の通り。「九月十五日、邇英殿で『論語』を講じてきたのが最後まで終わった。執政講読史官は東宮において宴を賜り、中使が派遣され、それぞれに陛下御自身が書かれた詩一首ずつが与えられた。私は紫薇花を詠んだ絶句を頂戴した。その詩は、

絲綸閣下文書静、^{しりん かくか ぶんしょ しず}〔絲綸 閣下 文書 静かに〕

鐘鼓楼中刻漏長。^{しょう こ ろうちゆう こくろう なが}〔鐘鼓 楼中 刻漏 長し〕

独坐黄昏誰是伴、^{どくざ こうこん だれ こ ともな}〔独坐 黄昏 誰か是れ伴う〕

紫薇花对紫薇郎。^{し び か たい し びろう}〔紫薇花は対す紫薇郎と〕

翌日、おのおのが御札の文書を差し出し、一篇の詩を添えた。私の詩は以下の通り。

蘇軾が^{じえいでん}邈英殿で皇帝に学問を講義したことは作品番号 08-2-032 ですで見えて、ここに到って『論語』の講読が完了したのである。皇帝の詩は、^{とう}唐の時代には皇帝の詔勅の草稿を作る役所の庭に^{さるすべり}紫薇花を植えたという故事を踏まえて、^{ち せいこう}知制誥の職にある蘇軾について歌ったものである。それに応じた蘇軾の詩は、皇帝に差し出すのにふさわしいよう、香り高い語句を選んで並べた工夫の作で、読み解くのはかなりの労力を要する。しかし、それに見合うだけの中身があるわけではないので、外見のよさを原文で示し、訳文としてはざっとした流れがわかればよいという程度の安直なものを添えておく。時に^{てつそう}哲宗皇帝は数えて11歳、現代でいえばまだ小学生の年齢であるから、自ら詩を作り、蘇軾の詩を自ら理解したとは思えない。

【訳文】

繡裳昼袞雲垂地、〔雲が地に垂れるような天子のお姿〕

不作成王剪桐戲。〔少年ながらも戯れの遊びなどなならない〕

日高黄緞下西清、^{じえいでん}〔日の高いころに邈英殿にお出ましされ〕

風動槐竜舞交翠。^{えんじゆ}〔折からの風に槐の影が揺れる〕

壁中蠹簡今千年、〔ここには千年を経た書物が納められ〕

漆書科斗光射天。〔開けば漆のような黒々とした文字が光を放つ〕

諸儒不復憂吻燥、〔ここに集まる学者は苦も無く詩を詠み〕

東宮賜酒如流泉。[東宮において、流れる泉のように酒が振る舞われる]
 酒酣復拜千金賜、[酒たけなわのとき、頂戴するのは千金に相当するもの]
 一紙驚鸞回鳳字。[驚らんが舞い鳳おおじが踊るような字が記された一枚の紙]
 蒼顔白髮便生光、[それは我らの白い髪や青い顔を輝かし]
 袖有驪珠三十四。[私は袖の内に珠のような三十四文字を納める]
 帰来車馬已喧闐、[帰れば早くも車馬を連ねて人々が集まり]
 争看銀鈎墨色鮮。[陛下の墨痕の鮮やかさを争って見ようとする]
 人間一日伝万口、[このことは一日のうちに一万の口によって伝えられ]
 喜見雲章第一篇。[陛下がこのたび初めて臣下に賜った御書を喜び見る]
 玉堂昼掩文書静、[玉堂で日中職務にあるときは、静かに]
 鈴索不搖鐘漏永。[時は緩やかに流れる]
 莫言弄筆数行書、[筆を弄して数行の書を記すまでもなく]
 須信時平由主聖。[お上の御聖徳によって平和な世になる]
 犬羊散尽沙漠空、[外敵は犬や羊のように砂漠の彼方に逃げ去り]
 捷烽夜到甘泉宮。[都には勝利の知らせが届く]
 似聞指揮築上郡、[英雄が西方の地を開くの聞いて]
 已覺談笑無西戎。[談笑の内にもはや争う者はいなくなるのである]
 文思天子師文母、[天子は文を重んじられ、その師[高太皇太后]もまた文を重んじられる母]
 終閉玉關辭馬武。[ついに西方の関を閉ざして武力の行使をやめるであろう]
 小臣願對紫薇花、[小臣は紫薇花むらさきばなに対しつづ]
 試草尺書招贊普。[諸外国に帰順を促す手紙の草稿を書くのである]

【補足】[皇帝から直接に詩を賜るというのはまことに栄誉なことであったが、ここに至るまでの間にも、蘇軾を要職から降ろそうとする運動が執拗に続けられ、蘇軾も

地方に転出することを願い出るなどしていた]

■ 【08-2-055】 狄山論匈奴

【解題】蘇軾が皇帝に講義したのは『論語』だけではなく、歴史に題材を採った講義もした。その論点を整理して8篇の短文を記して皇帝に提出している。その中から、『唐宋八家文』に収録されている1篇を見ておこう。これは『史記』の「酷吏伝」の張湯ちやうとうの条について論じたもの。まず予備知識として、『史記』の当該の部分を読んでおこう。小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝』、岩波文庫（1975年）から訳文をそのまま引用する。なお酷吏とは、法を厳格に適用して恐怖政治を執行する官僚で、冤罪を量産して己の手柄とし、それを推進力に昇進の階段を駆け上るのを常とする。その典型が漢の武帝に仕えた張湯だった。

【訳文】

小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝』、岩波文庫(1975年)より

匈奴が和睦を申し入れてきて、群臣一同は天子の前で会議を開いた。そのとき博士の狄山が主張した、「和睦が有利でございます」。天子がその理由を尋ねると、狄山は答えた。「『兵(兵器・軍隊)は凶器である』と申します。たびたび動かすものではございません。高帝(高祖)さまは匈奴征伐を思いたれましたが、平城でたいそう苦しめられたあげ、やっとのことで和睦を結ばれたのでした。恵帝さまと呂后さまのみ世は、天下は平穏安泰でした。文帝さまのみ世では、呉や楚など七国が謀反して、景帝さまが二つの宮殿の間を往復してみ心を悩ましたまうこと数か月、呉や楚などはうち破られました。そのあとも景帝さまは最後まで(匈奴に対する)軍事行動のことは口にのぼされず、そのために天下は富み豊かでありました。このたび陛下が兵を動かして匈奴を攻撃なさいましてからは、わが中国は空となり、国境地帯の人民ははなはた貧窮し苦しんでおります。これらのことをから考えますれば、和睦が第

一でございます」。天子はそこで張湯に尋ねた。張湯は答えた、「あれは愚かな儒者^{じゆしや}で、なにも知ってはおりません」。狄山は言った、「わたくしはもちろん愚かな忠義者なのでしょう。しかし御史大夫の張湯とは違い、それこそ偽りの忠義者です。張湯が淮南王や江都王の事件を裁いたやりかたなど、法文をあやつって諸侯を過酷な罪におとし、〔陛下の〕の肉親を離ればなれにさせ、皇室守護の臣(諸侯)に不安をいだかせたのでした。張湯が偽りの忠義者であることを、わたくしはもとからはっきりと存じております」。そこで天子はむっとした顔色になって尋ねた、「先生(狄山をさす)に一つの郡をまかせたら、外夷の侵入と略奪をなくすことができるか？」答え、「できません」。尋ねて、「一つの県では？」答え、「できません」。もう一度尋ねて、「一つの障^{とりで}のけもつ地域をまかせたらどうだ？」狄山は、返答につまると裁きかけられることになろう、と推察して、答えた、「できます」。その場で天子は狄山^{とりで}を障に送り任につかせた。一か月あまりあと、匈奴は狄山の首を斬りとりて引きあげた。それ以来、群臣は恐れおのいた。

【補足】[蘇軾がこの部分を特に取り上げて少年皇帝に講義した意図は容易に推測できるだろう。神宗皇帝^{しんそう}のもとで改革派は西方の夏国^{かこく}に対して積極策を取り、手痛い敗北を被った。また、改革派は、改革に反対する者を厳しく弾圧し、蘇軾自身もその標的となった]

【訳文】

謹んで漢代の制度について検討してみますと、博士^{はくし}[皇帝に仕える学者]の俸禄はわずかに六百石でした。それでも、朝廷は、大切な事柄があるときには、丞相、御史、九卿、列侯^{じやうしやう きやうし きやうけい れつこう}とともに、必ず博士を可否の議論に参加させました。皇帝は日ごろから儒者と親しみ、学問を尊重し、博士はたとえ身分は低くても意見を申し述べることを妨げられなかったのであります。

それで、狄山^{てきざん}は皇帝の前で張湯と議論を争うことができたのでした。このようなことは、一般の者にはなかなかできないことでありますが、人の上に立つ君主はこうありたきものなのであります。君主がおたや

かな顔で、意見を申し上げようとする者を促し、虚心にそれを受け入れようとしても、恐れてなかなかいおうとはしないものです。まして、武帝のように顔色を変え、怒りに任せて、意見をいった者を死に追いやるようなことをしたらどうなるでしょうか。つまり、張湯が権勢を振るい、盗賊が天下の半ばを占め、漢朝がほとんど乱れるに至ったのは、狄山の意見が容れられなかったことから始まったのであります。

【補足】[少年皇帝の教育を、蘇軾などの保守系文化人が担い、理想の皇帝像に現実の少年を近づけようと皆で鋭意努力を重ねていた。文化国家のあるべき美しい姿であるのだが、教育はインプットとアウトプットが必ず一対一で対応するほど単純なものではない。皇帝自身は早くから父神宗の遺志を継いで改革政治を復活させようとの志を抱いていたようで、保守系文化人の教えを素直に聞こうとする気持ちは希薄だったようだ。また、極端に厳格であった程頤 [→作品番号 08-2-010] を毛嫌いする余り、保守系文化人全体を嫌うようになったという説もある]

■ 【08-2-056】 昨見韓丞相言王定国、今日玉堂独坐、有懷其人

【解題】この詩の題は、「昨日、(先の) 宰相の韓絳かんこうに会うと、韓絳は王鞏おうきやう [字は定国ていこく] のことをいわれた。今日私は一人で玉堂ぎよくどうに座っていて王鞏おうきやうのことを懐おもった」。韓絳はこの年に政界から退き、潁州えいでの悠々自適の生活に入っていた。時に都にきていたのだろう。玉堂は翰林院かんりんいんにあって、これまでもしばしば見ている。王鞏が政界の大物である韓絳と親しかったことは作品番号 08-1-004 で見ている。王鞏は揚州ようの副知事に任命され、蘇軾は王鞏が早くに実務に就くことを望んでいたのだが、なぜかまだ赴任していなかったようだ。

【訳文】

昼間ぎよくどう、玉堂ぎよくどうに臥せっていると、

微かな風が白い衣に吹き寄せる。

銅の瓶かめが碧あおい井戸の底におろされ、

引き上げられる瓶から百尺の流れを作って水が落ちる。

その音によって夢から覚め、ひと掬いの冷たい水を愛でる。

その水を我が友おうきょう[王鞏]に与えたく思う。

水だけでなく、苦い言葉はいかんもまた肺肝を涼くするであろう。

貴君は秀眉にして玉のような両頬、

翔かける鸞らん[神の鳥]のような勢いがある。

貴君こうわいは江淮ようの地揚州州に行き、川の流れれによってその詩を清く洗うのがよい。

都にあつて御馳走ごちそうやらよい酒さけやらの並びの前まへにいたのでは、

貴君の信美は安んじられはしないのだ。

貴君かんこうも韓絳かんこうのように丞相じやうに昇る功業を成し遂げて後に、

家に還つてのんびりと酒杯けいばいを挙げるのがよいであろう。

そのときに人間世界において客として招きたい人があるならば、

手紙を出して呼ぶのは難しいことではない。

私も貴君の門を叩いて、起舞して歓びを尽くすであろう。

■【08-2-057】上韓持国

【解題】韓絳かんこうの弟あざなの韓維かんい [字は持国] は7月まで副宰相であつたが、政争に巻き込まれて地方に出ることになった。韓絳が韓維のことを心配して詩を詠むと、それに劉攽りゆうほんが和してさらに蘇軾が和した。その詩は、訳者にはどこがおもしろいのかさっぱりわからないので割愛し、ここでは蘇軾が韓維に直接贈つた詩を読んでおく。なお韓絳は8人兄弟の三男で、五男の韓維、六男の韓績かんしん [前年4月まで宰相であつた] も朝廷の

枢要の地位に就いた。漢の時代に揃って高位に昇った賈氏の三兄弟がいて「三虎」と呼ばれた。中でも賈彪が最も畏怖され、この詩の冒頭でそのことを用いている。

【訳文】

韓氏の「三虎」はいずれも国家の指揮を執り、

なかでも一虎[韓維]はかの賈彪に似る。

家に端居して机にもたれているときには、無心を学び、

早朝に朝廷に入るときには、常に正しい姿を見せる。

時流に逆らって独り行くのは聳え立つ山のようにあり、

天下の議論を逆さまにするのも厭わないのは真に効力のある薬のようである。

二聖[哲宗と高太皇太后]の政治を担って正しい道に戻し、

排斥されてもついに衆人の力を一つに合わせた。

私のような者はたまたらふ飯を食うことを思うだけで、

(韓維のような)君子がいなかったならば国が治まることはない。

(韓維が希望するように)汝州の西湖に船を浮かべて春風に酔って臥せたのでは、

いったい誰が民のために豊年をもたらすのだろうか。

【補足】[(1) 韓維は汝州に行くことを望んだのだが、実際には鄧州知事に任命された。(2) この詩で蘇軾は韓維を讃えている。しかし、後に見るように蘇軾と韓維の関係は必ずしも良好ではなく [→作品番号 08-3-057]、韓維を要職から降ろす勅書を書いたのは蘇轍であった]

■ 【08-2-058】次韻韓康公置酒見留

【解題】韓絳の酒宴に蘇軾が招かれ、まだ帰るなど詩で引き留められたので、それに

次韻したもの。

【訳文】

秋には庭の菊の花のもとで一酔をともし、
 重ねて来たときには、雪が穹窿アーチの形に積まれている。
 昔、謝安しゃあんは豪奢を諷られても意に介さなかった、
 私は野暮なことはいわないけれど、
 酒を注ぐのはあまり多くないでいただきたい。
 鐘乳しょうにゅうだ金釵きんさだといろいろな飾りを付けるよりは、
 人が自ずから玉のごときであらうとすべきだろう。
 昔、丙吉へいきちは馭者が宰相の車の中で眠り込んでしまったのを叱らなかった、
 さらに寛容である貴君のことであるから、
 私が酔いつぶれてもどうか大目に見ていただきたい。

■ 【08-2-059】 書雪堂義墨

【解題】王詵おうしん [→作品番号 08-1-059] が墨を贈ってくれたので、それについて記した短文。

【訳文】

元祐二年十二月二十一日、王詵おうしんが墨がん二十六丸、およそ十種余りを贈ってくれた。あれこれ磨って、
 数十字を作り、その色の深い浅いを観たところ、そのまま結構なものもあれば、混ぜ合わせて一品と
 してちょうど佳よい墨となるものもあった。
 かつて私は黄州こうにいたときに、近隣の四五郡の人から酒が送られてきたので、合わせて一つの器に

蓄え、これを「雪堂せつどうの義樽ぎそん」と呼んだ。

いままた「雪堂せつどうの義墨ぎぼく」と呼んたらよいだろうか。

【補足】〔王誥おうしんは裕福な友人で、かねてから折々にいろいろなものが贈られていた〕

■【08-2-060】次韻王都尉偶得耳疾

【解題】同じころに王誥おうしんが耳を患い、そのことを詩に詠んだので、それに次韻した。

【訳文】

人間の体に開いている六つの穴なんぞは、

貴君も知っている通り、あってもなくもよいものだ。

私がいいたいのはたったのひと言、

病やまいは疣いぼ！

決然と取り去ってしまえばよいのだ。

眼や耳が利けばよいというものではない——

病人は〔神経が研ぎ澄まされて〕寢床の下の蟻の動きも巧みに聞き取るというし、

棘とげの先端で猿が踊るのを見たがる愚か者もいる。

真の聡明は耳や眼にあるのではない。

薬だなんだと騒ぐのは家の者を煩わせてしまっただけだ。

三国時代しゅうごうの周瑜しゅうごは耳がよすぎて、

音楽を聴いて少しでも音程がずれるといちいち首をかしげたという。

貴君もそんなことがしたいわけではないだろう。

■【08-2-061】跋南唐挑耳図

【**解題**】上の詩に関連して、これより4年後に記した文章を見ておこう。五代十国時代の南唐のときに描かれた『挑耳図』という画に添えた短文で、画についてはほとんど何も述べず、もっぱら王詵との楽しいやりとりを記している。

【訳文】

王詵はかつて俄かに耳を患って聞こえなくなった。意に耐え難く、私に治療法を尋ねた。私はこう答えた。「貴君の家は代々の武将であります。頭を断たれようが、胸に穴を開けられようが、惜しむものではなかったであります。二つの耳が役に立たないのなら、割いて捨て去ったらよいではありませんか。疾いなどは、三日もしたら自ずと去るのではありませんか。もし去らないようでしたら、私の耳を割いてお取りなさい」

王詵ははっと悟るところがあり、三日で病は良くなった。それで喜びの歌を私に示した。

老坡心急頻相勸、[東坡先生はせっかちなことをいけれど]

性難只得三日限。[僕も性格として三日の辛抱がやっただ]

我耳已效君不割、[僕の耳も先生の耳も割かずにすみ]

且喜両家都平善。[両家は嬉しいことにこれまで通り仲良しでいられる]

いま王鞏が所蔵する『挑耳図』を見たところ、これは王詵から得たというので、いさかこのことを記した。

元祐六年八月二日。

【**補足**】[現在南京大学に所蔵されている『勘書図』[一名『挑耳図』]という画がある。五代十国時代の南唐の王齊翰の作で、机上に書物を開き、何やら右耳をつまんでいる人物が描かれている。蘇軾が見たのは恐らくその画であったのだろう]

■【08-2-062】送喬全寄賀君六首、并叙

【解題】これは「異人」を好む蘇軾らしい作品。序文、喬全きやうぜんへの送別の詩1首、そして賀元がごうに寄せた詩5首から成る。

【訳文】

叙

昔から伝え聞いているのは、靖長官せいちやうかんと賀水部がすいぶは唐末五代とうまつごだいの人で、道を得て不死みちであったということ。

真宗皇帝しんそう [宋の三代皇帝そう]が泰山たいざんで封禪ほうぜんの儀を行ったときに、道の左側で皇帝に挨拶する者がいた。その者は、「晋[唐と宋の間の五代の三番目の王朝]のときに水部員外郎すいぶいんがいろうであった賀元がごうにございます」といって、再拝して去った。皇帝は気づかずに通り過ぎ、後に、道辺で出迎えた人々の名簿を見て大いに驚いて探させたのだが、見つけることができなかった。

天聖てんせい [四代皇帝の仁宗の世じんそう]の初めに、賀水部はその弟子の喻澄ゆちやうを都に使用して、仏像を進呈した。それは数千万の価値があった。張方平ちやうほうへいは喻澄と遊び、以上のことを具つぶさに知った。

ここにまた喬全きやうぜんという者がいる。若いときに大病を患ってほとんど死にかけた。賀水部は喬全に道を学ばせた。喬全は今年八十歳で、ますます元気である。世間の人は賀水部をまた見ることはないが、喬全はしばしば賀水部と会っている。

元祐二年十二月、喬全は都に来て十日ほど滞在した。私は引き留めたが、喬全はこういって断った。「吾が師じゆ [賀水部がすいぶ]と上元もうげんの日に蒙山でお会いする約束をしているのです」

そして、

「吾が師はかつて密州みつで遊ばれたときに、貴公きこうが常山じやうざんへの道に登るのを知り、貴公のことを心に喜んでおられるようでした」

ともいった。

この詩を作って喬全を送り、合わせて賀水部に五首の絶句を寄せる。

【補足】〔(1) 賀水部が すい ぶという仙人ご だいじつこく しんちようが実在して、五代十国の晋朝しんちようのときに水部員外郎すい ぶ いんがいろうという名目上の官を授けられていたとしたら、晋朝が滅んだ946年に20歳だったとしても、このとき元祐2年〔1087年〕には161歳ということになる。(2) 賀水部と並んで名を挙げられている靖長官せい ちやうについては作品番号 05-3-013 に記述がある。(3) 真宗皇帝しんそう いていが行った封禪ほうぜんの儀ぎについては作品番号 07-2-031 で触れた。真宗皇帝は神秘的なことが大好きな人であった。(4) 蘇軾みつが密州知事であったときに、州庁舎を建て増して蓋がい公堂こうどうを作り、そのときに書いた文章に、「隠れた君子は実際には見ることができない。もしも見られたとしても招き入れることはできないであろう。……民衆にまじってそのあたりを行き来しているのだろうか。どうかして会えたりしないだろうか」と記していた〔→作品番号 05-2-035〕。喬全きやうぜんのいっていることが事実なら、まさに一人の仙人が蘇軾のごく近くにいたのである〕

きやうぜん
喬全に贈った詩

かのとき貴君の年齢は二十、
美しくかつ華やかであった。
ところが、悪い病にかかって眉も鬚も落ち、
紅顔は白髪に変わり、妻や子を驚かした。
鏡を見て自分自身を嫌い、この体を棄ててしまおうと考え、
奥深い山に茅の庵を結び、
松まつの朥たがを食べる暮らしに入り、
道辺で俗世を逃れた博士が すい ぶ〔賀水部〕と出会った。
博士は清らかに痩せ、四角い瞳からの光が野を照らした。
再拝して起き上がる前に、

声を一つ博士から浴びせられ、

この身は決して吾てはないと覚った。

泥の中から、蓮の花が白く輝き出たかのように感じ、

師に従って東に行き、(密州にある)瀕水みづと邾水いすい ふすいの二つの川を渡った。

貴君は師とともに山の頂から、

私の車の跡が密州の地に付けられるのを見ていたのだが、

私は俗人の間に仙人が混ざっているとは知りもなかった。

貴君はいまや年は八十、喉の肉が胸にまで垂れ下がっている。

しかし、飛ぶようにして山を登り、人が手助けしようとするいかと嘖るほどだ。

貴君は都に来たものの、東に帰る約束を違えることはない、

新らたな年ろうせんじゆには師の老仙儒[賀水部]のもとに詣でるのである。

望むのは、

秋風とともに二羽けりの鳧が西へと飛んで来て下り降りること。

仙界で採れるという瓜のように大きな囊なつめを私にも分けてくださるだろうか。

【補足】けり [鳧が仙人のイメージであることはこれまでも何度か見ている]

賀水部に贈った詩 其の一

師は戦乱の時代に成長され、

早くに俗世から身を逃れ、

晩年ばんねんに至って元祐太平の人となられた。

ほつかい そうでん 渤海が桑田そうでんになるような大変化にも驚くことなく、

春雨のころきざん もうざんに亀山、蒙山のあたりに行こうとされている。

【補足】きざん [亀山は作品番号07-1-106などで見ている。もうざん 蒙山はその東の山。序文にあった]

しんそう ほうぜん たいざん
真宗皇帝が封禪の儀を行うために泰山に向かった道筋に当たる]

其の二

師はかつて封禪の儀のためにお出ましになった皇帝に挨拶しようとした。

簡素な平服であったので前に出るのをためらわれた。

夜に皇帝がお泊りになる行宮で師の名が空しく奏せられ、

皇帝は、師が雲の間に遠く去ってしまったのを残念がられた。

其の三

老いた身をもって時に言葉を発せられるのは、

自身のためではない。

わずかな語句にも千鈞の重みがある。

かん こう
漢の高皇帝に会うことはできなくても、

高皇帝が驚き見えた商山の四人の隠者に相当するお方は現にいまもいるのだ。

其の四

昔から言い伝えられているように師は晋朝の人であった。

すでに天に飛び上がって仙人に変化するありさまを見せている。

聞かところではいまは東の蒙山におられるとか。

師のもとで薪を集め水を汲む奉仕をして、

仙薬を焼くありさまを拝見したいものである。

其の五

千年に伝わる風流人といえは^{とうだい が ちしょう}唐代の賀知章、
賀知章が最も愛したのは^{たくせんじん り はく}謫仙人こと李白であった。

しかし、二人のように詩を吟じて酔って舞うことを終生続けるのは無益であろう。

粟の飯と^{あかぎ}藜の汁を食らって、精神を養う法を問うべきである。

■ 【08-2-063】 送家安国教授帰成都

【解説】 蘇軾と同郷で同じ年に科挙に合格した者に^{かていこく か あんこく}家定国と家安国の兄弟がいたことは作品番号 08-2-016 で見ている。これは、^{せい と}家安国が^{しよく}成都の学校の教授となって蜀に帰るのを見送った詩。この詩は様々な故事を引き、しかもかなり高度な用い方をするために解釈が相当に難しい。したがってこの訳はレベルの低い「ずっぽ訳」である。

【訳文】

貴君と別れてから二十年、

私が歩んできた道は艱難に満ち、

両鬢の黒さはすでに失われてしまった。

それでも、学問ばかりはついに不変である。

鳥は飛びつつもしばしば退かなければならないことがある。

それでも、螢が草にしがみついたまま干からびて死んでしまうようなことはしない。

私はひとたび罪に落とされてから、

葉が霜によって零落するのを五回見た。

夜は空しく世の興亡を一人論じ、春の夢にもなお経典を読んでいた。

思いかたけないことに、新設の学説は廃されて旧に復し、

若い学徒は伝統を守ってきた人を師として教えを受けようと、

雲を凌ぐ見識の持ち主の手を煩わすことになり、
 貴君は蜀の人々を導く星となるべくかの地へと向かう。
 成都の学校には苔むす伝統があり、
 庭には古い柏の木が高く聳え立っている。
 生徒らは学問の真の香りを貴君から聞き、
 これまで学んできたものが偽物であったと知るであろう。
 蜀にはたくさんのおおどりの鳳の雛がいるから、
 竹のごとき貴君のもとで立派な翼を伸ばしてゆたろう。
 かくて、貴君の奏でる音律の整った音楽に合わせて、
 鳳たちは古の聖天子の庭で飛び舞うようになるのだ。
 私も蜀に帰り、残り少ない歳月を貴君とともに楽しみたいものだ。

■ 【08-2-064】 与千之侄

【解題】甥の蘇千之〔→作品番号 08-1-031〕に与えた手紙。従兄の蘇不欺の子で、科挙の地方試験に落第した後、郷里に帰っていた。

【訳文】

独り立って何も恐れないのは、司馬光殿と君の叔父兄弟〔蘇軾と蘇轍〕でした。万事を天命に委ね、真直ぐな道を進んで、それによって罪を得て放逐されても、むしろ獲るところが多くあったのです。風によってこの手紙を寄せるのは、とにかく学問に勤めて、自ら励むよう告げるためです。近ごろは史学が衰え、去年、学士を選抜する試験を行い、史書にある事柄を問うたのですが、詳しく知る者は誰もいませんでした。史書を読むべきで、読めば益するところは少なくないのです。

【補足】〔(1) 冒頭の一文は、甥に向かってであるから、やや大きなことをいったも

のであろう。改革政治が始まったときに、最後まで批判を続けたのは確かに蘇軾であった。皇帝が代替わりして、保守派による政治が行われるようになったときに、蘇軾と司馬光^{し ば こう}は意見が分かかれ、「この司馬牛^{し ば ぎゅう}め」と蘇軾が罵るようなこともあったが〔→作品番号 08-2-010〕、それは司馬光への尊敬の念を少しも減じるものではなかった。

(2) 蘇軾は学士の新メンバーを選びはしたけれど、試験結果には不満があった。驚異的な記憶力〔→作品番号 06-5-014、08-1-053 など〕を有する蘇軾からしたら、誰もが勉強不足に見えたのだろう。蘇千之^{そ せん し}にとっては偉大過ぎる叔父で、その励ましはかえって重圧であったのかもしれない]

■ 【08-2-065】 記樂天西掖通東省詩

【解題】 省庁間の風通しが悪くなったことを嘆いた短文。

【訳文】

元祐元年、私は中書舎人^{ちゅうしゅうしゃにん}となった。そのとき、執政は本省^{しつせい ほんしょう}〔門下省^{もんかしょう}〕の事柄がしばしば外に漏れるので、中書舎人の詰所^{まがき}の後ろに籬を設けて、両省〔中書省と門下省〕の間の往来を禁じようとした。私は、「皆様方は事柄の本質をわきまえ、道理に通じておられるのですから、どうしてその間に籬を設けて棘を挿し込む必要があるのでしょうか」といった。諸公は笑って、沙汰止みになった。

しかし、翌年になるとどうとう籬が作られてしまった。

暇な折に『樂天集』〔白居易^{らくてんしゅう}の詩集^{はくきょい}〕を読んでいると、「西省^{せいしょう}の北院^{ほくいん}に新たに小亭^{せうてい}を構え、竹を植え、窓を開くと、東に騎省^{きしょう}〔中書省と門下省〕が通じ合った。李常^{りじょう}と窓辺^{まがき}において酒を飲み詩を作った」という作品があった。つまり、唐の時代には西掖^{せいえき}〔中書省〕から東省〔門下省〕は通じていたのである。しかし、今では往来ができなくなった。残念なことである。

【補足】 蘇軾は開けっ広げな性格であったから、閉鎖的な密室主義を嫌った。政争

の厳しさがこのようなところにも現れたのであろう]

■ 【08-2-066】 憲宗姜茶湯

【解題】 この年、文彦博〔→作品番号 08-2-034〕が病み、蘇軾が薬を処方するということがあった。そのことを記した短文。

【訳文】

唐の憲宗皇帝は、馬聡が下痢、腹痛を病んだときに、治療法を授けた。それは、生姜を皮とともに砕いて米粒大にし、大きな盃を用いて、草茶を合わせて煎じて服するのである。

元祐二年、文路公〔文彦博〕が病を得て、どの薬も効果がなかった。私がこの処方伝えたところ、癒えたのであった。

■ 【08-2-067】 楽全先生文集叙

【解題】 楽全先生の文集の序文。楽全先生は、蘇軾の大恩人張方平〔→作品番号 08-2-010〕の号である。蘇軾はこのころに張方平の文集の編集を頼まれ、この序文を書いた。文集が完成したのはしばらく後のことである。

【訳文】

三国時代の孔融は志が大きく議論は高遠であった。当時の世において著しい功績が現れることはなかったのだが、それでも英偉豪傑の気は一時代の手本となり、孔融が盛慮や郗慮の人物を論じた文章は激しく高ぶる大丈夫の風儀があった。

同じ時代の諸葛亮は文章をもって名を顕したのではなかったが、万物の理に通じて事を成就させるありさまと、理論と實際を深く知り抜いた洞察力は自ずから言葉となって現れ出た。諸葛亮が書いた『出

師の表』は簡明でありながら意を尽くし、率直であっても放縦にはならず、実に偉大な言論文で、太古の『伊訓』、『説命』に並ぶ名文で、秦や漢以降の君主の歓心を得ようとして仕えた者が全く及ぶところのものではなかった。

私が常々残念でならないとしているのは、孔融と諸葛亮の文章を完全な形で読めないことだ。

現代の楽全先生はほとんどこの二人に近いのではないだろうか。

嗚呼、士として天下の重みを自らのこととして任ずる者がいなくなつてすてに久しい。議論が不得手なのではない。政事や文学について機敏に感じないわけでも、該博な知識を持っていないわけでもない。大きな事に臨んだときにも、根本を忘れず、己の日ごろの言説を失ってしまうことのない者が少ないのだ。つまりいまの士は器量が小さいのである。

楽全先生はまだ普通の庶民であったときから、我が身を成長させて国家の仕事に補おうとの望みがあった。若くして出仕し、老いて帰隱するに至るまで、言葉を使って時の流れに乗じたり、人に媚びたりすることは決してなく、君主に対するときにも、よく考えて後に発言した。評判は常に一定で、利害に左右されることがなく、まことに孔子がいうところの「道をもって君に仕える大臣」である。孔子から時代が遠く離れ、道が曖昧となり、志のある士、あるいは仁を具えた人であっても、少しでも低い地位に置かれると、高く用いられることばかりを望んでしまうのだが、楽全先生だけは一人邁進する気概に溢れ、公明正大な言論を行ってきた。これもまたまことに孔子のいうところの「用いられるのなら道を行い、用いられないのなら世間から隠れて道を楽しむ」といものである。上に対しては、君主と合致することを求められなかったので、貴ばれつつも用いられず、用いられても十分に力を発揮できなかった。下に対しても、士大夫と合致することを求めなかったので、楽全先生のことを悦ぶ人は少なく、悦ばない人が多かった。しかし、究極的に天下の偉大な人を挙げるとなると、必ず楽全先生が第一であるとされているのだ。

楽全先生は自身の本性を発揮し尽くし、天命も知り抜いて、自然のままに振る舞い、やむを得ずして為さねばならないことだけを行った。文章を書くことで世に名を顕そうと思うことはなかったけれど、慶曆

年間から元豊年間に至るまでの四十余年に、天下のことを論じて皇帝に示した文章は数多くあり、あるものは用いられ、あるものは用いられなかったけれども、全てが礼と義に基づき、人の情に合い、是非の判断はどれもが先人の議論の内に根拠があり、結果としての得失は後に必ず正しいものであったと検証された。その他の詩文に及んでは、どれも清遠雄麗で、読む者は楽全先生の人となりを想い見ることできる。まことに孔融、諸葛亮に似ているとわかるのである。

私は二十歳のときに、楽全先生の門下生となるべく成都でお目にかかった。ひとたびお会いすると、楽全先生は私のことを天下の俊英と同じように遇して下さった。それから三十余年の間に、私を啓発して成就させるところのものは至って多く、しかし、先生にお返すものはほんのわずかすらもない。私は先生の文集を求め、自分で校合して家に大切にしまってきた。ここに先生の文章の大略を論じ、もって後世の君子の評価を仰ぐものである。

昔、曾公亮は私にこのようにいった。「皇帝の前で重要な問題を議論するとき、他の者が一日かかって繰り返し述べても言い尽くせないことを、張公は数言で結論を導き出し、そのまま輝くような文章になり、書いて誦してもすばらしいものである」。先生がいわれたことは全てが採用されたわけではなかったけれど、慶曆以来の名臣として先生以上に敬われた人はいないのである。

先生は今年八十一歳、門を閉ざして訪問客もなく、終日正座して、造物者とともに無何有之郷に遊んでいて、いまはその言葉が聞かれることもなく、ましてその文が記されることもない。

【補足】〔(1) 要するにこれは歯が浮くばかりの過剰な賛辞を書き連ねた文章であるのだが、蘇軾が書くと不思議と気品があり、説得力がある。文章の底に、大恩人への深い感謝の思いが流れているからなのだろう。(2) 「造物者とともに無何有之郷に遊ぶ」とあるのは、『楞伽經の後に書く』〔→作品番号 07-2-011〕で見たように、晩年は仏教にはなほだ傾倒していたことをいうのだろう〕

第8章 栄光と失意——都

[第8章その三]

げんゆう げんゆう
元祐3年 [1088年]、蘇軾^{そしよく}53歳。

げんゆう げんゆう
元祐4年 [1089年]、蘇軾^{そしよく}54歳。

■ 【08-3-001】 和子由除夜元日省宿致齋三首

【**解題**】 弟の蘇轍は除夜から元旦にかけて省中に宿直し、齋戒して朝を待ちつつ 3 首の詩を詠んだ。これはそれに和したもの。

【**訳文**】

其の一

僕らが^{こうこ}江湖に流落したのは、天が運命に関与したからではあるまい。

兄弟でいま禁中に仕えているのはただの偶然によるものだ。

世は等しく年が新たになったけれど、

僕ら兄弟はまだ会えないでいる。

それは帰郷できない境遇に置かれているためなのだ。

【**補足**】 [かつて流罪になったのも、いま宮中にあるのも全てが偶然であるところではいっている。末の句は、故郷に住む田舎紳士であるならば、新年になってただちに兄弟が顔を合わせられるのにとという意味]

其の二

僕は白髪^{びつれがけ}にして蒼顔、歳は五十三、

こんな僕であるのに、家の者ときたら、

この春のために新調したうわぎ衫を無理やり着せたのだ。

新年の朝会から帰ってくると、その両袖にはまた天の香りが満ちていて、

頂戴してきた銀の幡が頭上から子供らに微笑みかける。

【補足】[元旦には宮中で新年の儀が行われる。蘇轍が齋戒したのは、それに臨む準備であった。儀式が終わると、朝臣は美しく飾ったはた幡をもらって帰る]

其の三

かの年の春、

僕らは月明かりを踏んで試験場へと急ぎ向かった。

そのときの試験委員長は醉翁[欧陽脩]、

醉翁は試験期間中は鎖された扉の内に籠った。

醉翁の門下生はみな白髪の老人となり、いま幾人が残っているだろうか。

そんな僕が醉翁と同じ役目を仰せつかって若者たちの新しい詩句を審査するのだ。

【補足】[蘇軾はこの年、科挙の二次試験の試験委員長を務めることになった。かつて蘇軾が科挙に合格したときに欧陽脩が試験委員長だった。32年を経て同じ役割を担うのである]

■ 【08-3-002】韓康公坐上侍兒求書扇

【解題】1月16日に韓絳[康公][→作品番号08-2-058]が主催する酒宴に招かれ、その場で作った座興の詩。趙徳麟ちようとくりんの隨筆ごうせいりやく『侯鯖録』に記事があるので、それと合わせて読んでおこう。趙徳麟は蘇軾と親しくした人で、第10章で登場する。

【訳文】

ちやうどくりん こうせいりく
趙徳麟：『侯鯖録』より

韓康公かんこうこう〔韓絳かんじやう〕が引退した後のこと、上元節じやうげんせつを見物まいするために潁州から上京し、一月十六日に韓康公の私邸に朝廷に並ぶ人々九人が集まった。いずれも門下生やかねてから親しい官員で、当時の徳名の高い人ばかりであった。傅堯俞ふぎやうゆ、胡宗愈こそうゆ、錢勰せんきやう、東坡とうば、劉攽りゅうはん、顧臨こりんといった人々が集まったのである。

このとき、錢勰は仕事があつて遅れてしまい、韓康公は渋い顔をした。すると、東坡は、「今日は定めし本殿で焼香を受けておられて、大勢の人々に引き留められているのでありましょう」といったので、人々は大笑いをした。

全員が揃つと、十人余りの家妓たけなわが出て、人々の接待をした。宴う 酣けのころに、韓康公の寵愛を新たに受けていた魯生ろせいが出て舞った。舞い終わったときに、魯生は蜂に刺されてしまい、韓康公はひどく心配した。しばらくすると、魯生は白い団扇を持って現れ、東坡に詩を求めた。

窓揺細浪魚吹日、〔窓に細かい浪が揺れるのは、魚が日差しを吹いているからである〕
手弄黄花蝶透衣。〔手に黄色い花を弄ぶ間に、蝶が衣を通り抜けてしまった〕
不覚南風吹酒醒、〔春の風がたちまち酒を醒ましてしまったので〕
空教明月照人歸。〔人々が歸るのを虚しく月が明るく照らすことになった〕

これは初句に妓女の姓を記し〔魚と日を合わせると魯になる〕、二句目に蜂のことを記したのである。

韓康公が大いに喜ぶと、東坡は、「私がいままことに恐れておりますのは、ほかの女性方も詞を乱しがるのではなからうかと」と、いったので、一同はまた大笑いした。

【補足】〔(1) 宴席を盛り上げることでは誰にも引けを取らない蘇軾の面目躍如とい

ったところである。こんなことをしていたのでは、厳格無比の程^{てい}頤とは全く合わないはずである [→作品番号 08-1-052]。(2) ここに集まった人々はいずれもすでに登場していて、傅堯^{ひぎょう}愈は作品番号 08-2-010 で、胡宗^{こそう}愈は作品番号 08-1-011 で、錢^{せん}勰^{きょう}は作品番号 08-2-036 で、劉^{りゅう}攸^{はん}は作品番号 08-2-028 で、顧^こ臨^{りん}は作品番号 08-2-025 で見ている。なお、傅堯愈は作品番号 08-2-010 では蘇軾を攻撃する陣営にいたのだが、この宴席では蘇軾のジョークに笑っているところを見ると、度量の広い人物であったのだろう。(3) 錢勰が焼香を受けているというジョークは説明がないと全くわからない。当時都に九子母神^{くしぼじん}を祀った祠があり、人々の信仰を集めて焼香に訪れる人が絶えなかった。九子母神のルーツは印度にあつて、日本の鬼子母神^{きしぼじん}と同根で、要するに子宝を恵む神様である。九子母神の隣には美しく作られた夫の人形が置かれていて、錢勰にはちょうど 9 人の息子があつて、かつ美男子であつたことから、人々は戯れて錢勰のことを「九子母の夫」と呼んでいたのである。(4) この宴席で团扇に書いたとされる詩がもう一首あり、蘇軾が恐れていたようにさらに詩を所望されたのだろう。それは、韓絳^{かんじょう}の屋敷を讃えただけの詩なので訳は割愛する]

■ 【08-3-003】書試院中詩

【解題】1月17日、蘇軾は科挙の試験委員長に正式に任命され、1月21日に孫^{そん}覚^{かく} [→作品番号 08-2-041]、孔^{こう}文^{ぶん}仲^{ちゆう} [→作品番号 08-2-021] ら 20 人ほどの関係者ととともに科挙を統括する役所 [試院^{しいん}] に入り、それより 1 カ月余りそこに籠った。一切の不正を防ぐために、外に出ることを禁じられたのである。これは試院から解放された直後に記した文章。

【訳文】

元祐三年一月二十一日、科学の監督としての仕事が始まり、李公麟りこうりんを採点委員に招いた。三月初めに採点が終わり、諸庁から関係した者などが集まった。そのうちの数人とともに李公麟のもとを訪れた。このとき李公麟すいきは水悸の病に苦しみ、気が塞いで食欲がなかった。皆で地面に転ぶ馬の詩を詠んで李公麟の煩悶を払おうということになり、黄庭堅こうていけんが最初に詩を作った。

儀鸞供帳饗風行、[試院に閉じ込められていた間は、寢床しんまは風がぞるぞるで]
翰林湿薪爆竹声、[役所から支給された薪は湿ってばちはばち撥ね]
風簾官燭淚縱横。[隙間風ろうそくで蠟燭の蠟があちこちに乱れるありさまだった]
木穿石盤未渠透、[石に穴を穿つようにしても外には全く通じず]
坐窓不遯令人瘦、[窓辺に座して瘦せてゆばかりで]
貧馬百啣逢一豆。[貧しい家の馬がたった一粒の豆を百回噛んでいるようなものだった]
眼明見此玉花驄、[ここに転んだ馬をまざまざと見て]
径思著鞭随詩翁、[すくに思ったのは、詩翁しおう[蘇軾]の乗る馬を鞭打ち]
城西野桃尋小紅。[郊外に出て桃の紅い花を尋ねるといことだ]

この詩に私が次韻した。

少年鞍馬勤遠行、[若いときは馬にまたがって遠くに行き]
臥聞嚙草風雨聲、[夜には馬が草を噛む音を寢床で聞いた]
見此忽思短策横。[転んだ馬を見て思うのは、横たえたままの鞭だ]
十年脾肉磨欲透、[十年の間に足の筋肉がすっかり衰えてしまったので]
那更陪君作詩瘦、[黄庭堅の詩に和そうとさらに身を削るようなことはしたくない]
不如芋魁歸飯豆。[芋の蔓と豆の粗末な飯でもいりから食べたいものだ]

門前欲嘶御史驄、[門前で馬が嘶くのは試験期間の終了を告げにきたのだ]
 詔恩三日休老翁、[老いた我が身にこれから三日の休暇が与えられるのだが]
 羨君懷中雙橘紅。[黄庭堅には母上が待っておられるのを羨ましく思う]

さいけい ちようほ し じょかん りようしゅういち
 蔡肇、晁補之、舒渙、廖正一がそれに続いた。それらの全てをここには記さない。
 私は戯れにもう一つ絶句を作った。

竹頭搶地風不举、[地に付くばかりに曲がった竹は風が吹いても頭を挙げない]
 文書堆案睡自語。[採点する答案に埋もれた私も同じように垂れて眠ってしまった]
 看馬欲▲頓風塵、[馬を見て思うのは、とにかく風の中を走って][▲は馬+展]
 亦思帰家洗袍袴。[家に帰って垢にまみれた衣服を洗うことだ]

これらの詩に対して李公麟は笑っていった。

「馬がようやく私の筆に入ってきましたぞ」

紙を取ってさっと画を描いた。その後これらを記す。

三月六日、びざん眉山の蘇軾が書く。

【補足】[(1) 画を得意とする李公麟ら気の置けない仲間たちとともに楽しんだひとときをこの短文に記録した。試験監督として1カ月余りも続いた拘束から解放されて、わいわい賑やかに詩を詠み合い、絵筆を振ったのだろう。詩は意味のよくわからないところがあるので、大意を示した「ずっぽ訳」である。(2) これより3日前の日付がある文章をすでに作品番号 06-2-080 として見ている。その日までには試院から解放されていたのだろう。なお、蘇軾が試院にいる間も、蘇軾は朝廷に置くべき人物ではないと批判する声がやまずに続いていた]

■ 【08-3-004】 韓康公挽詞三首

【解題】 3月7日、韓絳^{かんじょう} [康公]^{こうこう} [→作品番号 08-3-002] が亡くなった。77歳だった。
1月16日には楽しい酒宴を開いていたのに、たちまちこの世を去ってしまったのである。
蘇軾はこの挽詞を詠んだ。

【訳文】

其の一

故国は高い木々に覆われている、
だから貴いのではない。
王を助け国を興す大臣がいるときにこそ貴いのである。
私は公^{こう} [韓絳]^{かんじょう} よりも後^{おく} れて世を去る者、
公のような老成人 [円熟した大人物] がおられる時代にどうにか間に合った。
公の徳業は文武全般に及び、
公の風流は高位高官を代表した。
公が遊びに巡ったところはいまや公を喪って空しくあるのみ、
あちこちで残された民衆が泣いている。

其の二

公は父子二代にわたって忠清^{おんせい} の徳を顕し、
公は三代の皇帝に仕えて功績があった。
功を成した後も郷里に帰ることなく、
栄誉を極めてからも君主に尽くすことを忘れなかった。

学問は正しい伝統を厳しく守り、
 武威は国境の不穏な空気を鎮めた。
 古代の名臣、韓奕かんえきの後を継ぐ者として、
 全ての官員が優れた仕事をするよう指導されたのだった。

【補足】[最後は韓絳かんじょうと同姓の韓奕かんえきを持ち出して韓絳を讃えたのだが、韓奕がいかなる人物であったかをわざわざ調べなくてもよいだろう。なお韓絳の実像はここに詠まれているほどではなかったようだ]

其の三

公は屋敷の東に部屋を設け、
 後輩たちを呼び寄せ、その人物を見定めるとともに、
 笙歌しょうかをもって白髪しやくはの先輩方も迎え、
 燈火のもと、老いも若きも楽しみを尽くし、
 真夜中に及んで、それぞれ人を添えて帰したのだった。
 ——そうしたことも頭を回らせば一つの夢、
 詩を賦して墨がなお湿っているのを見つつ、
 独り私は涙をぬぐうのである。

【補足】[韓絳かんじょうの宴席で客人たちを楽しませていた魯生ろせい [→作品番号 08-3-002] のような女性は、主人がいなくなった後にどのようなになったのか、それを伝えるものは一切ない。旧来の漢詩文はそうした庶民の実情を描くことが少なく、宋代そうだいに流行した詞がその一部を拾い上げ、宋代に萌芽期を迎えた白話小説みんだいが明代に至って大いに発展したことでようやく庶民の哀歎も文学として掬い取られるようになるのだった]

■【08-3-005】余与李廌方叔相知久矣、領貢挙事、而李不得第、愧甚、作詩送之
与君相従非一日、筆勢翩翩疑可識。

【解題】この詩の題は次の通り。「私は李廌^{り たい} [字は方叔^{あざな ほうしゆく}] とは以前からの長い知り合
いである。私は科挙を執り行い、李廌は合格しなかった。私は非常に^は愧じ、この詩を
もって帰郷する李廌を見送った」。李廌は作品番号08-2-041でも見たように、蘇軾の推
薦を得て世に出ることを願っていた人物である。唐^{とう}の時代であれば、試験委員長が推
す人物は確実に科挙に合格したのだが、科挙^{そうだい}は宋代に入ってから極めて厳格に実施さ
れるようになり、試験委員長であろうとも、知人を有利に扱うようなことは一切でき
ないようになっていた。蘇軾がここで「愧^はじる」としているのは、李廌が書いたはずの優秀な答案を見逃してしまった不明を恥じるという意味である。かつて蘇軾の答
案を特に優れているとして梅堯臣^{ばいぎょうしん}が取り上げていなかったら、蘇軾の人生は大きく変
わっていただろう。

【訳文】

李君と知り合ったのは昨日今日のことではない。

李君の文章の勢い是一目でわかるはずだった。

唐代の李程は普段から李華の文章は優れていると説き、

自信をもってこれは李華の文章であると見抜いた。

私は自信なく迷ってしまったことを^は慚じ、

それからは家に籠っているのだが、

李君は大いに笑って、

「行止[及第か落第か]は天の定めるところ、

あなたが責められることはありません」

と、いってくれる。

このたびの受験生は五千人、

李君には怨みはなく、私には徳がない。

羊を買い、酒を沽^かってせめて李君に謝ろうと思う。

どうか春風の前で私のために十分に酔ってほしい。

家に帰ったなら、雲を凌^{しの}ぐすばらしい詩を賦すがよい。

私が見るに、李君の相は瘦^{そう}せた隠者になるものではないのだ。

■ 【08-3-006】和宋肇遊西池次韻

【解題】都の西側、順天門の外に周囲九里三十歩^{きんめい ち}の金明池があり、皇室の園林として美しく整備され、都の景勝地の一つとなっていた。都の西にあることから西池ともいわれ、広い水域に船を浮かべて水軍の訓練をすることもあった。宋肇^{そうちよう} [→作品番号08-2-051] が金明池で遊んだ詩を詠み、それに次韻した。

【訳文】

皇帝は慈愛と節儉のお心があって外国との戦争をなさらないが、

ここでは千艘の軍船が瀬を下る訓練を指導される。

人は鱧^{もうどう} [軍艦] が飛ぶように動きまわるさまに目を見張り、

仙界の巨大な亀が空に舞うのはかくあるうかと想像する。

西を見れば、我が故郷は三千里の彼方、

回顧すれば、そこを出てよりすでに二十年。

笑ってしまうのは、こうしてちまちまと官職にしがみついていること、

貴君が神仙の地の近くで日々を過ごすのには遠く及ばないのである。

【補足】^{そうちよう ふざん} [宋肇は巫山県の知事として赴任することになっていた。巫山は蘇軾の故郷である蜀^{しよく}にあり、昔から仙人が住むところとして知られていた。この詩の後半はそうしたことに基づいて詠まれている]

■ 【08-3-007】 僕領貢挙未出、錢穆父雪中作詩見及、三月二十日、同游金明池、始見其詩、次韻為答

【解題】この詩の題は、「私が科挙の監督をしていて試院^{しいん}から出られずにいた間に錢^{せん}颯^{きやう} [字の穆父^{あざな ぼくふ}] が雪中の詩を作った。三月二十日に一緒に金明池^{きんめいち}で遊んだところ、初めてその詩を見せてくれた。それで次韻して答えた」。錢颯は作品番号08-3-002で見た「九子母神の夫」である。

【訳文】

私かここに来るのを知って、雪は全て消え去り、
貴君が来るのを待って、花はまた風^{ひるがえ}に飄らないようにしていた。
私は同行の者を避けて一人だけで少しばかり飲んでいたので、
馬で走り来る使いに出会い、貴君のお招きを得ることとなった。
魚竜^{ぎょりゆう} [軍船]が千里を翔けるような絶技に見入るのは、
四朝^{しんめいち} [四人の皇帝の治世]を経た白髪交りの老人である。
かつて遊んだことのある酒店はいまもこぼれておるけれど、
衰えた顔は遙かな時を隔ててしまったものだ。

【補足】 [(1) 金明池^{きんめいち}は都の一大景勝地で、試験委員長の大役から解放されて、気の置けない友人とそこに遊べば、春の風光を大いに愛でる詩が生まれてよいはずなのだが、この詩はおざなりの感がある。ここまで蘇軾が都で詠んだ詩を改めて振り返ると、

都の風光を喜ぶような詩が一つもなかったことに気づくであろう。例えば、杭州^{こう}に赴任したときと比べると、その差は歴然としている。蘇軾には、当時世界第一の大都会であった都開封^{かいほう}に憧れるような気持ちがなかったことは、作品番号 01-1-006 で見た詩から一貫しているように思われる。(2) この詩には3月20日との日付があり、翌日の21日^{こうぶんちゆう}に孔文仲が亡くなっている。孔文仲は蘇軾とともに科挙の試験委員を務め、その任を終えたばかりだった。蘇軾は孔文仲の棺を撫して、「このような勁直^{けいちよく}の士はもういない」と嘆いたという。(3) さらに翌日の3月22日が、この年の科挙の最終試験の合格発表であった。蘇軾が関わったのは科挙の二次試験で、皇帝自身が行う最終の三次試験は3月10日に実施された。合格者は首席^{りじょうねい}の李常寧ら508人であった。歐陽脩^{おうようしゆう}は試験委員長^{とうそうほちたいか}のときに唐宋八大家に選ばれるような門下生を3人も得たが、残念ながら蘇軾の場合には、合格者の中に後世に燦然とその名を輝かすような者はいなかった。それはやはり、歐陽脩^{おうようしゆう}のときは北宋がまさに最盛期に向かいつつあったのに対して、蘇軾のときは北宋がすでに右肩下がりになっていたことが大きく影響しているのだろう。北宋は、新法党と旧法党の争い、そして旧法党内の争い、さらに新法党と旧法党の争いの再燃といった具合に政争に明け暮れたために、いくら科挙で優秀な人材を集めても、その力を結集できなくて、急速に国勢を衰えさせてしまった。なお、このときの合格者の中に、章惇^{しょうてん} [蘇軾のかつての親友] の息子の章援^{しょうえん}や、周敦頤^{しゅうとんい} [著名な大学者] の息子の周燾^{しゅうとう}がいて、次の第9章で2人との交流を見ることになる]

■ 【08-3-008】与李端伯宝文

【**解説**】李之純^{りしじゆん} [字は端伯^{あざな たんはく}] に宛てた手紙。李之純は官界の先輩で、このとき成都府の知事であった。

【訳文】

貴君が河朔におられたときにお手紙を差し上げて以降、紛紛とした声はやむことなく、次のお手紙を書くとができずいきました。このところは成都を治められて暇も多いとのこと、まことにお喜び申し上げます。蜀はもとより治めやすいところで、もしも擾す者がおりましても、貴君が深く民情を御承知の上からは民は貴君の政に素直に服すはずです。想い見ますのは、貴君がそちらに赴かれてから、談笑されるうちに日々事もなく治まり、春のお出ましを楽しまれておられる御様子、それにお供する方々の末に私がかわれるのを望むばかりです。弟は片舎に籠っていまはまたお手紙を記すことができずいいます。

【補足】 [この手紙は、文章の表面的な意味をそのまま受け止めるべきではなく、成都の民衆に優しく接してくれるよう李之純に特に頼んだものであると読むべきであろう。約30年前に成都知事の王素に送った手紙 [→作品番号 01-2-021] を思い起こさせるものがあり、蘇軾の強い郷土愛を感じることができる。ただし、この郷土を思う気持ち、保守派内の派閥争いの一因になっていたのは否定できない]

■ 【08-3-009】 書艾宣画四首

【解題】 蘇軾よりも少し前の時代に活躍した艾宣という画師がいた。その画を見て詠んだ詩。画によって刺激を受けた蘇軾の感性が、該博な知識と連動して生み出された作品で、我々がそれと共鳴するのはたやすいことではない。4首のうちから1首だけを訳す。

【訳文】

其三 杏花白鷗あんず やまぎし[杏の花と白い鷗]

天の工は、誰のために花の妍あでやかさを刻むのか、

蕊しべを抱えて群がる蜂たちのためなのか。

人が酒を手^とに把^とって春を惜しんでもすべ^とては夢……

この閑客^{かんきゃく}〔画中の白い^{やまじ}鷗^うのこと〕が永遠に見続けているのには及ばない。

【補足】〔終わりの句は、画中の春は永遠に続くということをいっているのだろう〕

■ 【08-3-010】次許沖元韻送成都高士敦鈴轄

【解題】4月2日、高士敦^{こう し とん}が国境地帯の治安確保の任務^{せいと}を帯びて成都^{きょうしやう}に行くのを許将^{きょしやう}〔字は沖元^{あぎな ちゆうげん}〕が見送った詩に次韻した。高士敦は高太皇太后の従弟であることから官職を授かった人物。蘇軾^{そ しゃく}は2年前^{げんゆう}の元祐元年8月、遼国皇帝^{りやうこく}の誕生日を祝賀する使者に選ばれ、高士敦が副使とされた。しかし、何らかの理由で蘇軾は辞退し、代わって林旦^{りんたん}が正使、高士敦が副使となって遼国に派遣された。そのことがこの詩の中に詠み込まれている。宋と遼は、正月とそれぞれの皇帝の誕生日などに祝賀の使者を交換し合い〔→作品番号 08-1-061〕、友好関係を維持する上で大切な年中行事となっていた。

【訳文】

高君^{こう くん}〔高士敦^{こう し とん}〕は皇族との縁^{ゆかり}によって官職に就いた、

地位の高下などはもとより虚名、

高君は真に優れた人物である。

私はものぐさのために高君とともに遼国^{りやうこく}に行くのを辞退し、

北へと飛び行く鴻^{おおとり}を眺めつつ、

高君が堂々の使節として遼国に迎えられるのを想見したのだった。

高君は、高い才能^{くんばつ}は勳閥とは無関係であることを証明し、

帰り来ると、あり余る力^{しよく}で蜀の治安を担当することとなった。

高君が成都に行くなら、

西に遠く雪に覆われた山を臨み見ても、
もはやそこに変事を知らせる^{のろし}烽が上がることはない。
だから、高君は日々酒樽の横で過ごしていればよいのである。

【補足】[4月4日に蘇軾が非常に感動したと伝えられる出来事があった。それはいろいろな書物に記されているが、ここでは邵博^{しょうはく}の随筆『邵氏聞見後録』[→作品番号08-1-051]の記事を見ておこう]

【訳文】

しょうはく しやう し ぶんけんこうろく
邵博：『邵氏聞見後録』

蘇軾が翰林院にいたときのこと、ある夕暮れ時^{ちゆうし}、中使[皇帝の使いの宦官]が来て、お召しであるといつた。すでに半分酔い心地であったが、急いで水を汲んで口を漱ぎ、少し意識をはっきりさせると、東門から入って小殿で皇帝のお出ましを待った。

御簾の内から声か^{りよこうちよ}し、呂公著を(宰相に加えて)司空平章軍国重事に、呂大防と范純仁を左右僕射^{しや}[宰相]にするとの仰せがあった。三人が承ると、高太皇太后^{こうたいこうたいこう}がいわれた。

「学士殿[蘇軾]は前年は何の官にあったのか」

蘇軾は答えた。

わたし じよしやうだんねんふくし
「臣は前年は汝州団練副使でございました」

「いまは何の官にあるのか」

かたしけな
「忝くも翰林学士を仰せつかっております」

「何をもってこれほど俄かに翰林学士になったのか知っておるか」

おぼ め
「太皇太后陛下の思し召しにございましょうか」

「私は何も関わっておりません」

「では、皇帝陛下の思し召しにございましょうか」

「陛下も何も関わっておられません」

「よもや大臣の間から臣を薦めてくださったのでありましょうか」

「大臣も何も関わっていません」

蘇軾は驚き、

「臣は無遠慮でありますけれど、自分から敢えて望むようなことはしておりません」

高太皇太后はいわれた。

「学士殿にこのことをずっとお伝えたく思っておりました。これは先の皇帝陛下の御心によるものです。先帝はお食事の間も箸を止めて文章を御覧になり、いま読んでいたものについてそっと私に向かってお語りになることがありました。そのようなときは、必ず学士殿の作でありました。先帝はそのたびに毎回『奇才である、奇才である』とおっしゃられました。しかし、学士殿を十分にお用いなることなく亡くなられてしまったのです」

蘇軾は思わず泣き声を挙げ、何もいなくなった。高太皇太后も皇帝も泣かれ、他の者も皆泣いた。すでに任命が終わると、皆は茶を賜わった。

高太皇太后は蘇軾にいわれた。

「学士殿はどうかお上のために心を尽くし、先帝の御恩に報われるように」

蘇軾は座を下って拝した。

高太皇太后の御指示で、御前の金の燭台が取られ、それによって蘇軾は翰林院に送られた。

以上のことを蘇軾は王鞏に語った。

【補足】[(1) 蘇軾が答えた汝州団練副使は、黄州安置から罪を赦されて完全に復権する前のかりそめの地位であった。高太皇太后の言葉は、東の坡を耕していたころからしたら、夢にも聞けるようなものではないので、蘇軾が感動したのも当然であった。都における蘇軾の栄光のシーンである。(2) このときの任命によって、宰相は文彦博、呂公著、呂大防、范純仁の4人になった。いずれも保守派である]

■【08-3-011】跋宋漢傑画

【解題】この文章は作品番号 05-4-114 としてすでに見ている。そのときは宋子房^{そうしぼう あざな} [字は漢傑^{かんけつ}] の伯父^{そうてき}の宋迪^{あざな} [字は復古^{ふくこ}] [→作品番号05-4-113] が主役として読んでいたもので、ここで宋子房を主役として読み直しておきたい。都に滞在する宋子房と会い、その画を見ての感想である。

【訳文】

私^{わたくし}はかつて宋迪君^{そうてき} [宋子房^{そうしぼう}の伯父^{ふくこ}]と遊び、その画^え『瀟湘晩景^{しょうしょうばんけい}』を見て三首の詩を作った。その一部に、

径遙趨後嶼、^{はし}〔曲がりかねった道は後ろの山へと趨り〕

水会赴前溪。〔水は前の溪へと赴いて合流する〕

と、あった。それ見て、宋迪君はいった。

「君も画を描くのだね」

その甥^{せう}の宋子房もまた画を学んでいる。これから数年もすれば宋迪君に並ぶようになるだろう。

元祐三年四月五日、書く。^{げんゆう}

【補足】 [かつて宋迪^{そうてき}の画を詠んだ三首の詩から、蘇軾は二句だけをこの文章に引いている。実は、作品番号 05-4-113 では訳者の理解が及ばないので割愛した第三首に含まれていて、この二句だけなら意味は明快である。画に描かれた遠近感を巧みに言葉で表現したもので、それが、「君も画を描くのだね」という宋迪の言葉を引き出したということになる]

■ 【08-3-012】 又跋漢傑画山二首

【解題】宋子房〔字は漢傑〕の画はどうであったのか。同じときに書いた二つの短文が残っている。なお、宋子房は、蘇軾が初めて官職に就いて赴任した鳳翔府で知事であった宋選〔→作品番号 02-1-018〕の息子である。つまり、蘇軾の最初の上官として特に蘇軾を厚遇してくれた人の子であるから、ここの画評はやや甘いのかもかもしれない。

【訳文】

(1) 唐代の人である王維、李思訓の流れの人々が描いた山川峰麓は、自ずから変化に富み、蕭然として出塵の姿があり、しほばその間に雲が描かれ、空に浮くその雲は遠く霞み、一羽の鳥が夕日の向こうへと飛び行き、江天の外へとまさに消え去ろうとしている。世の人々はこれを手本とし、唐人の画の典型として窮められたのである。

近年では、ただ范寛だけがこの古法をやや残しているものの、わずかなから俗気がある。宋子房のこの山の画は、不古不今、新意を少し出して、これをさらに極めるならば、山に色が著くかのようになるであろう。

(2) 士人の画を観ると、天下の名馬を閲るかのようで、いかなるところにも到ろうとする意気が感じられる。画工が描いたものは、往往にしてやたらと鞭や毛皮や飼葉桶や秣を並べて、数尺の巻物を埋めているだけで、優れたところが一点もない。宋子房の画は真に士人の画である。

■ 【08-3-013】 謝宋漢傑惠李承晏墨

【解題】宋子房〔字は漢傑〕から李承晏の墨が贈られたので、その謝礼の詩。李承晏は墨を作る名手であったのだろう。

【訳文】

年老いた松を焼き尽すと軽い花のような煤となる。

それに墨にする妙法は唐代の李超とうたい りちょうに始まった。

それを受け継いだこの墨は、

翠色スズリのような黒、冷やかな光沢、

それが何に似るかといったら、

寒空から降りてきた鴉の翼のような女性の髪であろうか。

■ 【08-3-014】 与李方叔

【解題】 李麿りたい あざな [字は方叔ほうしゆく] [→作品番号 08-3-005] に送ったメッセージ。

【訳文】

このところ連日、殿門に伺候し、お会いするのを果たせずにおります。お手紙をいただき、お変わりないとのこと。明日は韓康公かんこうこう かんこう [韓絳] の弔問に伺い、晩には家に帰ります。もし貴君の御都合がよろしければ、夜に訪問してお別れ前のお話ができるであります。

【補足】 [李麿りたいは科挙に不合格になってから後も、韓絳かんこう こうこう [康公] [→作品番号 08-3-004] が亡くなったころまでは都に滞在していたのだろう。多忙ななかでも、後輩を思う蘇軾の心遣いがわかる]

■ 【08-3-015】 次韻子由五月一日同軫対

【解題】 蘇軾を何とかして陥れようとする者は、あれがだめならこれと、次々にほじくり出し、このころは科挙を巡って不届きなことがあったとして趙挺之ちやうていし 之らの批判にさ

らされていた。蘇軾は弟とともに反論を記して5月1日に朝廷に提出した。そのことを弟が詩に詠んだので次韻した。

【訳文】

漢の時代に、賈宜は意を決して思うところを記して皇帝に差し出した――

僕らもまた同じと、堂々と正しいことを論じるだけであって、

そうするのは、農夫や樵きこりに笑われないためである。

唐の高祖皇帝は、晋陽で隋を討つための旗揚げをした――

そのとき、高祖皇帝は「これは我らのためにだけにするのではない」といった、

天下のことを思う天子のお言葉を僕らも聞けるに違いない。

唐朝は五月一日を皇帝が文武百官と顔を合わせる日と定めた、

まさに今日は五月一日である。

僕らの半生の出处進退は常に憂患とともにあり、

郷里に帰るのが上策であることは早くからわかっていた。

それでも、「後生こうせい畏るべし」、後に続く者たちの評価を思わずにはいられない。

ああ、それにしても僕は衰えてしまった。

僕は見くびられたのか、それとも見かけ倒しだったのか。

■ 【08-3-016】張士遜中孔道輔

【解題】蘇頌そしやう [字は子容] から、50年ほど前の事件の裏話を聞き、それを記録した文章。馮士元ふうしげんという人物がからんだスキャンダルで、その告発をした孔道輔こうどうほが途中で日和ったために失脚となった。政争の渦中であつた蘇軾としては、身につまされるものがあつただろう。蘇頌の名は作品番号 05-3-038 などで見えていて、蘇軾の先輩で、北

宋^{そう}第一の機械学者とされている。

【訳文】

かつて孔道輔^{こうどうほ}が御史中丞^{ぎょしちゆうじゆう}であったときに、馮士元^{ふうしげん}の事件を審理^{おもん}し、人に阿ることなく法に従って判断を下した。仁宗皇帝^{じんそう}はそれを称え、孔道輔^{こうどうほ}を高位に就けようとした。時の大臣は馮士元^{ふうしげん}と利を通じ合っていて、特に宰相^{ていりん}の程琳^{ちやうりん}が最もひどかった。孔道輔^{こうどうほ}がその実情を掴んだとき、張士遜^{ちやうしそん}は不快に感じ、孔道輔^{こうどうほ}を陥れようとした。皇帝^{ていこう}は孔道輔^{こうどうほ}が作成^{ちやうししきやう}した書類を中書省^{ちゆうししきやう}に送るよう指示した。孔道輔^{こうどうほ}が中書省^{ちゆうししきやう}に行く途中で、張士遜^{ちやうしそん}はそれを引き止めてしばし語り、おもむろに、「貴君は間もなく大きな地位に就くであります」と、いった。孔道輔^{こうどうほ}が喜ぶと、張士遜^{ちやうしそん}は、「貴君がこのようにまでなったのは、誰の力によるのか御存知でしょうか。程公^{ちやうこう}〔程琳^{ちやうりん}〕がいらっしゃらなければこれはならなかったであります」と、いった。孔道輔^{こうどうほ}はうなだれ、程琳^{ちやうりん}には徳があると考え、己の行為を取した。日を置かずして孔道輔^{こうどうほ}は皇帝^{ていこう}の前で、力を尽して程琳^{ちやうりん}を救おうとした。皇帝^{ていこう}はひどく立腹し、程琳^{ちやうりん}を罰するとともに、孔道輔^{こうどうほ}を左遷して都の外に出した。孔道輔^{こうどうほ}は張士遜^{ちやうしそん}に陥れられたと知り、憤慨の余り病気になる、赴任する途中で死んでしまった。

元祐^{げんゆう}三年五月三日、これを蘇頌^{そしやう}から聞いた。

■ 【08-3-017】 録陶淵明詩

【解題】 このころ歐陽脩^{おうようしゆう}の息子の歐陽棐^{おうようひ}〔字は叔弼^{あざな しゆくひつ}〕も朝廷にいて、若干の交流があった。そのことが記されている短文。最初に陶淵明^{とうえんめい}の詩をそのまま掲げている。

【訳文】

清晨聞叩門、[すがすがしい朝、門を叩くのが聞こえた]

倒裳往自開。[あわてて衣をさかさまにひっかけて、門を開いた]

問子為誰与、[「どなたでしたか」と尋ねると]

田父有好懐。[気のよい農家のおやじさんで]

壺漿遠見候、[壺に酒を入れて、遠くから様子を見にきてくれたのだった]

疑我与時乖。[私が時世に背を向けているのをいぶかしく思っ

襤縷茅檐下、[「茅葺屋根の下での襤縷おんぼろの日々は]

未足為高棲。[高尚なお暮らしとはいえますまい]

一世皆尚同、[世間は、みんなが同じようにするのが結構であるとしておるのです]

願君汨其泥。[あなたも、世俗の泥をかぶるのがよいのではありませんかな]という]

深感父老言、[先輩のお言葉に深く感じ入ります]

稟氣寡所諧。[それでも、私のもって生まれた性質で、うまく合わせるのが不得手なのです]

紆轡誠可學、[たづなを取り直して、進路を曲げるよう努めるべきなのではないですか]

違己詎非迷。[自身をいつわるのは、迷いというものなのではないでしょうか]

且共飲此飲、[まあ、それはそれとして、これを飲んで楽しみましょう]

吾駕不可回。[私の車は方向転換がきかないのです]

この詩を欧陽棐君は愛し、私もまた愛するものである。

私はかつてこのようなことをいった。

「言葉が心に発して、口を衝いて出ようとする。これを吐き出すと人に逆らうことになる。これを呑み込むと己に逆らうことになる。ならばどうするのか。むしろ人に逆らうのがよい。だから、私はついにそれを吐いてしまう」

陶淵明のこの詩の意は謀らずもそれと合致する。それでこの詩を書いておく。

【補足】〔(1) 陶淵明とうえんめいのこの詩は、『飲酒』という題の連作の第九首である。ひとつ前の文章と合わせて読むと、蘇軾そたいの覚悟が見えてくる。(2) 後に蘇軾の次男の蘇迨おうが歐

ようひ
陽菜の娘と結婚するのを第10章で見るようになる]

■ 【08-3-018】 与王慶源

【解題】 郷里おうわいきにいる王淮奇 [字は慶源] [→作品番号 06-1-084] に宛てた手紙。

【訳文】

御所望(ねがい)の紅あざなの帯けいげんを一条ここにお送ります。翁[王淮奇]が私にこれをお求めになったと、そこらの連中が聞いたなら、なんやかやといい出すかもしれません。好きにさせておけということでありましょうか。私の詩を一首と、黄庭堅君と秦観君の二首も添えます。いま詩文をもって世に名のある者がそれぞれ一首ずつ賦してくれたのです。『黄素経』一卷を写し、合わせて孫子発君[字は宣徳]に託してお送ります。……

【補足】 [郷里の方に行く孫子発に託して王淮奇にいろいろなものを贈ったのである。その経緯は次の詩の題に記されている]

■ 【08-3-019】 慶源宣義王丈、以累举得官、為洪雅主簿、雅州戸掾。遇吏民如家人、人安楽之。既謝事、居眉之青神瑞草橋、放懷自得。有書来求紅帯、既以遺之、且作詩為戯。請黄魯直学士、秦少游賢良各為賦一首、為老人光華

【解題】 長い詩の題は次の通り。「王淮奇 [字は慶源] は、しばしば科挙に応じた末にようやく官職を獲得し、洪雅の主簿、雅州の戸掾となった。民衆や下役人に対して家族のように接したので人々は喜んだ。すでに職を辞め、眉州青神県の瑞草橋に住み、悠々自適の暮らしを送っている。老人から手紙がきて紅くれないの帯を求めたので、それを贈り、戯れの詩を作った。黄庭堅と秦観にも一首ずつ作ってもらい、老人に華を添えることにした」。かつて王淮奇に宛てた手紙を作品番号 06-1-084 などで見えてきたが、そ

れらからは王淮奇が官職に就いている様子は窺えなかったので、最近になってようやく短期間ながらも念願を果たせたのだろう。「紅の帯」の意味するところはよくわからないが、職を退いた老人が華やかに身を飾るためのもので、それを都にいる蘇軾から贈られたならこの上ない名誉であるということなのだろう。郷里の先輩を大切に思う蘇軾は紅の帯だけでなく、こうていけん しんかん黄庭堅と秦觀にも詩を作らせた。なお秦觀はさい蔡州の学校の教授を務めていたので [→作品番号 08-1-059]、何らかの用事があってこのころに都にきていのだろうか。

【訳文】

貴君は書生のまま、霜に遭った葉のように枯れるところであった。

かろ^ろて官職を得ると、

子のように民を遇し、我が家の使用人のように下役人に接したので、

人々は貴君のことをお役人様として見上げるようなことはなかった。

貴君は、「自分はたまたま字が読める農夫であるだけなのだ」とっていた。

いつまでも貧乏であったので妻は泣き、子供は飢えて叫ぶし、

時にやじん野人が来て馴れ馴れしく貴君の髭をひっぱったりもした。

貴君は、役人としての成績は下の下であると自ら採点して職を辞し、

芋と豆くらいならどこへ行ってもついてまわるはずだと、

郷里に帰ったのだった。

いま貴君はずいそうきょう瑞草橋あたりの路を独り歩き、

携えるのは酒の入った壺が一つ、

じぼがん慈姥巖の前で自ら渡し舟を呼び寄せ、

せいいこう青衣江のほりをぶらぶらすると、人々が争って貴君の手を取ろうとする。

春の蚕いちの市いちに行くと、数州から集まってきた人の中に、
貴君が務めた土地の者がいて貴君を取り囲むので、
市の人々は貴君を指さして一体誰なのだろうか怪しむ。
そのとき貴君は、紅い帯に白い髻が映え、老いてなお堂々の姿である。
私は西に帰って貴君の隣に住もうと思う、
垣根を隔て、貴君の歌声に合わせて手を打つのだ、
懐旧の情に空しくふけるようなことはないつもりだ。

【補足】 [(1) 「野人」^{やじん}には、田舎者、庶民、礼儀を知らぬ者、飾らぬ真心のある人などの広い意味がある。都で高い位にあって上辺ばかりを飾る偽善者の真逆の人間である。(2) 詩の中ほどにある慈姥巖じぼがんと青衣江せいいこうは眉州青神県びせいしんの地名。蘇軾の郷里では春に賑やかに蚕の市が開かれることは作品番号 02-3-002 で見ている]

■ 【08-3-020】 次前韻送程六表弟

【解題】 従兄弟ていしげんの程あざな之元とくじゅ [字は德孺とくじゅ] が楚州知事そから江南西路こうなんせい轉運判官ろてんうんはんがんに転任することとなり、蘇軾は先の詩 [→作品番号 08-1-028] に次韻して贈った。

【訳文】

貴君の家の兄弟ほうぎやくはいずれ劣らぬ宝玉揃い、
門には赤い車輪せしの車ふが十台も並び、一万石もの貯えがある。
知事しるしの印ふの竹しるしの符ふを授ふかっただけでなく、
いずれは尚書しょうしょの位しの者しが履くつく馬くつも頂戴くつすることになるだろう。
先の年の災害時に、貴君は官の倉庫を開いて窮民を救い、
行く先々で武器を売って農産を増やす策を実施した。

都に帰ってくると、己の功績については口を閉ざしたまま何もいわず、
すぐにまた長江ちやうこうを渡って別の任地に向かうことになった。

私は残念に思う――

貴君は才能がありながら十分に用いられていない、
あたかも谷間に聳え立つ松のようだ。

私は全く違う――

役に立つところがないので、いたずらに大きくなれただけの木なのだ。

貴君は頭が白くなっても青い衫しわぎを着て百官の底あたりに置かれている、
それでもどうか腐らずにいてほしい、

旧い薪の上に新しい薪が積まれてゆく例は世間に多い。

思うに、私はかつて江南こうなんの江湖こうこに釣り舟を浮かべ、
無数の山を我が筆の内に収める経験をした。

いまのところは、

降りかかる火の粉を扇で払わなければならないほどの状況にはないけれど、
恐れなければならないのは、

俗世に染まり切って、山の方から出入りを止められてしまうこと。

貴君に頼みたいのは、

江南の老人たちにどうか謝ってほしい、

私が再び会おうといった約束を果たさずに、

空しく都で太陽を仰ぎ見ていることを。

いつか長江しやうに浮かんで蜀しよくへと遡るのだ、

その志はしかとここにある、

長江の水にかけて嘘はいわない。

■ 【08-3-021】 題崔布袋真儀

【解題】20年ほど前に一度見ていた布袋和尚ほてい おしろうの像ざいに書き添えた短文さいはく ごげん ほん。崔白さいはくと呉元瑜ごげん 瑜は当時よく知られた画工であった。かつて見たのは改革政治が始まろうとしていたときで、それからの歳月を思わずにはいられたなかっただろう。

【訳文】

熙寧年間きねいに、画工さいはくの崔白ほていが布袋ごげん 俵の姿を描いたこの画を見せてくれた。その筆は清く、古風で、優れて呉元瑜ごげん 瑜を超えていると思った。

元祐三年七月一日げんゆう びざん、眉山びざんの蘇軾そしが記す。

■ 【08-3-022】 跋盧鴻學士草堂図

【解題】これも画に添えた短文とうだい げんそう ろこう そうどうず。唐代とうだいの玄宗皇帝げんそうのころの盧鴻ろこうが描いた『草堂図』そうどうずに添えた短文。

【訳文】

これは唐とうの盧杞ろき丞相みんしやうや段文昌だんぶんしやうのもとにあった画で、いまは内侍都知ないじとちの劉有方りゆうゆうほう君の家にある。

元祐三年七月げんゆう ほうし、私は北使りゆうこく〔遼国の使者〕の接待役とていえきを都亭駅とていえきで務め、そのときに劉君りゆうきゆうが見せてくれた。

それで詩を賦して書いたのである。息子の迨たいと過かも遠く見にきたので、同じ詩を賦させて書かせた。

【補足】〔(1) 遼国の使者りゆうこくは坤成節こんせいせつ〔皇帝の即位記念日〕を祝うためにきたもので、都との東にある都亭駅とていえきで蘇軾そしはその接待に当たった。(2) 蘇軾そしは詩を賦したところに書いているが、その作品は残っていない〕

■【08-3-023】送周正孺知東川

【解題】7月、周尹^{しゅういん} [字は正孺^{あざな せいじゆ}] [→作品番号08-2-003] が梓州^し [東川^{とうせん}] の知事に任命され、その送別の詩。梓州は蜀^{しよく}に属する地である。

【訳文】

学問を实践する者は、

昔は一郡の知事にでもなれればもう十分な荣誉たとしたもので、

任を終えて帰郷すれば、人々から大いに敬われた。

まして、梓州^しは堂々の土地柄、

千人を引き連れて墓参りに行くほどたくさんの人がいる。

門から村に入るときには、

知事もきちんと車から降り、村の老人たちが迎えに出るくらいに、

礼儀を重んじるころ。

貴君の端正な姿は賢人とされた漢の何武^{かん かぶ}のようで、

司馬相如^{しば そうじょ}を知事として迎えるのを人々が誇りとしたことなど物の数ではない。

清らかに世の中が治まっているときには、

人を養うことが大切で、

木だって育て方によってはどれもが有用なものになる。

貴君に一郡を指揮する力量があるのに比べ、

私自身を顧みると、丘に帰って耕すのがよく、

職を去って悔いないことこそが勇氣ある決断なのだ。

貴君に先立って帰るべきで、

廉潔を慕って退くといえば聞こえがよいけれど、

実のところは、自分が衰えて役立たずだとわかっているのだ。

しよく
蜀の地では、知事になった人物の画を描く習慣があるから、

貴君の画の隣に並べてもらえるよう、

先に我が画を用意して待つつもりである。

【補足】しよく [蜀に関係するとなると蘇軾も力が入るのか、この詩と同じ韻を用いてもう1首送別の詩を周尹しゅういんに贈っている。煩を厭い 訳は割愛する]

■ 【08-3-024】 楽苦説

【解題】 楽と苦について考察。

【訳文】

楽な事を慕い、苦しい事を畏れる。これは己の身にまだ苦や楽が至っていないときの心持ちである。

すでに苦や楽が至り、身をもってその中にあるときには、慕うとか畏れるとかの心持ちなどあるはずもない。まして、苦や楽が過ぎ去った後には、慕うとか畏れるとかそのようなものはどこにもない。

声を尋ねる、影を捕らえる、風に繋ぐ、夢を追う——この四者は上に記したことに似ているけれど、声、影、風、夢はまたしも彷彿としてそこに存在している。

楽な事を慕い、苦しい事を畏れる——このことばかりを考え過ぎるのは病のものである。そのような病をどのように治せばよいのかと思案を重ねるのなら、その先に楽な事が得られるのであろう。

いま理屈でもって諸君等に語ろうとしてもそれは難しい。

げんゆう
元祐三年八月五日、書く。

【補足】 [理屈では語りにくいことを書いている文章であるから、訳文は原文から離れずに作りつつもはなはだ自信がない。問題は どうしてこの時期にこのようなことを書いたのかということだ。黄州に流され、いま朝廷の高官となっているのは、普通に

いえば苦から楽への大転換を経て、得意の最中であってよいはずなのだが、前の幾つかの詩でも見たように、蘇軾は次の苦がすぐそこに、もしくはすでにそこにあると感じていたのだろう]

■【08-3-025】虚飄飄

【解題】虚しく飄飄とするもの〔実態なくゆらゆらするもの〕を詠んだ詩。これだけを見ると、一種の物尽くしの戯れ歌、あるいは俗な教訓詩のようだが、この一連の詩文と合わせるといささか味わいが違ってくるであろう。

【訳文】

虚飄飄、〔虚しく飄飄とするもの〕

画檐蛛結網、〔軒端に結ばれた蜘蛛の網〕

銀漢鵲成橋。〔天の川を渡るという鵲の橋〕

塵漬雨桐葉、〔塵を漬すようにして降る雨に落ちる桐の葉〕

霜飛風柳條。〔霜を飛ばす風に揺れる柳の枝〕

露凝残点見紅日、〔ぼつんと残った露が紅い日を見るとき〕

星曳余光横碧霄。〔星がわずかな光を曳いて青空に横たわるとき〕

虚飄飄、〔虚しく飄飄とするものだって〕

比浮名利猶堅牢。〔浮つた名利に比べたらどれも実に堅牢なものだ〕

【補足】〔この詩に黄庭堅と秦觀が和し、海原に浮かぶ蜃気楼とか、春の水に解ける氷の橋とか、虚しく飄飄とするものをさらに列挙している〕

■【08-3-026】相国寺題名

【**解題**】^{そう}宋の都の第一の寺として名高^{そうこくじ}い相国寺を訪れた記録。

【**訳文**】

蘇軾、蘇轍、孫敏行、秦觀とともに相国寺にきて、王誥が描いた墨竹を見た。申先生も来られた。

^{げんゆう}元祐三年八月五日、申先生は一百一歳である。

【**補足**】^{そんびんこう} [孫敏行は官員仲間、^{しんかん} 秦觀はこのころまで都にいて蔡州に帰ったようだ。

^{おうしん}王誥 [→作品番号 08-2-061] は身分が高く、風雅を愛し、後で見るように画もなかなかの腕前だった。101歳という^{しんせんせい}申先生は未詳]

■ 【08-3-027】 礪石庵戯贈湛庵主

【**解題**】^{そうこくじ} 相国寺の礪石庵の^{けんあんしゆ}湛庵主に贈った戯れの詩。湛庵主の詳しいことはわからない。

【**訳文**】

年の初めには^{ほこうきょう}保康橋の上で夜に燈籠を観て、

夏には^{けつせきあん}礪石庵の^{いせ}巖の前で氷のような水を飲む。

山林の趣をもつて町の市の^{おむぎ}雑踏を笑わなくていい、

この老人[蘇軾]の手の内にも^{うどう}烏藤[杖のことで、山野を歩く意を宿している]があるのだから。

【**補足**】 [蘇軾には都の名所を詠んだ詩がほとんどない理由をここから読み取ることができなくもない。都の上元節^{じょうげんせつ}の夜景は無数の燈籠で飾られ、当時の世界で並ぶもののない盛観であった。相国寺境内では定期的に市が開かれて、その賑やかさもまた世界屈指のものであった。それらを楽しむよりも、蘇軾はむしろ^{うどう}烏藤を手^{うどう}に山林を歩くことの方は自身にとって価値のあることだと考えていたのである]

■ 【08-3-028】 和王晋卿題李伯時画馬

【解題】^{り こうりん あざな はくじ}李公麟 [字は伯時] [→作品番号 08-3-003] が描いた馬の画を見て^{おうしん あざな}王誥 [字は晋卿] [→作品番号 08-3-026] が詩を詠んだのでそれに次韻した。

【訳文】

飛脚のもとには良馬がある、
 貴君はそんなものに目を向けない。
 紙の上に収められたこの^{しんこつ}駿骨[馬のこと]、
 果たしてどこから来たのたろうか。
 ひとたび鞭を当てられたならば、
 肉を翻して蟻塚をひらりと跳び越え、
 沙漠の地を縦横に駆け抜けるであろう。
 そのようなときに巡り合えない不遇を嘆くのは、
 馬ばかりではない。

【補足】 [同じころに^{り こうりん}李公麟の馬の画について詠んだ詩がもう一首あるが、訳は割愛する]

■ 【08-3-029】 題晁無咎藏画馬

【解題】^{ちやう ほ し あざな む きやう}晁補之 [字は無咎] [→作品番号 08-2-037] はいろいろな画を持っていたようで、これは馬の画に添えた短文。

【訳文】

晁補之ちやうほしが所蔵するこの画さんたんには、八頭の野生の馬が描かれ、山や谷の間に見え隠れしている。惨淡とした雰囲気りゅうそうげんで、柳宗元りゅうそうげんがいうところの「風鬃霧鬣ふうそうむりょう、千里相角せんりあいかくす」[たてがみをなびかせて千里を競い走る]の趣おもむきがある。しかし、その筆法は不器用で、遠い韻しんべを知る人ではあるものの巧みではない。

元祐三年げんゆう、宋景年そうけいねんと張耒ちやうらいとともに観た。

【補足】[宋景年 [字は遐叔] は当時朝廷にいた人で、張耒 [字は文潜] [→作品番号 08-2-043] は晁補之とともに「蘇門四学士そもんしがつくし」の一人である]

■ 【08-3-030】 自跋石恪画維摩贊、魚枕冠頌

【解題】自作の贊および頌歌を書き、それにこの跋文を加えた。贊せきかくは石恪いせきかくが画いた維摩像ゆいに添えたもの、頌歌は魚枕冠ぎょしやくかんを称えたもので、前者は作品番号 06-5-018 で、後者は作品番号 06-5-024 見ている。

【訳文】

私は黄州こうにいたときに、この二つの作品を戯れげんに作り、次第に忘れてしまった。元祐三年八月二十九日、同僚と早くに出勤し、独りぎょくどうで玉堂に坐ざっていて、たちまちこの二首を思い出した。それでここに記録しておく。

翰林学士かんりんがくし、眉山びざんの蘇軾、記す。

【補足】[職場で不意に記憶が蘇って書き残したことで、この二篇はいまに伝わったのである]

■ 【08-3-031】 跋送石昌言引

【解題】父蘇洵そじゆんの同郷の先輩せきようきゆうに石揚休あざな [字は昌言] がいた。石康伯せきこうはく [→作品番号 06-1-108、08-1-009] の父である。石揚休は朝廷の高い位りように昇り、皇帝の使者として遼

くに派遣されたことがあり、蘇洵はそのときに送別の文章を作った。それを石揚休に渡すために筆を執って清書したのは蘇軾で、嘉祐元年〔1056年〕9月19日のことで、蘇軾は21歳で科挙の受験のために都に滞在中であった。それから32年を経て、蘇軾は再び自分が記した父の文章を見て、この跋文を書き添えた。跋文を読む前に、もとの蘇洵の文章を見ておこう。これは蘇洵の代表作としてよく知られている。

【訳文】

蘇洵：『石昌言使北引』

石揚休が科挙の一次試験に初めて合格したのは、私がほんの五、六歳のころで、私はまだ学問を習っていなかった。思い出せるのは、そこらの子供たちと父のもとで遊んでいたときに、石揚休が傍らから棗や栗の実を手にとって私に食べさせてくれたことだ。家が近く、また親戚でもあることから、非常に親しんでいたのである。

石揚休は一次試験に合格して以来、日に日に有名になっていった。私は次第に成長し、少しばかり書物を読むことを知るようになり、句を区切って読むことや、音律の規則に敵うように字を並べることを学んだのだが、まだ習熟する前にやめてしまった。石揚休は私が学問をやめたと聞いて、私には何もいわなかったのだが、その心の内を察するに、きっとひどく残念に思っていたのだろう。

十余年後に石揚休は第四番目の成績で科挙の最終試験に合格し、地方官として各地を巡り、郷里に帰ってくることはなかった。私は大人になり、あるとき感じるものがあって、それまでの己を折って、再び学び始めた。

それから数年して都に行き、石揚休と長安で会い、長年の苦労を互いに慰め、かつての通りに楽しく語り合った。私が十数篇の文章を出して見せると、石揚休ははなはだ喜んで、「善し」といつてくれた。私は晩学で師匠もなく、毎日文章をひとり書いてきていたので、心の内では己の未熟さを取じていた。石揚休がそのようにいつてくれて非常に嬉しく思った。

さらに十余年していままた都にくと、石揚休は翰林学士ならびに中書舎人となっていて、天子の使者として万里の外に出ることとなった。強く悍して我が朝に屈しない姿勢を示す遼国に向かって、大きな旆を立て、数百騎を従え、車千乗を連ねて都の門を出て行くのである。その意気はまことに盛んである。

私は思うに、子供であったときに父の傍らで石揚休を見て、将来このようなことになるとは想像すらできなかった。富貴になるかならないかなどは気に掛けるまでもない。私はいまの石揚休を見て独り感じることもある——男児として生まれたからには、將軍にはならなくとも、使者となって言論をもって交渉に勝つならもういことはないのだと。

かつて彭任は富弼に従って遼国に使者として行き、帰ってから後で私にこのようなことをいった。

「国境を出て駅亭に宿を取ると、鎧を身に付けた騎兵が数万騎ばかりも馳せて通過して行った。剣と槊がぶつかり合う音が一晚中続いた。それを聞いて従者は恐れて真っ青になった。明け方になって道に出て無数の馬の跡を見て、心臓がばいばりするのを自分ではどうすることもできなかった」

遼国が中国に対して威を輝かせて惑わすやり方は多くはこの類で、中国の人は事情がよくわからず、ある者は恐れて震え上がり、ある者は言葉を失い、向こうの笑いものになってしまうのである。ああ、何と考えの浅いことではないか。

漢の時代に劉敬は匈奴の冒頓のもとに使者として行ったときに、兵士も馬も隠れていて一切見るのがなかった。そのために皇帝は油断し、平城で匈奴の軍勢に囲まれてしまった。いま遼国のやり方はその逆であるから、中国に対して何かしかけてくる力など実はないとわかる。

孟子はこういった。

「大きな相手を説き伏せるときには、呑んでかかるのがよい」

まして相手は夷狄であるのだから、軽くみてかかれればよいのだ。

以上のことを石揚休に贈る。

【補足】〔(1) 宋は文官優位で、名のある將軍がほとんど現れず、外国に対して軍事

的に常に劣位に立っていた。だから、平和を維持するための外交交渉が重要であった。この文章で蘇洵は、外交交渉を有利に進めるのは戦場での将軍の活躍に勝るとも劣らない重要なことであると、石揚休に説いたのである。(2) 途中で彭任が富弼に従って遼国に行ったときのエピソードが記されている。これは富弼の神道碑 [→作品番号 08-2-012] で見た、遼国との非常に難しい交渉のときのことである。遼国は宋の使者を驚かすために、わざと大げさなデモンストレーションをしたのである。(3) 最後の孟子の言葉は、各国を遊説して苦勞を重ねた孟子ならではのもので、この言葉を選んだのは、独立不羈の精神で己の道を拓いてきた蘇洵にいかにもふさわしい]

【訳文】

右は嘉祐元年九月十九日に我が父が書いた『石揚休が使者として北に行くのを送る』という一文である。この文字は私が二十一歳のときに記し、これは石揚休に贈った原本である。いまは陳師道が所蔵している。

石揚休は詩が上手で、当時そのことで名が知られ、官員としては知制誥にまでなった。

彭任はやはり蜀の人で、富弼に従って遼国に派遣され、靈河県の主簿であったときに亡くなった。石介はかつて彭任についてこのように記した。

「彭任は道をわきまえた人で、背の高さは七尺あり、その膽はその身体以上に大きい。いつも酒店に居て、仲間とともに一日中飲み続ける。聞けば、彭任が遼国に行く使者となったのは、遼国の出方が予測できなかったときのこと、彭任はくささとして酒をあおって店の床を拳で叩き、皮膚が裂けて血がまどばった。かくして自ら志願したのだった。死ぬ気で遼国に向かったのである」

彭任のひととなりはおよそこのようで、人を殺めるばかりの任侠を好んだのだった。

元祐三年九月一日題す。

【補足】 [(1) 蘇軾は自分の筆で記した父の文章を 32 年後に再び見て、いろいろなこ

とを思ったに違いない。蘇軾が筆を執ったのはまだ科挙に合格する前で、自分の将来は全く予想がつかなかった。いまや蘇軾は石揚休せきようきゆうが使者として派遣されたときと同じく翰林学士かんりんがくしならびに中書舎人ちゆうしよしゃじんとなっていて、まさしく遼国に行く可能性もあった〔→作品番号 08-3-010〕。(2) この跋文では蘇軾自身の感慨を記すことはなく、彭任ほうにんについて記している。蘇洵そじゆんの文章をだけを見ると、彭任は臆病者だったかのように思えてしまうので、そうではないことを明らかにしたかったのだろう。(3) 陳師道ちんしどうの名は作品番号 08-2-041 で、石介せきかいの名は作品番号 06-4-070 でそれぞれ見ている]

■ 【08-3-032】送錢穆父出守越州絕句二首

【解題】9月7日、錢勰せんきよう〔字は穆父〕〔→作品番号 08-3-007〕が越州知事に任命され、都を出て行くことになった。これはその送別の詩。錢勰は、朝廷への報告に偽りがあると告発したことが問題視されて地方に出されたのだった。

【訳文】

其の一

公文書に埋もれていると百の憂いが集まってくる。

いまは酒を手にしてひとつ笑おうではないか。

都の人々は硬骨漢を失うのを残念がっているのだが、

会稽かいけい〔越州〕の人々は古の仙人いにしへのような人が来てくれるのを喜んでいる。

其の一

会稽かいけいといえば若耶溪じゃやけいの雲門寺うんもんじ、

唐とうの賀知章がしちやうが亡くなって以来、

見る者もなく蓮の花は空しく開き続けてきた。

私は残念なからなお泥の中になければならないが、

貴君に勧めるのは、

若耶溪に浮かべる船の棹を返して都に戻ってきたりしないように……

【補足】〔賀知章^{が ち しょう}は李白^{り はく}や杜甫^{と ほ}の先輩で、風雅を愛する脱俗的な人物で、高い地位を棄てて会稽^{かい けい}に隠棲した潔さは、心ある士大夫^{し たい ぶ}の慕うところであった〕

■ 【08-3-033】 西江月

【解題】同じ時期に同じく銭勰^{せん きょう}〔字^{あざな}の穆父^{ぼく ぶ}〕に贈った詞。

【訳文】

莫歎平齊落落、〔大業を成した人は零落の中にあっても志を失いませんでした〕

且応去魯遲遲。〔かの孔子^{こうし}にしても故郷を出て行かなければならないときがありました〕

与君各記少年時、〔あなたもわたしも少年の日々からのことを思うなら〕

須信人生如寄。〔まことに人の生^{せい}は寄せるがごときものなのです〕

白髮千茎相送、〔送る者も送られる者も白髪が千本〕

深杯百罰休辭。〔よい詩がでさなければ罰は酒が百杯〕

拍浮何用酒為池。〔酒の池に舟を浮かべて大いに酔おうといった者がいましたが〕

我已為君徳醉。〔すでにわたしはあなたの徳によってすっかり酔わされてしまっています〕

【補足】〔蘇軾の人生哲学「人の生^{せい}は寄せるがごとし」がここで用いられている。それだけ銭勰と心が通じ合うと感じていたのだろう。最後の句の「君の徳の為に酔う」は単なる美辞麗句ではない〕

■ 【08-3-034】 答黄魯直

【解題】黄庭堅^{こうていけん} [字は魯直^{あぎな り ちよく}] [→作品番号 08-3-003] に宛てた手紙。

【訳文】

先日、張耒君と晁補之君が来てくれました。私がしばらく病に臥せているので、貴君も連れてきたかったといっていました。もとより私の願うところです。来てくれるよう手紙を書こうと思ったのですが、ここ両日は座っていると痛みがひどく、その毒がまたおさまらないので、ことに無聊をかこっています。そこに貴君のお手紙と詩を得て、喜びに堪えません。一兩日中には痛みもおさまり、数日のうちに苦しみもなくなるでしょう。人々は病気見舞いにかこつけて訪れようとし、来るといきなり話し始めます。李常君が御史台に召されるとのこと、はなはだ喜ばしく思います。会えばいろいろなことを言い合えるでしょう。……

【補足】 [(1) 最初に蘇門四学士の張耒 [→作品番号 08-3-029] と晁補之 [→作品番号 08-3-003] が病気見舞いにきたことが記してある。このときの病は坐骨神経痛の類でないかと推測されている。(2) ここで李常 [→作品番号 08-2-028] について触れられている。黄庭堅は李常の甥に当たることから特に言及しているのだろう。その後も、李常と親しくしたような痕跡は残されていない]

■ 【08-3-035】 書贈柳仲矩

【解題】柳仲矩^{りゅうちゆうく} に書いて贈った短文。柳仲矩は柳瑾^{りゅうきん} [→作品番号 08-2-008] に繋がる人物であろうと推測されている。

【訳文】

柳仲矩君が共城からきた。官米を大きく丸めて私に食べさせつつ、百泉の奇勝について語ってくれた。

そして、隣に住んでみたらどうかと勧めてくれた。我が心はそれに誘われてすでに太行山の麓に飄然と行ったのであった。

元祐三年九月七日、東坡居士が書く。

【補足】[共城は黄河中流域の町で、北から太行山地が迫ってきて、百泉は名所として知られていた。蘇軾が都の政争に疲れ地方に出て行きたいとぼやいたので、この文章のようなことになったのだろう]

■ 【08-3-036】 文驥字説

【解題】都で急死した文努光 [→作品番号 08-1-049] の子の文驥の名前について記した短文。驥とは駿馬の意味である。

【訳文】

馬は徳に優れているという。馬は蹄を踏んで力を尽し、一方で轡を切って逃れようと智を尽す。その力によって千里を走り、その智によって道に迷う。

文驥は文同の孫、文務光の子、そして蘇轍の外孫である。小名を驥孫といい、それによってその名を驥とした。馬の力の方を称えるのではなく、徳の方を称えよう。それで字を元徳という。

元祐三年、外伯翁の東坡居士が書く。

【補足】[父を早くに亡くした文驥のことを思う蘇軾の気持ち伝わってくる]

■ 【08-3-037】 送程七表弟知泗州

【解題】題にある「程七」は「程六」の弟。つまり、蘇軾の姉の夫であった程之才の弟の程之元 [→作品番号 08-3-020] のそのまた弟の程之邵 [字は懿叔] である。程之邵が泗州知事として赴任することになったのでその送別の詩。

【訳文】

都にいたのでは、

大きな川も広い湖も見ることができない。

とにかく座っているだけでも顔は塵まみれになってしまう。

らくよう
洛陽からくる流れの末に舟を浮かべるなら、

たちまちわいが淮河の南の山々を見ることになる。

どの山も美しく、

ことに暁に鏡のような水面に現れ出る姿は格別である。

新任の知事殿も公文書に埋もれながらも、

山を見てふっと笑みをもらすであろう。

知事殿は天の馬のような人、

朝には北方の地にいたのに、暮れにはもう南方の地にいる。

いまは名馬を見分ける眼力の持ち主がいないので、

馬小屋で虚しく老いてしまうところであったのだが、

ささやかながらも外を駆ける機会を得たのであるから、

盗賊でも不逞の民でも徳をもって化服かふくさせるのがよいであろう。

人に知られないと嘆くことはない、

水辺に臨しむ泗州の古い仏像はきっと見ている。

知事殿は泗州の全てに赤ん坊に対するように愛情を注ぎ、

人の世の細々としたことは浮草のように見て、

万事は川辺の茅ちがやや菅すげのようにさらりと受け流す——

とかくこの人に任せておけばよいという人物なのである。

【補足】〔(1) 詩の始まりの部分は、蘇軾がもともと都の風光をあまり好んでいないことを反映しているのだろう。(2) 詩の終わりの部分はよくわからないので、いつもの「ずっぱ訳」である。(3) 蘇軾はかつて泗州を訪れていて〔→作品番号 07-2-003 など〕、その経験^しを踏まえてこの詩を詠んでいる]

■ 【08-3-038】送曹輔赴閩漕

【解題】曹輔〔字は子方〕が閩州〔福建〕に赴任するのを見送った詩。曹輔とはこのころから交流が始まった。

【訳文】

曹先生は儒者でありつつ、
弱きを助け強きを挫く好男児、
筆の勢いは波を翻すかのようだ。
これまでは、西方の馬が往来する国境近くの町にいて、
砂漠からの強風に儒冠は裂かれるばかり、
槊が横たわる間で詩を詠み、
盾の上で公文書を次々に書き上げていたのだった。
もつぱら遠く行くことを我が事とし、
いま都の紅い塵を浴びたかと思うと、
たちまち巖の潜む急流を越えて南に行くのである。
これまで炙った羊の肉を嚙んでいた口で、
これからは大海原の塩を舐めるのだ。
向こうで荔枝の実をひとたび食べるなら、

もはや首^{うまごやし}箱を盛った皿の事などは忘れてしまう。

私もまた江海^{こうかい}の人[辺鄙なところに生きる者]、

都会は安心して住めるところではない。

常に恐れるのは、青雲の志は遂げられないまま、

虚しく坐して白髪ばかりが増えること。

陶淵明は[「帰去来の辞」]を賦して、談笑のうちに官職を棄てた。

私はいま何をする者なのか、

自ら身^{つな}を索いで自ら独り苦しんでいるのである。

旅行^{そう}く曹先生に問おう——

「清き淮河^{わいが}の秋の水の深さはいまどれほどでしょうか、

私の舟はいつ出発すべきでしょうか」

季節はもう露から霜へと移り、日々に寒くなっている……。

【補足】[「我亦江海人、市朝非所安」[我亦た江海の人、市朝は安ずる所に非ず] や
「今我何為者、索身良独難」[今我は何為る者ぞ、索身良に独り難し] の句はこのこ
ろの蘇軾の真情をよく表したものと見てよいであろう」

■【08-3-039】次韻王郎子立風雨有感

【解題】蘇轍の娘の婿である王適^{おうてき あざな しりゅう} [字は子立] の名はこれまでもしばしば見ているが [→作品番号07-1-004など]、このころは蘇轍とともに都いたようだ。その王適が
「風雨に感じる」という詩を詠んだので次韻した。

【訳文】

人の一生とされる百年も、

一度俯き一度仰向くうちに過ぎ去る。

その間に、寒さと暑さが交互あるじに主となり、

毛皮が重苦しく感じられるようになったかと思うと、

すぐにまた団扇が邪魔さくなる。

栄辱にしてもどちらがよいとかいいち思い間もなく、

これを喪えばそれを獲るといふ具合に入れ替わるのである。

やたらと音を出そうとなければ、琴は永久に壊れることがない。

若者はとかく己を成長させようともせず、

自分は才能を抱いたまま空しく置かれていると呻き声を上げる。

苗を無理に伸ばそうと引っ張るようなことをするよりは、

菜が大きくなるのをゆっり待つ方がずっと益が得られる。

ここに一人の男が世間から離れて静かに暮らしている、

門の外には訪ね来る人の跡もなく、

とうえんめい
陶淵明のように、

衣の穴を結んでも冷たい風が入り込み、

門を塞むしいだ席から雪が吹き込み、

いつも飢えに迫られてしまうのを恐れている。

そんなことは笑い飛ばすがよい、

要するに造物者が君に戯れているだけなのだ。

君のためにこの詩を賦して筆を置くと、

風雨が強くなってきたような気がする。

よそう、君のためには春の上着を作るべきだ、

科挙に合格した祝いの宴に着ることができるよう。

【補足】〔蘇軾のこの詩から察するに、王適おうてきのもとの詩は恐らくかなり感傷的なものであったのだろう。王適は依然として科挙に合格できず、苦しい心理状態にあったようだ。後に見るように、王適はこのほぼ1年後の10月25日に35歳の若さで他界する〕

■ 【08-3-040】 書黄庭内景経尾、并叙

【解説】『黄庭内景経』こうていないけいきょうという道教の経典がある。「黄庭」とは脾臓ひぞうのことで、そこに宿る神の働きによって不老長生が得られるというようなことがこの経典には書いてあるらしい。蘇軾は筆を執って『黄庭内景経』を記し、葆光道師ほうこうどうし〔蹇拱辰けんきょうしん〕に贈った。この詩に添えた跋文も残されているので、その内容を序文の中に適宜補って訳す。

【訳文】

叙
成都の道士の蹇拱辰〔字は翊之〕すなわち葆光道師が廬山に帰ることになった。私は『黄庭内景経』を書いて葆光道師に贈った。竜眠居士〔李公麟〕は先にその経の趣を画に描き、その後で私と葆光道師を描いた。竜眠居士の筆勢は絶妙で世に稀な宝となるもので、感嘆するだけでは足るまいと、これを賛する詩を作った。

【補足】〔李公麟 〔→作品番号 08-3-028〕 は果たしてどのような画を描いたのだろうか〕

【訳文】

太上〔最も尊い〕なる虚皇〔虚の道を説く教祖〕がこの霊妙な経典を出されると、黄庭〔脾臓〕に宿る真人は嬉しさの余り舞い踊った。
髯の道人〔葆光道師〕と老いた儒者〔蘇軾〕がそこに居合わせた。

太上虚皇には髪を束ねた子供がこやかに仕え、
十三人の神がしっかりと警護している。

太上虚皇は堂々のお姿で私に尋ねた。

「そなたは何の縁があってここにおるのか。

朝には心こころが空で、夕べには悟る、

そのような者でなければこの経典を伝えることはできない」

太上虚皇はお立ちになり、

私はその最後に付いて、葆光道師に従って山や谷を越えて行く。

山の隠者たちは私が帰ってきたのを笑って迎える。

人間界に残ってしまった竜眠居士リウミン コジは、さてどうするのだろうか。

■ 【08-3-041】 葆光法師真贊

【解題】上の詩に見た葆光道師ほうこうどうしはどのような人物であったのか。蘇軾が、その肖像画に添えた贊があるので見ておこう。

【訳文】

嗟、この法師あまは四十四歳になり、雌雄の欲を知ることなく、身は都にありながら、己の利欲を営むことがない。体つきは立派ではなく、口から立派な言葉を発することもない。頭はぼさぼさで、本性は鹿のようである。向かおとすところには、鉄でも石でも隔てることはできないし、鬼神でも押し戻すことができない。皇城の門に降り、帝のいるところ見下ろしても、誰も怪しく疑う者はいないであろう。

■ 【08-3-042】 送蹇道士帰廬山

【解題】葆光道師ほうこうどうし [蹇拱辰けんきやうしん] が廬山ろざんに帰るのを見送った詩。

【訳文】

物を知覚するのはたぶん息によるのだろう、

息はどのようにして出たり入ったりするのか。

心が天に遊ぶのなら、何も無い部屋にいても空しいものではない、

心が天に遊ぶのでないときは、目耳鼻の六つの穴ががたがた騒ぎを起す。

葆光道師ほうこうどうしは人から逃れてろざん廬山に入る、

山の中には人はおらず、葆光道師が一人行き来する。

行く者は空くう、還る者は失しつ、

葆光道師の身は行住還るもないところにある。

綿綿めんめんと永遠に微風の絶えることのない山中で、

葆光道師ないたんは内丹[内なる完全性]と外丹がいたん[外からの働きによる完全性]を一瞬のうちに同時に成し遂げる。

人間世界で三千年を経たころに、

葆光道師は鶴にまたがってまた帰ってくるのだろうか。

【補足】[この訳詩は大意さえも示せていない。岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解

『蘇東坡詩集』（1927年）は、この詩を注して、「空を掴むくうつかが如く、雲を捕うくもとらるが如きもの、一貫せる意味は無きものごとの如くである」と記している。訳者がさっぱりわからないのも仕方ないとあきらめよう]

■ 【08-3-043】 李伯時画像跋

【解題】李公麟りこうりん [字は伯時あざなはくじ] [→作品番号 08-3-040] はさらさらと画を描く人であったようで、このような跋文も残されている。

【訳文】

李公麟^{り こうりん}は初めに私の肖像画を描き、そこに己自身の像を描き添え、「殿上二人」と賛を記した。黄庭堅^{こうていけん}と我が弟がその後ろに言葉を書いた。すると、李公麟は私と弟の像を描き、葆光道師^{ほうこうどうし}を導き手とした。皆が山中の人なのである。

蘇軾^{そく}が書く。

■ 【08-3-044】 興国寺浴室院六祖画賛、并叙

【解題】中国の禅宗を発展させた達磨^{だるま}、慧可^{えか}、僧璨^{そうさん}、道信^{どうしん}、弘忍^{こうにん}、慧能^{えのう}の6人の僧を六祖^{ろくそ}という。その六祖を描いた画が都の興国寺^{こうこくじ}にあり、蘇軾^{そく}がその賛を作った。ここでは賛に添えられた序文だけを訳す。

【訳文】

叙

私は嘉祐^{かゆう}年間に初めて科挙の進士科の試験を受けることになり、興国寺^{こうこくじ}の浴室院^{まくしつゐん}の老僧^{らくそう}徳香^{とくこう}のもとに下宿した。浴室院の南に古い建物があり、東西の壁に六祖^{ろくそ}像が画かれていた。東の壁の前には木を組んで楼閣堂宇^{ろうかくどうう}が作られ、それにさざぎられて全体を見ることができなかった。西の壁の三師^{さんし}は、いずれも神宇^{しんう}靖深^{せいしん} [深い精神性を湛える]、中空^{ちゆうくう}外夷^{がいい} [外見は魁夷で内は空である] であって、道を知る者でなければこのように画くことはできまいと感じた。画の上に蜀僧^{しよくそう}の令宗^{れいそう}の筆とあった。私はそのとき令宗の名を知らなかった。我が家に偽蜀^{ぎしよく} [五代十国時代の蜀国] の丘文播^{こうぶんぱ}の筆になる画があり、それと似ていてほとんど区別がつかないくらいであった。それで、私は、「令宗は丘文播を師とした人だろうか」と考え、蜀の老人たちに尋ねたところ、「丘文播^{かん}は漢州^{かん}の人で、弟を丘文暁^{きゆうぶんぎやう}といい、令宗はその異父弟あるいは従弟である」とのことだった。いずれも山水、人物、竹石を画くことを得意と

し、その出来栄こうせんは黄筌くわんそうと句竜くわんりゅう爽そうの間にあった。丘文播きゅうぶんぱの子の丘仁慶きゅうにんけいは花実や羽毛の書き方に優れ、蜀人しゅうじんの趙昌ちやうしょうが師と仰いだ人である。

それから三十一年を経て、中書舍人ちゅうしよしゃじんの彭礪ほうれい君が浴室院に宿泊し、私はそこで彭君に会った。寺にはもはや私を知る人は誰もいなかった。ただ寺の主である恵汶あゐんが当時えいぶんは堂上の侍者としてこの寺にいたようで、いまはもう年老いているのだった。

恵汶は私を案内して令宗の画を見せてくれた。しかし、東の壁の三祖はやはり蔭になって隠されたままだった。私と彭君は顔を見合わせて嘆息し、

「ああ、これを取り去ったら、何があるだろうか」

といった。

そこで、置いてある楼阁堂宇を北側から運び出したところ、六師が互いに向かい合って話をし、笑い合い、仏法を授け合うようなありさまとなった。

都の人はこれを聞いて見に行く者が日々に増えた。恵汶は柵を作ってこれを保護するようし、彭君はこれに賛を添えるよう私にいった。

【補足】 [(1) 蘇軾が科挙の受験のために上京したのは嘉祐元年 [1056 年] で、翌年の4月までこうこくじ興国寺に滞在した。それから31年後に再び興国寺を訪れたのである。(2) 壁の前に置かれていた楼阁堂宇とはどのようなものなのだろうか。(3) 蜀の画の伝統について蘇軾が記した文章を作品番号 06-1-107 で見ていて、そこでは黄筌の名が挙げられている。(4) 彭礪はかつて首席で科挙に合格した人で、王安石に用いられたものの新法を批判して左遷され、このころにまた都に戻った]

■ 【08-3-045】 書魯直浴室題名後並魯直題

【解題】 上に見た興国寺浴室院の「六祖の画」について、黄庭堅 [字は魯直] が後に文章を記し、さらにそれに蘇軾が短文を加えた。少し時間の順序が入れ替わるが先

に見ておこう。

【訳文】

浴室院よくしつゐんに蜀僧しよくそうの令宗れいそうが描いた達磨だるま以来の六祖師ろくそしの画があり、人物が皆絶妙である。山、川、花、木、動物、鳥、衣、器物などのもろもろの物について画師はよく知っていて、俗人が目に見えていても万物が従うところの道みちが何であるのかを言い得ないものを描いている。

この画を描いた壁は人々の行き来する場にありながら画は隠れ、数十年の間、人に知られていなかった。長い年月を経て、蜀人の蘇軾そしがこれを発見した。物は世の変遷とは関わらないようていながら、このような興衰の定めがあるのだろう。

この寺の井戸の水は冷たくて甘い。恵汝師えにょしが碾ひ建溪茶けんけいちやは天下第二に落ちることはない。

古い友人ちんぞうの陳慥ちんぞうは林下の士で、たまたまここに簞むしるを敷いて寓居し、蘇軾そし、范百禄はんひやくろくがしばしば訪れている。それで私も興国寺の門を過るときにはここに立ち寄っている。

元祐三年げんゆう、黄庭堅こうていけんが題す。

これから五百年の後には、浴室院のあたりも廢墟となり、六祖の画は消え去り、蘇、范、黄、陳もことごとく鬼の名簿に入っている。それでもこの書だけが存在しているのなら、ここに来たものは私のこの心を知って、手を打って笑ってくれるだろう。

十二月十五日、蘇軾が書く。

【補足】[ここに注目すべきは陳慥ちんぞう ほうさんほうさん しし がよくしつゐん] が都にきて浴室院に滞在していたことだ。蘇軾が陳慥に上京を勧めていたことを作品番号 08-1-024 で見ているが、陳慥が実際にいつ都にきて何をしたのかなどの詳しいことは不明である。また、作品番号 06-3-020 で見た「柏石はくせきの図」の詩はこのときに詠んだとする考証もある]

■【08-3-046】乞郡劄子

【解題】蘇軾を批判する声は、元祐元年 12 月に館職かんしよくを受ける試験しぎくを担当したころに始まり、以来止むことがないままに間もなく 2 年になろうかという 10 月 17 日、この文章を皇帝に提出した。すでに何度か繰り返してきているのだが、地方官として外に出たいとの切実な願いを改めて強く訴えたのである。

【訳文】

元祐三年十月十七日、翰林学士朝奉郎知制誥兼侍読の蘇軾さつし、劄子にて申し上げます。

臣わたしは近ごろ左臂ひじが不調で、両目がよく見えず、そのために、礼儀を失い職を疎かりこかねない恐れがあり、一つの郡を担当する任に就けていたたく堅く乞うものであります。……[中略]……臣下としての大義を申せば、たとえ病であつても死ぬまで仕事に努め、礼儀を失って職を疎かりしているとのお咎めがあつても、それを避けずに受け止めるべきであります。臣わたしが敢えて職務に就かぬことを乞ひますのは、実は理由のあることなのであります。これを申し上げるならば、枢要の方々の機嫌を損ね、軽くない罪を得てしまうであります。しかし、言わずにおりますのは、父とも申すべきお上を欺くことになり、それは誅罰に値する最も大きな罪であります。それについて申し上げますこといたしました。

……[中略、『易経』を引用して、己の身に不安があるときには十分に国に酬いる仕事ができないことをいう]……陛下が御即位されました始めに、臣わたしは死の淵から救われたばかりか、半年の間の翰林学士にまで抜擢していただきました。その御命令に従い、敢えて辞するようになく、臣わたしの拙なる身をもって銳意国に報いようとしたところ、台諫[官僚の違法行為を糾弾する部署]より仇敵であるかのようだいかんに批判を受けることとなりました。臣わたしは先の宰相の司馬光と賢愚のほどは違いますが、厚い信頼を長く頂戴しておりましたことから、司馬光が大任に就きましたときにはすくにもそのもとに馳せ参じたのであります。これは人の情として当然のことで、どこからも異論の出るものではありません。しかしながら、司馬光が差役法について建てた政策については、いまは不適當であるとして強く争わざるをえませんでした。

しかし、台諫の人々は司馬光の意見に合わせることで昇進しようとしたのであります。そして、司馬光が亡くなると、司馬光の考えであるとして陛下の眼をごまかし、徒党を組んで異論を排除しようとし、臣の意見は不適當であると協同で攻撃したのでした。司馬光が民に対して至誠を尽くすことを求め、人に迎合することを求めることがなかったのを全く知らないのであります。陛下は虚心にして無我であられますことから、そのような徒党の上に立つ主となられるようなことはあるはずがないのです。

……[中略、范百禄と韓維が論争を起こしたとき、呂陶が范百禄に立って韓維を批判したことをいう]
 ……臣はもともと蜀の人で、范百禄と呂陶とは実は旧知の間柄で、そのことをもって、韓維の一派は臣のことを憎んで、「川党」[蜀党の別称]を組織する者たとして指弾しました[党派を組んで政治運動をするのは臣下としてあるまじき行為とされていた]。……[中略、かつて黄庭堅が趙挺之の施策を批判し、また蘇轍が趙挺之の妻の父の罪を明らかにしたこと、趙挺之は高官に用いられると、蘇軾を憎んで排斥することに全力を挙げたことをいい、また王覲は蘇軾の一味である胡宗愈が問題を起こしたとし、孫覺は蘇軾の親類である丁騫雲が問題を起こしたことと関係つけて蘇軾を罪に陥れようとしたことをいう]……それらに対して、陛下は不確かなことはいわないようにことのお言葉をもらされました。朝廷の内外の人々は、このことをもって陛下のお心を知ったのであります。臣は早くに朝廷を去らなければ必ず危いことになると考えましたのであります。臣は陛下は天より授かった御聡明さをもって臣が無罪でありますことを御存知であると存じ上げております。しかし、台諫の気炎は朝廷を震動させ、上は執政大臣から朝廷の百官、下は都の外の各地の知事に至るまで、皆がその鋒先を恐れて、その意向に添おうとしています。臣は去らなければ勢いとしてこの身を全うできないのであります。天下はこのようなことを知っておりましても、陛下は宮中の奥深くにおられて、こまでは知る由もないのであります。

臣が考えますに、古の三代以降で、明主と称えられて、漢の宣帝、唐の太宗を上回る人はいません。しかし、宣帝は蓋寛饒を殺し、太宗は劉洎を殺しました。どちらも讒言を信用したもので、罪がないのに死んだことは今に至っても哀れまれています。……[中略、例示した二人について詳しく述べる]
 ……宣帝と太宗の二人が明知を備えていなかったわけではないのです。蓋寛饒と劉洎の二人が皇

帝に深く理解されていなかったわけではないのです。二人は皇帝に深く理解されていることを恃みとして、讒言が積み重ねられていくのを避けなかったために、ついには身体と首とが場所を違えて天下の笑いものとなってしまったのです。いま臣が陛下に理解されておりますことは蓋寛饒や劉洎より優るといたしましても、臣を悪く言う者は当時の十倍もいるような状況になっております。陛下の明哲、寛仁が先の二人の皇帝を超えるものでありましようとも、臣がそれを恃みとして朝廷を去らずにいましては、先の二人と同じにならずにすむことはないのでありましよう。先の二人の死を見て、天下の人々、後世の人々は二人の皇帝は讒邪を信じて忠良を害ったといひ、二人の皇帝の聖徳はひどく傷付いてしまいました。先の二人の者がもしも変化の兆しをあらかじめ知って、先に去ることを求めていたならば、その身もその名も、また皇帝の名誉も保たれていたはずなのであります。臣はたとえ自分のことなどは考えなくても、臣が罪を得た後に、天下の人々、後世の人々が陛下をどのよういようになるかを考えないわけにはいかないのであります。

昔、先帝は臣を上殿に召され、古今の成敗についてお尋ねになり、今後は事に即して物を申し上げるようことのお言葉を頂戴いたしました。その後、臣はしばしば事を論じ、それは採用されたわけではありませんでした。さらに詩文を作って、物に寓し、諷に托して、できればお上のお耳に達して、聖意を感悟申し上げることがあればと務めました。しかし、李定、舒亶、何正臣の三人は、臣がそのようなことをするのは朝廷を誹謗するものであるとして、遂に臣は罪を得てしまいました。諷諫と誹謗とは似たところがありましても、違つたのであります。ところが、先ごろ、臣の書いたものにある語句をもって、趙挺之は先の皇帝を誹謗するものであるとしました。これは白を黒とし、西を東とするもので、まったく似たところさえもないのであります。臣は趙挺之が臣を害おうとするものは李定、舒亶、何正臣を上回るものであり、臣の讒言の受け方は蓋寛饒、劉洎を上回るものがあると知ったのであります。

……[以下略、蘇軾の希望を叶えてくれるようお願い文章が続く]……

【補足】〔(1) この文章において、司馬光の死後に始まった讒言の嵐の中であって、それはかつて李定らが死罪を求めたときよりもひどいものになったので、もはや都を

去る以外にないと蘇軾は述べている。蘇軾もある程度は警戒していたにしても、都に来てわずかの間にこのような状況に追い込まれるとは考えもしなかったであろう。(2) 蘇軾に対する主な攻撃を挙げておく。①館職を授けるための試験の問題の中に先帝を誹謗する文言があったとして、朱光庭、傅堯兪、王巖叟らが攻撃した。②呂陶が蘇軾兄弟と徒党を成し、その背後には文彦博がいるとして、賈易が攻撃した。これはむしろオウンゴールとなって賈易は左遷され、程頤も皇帝の教育係の任を解かれた。③蘇軾はそもそも国家の大役を担える器ではないとして、王覲が攻撃した。④蘇軾はもっぱら軽薄な人士を己のまわりに集めているとして、趙挺之が攻撃した。⑤もともと関係のない事件に蘇軾を巻き込もうとして、王覲、孫覚が攻撃した。⑥科挙の二次試験を巡って蘇軾が不正を行おうとしたとの噂が流されるなど、種々の誹謗中傷が間断なく行われた。(3) 蘇軾を批判した人々の中に孫覚の名があるのは少々意外な気がする。孫覚といえ、作品番号 04-1-030 でその名を見て以来、長く深い付き合いのあった人物である。かつての友情も、権力抗争の場にあっては顧みられないものになってしまうのだろうか。あるいは、孫覚からすると、蘇軾のことを他の人よりもなまじ深く知っているために、より強く油断のならない人物であると見ていたということであるのかも知れない。蘇軾を嫌う者はなぜか徹底的に嫌うようになるようで、蘇軾にはそのように仕向けてしまう何かがあったのだろうか。(4) 蘇軾が蜀党 [あるいはこの文章にあるように「川党」とも呼ばれた] の領袖と目されて、激しく攻撃されるようになったのは、弟の蘇轍にもかなり大きな要因があったという説もある。蘇轍は一本気で、常に直線的な物の言い方をして、極めて剛直であったので、若いときから警戒の目で見られていた。弟の直球を嫌うか、兄の変化球を嫌うかは人それぞれであろうけれど、兄弟を憎む心は、自ずとより目立つ兄の方に集中して向けられるということだったのだろう。付け加えれば、この文章には「韓維の一党は臣のことを憎んで……」とあ

るが、蘇軾は先に韓維を讃えた詩を作っていて [→作品番号 08-2-057]、その一方で、蘇轍は韓維を糾弾していたのだった]

■ 【08-3-047】 書出局詩

【解題】 上の文章を提出した後もまだ都での職務は続いた。これは翰林^{かんりんがくしん}学士院の官署から出た際にふと浮かんだ詩を記した文章。

【訳文】

急景帰来早、[日の傾くことが急で、早く帰り来たところ]

濃陰晚不開。[夜になっても濃く曇ったままだった]

傾杯不能飲、[杯を傾けても飲む気になれない]

待得卯君来。^{ぼうくん}[卯君[弟]が帰るのを待ってからしよう]

今日は官署から早く出たところ、暗く曇って雪が降ってきそうだった。弟はもっと遅くなってから官署を出た。この詩を作って、すぐに、十年前^{じよ}に徐州^{おウきやう}にいて、王鞏が訪ねてきたときのことを思い出した。王鞏は徐州に十日余り留まってから南京^{なんけい}応天府^{おうてんふ}に帰った。ときに弟は南京^{なんけい}応天府^{おうてんふ}にいたので、王鞏は去り際に、弟への手紙を書くよう求めた。私は酔い伏せてしまっていて書くことができなかったので、一首の絶句を与えた。

王郎西去路漫漫、^{おう}[王君が西に去って行く路は長い]

野店無人霜月寒。[野の店には人もなく、寒さのうちにあるのは月だけ]

涙湿粉箋書不得。[涙が紙を濡らしてしまって書くことができない]

憑君送与卯君看。^{ぼうくん}[王君に託して卯君に与えようと思う]

卯君とは弟の子供のときの名である。

弟との現在の情味は徐州にあったときよりも勝っている。それでも、一緒に自然の中に帰って、「夜雨対牀」をともにする楽しみには及ばない。

元祐三年十月二十三日。

【補足】〔(1) 蘇軾が徐州知事であったときに王鞏が訪ねてきたことは作品番号 05-4-075 で見ている。(2) 誹謗の嵐が吹き荒れる都で、蘇軾が切に願ったのは弟との「夜雨対牀」であった〔→作品番号 07-1-075〕。兄弟は都にともにいながらも、高位に就いているが故にしみじみ語り合えるような状況にはなかったのだろう〕

■【08-3-048】書林次中所得李伯時歸去來、陽関二図後

【解題】李公麟〔字は伯時〕〔→作品番号 08-3-043〕が描いた『歸去來』と『陽関』の二図に添えた詩。その画は官員仲間の林旦〔字は次中〕が所有していた。『歸去來』は何度も見ている陶淵明の『歸去來兮の辞〕〔→作品番号 06-2-051〕を、『陽関』は唐の王維が詠んだ送別の詩を画にしたものである。二首のうちの一首を訳す。

【訳文】

其の二

二つの画は描かれたばかりであるかのよう、

墨の艶やかさから香りが立ち上がる。

酒の前で別れの詩を唱えるありさまを描き終わると、

たちまち『歸去來』の画を作った。

それは、悲痛な思いだけを学ぶまいとのことであろう。

■【08-3-049】臥病逾月、請郡不許、復直玉堂。十一月一日鎖院、是日苦寒、詔賜官燭法酒、書呈同院

【解題】この詩の題は、「病で臥すこと月を超え、郡の職に就くことを願ったものの許されなかった。十一月一日、また玉堂〔翰林院の建物〕で宿直することになった。官署の門が鎖され、この夜は寒さが厳しかった。皇帝の御指示によって宮中の蠟燭と酒を頂戴した。そのことを書いて、翌朝、同院の者に示した」。

【訳文】

細かな霰がさらさらと玉堂に降りかかる。

夜になってから文書を起草せよとのことで、

忙しく衣を付けて職務に励む。

御燭の光を分けてたさったのは星が輝くばかり、

宮中から賜わった壺はよい香りを漂わせる。

酔って書くと目がちかちかして字が大きくなり、

仕事を終えても老人は眠ることができなくて、

時の流れが遅く感じられる。

いつしか人生の終わりの日々を暖かく過こし、

灯火を掲げ、祭りの酒はまだ半分の楽しみを残していると、

さらに歡を尽くすようなことができるのたろうか。

■【08-3-050】送周朝議守漢州

【解題】周表臣しゅうひょうしんという人が漢州かんしゅうの知事として赴任するのを見送った詩。漢州は蜀しよくに

属する。

【訳文】

蜀しよくの地では、茶の取引きを巡って民衆がたびたび苦しめられてきた。

近年では李杞り きと李稷り しよくによって莫大な茶税を絞り取られたために、

人々はその忌まわしい名を記憶に刻み込んだ。

この状況を改めたのは、

周表臣しゅうひょうしん、その甥の周尹しゅういん、そして張宗諤ちやうそうがく、呉師孟ご し も う、呂陶りよとう、宋大章そうだいしょうの六君子で、

貴君の家が最も力を尽くしたのだ。

ここに貴君は事に坐して都を出て漢州に行くことになった。

貴君は老齡に及んでも、剣を見つめる気迫をもって、

歳としの暮れに風雪を犯して遠く旅に出る。

郷里に帰ることを思うのも時宜に敵っていようから、

自身を顧みてよく考えるのがよいだろう。

それでも、私が聞いているのは、漢州のあたりは種々の問題があるとか、

昔、七十歳ななじゅうさいになった龔遂きんすいが地方に派遣されて著しい功績を挙げた例もある。

貴君も立派に職務を果たすなら、都みやこに召し還かへそうとの詔みことりが届き、

漢州の人々は還すまいと貴君の袖を引くであろう。

まだまだ都の高官として活躍して、

宮中の庭園の美を詩に歌うことになるであろう。

【補足】[茶が広く飲まれるようになったのは、作品番号06-4-027にあったように、唐とう代以降だいのことで、宋代そうだいに入ると茶は生活必需品となり、国はそれを国家の専売品にして多額の税収を得ようとした。国が増税を図れば民衆の負担が増え、一方で闇取り引

きが盛んになって違法集団が跋扈する。蜀^{しよく}は茶の産地で、専売制度はしばしば紛争の種となった。この詩はそのことを踏まえて詠んでいる。李杞^{りき}と李稷^{りしよく}は新法党の人で、
税収の増加に努め、民衆を苦しめた。その政策を、保守派の「六君主」が是正に努めたのであるが、そうした功績がありながら、周表臣^{しゆうひょうしん}は左遷されてしまったのである。
「六君子」のうち呂陶^{りようとう}の名は蘇軾を擁護する人々の一人として作品番号 08-3-046 など
で見ている]

■ 【08-3-051】 木山、并叙

【解題】 この詩には短い序文がある。

【訳文】

叙

吾が父はかつて三つの峰を持つ「木山」^{ぼくざん}を蓄えていた。父はそれについて文章を書き、また詩を詠んだ。すると、梅堯臣^{ばいぎょうしん}がその詩を見て詩を詠んだ。それから三十年を経て、甥の蘇千乗^{そせんじよう}が五つの峰のある「木山」を得たので、ますます面白いことになった。そこで、梅堯臣の詩に次韻して、「木山」のかたわらに刻むことにした。

【補足】 [(1) 「木山」^{ぼくざん} は山のような形をした枯れた木。この序文にある父の文章を蘇軾の詩の前に見ておこう。(2) 蘇千乗^{そせんじよう}は蘇軾^{そふぎ}の従兄の蘇不欺^{そふぎ}の長男で、三男の蘇千能^{そせんのう}とともにこのころに都にきていた。先に蘇不乗^{そせんし}と次男の蘇千之^{そせんし}は科挙に不合格となって帰郷していたので [→作品番号 08-1-031]、何らかの事情でまた上京していたのだらう]

【訳文】

そ じ ゅ ん ぼ く か ざ ん き
蘇洵：『木仮山の記』

木となって生まれても、不幸にして、ひこばえのままで終わってしまうのもあれば、人の腕ぐらいになつたところ
 ろで枯れてしまうもある。幸いにも家の棟木むなぎになるぐらいにまで成長したところで、人の手で伐られてし
 まうもある。あるいは、不幸にして、風に倒され、水に流されるのもあり、そして碎けて腐ってしまうのもあ
 り、幸いにも碎かれ腐ることから免れても、人に拾われ、木材として使うために斧で伐られ、鋸のこぎりで切
 られてしまうもある。最も幸いなのは、浅瀬に流れ着いて砂の下に埋もれ、何百年か後になって、好
 事家に掘り出され、その形が山に似ているとかで愛玩され、斧や鋸で傷付けられずすむものであろ
 う。そのようなものでも、遠い辺鄙な地にあつたのでは、好事家の目に触れる機会はなく、結局は薪にさ
 れてしまふであらう。最も幸いなものになりかけて、不幸なものとなってしまうのである。

我が家には三つの峰を持った木仮山がある。それを見るたびに、運命とはいかなるものであるかを私は
 疑わずにはいられない。この木は生まれて、ひこばえのままで終わってしまうことはなく、人の腕ほどで枯
 れてしまうこともなく、家の棟木になるぐらいまで成長して伐られてしまうこともなく、風に倒され水に流されて
 からも碎かれて腐ることもなく、木材として使うために斧で伐られ鋸で切られることもなく、浅瀬に流れ着
 いて砂の下に埋もれ後に薪にされてしまうこともなく、こうして我が家に来たのである。こうなつたのは、単
 なる偶然ではなく何か理由があるのではないだろうか。

私がこの木仮山を愛するのはたまた形が山に似るからだけではない。運命の玄妙さに感じるところがある
 からだ。そしてただ愛するだけでなく、この木を敬う気持ちもある。

三つの峰の中央は、大きく険しく、まことに重々しく、左右の峰を従えるような勢いがある。左右の二つ
 の峰は、中央の峰に勢いで服しているように見えても、鋭く威厳のあるありさまは、犯すべからざるもの
 がある。二つ峰には決して中央の峰におもねる気持ちはない。そのようであるから、三つの峰からなるこ
 の山を敬い、感じるところがあるのだ。

【補足】[三つの峰とは、容易に推測できるように、蘇洵、蘇軾、蘇轍を象徴するも
 のである。蘇洵は人に知れないままに空しく薪として焼かれてしまうことを厭い、独

学で一代の文章家になったのである]

【訳文】

木が生まれて願うのは、

有用な材として伐り出され、一万頭の牛に曳かれて運ばれて行くことではない。

天寿を全うして後に沙洲に倒れ伏すことである、

幸いにもその時がきて、

河の神が活躍する秋に巡り逢う——

神は大木を見て勇むけれど、押す流すことができない、

そのまま、木には、幾年もの風雪によって嶺の形が巧みに彫り出され、

竜や蟻の働きによって、豪快な姿が作り出される。

大胆にもそれを持ち出そうとする者がいる……

物好きの者を阻止することはできず、河の神でも咎めようがない。

かくてこの木山ぼくざんがある。

そうだ、我が故郷の町には、地の底に達する古い沼がある。

その傍らの竹林こそが我が隠棲の地だ。

二頃けいばかりの良い田を買うのは難しくないだろうし、

檀はんのきを植えれば三年で薪が得られるようになるだろう。

そこで私はこの五つの峰と向き合うのだ。

きっと郷里の人々は私が隣に住むのを嫌わずにいてくれるだろう。

■ 【08-3-052】 送千乗、千能両侄還郷

【解題】 上の詩に見た、蘇千乗そせんじょう、蘇千能そせんのうの 2 人の甥が郷里に帰るのを見送った詩。 2

人は都に来たものの、その目的を果たせずに帰郷しなければならなかったと推測される。

【訳文】

治生^{ちせい}[人々を安らかに治める道]は富を求めるためにあるのではない、

読書[治生のための学問]は官職を求めるためにあるのではない。

譬えていなら、(富も官職も得ないのは)酒を飲んでも酔わないようなもの、

陶然^{うっとり}としてあり余る歓びがあるのならそれでよいのだ。

諸君^{しよきん}は龐徳公[三国時代の隠者]を知っているだろう――

白髪^{わだかま}の老人になっても泥の中で蟠っていたのは、

子孫^{おも}を念^{おも}う心がなかったからではない、

子孫に遺すべきは、地位でも富でもなく、

安らかさだけがあればよいと考えていたのだ。

龐徳公^{りくちんざん}を召し出そうと鹿門山を訪ねて公を拝した為政者もいたが、

公は自ら耕す暮らしを続け、己の節義を全うした。

諸君等は若くて多難、衣服には常に氷雪が降りかかる。

諸君等五人兄弟は志を一つにして、あたかも一人の人間であるかのよう、

孔子^{こうし}も難しいとした孝養を尽くし、

貧乏のなかでも母には鶏肉を煮て与え、自分たちは首蓆^{うまごやし}を嚙んでいる。

食^{しょく}といものは人^{わづら}を累^{つら}わさずにはおかないもの、

屑肉のたった一切れにも苦勞をしてしまう。

かくて諸君は西から四千里の道をやって来て、

破れた着物をまとい、寒さにもへこたれるようなことは口にしない。

顔立ちは我が兄〔従兄の蘇不欺〕に似て、
心もまた同じように広く穏やかである。
諸君はいま私を置いて去ろうとしている……
歳の暮れに苦い思いが残る。
私は決して都の高い地位にあるべき人間ではない、
青雲の志はすでに昔のことになってしまった。
故郷に帰ったなら、松と菊を植えるがよい、
そのまわりに青い竹を廻らせるとよい、
はんのき
檻は三年で大きな樹陰をつくるというから、
その下に私が帰ったときに冠を掛けられるようにしてくれたまえ。
我が町には清らかな川の流れが入り込み、
小川のせせらぎとなって我が小園も潤してくれる。
ともに粗末な家に寄り集まり、
背中に日差しを浴びつつ、
都の暮らしぶりが上辺だけのものであるのを語り合おうてはないか。

【補足】〔最後の句の原文は「曝背談金鑾」〔背を曝して金鑾を談ぜん〕。金鑾は宮中の豪華な宮殿のことで、ここでは龐徳公が子孫に遺すべきとした「安らかさ」との対比で、外面は立派でもさして価値がないものであるとしているのだろう〕

■ 【08-3-053】 与蒲伝正

【解題】これは何年か後に蒲伝正〔字は宗孟〕に送った手紙。蒲伝正は蘇軾と同郷の人で、蘇千乗、蘇千能の母は蒲伝正の妹であった〔→作品番号 08-1-031〕。蒲伝正は奢侈を好み〔→作品番号 07-2-008〕、そのことがこの手紙に記されている。

【訳文】

甥の蘇千乗は、伯父上[蒲伝正]は家計のやりりができなくて、書画や珍しい物を買ったためなら、家の物もよく質に入れてしまうので、私から苦言を呈してくれないだろうか、しばしば申しておりました。確かに、甥のいう通りであると、私も深く思います。退官後の計画は、今からよく考えておかなければ間に合いません。そしておかないで、退隱の後に、粗食粗衣に甘じ、門を閉ざして客人を絶ち、貧窮に陥った親類を救わないといったようなことを、果たして平気でできるようになるのでしょうか。これらのことに備えがなくてはならないのです。よい息子がいるならそれだけで大丈夫というものではなく、家業というものを営まずにおくわけにはいかないのです。書画や珍しい物なんぞは、近頃私は土くれのようにそれを視るようになりました。たとえ私のいうことが成る程と思えなくても、亡き甥の顔を思い出して、少し意に留めていたいただきたいのです。

【補足】[この手紙がいつどのような経緯から書かれたのかは知られていないが、蘇千乗は志を果たせず亡くなり、蒲伝正は相変わらず浪費家のままであったことがわかる]

■ 【08-3-054】 題李伯時画趙景仁琴鶴図二首

【解題】趙景仁という風雅を愛する人物がいて清献先生と呼ばれていた。琴と鶴と亀を愛し、任地に赴く際には必ずこの三者を携えた。ところが元豊年間に蜀に行くに際して、鶴は空に、亀は川に放ったという。それから何年か経ち、このころは清献先生は都にいたらしく、李公麟 [→作品番号 08-3-048] が『清献先生と琴と鶴』の画を描いた。これはその画に蘇軾が添えた詩。2首のうち1首を訳す。

【訳文】

其の一

せいけん
清献先生は一銭の貯えもない、

琴も鶴も昔から家に伝わるものだった。

最高の音楽は、弦のない琴による音のない曲だとか。

仙宮では、それに合わせてげんせん幻仙[鶴]が舞うのである。

【補足】〔(1) 画であるから、これこそが無音の音楽であると洒落たのだらう。(2) このころにりこうりん李公麟は、蘇軾ら 17 人が集まって遊ぶありさまを描いた『せいえん がしゅうず西園雅集図』を作っている。それについてべいふつ米黻〔→作品番号 08-2-050〕が記した文章があるので、一部を読んでおこう。西園はおうしん王誥〔→作品番号 08-3-028〕の私邸の庭。王誥は皇帝の娘婿だけに堂々とした邸宅を構えていたのである。

【訳文】

べいふつ せいえん がしゅうず き
米黻:『西園雅集図の記』

りこうりん どう しやうり りしやうどう
李公麟はこの画では唐の小李將軍[李昭道]に倣って泉石に着色し、雲や草や木や花や竹が絶妙に描かれているありさまは人を感動させる。特に人物は秀拔で、その形をよく写し、自ずと林下の雰囲気を漂わせ、塵埃の汚れは一点もない。並みの筆では全くない。

黒い帽子を被り黄色い道服を着て筆を手にし何やら書いているのは蘇東坡先生である。……[以下、

おうしん さいけい りしぎ
王誥が座ってそれを眺め、蔡肇が少し離れたところに立って眺め、李之儀が椅子にもたれて眺め、その後ろに王誥の家姫が控えている様子が叙述される]……。一本の松が葉を鬱蒼と繁らせ、そこに

のうぜんかずら
凌霄花が絡んで、紅と緑が呼び合い、その下に大きな石の机があつて、古い器や琴が並べられ、そのまわりに芭蕉がある。石の上に座って、道士の帽子を被り、紫の衣をつけ、右手は石にかけ、左手

は巻軸を持って書を見ているのは蘇轍である。……[以下に、こうていけん りこうりん ちやうほ し ちやうらい てい黄庭堅、李公麟、晁補之、張耒、鄭

か かい しんかん ちんけいげん べいふつ おうきんしん えんつうだい し りゅうけい
嘉会、秦觀、陳景元、米黻、王欽臣、円通大師、劉涇の様子が叙述される]……。人間世界の

清らかな楽しみでこれ以上のものはない。ああ、名利の地にあわあわして退くことを知らない者は、この楽しみを果たして得られるのだろうか。蘇東坡以下の十六人は文章をもって議論し、博学で知識が深く、堂々の辞、立派な書、古を好んで多伎を知り、雄豪さにおいて俗人を超え、卓然と高い境地にあつて、名を四方に轟かすものである。後にこれを覧る者は、ただ画として見るのではなく、それぞれの人物に思いを馳せていただきたい。

【補足】[(1) ここに挙げられている 17 人のうち、本章でその名をまだ見ていなかったのは、鄭嘉会 [字は靖老]、陳景元 [字は碧虚]、王欽臣 [字は仲至]、田通大師、劉涇 [字は巨濟] である。陳景元は道士で、劉涇は画を得意とした。(5) 『西園雅集図』は蘇軾を中心とした文人の集まりを、極めて理想化して描いた画で、それを見て素直に感心してもよいのだが、蘇軾の政敵からしたら、「ケッ、いい気なものだ」と、唾でもひっかけてやりたくなつたであろう。あるいは、17 人の仲間に入りたくても入れてもらえない人が嫉妬して、さらには憎悪するようなことにもなつたであろう]

■ 【08-3-055】 書別子開

【補足】蘇軾と一緒に科挙に合格した同年の仲間に曾肇がいて、すでに亡くなったことは作品番号 06-4-016 で見たが、28 歳下の異母弟の曾肇 [字は子開] がいて、官界で活躍していた。蘇軾は 12 月 6 日に曾肇のもとを訪れてこの短文を記した。

【訳文】

曾肇は、黄河の様子を検分するために、これから河北に行く。冬至の一日前に辞令を受け、冬至の後に出発する。私は冬至の賀節のお祝いをした後、別れを告げるために訪れ、数杯を重ね、頽然としてすっかり酔ってしまった。

机の上にこの佳紙があつたので、草書を作り、数枚の紙にこのよに記す。

これから北に行って帰ってくるなら春になっているだろう。そのときに、酒、蟹、山菜、桃、杏を私のために用意してくれるのなら、また公と一緒に飲みたいと思う。

■【08-3-056】評詩人写物

【解題】三男の蘇過^{そか}のために、詩はどのように物を写すべきかを記した。

【訳文】

詩人^{しやぶつ}には写物の功がある[物ありさまを的確に写し出すことを功績とする]。

『詩経』^{しきやう}に、

桑之未落、[桑の葉が落ちる前]

其葉沃若。[それはつやつやと若い]

と、ある。他の木のほとんどはこのようではない。

林逋^{りんぼ}の「梅花」の詩にこうある。

疏影横斜水清浅、[まばらな影が横に斜めに映り、水の流れは浅い]

暗香浮动月黄昏。[ひっそりと香りが浮いて動く、月が出た黄昏時に]

これは、断じて桃や李の詩ではない。

皮日休^{ひじつしゅう}の「白蓮」の詩にこうある。

無情有恨何人見、[情がないのか、恨みがあるのか、見る人は誰もいない]

月暁風清欲墮時。[ただ暁の月、清らかな風、そして花は落ちてしまう]

これは断じて紅い蓮の詩ではない。

せきえんねん
石延年の「紅梅」の詩にこうある。

認桃無緑葉、[桃かと思れば緑の葉がなく]

辨杏有青枝。[杏かと思れば青い枝がある]

これは実に下卑た語だ。村の学校の生徒の中ぐらいの出来である。

げんゆう
元祐三年十二月六日、書いて過に渡す。

【補足】『詩経』はいうまでもなく古典中の古典。林逋は宋の初めの人で、蘇軾はたびたびこの人を讃えている [→作品番号 07-2-031]。皮日休は唐の終わりの人で、混乱する社会の実態を詠んだ詩もある。石延年は蘇軾の少し先輩で、ここに引かれている句はよほど気に入らなかったのだろう、作品番号 06-3-009 でもやはりこけにしている]

■ 【08-3-057】 次韻王定国会飲清虚堂

【解題】王翬 [字は定国] の清虚堂で飲んで詩を読み合った。王翬は揚州知事に任命されたものの [→作品番号 08-2-056]、果たして赴任してきちんと仕事をしたのかよくわからない。この詩は揚州とはまた別の地に王翬が行くことを歌っているようである。

【訳文】

揚州の官梅を詩に詠んだ唐の時代のかの知事と同じ、

貴君もまた梅によって詩興を発した。

貴君は誰かと地位を争うようなことは望んでいない、

つまり聖人[清酒の異称]でも賢人[濁酒の異称]でも構いはしないのだ。

かくて、貴君は淮河のほどりに新しい住まいを定めたので、

我が胸には劍南[蜀]の川へと帰心が湧き上がってくる。

この身は蚕が老いるのに似ていようか、

春の光をたっぷり受けて次の眠りに入ろと思う。

■【08-3-058】興竜節待宴前一日、微雪、与子由同訪王定国、小飲清虚堂。定国出数詩皆佳而、五言尤奇。子由又言昔与孫巨源同過定国、感念存没、悲歎久之。夜歸、稍醒、各賦一篇、明日朝中以示定国也

【解題】長い詩の題は次の通り。「興竜節 [哲宗皇帝の誕生日、12月8日] の祝賀の宴の前日、雪がわずかに降った。弟と王鞏 [字は定国] を訪ね、清虚堂で少し飲んだ。王鞏が数篇の詩を出し、どれもよく特に五言詩が最高だった。弟がこのようにいった。『以前に孫洙 [字は巨源] と一緒に王鞏を訪ね、人々の存没を語り合い、しばし悲しく嘆息した』。夜になって帰り、酒から醒めたところで弟とそれぞれ一篇の詩を賦し、明くる朝、王鞏に示した」。孫洙の名はこれまで何度か見ている [→作品番号 05-3-058]。この詩は一緒に飲んで楽しかったということ以上の内容はなく、気のおけない仲間内の飲み会を美辞麗句を駆使して詩にしてみせた、いわば戯れの作であろう。よってきらびやかな漢字の並びを見ていただくことを眼目として、大意を書き添える。

【訳文】

天風淅淅飛玉沙、[風に雪がさらさらと飛ぶ]

詔恩歸沐休早銜。[ありがたくも今日は早く帰るのを許された]

遙知清虛堂裏雪、[そ^{せいきょどう}うだ、清虚堂の雪景色はどうだろうか]

正似簷蔔林中花。[きつとクチナシの花が咲いたような感じだろう]

出門自笑無所詣、[ふらりと門を出て笑うのは、どこに行くあてもない]

呼酒持勸惟君家。[やはり君の家で一杯やるのがよいだろう]

踏冰凌兢戰疲馬、[氷を踏んで走るのは馬には迷惑なこと]

扣門剥啄驚寒鴉。[門をどンドン叩いて鳥を驚かせてしまう]

羨君五字入詩律、[うらやましいのは君の五言詩が巧みなこと]

欲与六出争天葩。[雪と美しさを競うほど]

頭風已倩檄手愈、[君の詩によって、脳天の病が癒え]

背癢恰得仙爪爬。[背中のかゆいところを仙女にかいてもらったかのような]

銀瓶瀉油浮蟻酒、[銀の瓶から極上の酒を注ぎ]

紫碗鋪粟盤竜茶。[紫の碗に極上の茶を入れる]

幅巾起作鷓鴣舞、[立って舞う者もいれよ]

疊鼓誰摻漁陽攄。[鼓を撃つ者もいる]

九衢燈火雜夢寐、[夢心地で都の灯火を見ながら帰ると]

十年聚散空咨嗟。[この十年のあれこれにため息をつく]

明朝握手殿門外、[ともあれ、明日の朝は門の外でまた会って]

共看銀闕噉朝霞。[宮殿に朝の霞がたたよのを一緒に見よう]

■ 【08-3-059】 真宗信李沆

【**解説**】^{こうりゆうせつ}興^{そしやう}竜^{あざな}節^{しやう}の当日に蘇頌 [字は子容] [→作品番号 08-3-016] と話したことを記録した短文。

【**訳文**】

^{しんそう}真宗皇帝のとき、ある者が^{ばいじん}梅詢を重く用いるよう推薦すると、皇帝はいった。

「かつて^{りこう}李沆は梅詢は君子ではないと申していた」

そのとき李沆は亡くなって二十年余り経っていた。

そのことで、^{おうようぶんちゆうこう}欧陽文忠公[^{おうようしゆう}欧陽脩]はかつて蘇頌にこのように尋ねた。

「宰相が亡くなって二十年になるというのに、皇帝がその言葉を信じ続けているというのは、そこにはどのような理由があるのだろうか」

蘇頌は、

「ただ無心であるからなのでしょう」

と、いった。

そのことを私は蘇頌から聞いて、その言葉を讃え、このようにいった。

「^{じんそう}仁宗皇帝のもとで宰相になった^{ちんしつちゆう}陳執中は俗吏でしかありませんでしたが、公正であることだけをもって皇帝の信頼を得ていました。まして、李公は才識があって、しかも無心で世を濟おうとしていたのですね」。

時に^{げんゆう}元祐三年の^{こうりゆうせつ}興竜節に^{しやうしよしやう}尚書省で宴を賜わってこのように論じたのである。

その日、^{おうきやう}王鞏はその父の^{おうそ}王素がこのようにいったと話してくれた。

「^{ちんしつちゆう}陳執中が宰相を辞めたときに、仁宗は、代わりとして誰がよいのかと尋ねられました。陳執中が^{こいく}呉育の名を挙げると、皇帝はすぐに呉育を召し寄せ、^{けんげんせつ}ちょうど乾元節[仁宗の誕生日]の宴があって、呉育もそれに加わり、たまたま酔って座ったまま眠ってしまい、はっと驚いて目覚めると、床を叩いて従者を呼んだのでした。皇帝はその様子を見て、(宰相の器ではないと判断して)呉育を御史台の任に就けた

のでした」。

このようであったとすると、陳執中は俗吏ではあっても、(仁宗に信頼されていたからには)賢いところがあったのだろう。呉育が宰相になれなかったのは天命というべきであったのだ。呉育は晩年には気を病むところもあったようで、大きな役目をついに与えられなかったのは、仁宗皇帝が逸材を棄ててしまうような主^{あるじ}だったからではないのだ。

■ 【08-3-060】 書王定国所蔵煙江疊嶂図

【**解題**】 ^{おうきよう}王^{あざな}鞏 [字は定国] が所蔵する 『^{えんこうじょうしやう}煙江疊嶂図』 [江が煙り、山が重なる図] に書き添えた詩。

【訳文】

^{かわ}江のほとりで生じた愁いの心、
 たちまち千の山のように重なり合い、
 あるいは虚しく浮かぶ^{みどり}翠となって、
 空へと積み上げられる、
 それは山なのか雲なのか、
 遠くから知ることができない。
 煙る空が晴れ上がるなら、
 山だけがそのままに残り、
 ここにくっきりと見えるのは、
^{あおぐる}蒼蒼聳える二つの崖、
 その間に暗い^{ぜつこく}絶谷がある。
 鳥の道だけが通じる泉があり、

水は林を巡り、石に絡み、

見え隠れしながら下って谷の口へと赴き、

奔流する大河となる。

川が平らになるところ、

山が開けて林の裾野が終わり、

小さな橋がかかり、野の店がある。

旅行く人はゆるゆると木立の向こうに去り、

漁師の舟が一艘、

かわ江に浮かんで天の涯へと流れゆく。

知事殿[王翬]はどこからこの画を得たのだろうか、

一つの点、一本の線に至るまで清らかに美しい。

このようなところが人間世界のどこかにあるのか、

たたちに行つて二頃けいの田を買いたいものだ。

そう、誰もが知っているように、

ぶしょう ほんこう武昌の樊口は幽絶のところ、

とうぼ東坡先生はそこに留まること五年、

春は、風が水を揺らして長江は漠漠として天に連なり、

夏は、夕暮れ雲が雨を巻いて娟娟として山は煙り、

秋は、かたで楓が赤く染まってからす鴉とともに翻つて、東坡先生は水の上に宿り、

冬は、高い松から雪が落ちて、東坡先生は昼寝から目覚めるのだった。

とうげんきやう桃源郷は実は人間世界にあって、

神仙の住むところだけにあるとは限らない。

こうざん江山は我が内なる塵土を清らかにしてくれ、

世間に戻る路があってもそれを尋ねてはならない。

この画を還そうとして私は三度嘆息する、

ああ、山中の人よ、

私に帰ってくるよう招く詩を詠んでくれまいか。

【補足】〔(1) 詩の中ほどで「知事殿はどこからこの画を得たのか」といっているが、この画は次の詩にある通り王詵^{おうしん}〔→作品番号 08-3-054〕が描いたものである。(2) 詩の後半は黄州^{こう}の日々を回顧し、どうして都に出てきたのか悔やんでいるかのような趣がある。(3) 王詵が描いたこの『煙江暈嶂図^{えんこうじょうしやうず}』は現在に至るまで伝えられ、上海博物館の所蔵品となっている〕

■【08-3-061】王晋卿作煙江暈嶂図、僕賦詩十四韻、晋卿和之、語特奇麗。因復次韻、不独紀其詩画之美、亦為道其出処契闊之故、而終之以不忘在莒之戒、亦朋友忠愛之義也

【解題】上に続いて同じ画についての詩。その題は、「王詵^{おうしん}〔字は晋卿〕は『煙江暈嶂図^{えんこうじょうしやうず}』を作った。私が十四韻の詩を賦したところ、王詵はそれに和した。特に美しい詩であったので、私はここにさらに次韻する。その詩は王詵の詩画の美^{しる}を紀すものではなく、王詵がその出処において長く苦勞してきたことをいうものである。最後に『莒に在るの戒め』を添えるのは友人としての忠愛の心である」。この詩の終わりには、「莒^{きよ}に在るの戒め」を詠み込んでいるのだが、二つの故事を用いていてかなりわかりにくいので、ここでは故事について解説することなく含意だけを汲んで訳す。

【訳文】

山の中で頭を挙げ、日の注ぐ涯を見る――

ちやうあん

長安[都]は見えず、

うすぼんやりとした雲があるだけ。

長安[都]に帰って山の上を望む——

時は移り、事は改まり、

涙をこらえきれない……

かつてここで聞かれた管弦の曲はもはやなく、

集まっていた大勢の客人は去ったまま、

豪華な作りの馬小屋だけがそのままにある。

一日千里を走る俊足の馬は、

風雪を好み山川の険しさを軽んじ、

ここで身を縮めて贅沢な餌を食らうのはまっぴらだと、

十年の間、戦の旗の前を駆け巡り、

瘦せたことでかえって堂々の骨格が現れ出たのだった。

貴君が経験した苦難はむしろ天の与えるものだった。

貴君のふうりゅうぶんさい風流文采は磨れば磨るほど尽きることがなく、

画と詩は互いに優美を争うに至った。

山を画くのは山中の人だけとは限らず、

田を歌う人は田を知る人ばかりではない。

とう げんそう ていけん唐の玄宗皇帝は鄭虔の三絶[詩、書、画]を讃えたが、

貴君はすでに二絶[詩、画]を得ていて、

筆の勢いからして三百年來の三絶となるであろう。

貴君はげんこく巖谷の巖しさをもってなほなよとしたものを、

びほう眉峰の秀でるのをもってきらきらとしたものを克服したのである。

人間世界にあるのはただ春の一つの夢、
 この身は蚕が三度眠る間に老いてしまうのだ。
 山中は幽絶の場であっても永くいることはできない、
 平地の家にいる仙人となるのがよいだろう。
 貴君は山中の水石を長く眼に留めておくことができ、
 私の好むところのものを知っているから、
 この画とこの詩がここにこしであるのだろう。
 どうかこれからも山のことを終生忘れることなく、
 画を描き、詩を賦して私を楽しませてほしい。

【補足】〔王誥は蘇軾に連座して遠くに流され、苦難の日々を送った。それを経験したからこそいまがあるということ、王誥の詩画を讃えつつ、また戒めとしたのである。それはまた蘇軾自身にとっても同じであった。詩の途中に「苦難はむしろ天の与えるものだった」と訳した原文は「塩車之厄寧非天」〔塩車の厄寧ぞ天にあらずや〕
 [塩を載せた車を曳くような苦役を与えたのはきっと天の定めるところなのだ] である]

■【08-3-062】王晋卿所蔵著色山二首

【解題】王誥〔字は晋卿〕が所蔵する著色された山の画に添えた詩。

【訳文】

其の一

李成の画は縹緗として、

雲があるのかないのか、空に出たり消えたり、

水墨の仙といわれた。

それ以来、画は一変し、

もはや風流はそこに尽きて、

とう り しくん
唐の昔の李思訓の著色された山の画は誰からも顧みられなくなった。

【補足】 [り せい ご だいじっこく そう李成は五代十国時代の終わりから宋の初めに活躍した人で、水墨画の新しい世界を拓いた]

其の二

かん けい らくかく
韓愈が詩に犖確[怪石がごろごろあるありさま]と詠んだ山に似るのか、

行こうとして路がなく、導いてくれる人もいない。

留まっていた雲が離れ出して朝の光が漏れくと、

そこに見えてきたのは、

あか たに あお
山の紅と澗の碧なのであった。

【補足】 [白と黒だけの水墨画ばかりを見ていると、ときに着色されたものが新鮮に目に映るのだらう]

■ 【08-3-063】 論周種檀議配享自劾劄子

【解題】 これは読んで少しも楽しくない公文書である。うん 鄆州の州学校の教授を務める周種という人物を、蘇軾は「蟻虱のような小臣」と罵倒し、断じて処罰することを朝廷に求めている。周種がどれほど悪いことをしたのかとしんそう おういうと、神宗皇帝の廟に王安石も一緒に祀ることを朝廷に検討するよう求めたのである。皇帝の廟に功臣を合あわせて祀ることを配享はいきょうといい、死後に与えられる荣誉として極めて大きなものであるとされた。神宗皇帝と王安石の関係からして配享は自然なことであるように思えるのだ

が、このときの政治情勢からして、蘇軾は何としてでもそれを止めなければならないと考えた。周種を弾劾する文章は2通あり、2通目は口調が一段と厳しくなる。

【訳文】

其の一

元祐三年十二月二十一日、翰林学士朝奉郎知制誥兼侍読の蘇軾が文書にて申し上げます。

臣が先に中書舎人を拝命しました日に、かつて江寧府の右司理参軍であった周種は鄆州の州学校の教授になりましたが、近ごろ聞きますところでは、周種が上疏して、朝廷はもとの宰相である王安石を神宗皇帝の御廟に配享すべきであると申し上げました。謹んで漢代の法律を按じますに、皇帝の廟についてやたらに議論をする者は死刑に処すとされていて、高祖皇帝から景帝、武帝、宣帝に至ってもこの法が行われ、それによって宗廟を尊び、朝廷を重んじることが衰えたりしないよう防いだのであります。実に深い意味のある法律であります。本朝においては祖宗以来、元勳にして天下の人々から重く仰がれ終始徳を全した人だけが特に選ばれて、歴代皇帝とともに祀られてまいりました。それも天子が御自身で選ぶのではなく、必ず衆議に委ねられ天下の公議が納得する人物でなければなりません。すでに選ばれたならば、詔に「恭しくも公論に依る」との旨が記され、宗廟にそのことを申し上げ、その後で配享が実施されたのであります。このようにして厳正に行われてきたものであるのに、朝廷から遠くにあつて地位の低い小臣が私意をもって配享を議論するようなことがあつてよいものでありましょうか。そのようなことをしても不問に付すならば、宗廟の威厳は損なわれ、朝廷は軽視されてしまつてありましよう。

臣が思いますに、王安石が生前に何をしたかという、非を是とし、正を邪としたことは朝廷の中外の者が具さに知るところで、皇帝の眼からも逃れることのできないものであります。先帝もそのことをお知りになって、王安石を閑職に置き、終にまた用いることはなかつたのであります。今すでに王安石の定められた青苗法などの法律は改められ、王安石の党人であつた呂惠卿、李定等の連中は地位を奪われ

て遠く退けられ、学校や科挙の制度も改められ、仏教や道教を排斥したことをやめ、王安石が建てた恣意的な学説を禁止しました。このような大議はすでに確定し、数年にわたって実施されています。また、先帝に配享されるのは富弼ふひつであると定められ、天下の人々はそれが至当であると受け止めております。

敢えてここに議論を引き起こそうとした周穉ちうじとは何者でありましょうか。恐らくこれは朝廷を試し、おおいおい邪説を進め、陰で群小の者どもが声を合わせるように企む者でありましょう。これは孔子も指摘したところの「危こういこうをこうしてこうたればこうもこうけのこういこう」「間違こうったこう考こうえにこう安こう住してこう疑こうわない」ということそのものであります。

臣わたくしは 忝かたじけなくもお傍にお仕えて、このような誤ったことがあって、このような人物が学校を汚しておりますことを聞きました。もし、このことに知らん顔をして申し上げずにおきましたならば、悪だきみをする連中を好きにさせてしまって、大きな罪を臣わたくしが犯すこととなりましょう。謹んで臣わたくしの出過ぎた行為を自ら弾劾して罪を待つものであります。伏して聖慈を望み、特に赦して下さいますようお願いのたすであります。

【補足】〔(1) 蘇軾が問題にしたのは、実は王安石を配享おうえんせきするか否かではなく、その意見を容れた後に起こるであろう事態であった。そのことがこの文章ではあまり明確ではなかったので、次の 2 通目を書くことになる。当時、保守派は三派に分かれてつまらぬ争いばかりをしていた。先に追放された改革派は、その間隙を縫って再び政権に返り咲くことを狙っていた。配享はその足場を得るための第一歩であると、蘇軾は察したのである。(2) この文章で王安石は「非を是とし、邪を生とした」と全面的に批判している。先に王安石を高く評価していた [→作品番号 08-1042] のとは大きく異なっている。それぞれの文章の主旨に合わせて、ほとんど正反対の評価を王安石に対して下しているわけで、どちらが本心であるのかという検討はさほど意味がないだろう。ここではとにかく呂惠卿りよけいけいや李定りていが再び跋扈するのを阻止するために、大親分であった王安石を徹底的に悪く言うておく必要があったのだ〕

其の二

元祐三年十二月二十一日、翰林学士朝奉郎知制誥兼侍読の蘇軾が文書にて申し上げます。

臣は近ごろ次のように申し上げます。学官に挙げられた周穉は王安石を先帝に配享すべきであるとの議論を勝手に起こし、朝廷を試して順次邪説を進め、陰で群小どもが声を合わせるようしていることに対して、しかるべき部署においてこの妄挙の罪を調べ、重い処分を下し、もって世の中への警告とするようお願いしました。しかるにいまに至るも何の御指示も下されておられません。

臣が考えますに、賞罰を明らかにし、邪正を定めることは国家の根本であります。この二つがなければ、国は乱れて亡びに向かいます。……[中略、古典を引いてこの論を補強する]……

臣が観ますところ、二聖[皇帝と高太皇太后]が位を嗣がれて以来、小人どもを追い払われました。

呂惠卿、李定、蔡確、張城一、呉居厚、崔台符、楊汲、王孝先、何正臣、盧秉、蹇周輔、王子

京、陸師閔、趙濟、それに宦官の李憲、宋用臣などは、ある者は国境で戦を起して次々に禍をもたらし、ある者は国家が利益を貪って収奪を厳ししているとの民の怨みを招き、ある者は大獄を起して

善良の者を罪に陥れました。奸悪を働いた者はとても数えきれないほど大勢いたのでした。王安石は実はその首領であったのです。いまやそうした連中のうちすでに死んだ者のまかは都から遠ざけられましたが、その腹心や手助けをした者はいまも朝廷の中外にいて、かつての私恩を思ってまた用いられることを願ひ、そのことを計画して何やらものを言う者がたぐさいます。いずれも実情を曲げ、悪事の跡を隠し、腹黒さを一つにし、その仲間意識は堅いものがあります。しかし、お上がそのことを御存じてないのを

臣は実に憂うのであります。

君子は鳳のように集めるのが難しいとされています。鳳はわずかな異変の兆しがあるだけで、すぐに飛び上がり、様子を見てから後にまた集います。まして追い払われたならもう集まることはありません。小人は蛆や蠅のように群がりやすいとされています。生臭いものがあるところに集まり、たちまちのうちに千匹、万匹になります。まして招き寄せたならいくらでも集まってくるのです。朝廷はこのところ少ずつ先の連

中に対する戒めを緩め、李憲、王安礼、蔡確が朝廷に願い出たことを許しております。崔台符、王孝先等は再び用いられようし、楊汲もまた復位しようとしています。呂惠卿はそのような情勢を見て、蘇州に住むことを願ひ出しています。これらの者は皆、民にとっての大賊で国を蝕む巨大な害虫です。連中の首領が復権したならば、この上ない幸いとするであります。罪の小さな者たちはすぐにも用いられることとなります。少しでも緩めたならば次第に大きく緩めることになるのです。呂惠卿、蔡確らが用いられるときには、青苗法、市易法などの法律も復活するであります。

そこまで申しますのは、李士京という邪佞な小人が愚か者ども集め、大臣に気づかれないように連絡し合って、運河を掘り、城壁を修理することを実行しようと企んでいます。これが行われたならば、次には茶磨の法を運用しようとするでしょう。それを観ると、呂惠卿、蔡確らが用いられて青苗法、市易法が復活することだってあると思わなければならないのであります。

唐の時代に盧杞が責められて宰相から降ろされたときに、しばしばそれを赦すことをいう者があり、徳宗皇帝は盧杞に一つの郡を与えようしました。朝廷の人々はそれを心配し、宰相の李勉、給事中の袁高、諫官の趙需、裴佖、宇文炫、盧景亮、張薦、それに常侍中の李泌等が死を覚悟して反対しました。盧杞が郡知事になったならば、それに留まらずに、また任用されて、一つの松明が原野を焼き払うようにして、天下を禍に陥れるもとなるのを恐れたのです。いま周穉が草ぐずのような微小な身でこの議を建てるのは、同じように禍のもとを開くのであります。

漢の時代に淮南王が謀反を起こしたときに、ただ汲黯だけを憚り、宰相の公孫弘さえ説き伏せれば、あとは簡単にうまくゆくと考えました。いま周穉が蟻鼠のような小臣の身をもって敢えて大奸をなすのは、朝廷にははかるべき人がいないと愚弄するものであって、不幸にして淮南王のような者がいたならば、何の憚るところもないということなのであります。

臣は敢えて遠い昔のことを引きましたけれど、執政のうちに富弼や韓琦のような人がいて、台諫のなかに包拯、呂誨のような人がいて、あるいは司馬光がここにいましたならば、鼠のようなこの連中は何もできないはずでありました。王安石は仁宗皇帝、英宗皇帝の御代にいかさまなことを百も言い、妄りに

己の名を高くて、高い地位を得ようとしたが、韓琦が独りその奸を見抜き、ついに昇官させることはありませんでした。韓琦が宰相の位を去らなかつたならば、王安石はその志を得ることはなかつたのです。このことから人物の邪正を見抜いて、禍が現れる前に消すことが宰相の大事な仕事なのであります。

臣はここ数日、執政の議論を聞きますに、処罰を緩めようとしているとのことで、もしもそうありますなら、小人が互いに朝廷へと引き上げ合うようになり、呂惠卿らは朝廷の判断のありようをそこから知るようになるでしょう。事は天下の行く末、国の治乱に及ぶことなのであります。

伏して望みますのは、特に御宸断を下されて、周種^{ごしんたん}の罪を厳しく議論して、軽々しく赦すことなきやうに。周種^{ごしんたん}はもとは州県の小吏として、その意はわずかでも昇進することにあっただけでしたが、いまたちまち狂ったように大きな議論を先頭に立って起こしたのは、必ず陰で何かを企んでいる者がいるからなのでしょう。そうでなくて周種^{ごしんたん}が敢えて己の分際を超えて天を揺るがすようなことをするはずがないのです。もし臣の申し上げることを聞いていただけないならば、再びならず幾度も論じるものであります。

【補足】〔(1) 途中に列挙されている呂惠卿以下の人物は改革派の主要な顔ぶれである。この中に章惇^{りょけいけい}の名がないことは注目に値するのかもしれない。章惇は他の連中とは違って、本来の改革の意義を知って国のためになる政治を行おうとしていたと蘇軾は認識していたのではないだろうか。(2) 蘇軾の他にも配享に反対する者があって周種^{しょうじゆん}の議は却下され、周種^{うん}は潭州の州学校教授の任を解かれた〕

■ 【08-3-064】夜直玉堂、携李之儀端叔詩百余首、読至夜半、書其後

【解題】翰林院の玉堂に宿直するに当たって李之儀^{かんりんいん ぎよくどう} [字は端叔^{りしぎ あぎな たんしゆく}] [→作品番号 08-1013] の詩百余篇を携え、読んで夜半に至り、その後この短文を記した。

【訳文】

ぎよくどう

玉堂は清浄な場所であるので眠るのは難しい。

かといって、王維おういが宿直の話し相手に孟浩然もうこうねんを呼んだようなことはできない。

それで貴君の好い詩を借りて永い夜を過ごすことにした。

佳い個所に逢うごとに、参禅さんぜんするように深く味わう。

貴君の詩に導かれて生じた愁いは、硯に入って水を凍らせ、

貴君の詩に導かれて生じた喜びどしぎは、燈に入って輝きを増す。

貴君の家の子供たちに言葉を寄せよう、

いつか御父上の詩集を編むときにはこの句も入れてほしいものだ。

【補足】おうい王維が宮中に宿直した夜に孟浩然もうこうねんを呼んで語り合ったという話は作品番号07-1-056でも見ている]

■ 【08-3-065】次韻王定国得晋卿酒相留夜飲

【解題】裕福な王誥おうしん あぶな [字から晋卿しんけい] から王鞏おうきやう [字は定国ていこく] が酒をもらい、それで蘇軾を招いた。王鞏が詩でもっとゆっくり飲みましょうと誘ったのに対して応じた戯れの詩である。王鞏はなぜかまだ都にいた。

【訳文】

貴君うわぎは衫から腕を丸出しにし、

この秋をも圧倒をする気分、

私が紫こはくの裘を羽織るのは、

仙人にてもなった心持ち。

酒こそは私を有名にしてくれたもの、

病やまいのもとになろうとも、憂いを忘れさせるのは格別。

音律の定めなく自在に作る貴君は詩の將軍、
 酔いの真の境地を知っている私はその道の侯爵である。
 樽を倒してこの夜をとことん飲もうてはないか、
 蛇のようにくたくたに酔いつぶれても、
 まさかはり鉤でひっ捕らえて行く人はいないだろう。

■ 【08-3-066】 陳隋好楽

【**解題**】ちんちやう 陳朝の最後の皇帝のちんしゆくほう 陳叔宝と、ずいちやう 隋朝のようだい 煬帝が音楽を好んだことについて記した文章。大半が史書からの抜き書きで、蘇軾の感想は最後の一文だけである。陳叔宝は作品番号 08-1-066 でも見たように中国史上で屈指の暗愚な帝王で、煬帝はその陳を亡ぼす作戦を遂行し、隋による天下統一を果たしたものの、民衆を酷使し過ぎたために短期間で国を亡ぼした暴君として有名。

【訳文】

笛を吹き、琵琶や琴を弾き、歌い舞う技は、ほくせい 北齊のぶんじやうてい 文襄帝[高澄]のころから特に好まれるようになり、かせい 河清年間[6世紀中ごろ]以降に最も甚だしくなった。陳の後主[ちん 陳叔宝]はこじゆう 胡戎のがく 楽[西方伝来の音楽]をひたすら賞玩し、耽愛してやまなかった。……[朝廷の人々が挙って音楽に熱中し、後主自身も作曲に耽ったことが記される]……皇帝は御幸する途中の馬上でも作曲した。楽しみが行き過ぎると哀しみがくるのであって、ついに国を亡らしたのだった。

(隋の)煬帝は音律を理解しなかったのも、あまり関心を持たなかったのが、後にたぐさんのえんきょく 艶曲を作らせ、その詞はいんき 淫綺であった。……[煬帝が作らせた曲名を並べ、音楽に通じる者に高い位を与えたことを記す]……

(南北朝時代の)宋の武帝[劉裕]が皇位を禅譲されたときに、朝廷には音楽が備わっていなかった。

いんぶんちゆう

殷仲文がそのことを武帝にいうと、武帝は、「毎日、暇な時間がないし、音楽はわからない」といった。殷仲文が、「繰り返し聞けばわかるようになります」というと、「わかると好むようになるものであるなら、習わなくておこう」といった。

こうした帝王の言動を観れば、興亡の理は明らかではなからうか。

【補足】〔(1) この文章をこの時期に記したのは、このころに朝廷で用いる音楽を一新する議論があったことと関係しているのだらう。范鎮〔→作品番号 08-1-021〕がそれに関与していて、范鎮がそのことを詩に詠み、蘇軾が和した作品が残っている。訳者には理解できない内容であるので割愛する。(2) ここで興味深いのは、劉裕の評價である。家柄が何よりも重要視された唐代以前において、下級役人の息子であった劉裕が己の実力だけで皇位にまで昇り詰めたのは極めて稀有な事例であった。強引に皇位を奪い、元の皇帝を殺害したのは道義的には非難されるべきだろうが、世襲によって愚かな皇帝が続く非道徳性よりは、国や民にとって遥かによいことであったのは間違いない。武によるか文によるかの違いはあっても、己の力で世に出て天下に名を馳せるといふ点では、宋代の士大夫と共通するところがあり、蘇軾も蘇轍も司馬光も劉裕には強い関心を寄せていた。なお、陶淵明は劉裕と同じ時代を生き、頭角を現しつつあるころの劉裕を近くで見えていたと推測され、劉裕の生きざまには首肯できないところがあったようだ]

■ 【08-3-067】 范景仁墓誌銘

【解題】 閏 12 月 1 日に范鎮〔字は景仁、蜀公〕が亡くなった。上の補足でも見たように、范鎮はその直前まで国政に関わっていた。81 歳であった。蘇軾は祭文を作り、翌年の 8 月に范鎮が郷里に葬られた折に、墓誌銘を書いた。ここでは墓誌銘の一部を読んでおこう。

【訳文】

熙寧、元豊のころに、いま天下の賢者は誰であるかと士大夫が論じると、必ず司馬公[司馬光]と范公[范鎮]の名が挙げられた。二公の道德、風流は現代の手本として仰ぐべきであり、二公が可否を論じると天下の榮辱がそれによって定まるとされた。二公が歡びを一つにすることは、それに及ぶ者は誰もいなかった。二公は「私と君は生まれて志を一つにし、死ねば一緒に伝えられるであろう」といっていた。天下の人で二公の優劣を比べる者はいなかった。二公は、後から死ぬ者が先の者の墓誌を作って互いに伝え合おうと約束した。それで、司馬公はあらかじめ『范鎮伝』を準備しておいた。そのなかに、「呂誨の先見も、范鎮の勇決も、いずれも私の及ぶところではなかった」と記した。

私は幸いにも二公と親しく、その平生を詳らかに知ることができた。大きな節義に照らして二公が用捨する選択は互いに相談しなくても常に同じであった。例えば、仁宗皇帝が皇嗣を立てたときの議論でも、英宗皇帝のときに濮安懿王の呼称をどのように定めるのかという議論でも、神宗皇帝のときの新法の議論でも、二公はあたかも一人であるかのように、左右の手が先後を一つにして出るのであった。それで司馬光は常に人に、「私と范君は兄弟で、ただ姓が同じではないだけだ」といっていた。しかし鐘律[宮廷音楽]について論じたときだけは、繰り返し相手を非としたので、全て同一であったわけではなかった。君子はそれで二公は単に同調しているのではないと知ったのである。司馬公が亡くなると、私はその行状記をまとめて范公に授け、范公はそれを墓に誌し、私は墓道に表を刻んだ。いま范公の墓を作るに当たって、その子孫は皆で、司馬公はすでに没してしまったので、あなたをおいて他に墓誌を作る者がいないといい、かつ我が先君子[蘇洵]の大切な友であったことから辞退はできなかった。……[以下、范鎮の生涯を記す]……

■ 【08-3-068】 祭古塚文

【解題】 宜興県の陽羨 [→作品番号 07-2-045] にある蘇軾の土地を管理にしている者

が古い墓を発見したので、そこに葬られていた人を祭る文を書いた。序文だけを訳す。

【訳文】、

閏十二月三日、私の田の管理人は住まいの東南に部屋を築こうとして、大きな塚[墓]を掘り当て、頭の部分が出てきた。私はそれをまた埋めるよう命じて、その人を祭る文を作った。……

【補足】^{ようせん}陽羨とは随時連絡を取り合っていたのだろう。人が長く住むと、墓だらけになってしまう。墓地として適しているのは高燥な地とされていたから、墓地を永遠に守っていたら生きている人にとって住むに適切な場所がなくなってしまう]

■ 【08-3069】 書正信和尚塔銘後

【解題】^{せいしん おしやう}蘇軾の郷里にゆかりのある正信和尚の「^{とうめい}塔銘」[墓誌銘]の後に記した短文。正信和尚についてはここに記されている。

【訳文】

^{だいあん しよく り}大安[蜀の利州路に属する]の^{よう}楊氏からは代々名僧が出ている。^{せいしんひやうこう}正信表公は三人兄弟で、兄弟の一人が^{じんけい}仁慶で、^び眉州の^{そうじやう}僧正となり、もう一人が^{げんしゆん}元俊で、^{ごくらくいん}極楽院の^{あるじ}主となった。いまの大安の^{じへいいん}治平院である。いずれも行いが高く、そして、特に表公は超然として、晩年は静覚をもって聞こえた。三人とも我が先大父^{せんだい ふ}職方公[祖父の^{そ じょ}蘇序]、我が先君^{せんくんちゆうだい ふ}中大夫[父の^{そ じゆん}蘇洵]と交遊があり、善い仲であった。

^{きねい}熙寧年間の初めに、私は(父の)喪が明けて都に向かおうとしたときに、表公はたまたま病に臥せていたので、部屋に入って別れを告げた。一寸余りの白髪で、^{りやうぜん}眼光は了然として、骨が際立って出ていて、画にある^{しほ ぼ だい}須菩提のように畏れ多い姿であった。私が立ち去るに忍び難くしていると、表公はいわれ

た。「行きなさい、どこであろうとも会えるではないか」

私は、

「公は千里も遠いとはしないと一緒にきてくださるのでしょうか」

表公は笑っていった。

「正信の家では私の言葉を申します。貴君に従って千里を行くこともできなくはありませんし、私にとっては取るに足りないことです」

表公はその後すっかり回復され、六年後に亡くなった。そのときに私は銭塘せんとう ことう〔杭州〕にいて、夢に表公を見て、あたかも別れを告げにきたかのようであった。

また十五年が経ち、表公の弟子が法要を行い、偈げ しょう、頌しょうおよび塔記とうきを作って私に見せてくれたので、その終わりに記す。

■ 【08-3-070】 与弁才禪師

【**解題**】こう 杭州べんさいだい し げんじょうにいる弁才大師元浄 [→作品番号 06-1-081、07-1-016 など] に宛てた手紙。

【訳文】

(1) 長らくお手紙を差し上げることもなく、恥ずかしさが深く増し、切に貴僧の御佳勝を願うばかりです。私は忝くも過分の処遇を賜りながら、国政に補うところがほとんどありません。東南の一郡を得て移ることを日夜に望んでおります。老いに臨んで御法音をお聞きてできますよう、その時がきますまで、どうぞ御自愛ください。

【**補足**】 [これは前の年に書いたものであるようだ。この望みが叶えられたかどうかは本章の終わりで見ることになる]

(2) 私に少しお願いするところがあります。……我が弟が絹一百疋を寄進して、先君せんくん霸州文安はしゅうぶんあん県主

ぼるいそうちゆうだい ふ そじん せん か ぶしやうぐんたいくんでい し
 簿累贈中大夫〔父の蘇洵〕と先妣武昌郡太守程氏〔母〕のために、地藏菩薩一尊と侍者二人の像を造って、都の寺で供養したいと考えております。菩薩の大きさは人と同じくらいで、用意できる費用はその絹だけであります。もし費用が十分でなければ、刻む手間を省いても構いません。どうか、匠の者を選んで造っていただけないでしょうか。完成しましたら、受け取る船を手配します。はなはたお煩わせしうことに申し訳ないことあります。

【補足】〔(1) これは弟の願いを伝えたもの。父母の供養のために観音菩薩像の作成を依頼したのである。都で造らずに遠く杭州に依頼したのは、そうした技術が都よりも進んでいたからであろう。(2) もう一通手紙が残されていて、次男の蘇迨がかつて弁才大師のもとで剃髪し、竺僧という名を授けられたことで無事に成長し、承務郎の官位を受けるまでになったので、その謝札を贈ると記している。蘇迨が剃髪したのは三歳のころで、出家する形を取ることで、子の成長を妨げるものを退けられるとされていたのである〕

■ 【08-3-071】 次韻劉貢父春日賜幡勝

【解題】この年は閏12月があり、年の内に立春になった。劉攽〔字は貢父〕〔→作品番号 08-3-002 など〕が宮中から立春を祝う幡の飾りを賜ったことを詠んだ詩を作り、それに次韻した。この詩は慶賀にふさわしい語句を並べ、原音で朗誦するなら、恐らく陶然とした味わいを得られるのだろうが、内容自体は乏しいので、読み下し文を添えるだけにする。

【訳文】

寛詔随春出内朝、〔寛詔 春に随って内朝より出ず〕

三軍喜氣挾狐貂。〔三軍の喜氣 狐貂を挾む〕

鏤銀錯落翻斜月、ろうぎん さくらく しやげつ ひるがは [鏤銀 錯落として斜月に翻り]

剪彩繽紛舞慶霄。せんさい ひんぶん けいしやう ま [剪彩 繽紛として慶霄に舞う]

臘雪強飛才到地、ろうせつ し と わず ち いた [臘雪 強いて飛んで才かに地に到り]

曉風偷転不驚条。きやうふう ひそ てん えだ ねどる [曉風 偷かに転じて条を驚かさず]

脱冠径醉応帰臥、だつかん たっ ただ よ まさ き が [冠を脱して径ちに酔うて応に帰臥すべし]

便腹従人笑老詔。べんぷく ひと ろうしやう わら ま [便腹 人の老詔を笑うに従かす]

【補足】 [(1) 蘇軾自身の注で、この前日に小雪が降ったとあり、それで5句目に「臘雪」 [12 月の雪] の語がある。また、この日に酒を賜ったともあり、それで 7 句目に

「径ちに酔う」とある。(2) この詩に続いて、蘇軾はもう 1 回次韻し、さらに葉均と王欽臣がもとの詩に和したのでそれに応えてまた和し、さらにもう 1 回和している。

いずれも同じような見た目の立派さが取り柄の詩なので、訳は割愛する。(3) ここまで何度も登場してきた劉放は翌年 3 月に亡くなる。蘇軾と劉放とはともに諧謔を得意とすることで知られ、いくつものエピソードが伝えられている。そのうちの一つ、この時期の出来事であったと推測されているものを、先にも見た朱弁の隨筆『曲洎旧聞』 [→作品番号 08-2-012] から引用する]

【訳文】

朱弁：『曲洎旧聞』より

蘇軾は劉放に向かってこのようなことをいった。

「かつて弟とともに制科の受験勉強をしていたときに、私たちは毎日『三白』ばかりを食べ、これをはなはだうまいと思っておりました。世間に『八珍』[八種の珍味]とかいうものがあると聞いても、そんなものなんだという気でしたのです」

劉放が、

「三白と何ですかな」

と、尋ねると、

「一ふりの塩、一つかみの大根、一杯のご飯、これで『三白』であります」

劉攽は大いに笑った。

その後しばらくしてから劉攽は手紙で、

「しょうはん晶飯を御馳走したいので拙宅にお越しいただきたい」

と、蘇軾を招いた。

蘇軾は「三白」の話をしたことをすっかり忘れていて、

「『晶飯』は何たかわからぬが、劉君はたくさんのお書物を読んでいるから、きっと何か出処があるのだろう」

と人に語って、劉攽を訪ねた。

食事のときになって、食卓に並べられたのは塩と大根と飯だけだった。それを見てようやく「三白」を戯れ

に「晶」と書いたのだと悟り、笑って箸を取り、全部平らげた。

蘇軾は馬に乗って帰る際に、

「明日、お越しくださいよ。『もうはん糞飯』を御用意しておきましょう」

といった。

劉攽はきっと戯れであろうと思ったが、「糞飯」とは何であるのかわからなかった[糞は毛皮の意]。

劉攽が約束通りに行くと、蘇軾はべらべらと話に夢中で、食事の時刻を過ぎてしまった。劉攽は腹が

減って仕方ないので、食事を求めた。

「少しお待ちください」

といって、また話を続け、一向に食事は出てこなかった。

同じことが何度も繰り返されたので、劉攽はどうとう、

「もう腹が減ってどうにもなりません」

と、悲鳴を上げた。

蘇軾が毛もろにいうには、

「^{ない}塩も毛、^{ない}大根も毛、^{ない}飯も毛。^{ない}三つ毛でありますぞ」

劉攽は腹をかかえて笑い、

「君がこの前の仇をきっととるだろうと思ってはいましたが、ここまでは考えが及びませんでした」

蘇軾はそこで食事を勧め、夕暮れまで楽しんだ。

世俗で「無」のことを「模」といい、「模」と「毛」は音が通じる。それで「無」を「毛」とし、「三無」を「毳」としたのである。さすがの劉攽もここまでは考えが及ばなかったのだ。

■ 【08-3-072】次韻王晋卿惠花栽栽所寓張退傳第中

【訳文】年が改まって元祐4年〔1089年〕、蘇軾は54歳になった。王誥〔字は晋卿〕

〔→作品番号 08-3-061〕が花と詩を送ってくれたので、その詩に次韻した。この詩の題によると、花は張士遜〔号は退傳〕の旧居に植えられていたものであった。張士遜

〔→作品番号 08-3-016〕は宋の第二代から第四代の皇帝に仕えた重臣で、都に立派な屋敷を構えていた。この詩は禅語めいて意味がなかなか捉えがたい。訳者なりの解釈を加えることなくほぼ直訳する。

【訳文】

坐来念念失前人、〔座っていると、一念ごとに前の人失われる〕

共向空中寓一塵。〔前の人も我もともに空の中に向かい、一つの塵に寓する〕

若問此花誰是主、〔この花に対して誰が主であるのかともし問うなら〕

天教閑客管青春。〔天はいおうか、閑な客人に春うらを管轄させるのだと〕

■ 【08-3-073】次韻王晋卿上元侍宴端門

【**解題**】^{じょうげんせつ}上元節に^{たんもん}皇城の端門で皇帝による宴が開かれ、^{おうしん}王誨 [^{あざな}字は晋卿] は皇族に
つながる者としてその座に加わり、そのことを詩に詠み、蘇軾が次韻した。

【**訳文**】

月[皇帝]が上ると、宮城の門が開かれ、
門外の露台の上を銀河[群臣]^{めい}が繞る。
貴君はまさ^{かんたん}に邯鄲の枕に夢見る心地、
貴君の詩を見て、私は化してその場に居並ぶ思い、
仙界の毬のような燈籠に光が動き、
お上の歩みとともに香りが溢れ出る。
従うのは一万の名馬の列。
我が衰病の身はそのお供をするのは叶わないのである。

■ 【08-3-074】 王鄭州挽詞

【**解題**】^{そうちよう}宋朝初期の勲臣の子孫で、皇族と姻戚関係のある^{おうこくしん}王克臣 [^{あざな}字は子難] が亡
くなり、蘇軾はこの挽詞を作った。76歳であった。

【**訳文**】

^{たらや}羨むのは、
貴君が白髪^{りんきやう}に至って琳宮[皇城]より^{てい}出て鄭州に帰り、
盛大に太鼓や角^{つのぶえ}によって迎えられたこと。
大水害の後に、貴君は千里にわたって農桑を盛んにしたので、
人々はその功績を歌い合い、

貴君を慕う者が続々とその門に訪れた。

しかし、人の世の聚散はあらかじめ知ることはできず、

悲歡は一瞬のうちに变化する。

かのとき都の府庁舎で同僚であった者はいま幾人いるのだろうか、

そのころ貴君が机に向かうと、風が立つ勢いで筆を揮っていたのだった。

【補足】〔(1) 王克臣おうこくしんは最後の日々を鄭州ていで過ごしていたようである。(2) 終わりの部分には、蘇軾自身の注で、「私が開封府かいほうにいたときに、王克臣もそこにいた」と記している。それは、王安石おうあんせきの改革を強く批判していたときのことである [→作品番号 03-2-008]]

■【08-3-075】書王定国所蔵王晋卿画著色山二首

【解題】王翬おうきゆう [字は定国あざな ていこく] が所蔵する王詵おうしん [字は晋卿あざな しんけい] の画に詩を添えた。それは着色した山の画であった。王翬が持つ王詵の画を詠んだ詩は作品番号 08-3-060 でも見ている。

【訳文】

其の一

白髪しやうざんの四老人は、

かつて商山しやうざんにいた隠者いんしやなのだろうか。

貴君を煩わして紙の上から光が射して、

我が胸中の山を照らし出してくれる[それが画中の山]。

山の中には何かあるのか、

老いた木、いかめしい土や岩、

天からの日光を受けて、溪谷がきらきらと輝く。

我が心から一切の物が無くなって空となり、

言葉は何ら関係するところかない。

見るがよい、

ここにある古い井戸の水には万象が往還しているのだ。

【補足】[王誥の画には4人の人物が描かれていたのだろう。この詩の始めは、それを
商山しょうざんに隠棲した漢代の有名に隠者かんだいに譬えたもの。この詩は全体として王誥の画と蘇軾
の心象風景を重ね合わせて詠んでいる]

其の二

南方に流された貴君おうきやう[王鞏]は、

嶺北れいほくに帰って初めて雪に逢うことができた。

私もまた江南こうなんにおいて五回の春を見た。

この語を、風流を解する王誥君おうしんに寄せよう、

三人はともに山を識る人である。

【補足】[(1) 岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳『蘇東坡詩集』(1927年)は、この詩
の解説に「余論」として「若し今日此の画にこの讚あれば、希世の国宝なるべきも、
それは要するに空想である」と記している。(2) 同じ頃に王鞏おうきやうに贈った詩があり、少
し皮肉めいたことをいっているようなのだが、はっきりとはわからないので訳は割愛
する]

■ 【08-3-076】 寄傲軒

【解題】李之儀りしぎ [字は端叔あざな たんしゆく] [→作品番号 08-3-064] の弟子に韋許いきよ [字は深道あざな しんどう] とい

う人がいて、科挙を目指すことなく自由人として生きていた。その住まいである「寄き傲軒ごうけん」を詩に詠んだ。

【訳文】

韋先生は英妙えいみょうの頃[若い盛りに]、
 数多の筆を使いつぶして、千匹の兔を丸裸まるはだかにしてしまった。
 先生のあり余る才能からしたら、仕官の道などいかに足りないど、
 試験場に足を踏み入れることをしなかった。
 門に「傲ごう」の字を掲げているのはなぜなのか、
 俗人に対して傲おごるのではなく、我が名を傲るのである。
 先生はきっと知っておられる、
 高位こういに昇って栄誉を受けるところで、辱はじを償うものではないと。
 人はそれぞれに自身を安んじる計がないわけではない、
 しかし、「得とく」と「失しつ」とは車輪が回転するようにくるくる入れ替わり、
 「得」のときに、人は、顔に乙の字が浮かび上がった猛々しい虎のようになり、
 「失」のときに、人は、手も足も首も尻尾も甲羅の内に引っ込めて怯える亀のようになる。
 先生だけは、いつでも揚揚ようようとして、憂患ゆうわんによって汚よごされることはない。
 住まうところなどは、我が身を寄せて、上を見て下に向くだけの広さがあれば十分だとする。
 私もまたかの東の坡たかまのでは、小さな住まいすまいにいて、
 無限の春の内うちで、我が一寸の心に万物を収めていた。
 先生も私も酔えば、傍らうたに人などいないように嘍い、
 自身みづかみに向かって一樽の酒を勧める。
 先生の枕の先は車馬くるまが通る道、

月が木々の梢に傾ころ、
朝廷に臨む役人がざわざわと騒がしく先を急ぐのだが、
先生はちょうど眠りの真ただ中にある。

【補足】 [(1) 途中にある「東坡無辺春、方寸尽蔵蓄」〔東坡無辺の春、方寸 尽 く蔵蓄す〕は、かつて『赤壁の賦』〔→作品番号 06-3-057〕で示した哲学を要約したものである。(2) 旧い中国では官庁の朝は早く、官員は暗いうちに出勤した。なお、宋の都は夜通し賑わう場所もあり、また夜明け前から商売を始める者も大勢いた]

■ 【08-3-077】 送呂昌朝知嘉州

【解題】 呂昌朝が嘉州の知事として赴任するのを見送った詩。呂昌朝については元祐年間に嘉州知事となって、「清雅にして操行あり」ということだけが伝えられている。呂昌朝は蜀の人であったのか、嘉州〔蜀に含まれる〕に赴任することを、帰郷することとして詠んでいる。

【訳文】

貴君は、夢に三本の刀を見て大都市の知事になった昔の人を羨んだりしない。

古の文人の後を継いで、かの地の八景を詠もうとしているのだ。

貴君を勅命で嘉州に遣わすのは、

詩人に町の下にある名月湖を見おろさせるためであり、

古い仏を収める凌雲閣を臥したまま見上げさせるためである。

故郷に帰るのを思うのは、土地の名産の味にひかれてのことではなく、

蜀の人が描いた名画『竹鶴の図』の縁によって句を得るためである。

空に横たわる故郷の山は変わらぬ色を湛えているけれど、

貴君は白髪となってもなお知事として活躍すべき人なのである。

【補足】〔(1) 詩の後半は、このまま故郷に隠棲してしまうのではなく、呂昌朝りょしょうちょうにはまだまだ官員として働く場があるはずだといっているのである。(2) この詩は幾つもの故事を踏まえて詠んでいる。ここでは大意を汲んで訳したのだが、三点だけ説明を加えておく。「三本の刀を夢に見て」というのは、晋しんの時代の話で、ある人が、天井から三本の刀がぶらさがっているその下で寝ている夢を見た。すると、さらにもう一本刀が増えた。その人は縁起の悪い夢だと感じたのだが、夢判断をする人が、「三刀とは州の字に当たり、さらに一本益ましたのだから、夢は益州えき知事になるという吉兆である」と占い、実際にその通りになった。益州しよくはやはり蜀かの地で、嘉州より大都市である。「土地の名産の味」とは、やはり晋の時代の話で、都みやこにいて秋風がふくころに故郷の旬の魚の味を思い出し、ただちに官職を棄てて帰郷した人がいた。『竹鶴ちくかくの図』とあるのは、呂昌朝は画の収集家で、その中に蜀人の画いたその画があったのである〕

■ 【08-3-078】 記奪魯直墨

【解題】黄庭堅こうていけん [字は魯直あざな ろ ちよく] [→作品番号 08-3-045] との楽しいやりとりを記した短文。

【訳文】

黄庭堅こうていけん君は私の書しよを学び、書をもっている時代に名を馳せるに至った。好事の者たちは上質の紙や墨を提供して争ってその書を求めている。だから、黄君がいつも携えている古ふるびけた錦にしんの囊ふくろはそれらの物でいっぱいになっている。ある日、黄君が来たので、その囊を探ると、半分ばかりになった李承晏りしやうあんの墨があった。私が乱みだしがると、黄君は甚おだ惜おしんで、「家で飼っている何羽もの鶏けいよりも、野生かみの鶩うの方が珍重されるのですよ」と、いった。それでも私はついにそれを奪い取った。それがこの墨である。

げんゆう

元祐四年三月四日。

【補足】[李承晏^{りしょうあん}の墨については作品番号 08-3-013 で見ている]

■【08-3-079】書黄魯直恵郎奇筆

【解題】これは黄庭堅^{こうていけん} [字は魯直^{あざな ろちよく}] から筆をもらったという話。

【訳文】

私は科挙を受験したころはいつも郎奇^{ろうき}の筆を使っていた。近ごろは郎奇の筆を見ないので、郎奇が生きているのかも知らずにいた。今日、たまたま黄庭堅^{こうていけん}君のところで郎奇の筆を得た。黄君がいうには、「郎奇はここ十年ほど病気であったのですが、近ごろ平癒しました。その筆は試験の答案を書き者のためには作らず、詩を賦す人の用にのみ供しています」

【補足】[郎奇^{ろうき}は筆職人の名で、蘇軾が受験したころすでに評判が高かったのなら、かなりの年配であろうから、自分の筆の使い道に注文を付けたくもなるのだろう。あるいは、黄庭堅^{こうていけん}が戯れていっただけなのかもしれない]

■【08-3-080】書魯直所藏徐偃筆

【解題】これも筆にまつわる黄庭堅^{こうていけん} [字は魯直^{あざな ろちよく}] とのやりとり。

【訳文】

黄庭堅^{こうていけん}君がよい筆を幾つも出してきて、私に試し書きをさせた。この筆の先は、塩をかけられた蚯蚓^{みみず}のように紙の上でぐにゃぐにゃ曲がる。黄君がいうには、「これは徐偃^{じょえん}の筆です。筋はあっても骨がなく、まことにその名を得たというべきでしょう」

【補足】[徐^{じょ}の偃王^{えんおう}という大昔の伝説的な人物がいて、くねくねと巧みに戦争を避け

たので、「筋はあっても骨がない」と評された。その故事を使って、こうていけん 黄庭堅が「じょえん 徐偃の筆」と名付けたのだろうか]

■【08-3081】次韻黄魯直寄題郭明父府推潁州西齋二首

【かくめい 解題】郭明父というえい 潁州で官職にある者がいた。郭明父の住まうせいさい 西齋にこうていけん 黄庭堅 [あざな 字は魯直] が詩を寄せ、蘇軾が次韻した。2首のうち1首を訳す。

【訳文】

其の一

き 樹の上で鳥がいつも啄啄と叩く、
 客人が来たのとまぎらわしく、
 返事などしないしていると、
 客人は帰ってしまった。
 主人は来客を嫌っているのではない、
 真の友が訪れるなら、
 友が乗ってきた車輪を井戸に投げて帰れないようにし、
 衣を解いて自ら料理の腕をふるうのである。
 詩とか酒とかいっものはとかく身を汚すもと、
 文章など去ってしまうならまことの賢人となるのかも知れない。
 遠からずせいこ 西湖に我らの白髪が映えるであろう、
 小さな舟を水中の天に浮かべるのである。

【えい 補足】潁州に風光明媚なせいこ 西湖がある。潁州はおうようしゅう 歐陽脩が最後に住んだところで、かつてこう 杭州に赴任する前に蘇軾は潁州を訪れ、欧陽脩とともに西湖に浮かんだことを作

誰のために咲いたのか、
 江べりには梅、山には杏の花が開いている、
 東坡先生は独り微笑み、
 野の小川を眺めつつゆるゆると歩く。
 この風物を貴君〔王詵〕はまだ識らない、
 花の浪が天に翻って雪とぶつかり合うようなありさまを……。
 来年はきっと私はまた江湖にあることだろう、
 そのとき貴君はなお都にいて梅の花に向かって三度嘆息するのだ。

【補足】〔来年の春を都で迎えることはない、蘇軾はもはや願望としてではなく、確信していたのだろう〕

■ 【08-3-084】書李伯時山莊図後

【解題】ついに蘇軾を地方の知事に任命する辞令が下った。行き先は杭州、そうと聞いて蘇軾の心は躍ったに違いない。高太皇太后が蘇軾の意を汲んで定めたと推測されている。蘇軾が州知事として赴任する都市としてどこが最もよいかといえば、故郷の成都が第一に挙げられるだろう。しかし、蘇軾は蜀党の領袖であるとして政敵から嫌われている状況下で、蜀の中心都市に蘇軾を置くわけにはいかない。だとしたら、第二の選択は、江南最大の都市で、蘇軾にはすでに馴染みの杭州ということになる。このあと蘇軾を都に引き留めようとする動きもあって、実際に都を発ったのは4月終わりであった。これは李公麟〔字は伯時〕〔→作品番号 08-2-031〕が描いた『山莊図』に添えた短文。李公麟は故郷の舒州にある竜眠山に籠って勉強していたことがあり、竜眠居士と号していた。『山莊図』は竜眠山の山莊を描いている。その画に添えて弟の蘇轍が20首の詩を作っている。その序文を最初に見ておこう。

【訳文】

蘇轍:^{だいいり こうりんさん そうず}『題李公麟山莊図』の叙

李公麟^{り こうりん}が『竜眠^{りゅうみん}の山莊^{さんそう}の図』を作った。建徳館^{けんとくかん}から垂雲^{すいうん}汧^{はん}まで、描き著したところは十六箇所、西から東およそ数里にわたる。岩嶒^{がんがく}が隠れ見えし、そこここに泉の源^{せん}があつて、山を行く者の路はそこに窮まる。道^{みち}を南の溪山^{けいざん}にとると、山と谷が清く深く向かい合い、遊ぶべきところが四箇所^{しいうんさん}ある。勝金巖^{しょうきんがん}、宝華巖^{ほうかがん}、陳彭滌^{ちんぼうさい}、鶴源^{じゅげん}である。それらは簡単には見られないので、特に後ろに描いている。兄がすでにこの画の記を作り、私に小詩二十首を賦すよといった。王維^{おうい}が輞川莊^{もうせんそう}について詠んだ作を継ごうとするものである。

【補足】〔蘇轍のこの序文と詩は、『山莊図』について具体的に叙述している。以下に見る短文は、それとは対照的に蘇軾の芸術観を語っている〕

【訳文】

ある人はこのようにいう。

「竜眠居士^{りゅうみん こじ}の『山莊図』^{さんそうず}を見て、その後で山に入るなら、その者は足にまかせて行かすだけで、自ずと道がわかるようになる。あたかも、かつて夢に見たところにまたきていると感じたり、前世にもここにきたと悟ったりするのと同じようになるのだ。山中で見る泉、石、草、木は問うまでもなくその名を知っていて、山中に遭う漁師、樵、隠逸の者は名乗らずともその人を識っている。これは、竜眠居士が記憶力に非常に優れ、一切を忘れることなく画き尽したからである」

私はそれに対してこのようにいう。

「そうではない。太陽を画しているはずなのに、これは丸餅を画いたのではないかと疑ってしまうようなことがよくある。それは太陽を忘れてしまって画いたからなのだろうか。酔って何もかも忘れてしまっても、鼻から酒を飲む^{はな}とうと吐かない。夢の中であつても、足の指で物を掴もうと吐かない。天の機と合致^{はたしき}している

ことは、強いて記憶しようとしてできるようになるわけではない。竜眠居士が山にあるときには、何かしら一つのものだけに心を留めることがない。だから、その精神は万物と交流し、その智慧は百の工と通じる。それだけではない。一方に道[真理]があり、一方に芸[技能]がある。道を会得していても、芸が備わっていなければ、心の内では物の形がわかかっていても、それを手で書き表すことはできない。私はかつて竜眠居士が描いた『華嚴経』の図を見た。どれも自分の意でもって造っていて、しかも仏の教へと合致していた。仏が言葉でいったものを、竜眠居士が画に画いたのであって、まるで仏と竜眠居士が一人でいっかつ画いているかのようであった。まして、この画は竜眠居士自身が見たところのものを画いたのである」

■ 【08-3-085】 蜀公不与物同尽

【解題】 李麴 [字は方叔] [→作品番号 08-3-014] との会話を記録した短文。李麴は科挙に落第した後に帰郷したのだが、このころにまた上京したのだろうか。

【訳文】

李麴がこのようなことを話した。

「范蜀公[范鎮]が亡くなる数日前のこと、鬚も髪もすべて真っ黒になったといひます。あたかも画に描いたかのようであったのです。公は日頃から心を虚しくして気を養っておられたので、生命が尽きる時に至っても血気が衰えることがなく、それが外に発せられてそのようになったのでしょうか。范氏には乳首が四つある人が多いといわれていて、公はもとから人と異なるところがあって、その上、あのように徳を立てられたので、その終わり方も万物が尽きるのとは異なっていたのでしょうか」

我等には知れないことがあるのだろう。

元祐四年四月五日。

【補足】 [范鎮が亡くなったのは作品番号 08-3-067 で見たように昨年の終わりであつ

た。都ではすでにこのような噂話がされていたのだ]

■ 【08-3-086】 与家退翁

【解題】 同じ年の科挙に合格した同郷の家定国 [字は退翁] [→作品番号 08-2-016] に送った手紙。

【訳文】

人が来て、お手紙を頂戴しました。お変わりなく健やかにお過ごしのことつまびらを審らかりし、お会いしているかのように心が慰められます。私はここ連年、都の外に出ることを希望し、越州えつを願ったところ杭州こうが得られました。望外の御恩であります。衰疾の身に便であるだけでなく、拙い身を取り沙汰されることから安らかに逃れられます。ただ故郷からは日に日に離れ、墓所を掃除できるのはいつの日になるのでしょうか。惘惘もうもうとした思いになります。……四月十三日。

■ 【08-3-087】 跋邢敦夫南征賦

【解題】 邢居実 [字は敦夫] という青年が二十歳になるかならないかで亡くなった。邢居実が14歳のときに蘇軾はその詩を読んで期待を寄せていたのだが、思いがけない事件で若くして命を落としたのだ。これはそのことを悼む短文。

【訳文】

邢居実けいきょじつは童子のころから、数多くの優れた人々との交流があった。邢居実の志は文学で賞賛を得ようとするだけのものではなかった。邢居実の姿を一日見ないと思っていれば、草木が枯れるように亡くなってしまった。黄庭堅こうていけんも晁補之ちやうほしも皆が泣き、長く哀しみにひたつた。いま邢居実の作ったこの『南征賦』なんせいふを見て、少しばかり慰められる気がする。

かつて江南で李靚りこうに会ったときに、李靚は自身の文を教えてくれた。そこにこのようにあった。

「天は私にどれほどの寿命を与えてくれたのか。それでは足りないということがあるろうか。古いにしへの人の手を借りるなら、足りないことはないのだ」

私は邢居実もまたこうであったと思いたい。

元祐四年四月十六日。

【補足】[李靚りこうは蘇軾よりも一世代ほど上の人で、科挙には合格しなかったが豊かな学識があつて多いときには百人を超える弟子を指導し、招かれて太学たいがくで教えたこともあった。李靚の言葉は己の本分を学者と見てのものであるのだろう]

■ 【08-3-088】 范文正公文集叙

【解題】蘇軾は都みやこにいる最後の日々に范仲淹はんちゆうえん [諡おくりなは文正ぶんせい] の文集を編み、その序文を記した。かねてから范仲淹の子の范純仁はんじゆんじんに頼まれていたものを、杭州こうに向けて出発する直前に仕上げたのである。范純仁は范仲淹の次男で、作品番号 08-3-010 で宰相に任命されたのを見ている。作品番号 08-1-005 で登場した范純粋はんじゆんすいはその弟。この訳文は 01-2-003 にすでに掲げた。そのときは蘇軾の少年時代を知る恰好の資料として見たのだが、范仲淹が生涯の課題とした国政の大改革に着手したものの、すぐに頓挫して地方官として出ていかなければならなかった年齢 [56 歳] に蘇軾が近づいたときに、どのように范仲淹を見ていたのかということを知る意味で、もう一度ここで読んでおきたい。范仲淹の改革が失敗した原因は幾つがあるが、改革を実行する手段を十分に整えておかなかったことが大きく、その点で数々の新法おうあんせきを準備した王安石は用意周到であった。范仲淹による改革がもしも当初の目的を達成していたなら、むしろ王安石による改革は行われなかった。

【訳文】

慶暦三年[1043年]のこと、私は八歳で土地の学校に入った。間もなく、ある文士が都から石介の作った『慶暦聖徳の詩』を携えてやってきた。学校の先生がそれを読んでいるのを私は横からのぞき見た。

それが現在特に優れる十一人を讃える詩であると聞いて、

「どのような方々なのでしょうか」

と、私は先生に尋ねた。

「君のような子どもにはまだわかるまい」

と、先生は言った。

「それが天の上の人であるのならわからないということもあるでしょう。でも、同じ地上の人であるのならわからないことはないはずだ」

私の返答に先生は驚き、その詩を読んでくれた。そして、

「このなかでも韓琦、范仲淹、富弼、欧陽脩の四人は人傑である」

と、言った。

このときはまだきちんと理解できたわけではなかったが、四人の名ははっきりと記憶に刻まれた。

二十二歳のときに[科挙に受験するために]都に行くと、范仲淹はすでに亡くなっていて、欧陽脩が記した墓誌を読み、私は、

「その人のあることを知って十五年、しかし、ついにお顔を見ることがかなわなかったのは運命なのだろうか」

と、嘆き悲しんだ。私は科挙に合格し、初めて欧陽脩に会うことができ、その紹介で韓琦とも富弼とも会えた。三人は口を揃えて、

「残念なのは君が范仲淹に会えなかったことだ」

と、私に言った。

それから三年後に私は許州で范仲淹の次男の范純仁に会い[これは母の喪が明けて都に上る途

中のこと[→作品番号 01-2-040]、また六年後に都でその弟の范純礼はんじゆんれいに会い、さらに十一年後に末の弟の范純粹はんじゆんすいと同僚になった。皆と会ってすぐに旧知の仲のようになった。

私は范兄弟から父上の遺稿を託され、文集を編集して、それに序文を添えてほしいと頼まれた。それから十三年が経ってしまようやくその約束を果たせるに至った。

范仲淹の功績と徳は、その文章があって初めて世に知れるのではない。その文章は、序文があって初めて世に遺されるのではない。それでも文集を編集し序文を記すのをあえて辞退しないのは、八歳で范仲淹を敬うことを知って四十七年になり、他の三傑とは交わりを結ぶことができたのに、范仲淹一人とは知り合えなかったのを平生の恨みとし、その人の書いた文章の脇に我が名を掲げることその人の門下生の最後の一人であるかのようになれるのならば、ついに願いを叶えたのに近からうかと思うからだ。

古の立派な人々が天下のために貢献した事績を見ると、それを為し上げた基本的な姿勢は、国に仕えてから学んで得たものではなく、庶民のなかで暮らしていたときからすでに身に備わっていたものであった。漢の劉邦かんりゅうほうが天下を平定するのを助けた韓信かんしんは、劉邦と会った最初のときすでに遠い見通しを持っていて、諸葛孔明しよかつこうめいも草庵に訪ねてきた蜀の劉備しよくりゅうびと初めて会ったときすぐに何をすべきかを語り、終生それを貫いた。人に尋ね、聞いたことを試してみても、成功したらよしとするようなことではなかったのである。

范仲淹は母上が亡くなって喪に服していた間に、天下のありさまを見て、いかにして民衆に泰平をもたらすかをつらつら考え、[39歳のときに]一万字に及ぶ文章を書いて時の宰相に送った。天下の人々はその文章を読んだ。後に范仲淹が国政の改革に取り組んで副宰相にまでなったこと、あるいは平生に為したところのものは、皆この文章に記されていた通りであった。

范仲淹の遺稿二十巻をここに編み、詩賦は二百六十八、文章は百六十五に及ぶ。これらを見れば、范仲淹が仁義礼楽忠信孝悌を思うのは、飢えて食するのを思い、渴いて飲むのを思うのと同じで、片時も忘れようとしてもできなかったことであつたとわかる。その心は火のように熱く、その情は水のように潤

い、天性からしてそのようであった。慰めに、あるいは戯れに、もしくは瞬時に作った詩文であっても、その天性から出たものであるから、天下の人々はその真心に打たれ、争って師として尊ぶのである。

孔子は、

「徳ある者には必ずしかるべき言葉がある」

と、言った。それはしかるべき言葉が初めにあってその人の口から出てくるのではない。徳のある人の口が発するからしかるべき言葉となるのである。

また『礼記』には、

「私は戦えば必ず勝つし、子孫が私を祭るなら福を受けるだろう」

と、ある。これは戦いの能力について言ったのではない。礼に基づき、徳をもって戦うなら、必ず勝つことを言ったのである。范仲淹は戦う人生であったが、その怒りは徳から現れたものであった。

元祐四年[1089年]四月二十一日。

【補足】[都において批判の嵐にさらされていた蘇軾は、批判を口にする人々の怒りには、范仲淹と違って、そのおおもとにおいて徳がないと感じていたのではないだろう]

■ 【08-3-089】 題柳耆卿八声甘州

【解題】柳永〔字は耆卿〕の詞に添えた短い感想。柳永は北宋を代表する詞人。井戸端でその詞を歌う女性の声が聞かれない日はないといわれたほどに、その詞は大流行し、作品が広く庶民に愛されたことでは恐らく空前の出来事であった。

【訳文】

世間の人々は柳永の曲は俗であるという。そうではない。たとえば、『八声甘州』を見るなら、

対瀟瀟暮雨灑江天、[対するは、瀟瀟たる暮雨の江天に灑ぎ]

一番洗清秋。[一番 清秋を洗うに]

漸霜風凄緊、[漸く霜風 凄緊となり]

関河冷落、[関河 冷落し]

残照当楼。[残照 楼に当る]

これらの語は詩句としても、唐人の至った高みから下るものではない。

【補足】[蘇軾がこのように評価したこの詞の全体を読んでおこう]

【訳文】

りゅうせい はちせいかんしゅう
柳永：『八声甘州』

対瀟瀟暮雨灑江天、[見れば、一面の暮れゆく空から瀟瀟と雨が江に降り灑ぎつつ]

一番洗清秋。[清らかな秋をすっかり洗い上げます]

漸霜風凄緊、[霜を帯びたびりっとひきしまった風が吹き出し]

関河冷落、[あたりをもの寂しげに変えてゆくと]

残照当楼。[夕日が楼閣へと射しこんできます]

是処紅衰翠減、[ここに紅は衰え翠は失せて]

萼萼物華休。[物の華やかさは萼萼と休まります]

惟有長江水、[そして、長江の水だけが]

無語東流。[語ることなく東へと流れゆくのです]

不忍登高臨遠、[どうなのでしょう、高いところに登って遠くを臨むのは]

望故郷渺邈、[遙か遠い故郷を望み見たなら]

帰思難収。[帰ろうとする思いをもう収めることができなくなってしまうのではないのでしょうか]

嘆年来蹤迹、[この何年もの間、いったい]

何事苦淹留。[何がどれてくずくずしていたのでしょうか]

想佳人。[想うのは、かの佳き人]

妝楼顚望、[美しい楼閣ろうかくにあつて頭を挙げて]

誤幾回、[何度、誤あやって頭を回めぐらせたのでしょうか]

天際識帰舟。[天の際に帰り来る舟が見えたと思って]

争知我、[ても、知りませんのです]

倚闌干処、[欄干らんかんに身を寄せて]

正恁凝愁。[いままさに私が愁あはれいに思いを凝こらしていることなどは]

【補足】りゅうえい柳永は官員の息子で、科挙を目指して勉強しながらも、早くからその詞が花柳界で流行り、そのために試験で優秀な成績を挙げながらも、じんそう仁宗皇帝が、そのような「失態無徳」の人物は我が朝廷には要らないといったために不合格になってしまったという伝説がある。以来、柳永は失意の日々を送りつつ詞を作り、それでますます女性たちの心に響く詞が生まれるようになった。柳永は50歳を前にして一念発起して再度科挙に挑んでようやく合格し、晩年を地方官として過ごした。この『八声甘州』は柳永の代表作の一つとされ、制作時期は必ずしも明らかではないが、最後の地方官時代の作品と見てよいのだろう。遠く想う「佳人かじん」は、具体的な誰かを指すのではなく、過ぎ去った人生全体であるかのようだ。だから、誰もがこの詞を読んで共感できるのだろう。蘇軾もまた、こう杭州に向かうに当たって、この詞に触発されて、これまでの日々をじっと想い見たと想像してもさほど見当違いではないであろう]

第8章 原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

■ 【08-1-001】 次韻趙令鑠

東坡已報六年穰、惆悵紅塵白首郎。
枕上溪山猶可見、門前冠蓋已相望。
故人年少真瓊樹、落筆風生戰堵牆。
端向甕間尋吏部、老來專以醉為鄉。

■ 【08-1-002】 次韻趙令鑠惠酒

神山無石髓、生世悲暫寓。
坐待玉膏流、千載真旦暮。
青州老從事、鬲上非所部。
惠然肯見從、知我憎市酤。
開瓶自洗盞、肴核誰與具。
門前聽剥啄、烹魚得尺素。

■ 【08-1-003】 次韻王定国得穎倅二首

其一

仙風入骨已凌雲、秋水為文不受塵。
一噫固忘号地籟、余波猶足掛天紳。

買牛但自捐三尺、射鼠何勞挽六鈞。
莫向百花潭上去、醉翁不見與誰春。

其二

滔滔四海我知津、每愧先生植杖芸。
自少多言晚聞道、從今閉口不論文。
灑翻白獸樽中酒、歸煮青泥坊底芹。
要識老僧無盡處、牀前牛蟻不曾聞。

■ 【08-1-004】次韻王定國謝韓子華過飲

楚有孫叔敖、長城隱千里。
哀哉練裙子、負薪躡破履。
豈無故交親、逝去如覆水。
不如老優孟、談笑託諧美。
世家不可恃、如倚折足几。
祥符有賢相、手握天下砥。
懿敏亦名公、三貴德爵齒。
蓋棺今幾日、公子誰料理。
誰要卿料理、欲說且止止。
宅相開府公、久為蒼生起。
如何垂老別、冰盤饋蒼耳。
親嫌妨鶻薦、相對筵微泚。
新詩如彈丸、脫手不移晷。

我亦老賓客、苦語落紈綺。
莫辭三上章、有道貧賤恥。

■ 【08-1-005】 送范純粹守慶州

才大古難用、論高常近迂。
君看趙魏老、乃為滕大夫。
浮雲無根蒂、黃潦能須臾。
知經幾成敗、得見真賢愚。
羽旄照城闕、談笑安辺隅。
当年老使君、赤手降於菟。
諸郎更何事、折箠鞭其雛。
吾知鄧平叔、不鬪月支胡。

■ 【08-1-006】 次韻王震

携文過我治平間、霧豹當時始一斑。
聞道吹噓借余論、故教流落得生還。
清篇帶月來霜夜、妙語先春發病顏。
詩酒暮年猶足用、竹木高會許時攀。

■ 【08-1-007】 次韻馬元賓

流落江湖万里歸、相逢自慰已差池。
初聞好句驚人倒、悔過東庭識面遲。
握手寧知無賀監、結交誰復許袁糸。

塞鴻正欲摩天去、垂老追攀豈可期。

■ 【08-1-008】次韻周邠

南遷欲舉力田科、三徑初成樂事多。
豈意殘年踏朝市、有如疲馬畏陵坡。
羨君同甲心方壯、笑我無聊鬢已皤。
何日西湖尋舊賞、淡煙疏雨暗漁蓑。

■ 【08-1-009】祭石幼安文

■ 【08-1-010】惠崇春江晚景二首

其一

竹外桃花三兩枝、春江水暖鴨先知。
蒹葭滿地蘆芽短、正是河豚欲上時。

其二

兩兩歸鴻欲破群、依依還似北歸人。
遙知朔漠多風雪、更待江南半月春。

■ 【08-1-011】次韻胡完夫

青衫別淚尚爛斑、十載江湖困抱關。
老去上書還北闕、朝來拄笏望西山。
相從杯酒形骸外、笑說平生醉夢間。

万事會須咨伯始、白頭容我占清閑。

■ 【08-1-012】次韻錢穆父

老入明光踏旧班、染鬚那復唱陽關。
故人飛上金鑾殿、遷客來從飯顆山。
大筆推君西漢手、一言置我二劉間。
便須置酒呼同舍、看賜飛鳧出帝閑。

■ 【08-1-013】次韻答李端叔

若人如馬亦如班、笑履壺頭出玉閑。
已入西羌度沙磧、又從東海看濤山。
識君小異千人裏、慰我長思十載間。
西省隣君時邂逅、相逢有味是偷閑。

■ 【08-1-014】正月八日招王子高飲

屋雪号風苦戰貧、紙窓迎日稍知春。
正如薔蔔林中坐、更對芙蓉城裏人。
昨想玉堂空冷徹、誰分銀榼送清醇。
海山知有東南角、正看歸鴻作小顰。

■ 【08-1-015】送戴蒙赴成都玉局觀、將老焉

拾遺被酒行歌處、野梅官柳西郊路。
聞道華陽版籍中、至今尚有城南杜。

我欲歸尋万里橋、水花風葉暮蕭蕭。
芋魁徑尺誰能盡、檀木三年已足燒。
百歲風狂定何有、羨君今作峨眉叟。
縱未家生執戟郎、也忘世出埋輪守。
莫欺老病未歸身、玉局他年第幾人。
會待子猷清興發、還須雪夜去尋君。

■ 【08-1-016】 与楊元素

■ 【08-1-017】 定風波

常羨人間琢玉郎、
天忒分付点酥娘。
自作清歌伝皓齒、
風起、
雪飛炎海變清涼。

万里歸來顏愈少
微笑、
笑時猶帶嶺梅香。
試問嶺南忒不好、
却道、
此心安處是吾鄉。

■ 【08-1-018】 東林第一代広恵禪師真贊

■ 【08-1-019】 次韻王覲正言喜雪

聖人与天通、有詔寬獄市。
好語夜喧街、湿雲朝覆砌。
紛然退朝後、色映宮槐媚。
欲誇剪刻工、故上朱藍袂。
我方執筆待、未敢書上瑞。
君猶伏閣爭、高論亦少慰。
霏霏止還作、盎盎風与氣。
神竜久潜伏、一怒勢必倍。
行当見三白、拜舞歡万歳。
帰来飲君家、酣詠追既醉。

■ 【08-1-020】 元祐元年二月八日、朝退、独在起居院読漢書儒林伝、感申公故事、作小詩一絶

寂寞申公謝客時、自言已見穆生幾。
縮臧下吏明堂廢、又作竜鐘病免歸。

■ 【08-1-021】 与范蜀公

■ 【08-1-022】 送陳睦知潭州

華清縹緲浮高棟、上有纈林蔵石甕。

一杯此地初識君、千巖夜上同飛鞚。
君時年少面如玉、一飲百觚嫌未痛。
白鹿泉頭山月出、寒光澆眼如流汞。
朝元閣上酒醒時、臥聽風鑿鳴鉄鳳。
旧遊空在人何處、二十三年真一夢。
我得生還雪髯滿、君亦老嫌金帶重。
有如社燕与秋鴻、相逢未穩還相送。
洞庭青草渺無際、天柱紫蓋森欲動。
湖南萬古一長嗟、付与騷人發嘲弄。

■ 【08-1-023】 和蔣發運

夜語翻千偈、書來又一言。
此身真仙祖、何處不羲軒。
船穩江吹坐、樓空月入樽。
遙知思我處、醉墨在頽垣。

■ 【08-1-024】 与陳季常

■ 【08-1-025】 書子由夢

■ 【08-1-026】 書章警詩

■ 【08-1-027】 題列子由詩後

■ 【08-1-028】 送表弟程六知楚州

炯炯明珠照双壁、当年三老蘇程石。
 里人下道避鳩杖、刺史迎門倒烏髻。
 我時与子皆兒童、狂走從人覓梨栗。
 健如黃犢不可恃、隙過白駒那暇惜。
 醴泉寺古垂橘柚、石頭山高暗松櫟。
 諸孫相逢万里外、一笑未解千憂積。
 子方得郡古山陽、老手風生謝刀筆。
 我正含毫紫微閣、病眼昏花困書檄。
 莫教印綬繫余年、去掃墳墓当有日。
 功成頭白早歸來、共藉梨花作寒食。

■ 【08-1-029】 送王伯敷守虢

華山東麓秦遺民、當時依山來避秦。
 至今風俗含古意、柔桑綠水招行人。
 行人掉臂不回首、爭入崤函土囊口。
 惟有使君千里來、欲飲三堂無事酒。
 三堂本來一事無、日長睡起聞投壺。
 牀頭硯石開雲月、澗底松根鬪雪腴。
 山棚盜散人安寢、勸買耕牛發陳廩。
 歸來只作水衡卿、我欲携壺就君飲。

■ 【08-1-030】 道者院池上作

下馬逢佳客、携壺傍小池。

清風乱荷葉、細雨出魚兒。

井好能冰齒、茶甘不上眉。

歸途更蕭瑟、真個解催詩。

■ 【08-1-031】 次韻子由送千之侄

江上松楠深復深、滿山風雨作龍吟。

年來老幹都生菌、下有孫枝欲出林。

白髮未成歸隱計、青衫儻有濟時心。

閉門試草三千牘、仄席求人少似今。

■ 【08-1-032】 題文与可墨竹、并叙

叙

故人文与可為道師王執中作墨竹、且謂執中勿使他人書字、待蘇子瞻來、令作詩其側。与可既沒八年、而軾始還朝、見之、乃賦一首。

斯人定何人、游戲得自在。

詩鳴草聖余、兼入竹三昧。

時時出木石、荒怪軼象外。

拳世知珍之、賞會独予最。

知音古難合、奄忽不少待。

誰云死生隔、相見如龔隗。

■ 【08-1-033】 次韻錢舍人病起

牀下龜寒且耐支、杯中蛇去未忘衰。
殿門明日逢王傅、櫺具爭先看不疑。
坐覺香煙携袖少、獨愁花影上廊遲。
何妨一笑千疴散、絕勝倉公飲上池。

■ 【08-1-034】 次韻和王鞏

謫仙竄夜郎、子美耕東屯。
造物豈不惜、要令工語言。
王郎年少日、文如瓶水翻。
爭鋒雖剽甚、聞鼓或驚奔。
天欲成就之、使觸羝羊藩。
孤光照微陋、耿如月在盆。
歸來千首詩、傾瀉五石樽。
却疑彭沢在、頗覺蘇州煩。
君看騶忌子、廉折配春温。
知音必無人、壞壁掛桐孫。

■ 【08-1-035】 用王鞏韻、送其侄震知蔡州

九門插天開、万馬先朝屯。
拳鞭紅塵中、相見不得言。
夜走清虛宿、扣門驚鵲翻。

君家汾陽家、永巷車雷奔。
夕郎方不夕、列戟以自藩。
相逢開月閣、画檐低金盆。
至今夢中語、猶拳燈前樽。
阿戎修玉牒、未憚筆削煩。
君歸助獻納、坐繼岑与温。
我客二子間、不復尋諸孫。

■ 【08-1-036】跋歐陽寄王太尉素詩後

■ 【08-1-037】法雲寺鐘銘、并叙

■ 【08-1-038】用旧韻送魯元翰知洺州

我在東坡下、躬耕三畝園。
君為尚書郎、坐擁百吏繁。
鳴蛙与鼓吹、等是俗物喧。
永謝十年旧、老死三家村。
惟君綈袍信、到我雀羅門。
緬懷故人意、欲使薄夫敦。
新年对宣室、白首代堯言。
相逢問前輩、所見多後昆。
道館雖云樂、冷卿当復温。
還持刺史節、却駕朱輪軒。

黄髮方用事、白鬚宜少存。
嗣聖真生知、拯民如救燔。
初囚羽淵魄、尽返湘江魂。
坐憂東郡決、老守思王尊。
北流桑柘没、故道塵埃翻。
知君一寸心、可敵千步垣。
流亡自棲止、老幼忘崩奔。
得閑閉閣坐、勿使道眼渾。
聊乘忘舍筏、直泝無生源。
歸來成二老、夜榻當重論。

■ 【08-1-039】 次韻朱光庭初夏

朝罷人人識鄭崇、直声如在履声中。
臥聞疏響梧桐雨、独詠微涼殿閣風。
諫苑君方統承業、醉鄉我欲訪無功。
陶然一枕誰呼覺、牛蟻新除病後聰。

■ 【08-1-040】 奉敕祭西太一和韓川韻四首

其一

聖主新除秘祝、侍臣來乞豐年。
壽宮神君欲至、半夜靈風肅然。

其二

玉璽親題御筆、金童來侍天香。
禮罷祝融參乘、前驅已過衡湘。

其三

解劍独行殘月、披衣困臥清風。
夢蝶猶飛旅枕、粥魚已響枯桐。

其四

陂水初含曉淥、稻花半作秋香。
皂蓋却迎朝日、紅雲正繞宮牆。

■ 【08-1-041】 西太一見王荊公旧詩、偶次其韻二首

其一

秋早川原淨麗、雨余風日清酣。
從此歸耕劍外、何人送我池南。

其二

但有樽中若下、何須墓上征西。
聞道烏衣巷口、而今煙草萋迷。

■ 【08-1-042】 王安石贈太傅

■ 【08-1-043】 答張文潛鼎丞書

■ 【08-1-044】 与滕達道

■ 【08-1-045】 次韻子由送陳侗知陝州

誰能如鉄牛、横身負黄河。
滔天不能没、尺篋未易訶。
世俗自無常、徐公故逶迤。
別来不可説、事与浮雲多。
當時無限人、毀誉即墨阿。
虚声聲了無実、夜虫鳴機梭。
相逢一笑外、奈此白髮何。
天驥皆籊雲、長鳴飽芻禾。
王庭旅百実、大貝随弓戈。
君独一麾去、欲賡五袴歌。
甘棠古楽国、白酒金叵羅。
知君不久留、治行中新科。
過客足嘖喜、東堂記分鵝。
此外但坐嘯、後生工揣摩。

■ 【08-1-046】 呂惠卿責授建寧軍節度副使本州安置不得簽書公事

■ 【08-1-047】 答湖守呂景純

■ 【08-1-048】 与楊元素

■ 【08-1-049】 与親家母

■ 【08-1-050】 和王晋卿、并引

引

駙馬都尉王誥晋卿、功臣全彬之後也。元豐二年、予得罪貶黃岡、而晋卿亦坐累遠謫、不相聞者七年。予既召用、晋卿亦還朝、相見殿門外。感嘆之余、作詩相属、托物悲慨、阨窮而不怨、泰而不驕。憐其貴公子有志如此、故次其韻。

先生飲東坡、独舞無所屬。

當時搥明月、对形三人足。

醉眠草棘間、虫虺莫予毒。

醒来送歸雁、一寄千里目。

悵焉懷公子、旅食久不玉。

欲書加餐字、遠托西飛鵠。

謂言相濡沫、未足救溝瀆。

吾生如寄耳、何者為禍福。

不如兩相忘、昨夢那可逐。

上書得自便、歸老湖山曲。

躬耕二頃田、自種十年木。

豈知垂老眼、却对金蓮燭。

公子亦生還、仍分刺史竹。

賢愚有定分、樽俎守尸祝。
文章何足云、執技等医卜。
朝廷方西顧、羌虜驕未伏。
遙知重陽酒、白羽落黃菊。
羨君真將家、浮面氣可掬。
何当請長纆、一戰河湟復。

■ 【08-1-051】 司馬温公神道碑

■ 【08-1-052】 題王晋卿詩後

■ 【08-1-053】 与仏印

■ 【08-1-054】 自題臨文与可画竹、臨篔簹図並題

石室先生清興動、落筆縱橫飛小鳳。
借君妙意写篔簹、留与詩人発吟諷。

■ 【08-1-055】 送賈訥倅眉二首

其一

当年入蜀歎空回、未見峨眉肯再来。
童子遙知頌襦褲、使君先已洗樽罍。
鹿頭北望忘逢雁、人日東郊尚有梅。
我老不堪歌樂職、後生試覓子淵才。

其二

老翁山下玉淵回、手植青松三万栽。
父老得書知我在、小軒臨水為君開。
試看一一龍蛇活、更聽蕭蕭風雨哀。
便与甘棠同不翦、蒼髯白甲待歸來。

■【08-1-056】送程建用

先生本舌耕、文字浩千頃。
空倉付公子、坐待發苕穎。
十年困新說、兒女爭捕影。
鑿垣種蒿蓬、嘉穀誰復省。
空余南陔意、太息北堂冷。
織履隨方進、採薪教韋逞。
辛勤守一經、菽水賢五鼎。
今年聞起廢、魯史復光景。
公子亦改官、三就繁馬頭。
歸來一笑粲、素髮颯垂頰。
會看金花詔、湯沐奉朝請。
天公不吾欺、壽与龜鶴永。

■【08-1-057】次韻李修孺留別二首

其一

十年流落敢言歸、魚鳥江湖只自知。
豈意青天掃雲霧、尽呼黃髮寄安危。
風流吾子真前輩、人物他年記一時。
我欲折繻留此老、緇衣誰作好賢詩。

其二

此生別袖幾回麾、夢裏黃州空自疑。
何處青山不堪老、当年明月巧相隨。
窮通等是思家意、衰病難堪送客悲。
好去江魚煮江水、劍南歸路有姜詩。

■ 【08-1-058】 次韻黃魯直赤目

誦詩得非子夏學、紬史正作丘明書。
天公戲人亦薄相、略遣幻醫生明珠。
賴君年來屏鮮腴、百千燈光同一如。
書成自寫蠅頭表、端就君王覓鏡湖。

■ 【08-1-059】 書黃泥坂詞後

■ 【08-1-060】 武昌西山、并叙

叙

嘉祐中、翰林學士承旨鄧公聖求、為武昌令。常游寒溪西山、山中人至今能言之。軾謫居黃岡、與武昌相望、亦常往來溪山間。元祐元年十一月二十九日、考試館職、與聖求會宿玉堂、

偶話旧事。聖求嘗作元次山窪樽銘、刻之巖石、因為此詩、請聖求同賦、當以遺邑人、使刻之銘側。

春江綠漲蒲萄醅、武昌官柳知誰栽。
憶從樊口載春酒、步上西山尋野梅。
西山一上十五里、風駕兩腋飛崔嵬。
同游困臥九曲嶺、褰衣獨到吳王台。
中原北望在何許、但見落日低黃埃。
歸來解劍亭前路、蒼崖半入雲濤堆。
浪翁醉處今尚在、石臼杯飲無樽罍。
爾來古意誰復嗣、公有妙語留山隈。
至今好事除草棘、常恐野火烧蒼苔。
當時相望不可見、玉堂正对金鑾開。
豈知白首同夜直、臥看椽燭高花摧。
江邊曉夢忽驚断、銅環玉鎖鳴春雷。
山人帳空猿鶴怨、江湖水生鴻雁來。
請公作詩寄父老、往和万壑松風哀。

■ 【08-1-061】 記虜使誦詩

■ 【08-1-062】 德威堂銘、并叙

■ 【08-1-063】 書狄武襄事

■ 【08-1-064】 狄詠石屏

霏霏点輕素、渺渺開重陰。
風花乱紫翠、雪外有烟林。
雪近勢方壯、林遠意殊深。
会有無事人、支頤識此心。

■ 【08-1-065】 雪林硯屏率魯直同賦

西山無時春、巉巖鎖頑陰。
分明倚天壁、点綴無風林。
物固為人出、興誰於此深。
窮奇真自蠹、詩句且娛心。

■ 【08-1-066】 虢国夫人夜游園

佳人自鞚玉花驄、翩如驚燕蹋飛螭。
金鞭争道宝釵落、何人先入明光宮。
宮中羯鼓催花柳、玉奴絃索花奴手。
坐中八姨真貴人、走馬来看不動塵。
明眸皓齒誰復見、只有丹青余淚痕。
人間俯仰成今古、吳公台下雷塘路。
當時亦笑張麗華、不知門外韓擒虎。

■ 【08-1-067】 如夢令

其一

為向東坡伝語、

人在画堂深处。

別後有誰來、

雪压小橋無路。

歸去、

歸去、

江上一犁春雨。

其二

手種堂前桃李、

無限綠陰青子。

簾外百舌兒、

驚起五更春睡。

居士、

居士。

莫忘小橋流水。

■ 【08-1-068】 跋鄧慎思石刻

■ 【08-1-069】 上呂相公

■ 【08-1-070】 与王慶源

■ 【08-1-071】 与李方叔

■ 【08-1-072】 与章子厚

■ 【08-2-001】 和周正孺墜馬傷手

平生學道已神完、豈復兒童私自憐。
醉墜何曾傷內守、色憂當為念先傳。
書空漸覺新詩健、把蟹行看樂事全。
壳却老驄為酒直、大呼鄉友作新年。

■ 【08-2-002】 戲周正孺二絕

其一

折臂三公未可知、會當千鎰訪權奇。
勸君鬻駱猶閑事、腸斷閨中楊柳枝。

其二

天厩新頒玉鼻驄、故人共敵亦常情。
相如雖老猶能賦、換馬還忘繼二生。

■ 【08-2-003】 玉堂栽花、周正孺有詩、次韻

故山桃李半荒榛、粗報君恩便乞身。
竹簟暑風招我老、玉堂花蕊為誰春。

織織翠蔓詩催發、皎皎霜葩髮鬪新。
只有來禽青李帖、他年留與學書人。

■ 【08-2-004】 潘推官母李氏挽詞
南浦淒涼老逐臣、東坡還往盡幽人。
杯盤慣作陶家客、絃誦常叨孟母隣。
尚有升堂他日約、豈知負土一阡新。
今年我欲江湖去、暮雨連山宰樹春。

■ 【08-2-005】 與范子豐

■ 【08-2-006】 杜介送魚
新年已賜黃封酒、舊友仍分頰尾魚。
陋巷關門負朝日、小園除雪得春蔬。
病妻起斫銀糸脰、稚子謹尋尺素書。
醉眼朦朧覓歸路、松江煙雨晚疏疏。

■ 【08-2-007】 送杜介歸揚州
再入都門万事空、閑看清洛漾東風。
當年帷幄幾人在、回首觚稜一夢中。
采葉會須逢薊子、問禪何處識龐翁。
歸來隣里忘迎笑、新長淮南舊桂叢。

■ 【08-2-008】 題憩寂園詩、并魯直跋

■ 【08-2-009】 和黄魯直燒香二首

其一

四句燒香偈子、隨香遍滿東南。
不是聞思所及、且令鼻觀先參。

其二

万卷明窓小字、眼花只有爛斑。
一炷煙消火冷、半生身老心閑。

■ 【08-2-010】 与張太保安道

■ 【08-2-011】 跋画苑

■ 【08-2-012】 富鄭公神道碑

■ 【08-2-013】 呂公弼招致高麗人

■ 【08-2-014】 書鬼仙詩

■ 【08-2-015】 記鬼詩

■ 【08-2-016】次韻子由送家退翁知懷安軍

吾州同年友、粲若琴上星。
當時功名意、豈止拾紫青。
事既喜違願、天或不佞齡。
今如囟中鶴、俯仰在一庭。
退翁守清約、霜菊有余馨。
鼓笛方入破、朱弦微莫聽。
西南正春旱、靡沼黏枯萍。
翩然一麾去、想見靈雨零。
我無謫仙句、待詔沈香亭。
空騎內厩馬、天仗隨雲駢。
竟無糸毫補、眷焉誰汝令。
永愧旧山叟、憑君寄丁寧。

■ 【08-2-017】送楊孟容

我家峨眉陰、與子同一邦。
相望六十里、共飲玻璃江。
江山不違人、遍滿千家窓。
但苦窓中人、寸心不自降。
子歸治小國、洪鐘噓微撞。
我留侍玉坐、弱步歛豐扛。
後生多高才、名與黃童雙。
不肯入州府、故人余老龐。

殷勤与問訊、愛惜霜眉彫。
何以待我歸、寒醅發春缸。

■【08-2-018】見子由与孔常父唱和詩、輒次其韻。余昔在館中、同舍出入、輒相聚飲酒賦詩。近歲不復講、故終篇及之、庶幾諸公稍復其旧、亦太平盛事也

君先魯東家、門戶照千古。
文章固応爾、須鬣余似處。
雖非蒙俱狀、尚有歷国苦。
誦書口瀾翻、布穀雜杜宇。
十年困奔走、櫛沐飽風雨。
吾道其非耶、野处豈兕虎。
灞陵閑老将、柏直口尚乳。
自君兄弟還、鼎立知有補。
蓬山耆旧散、故事誰刪去。
來迎馮翊伝、出餞会稽組。
吾猶及前輩、詩酒盛冊府。
願君唱此風、揚觶斯杜举。

■【08-2-019】黄魯直以詩饋双井茶、次韻為謝

江夏無双種奇茗、汝陰六一誇新書。
磨成不敢付僮僕、自看雪湯生璣珠。
列仙之儒瘦不腴、只有病渴同相如。
明年我欲東南去、画舫何妨宿太湖。

■ 【08-2-020】 次韻張昌言給事省宿

馮顛久已歆殘雪、戎眼何曾眩落暉。
朔野按行猶雀躍、東台暝坐覺烏飛。
漫誇年少容吾在、若鬪尊前拳世稀。
待向嵩陽求水竹、一犁烟雨伴公歸。

■ 【08-2-021】 和三舍人省上

紛紛榮瘁何能久、雲雨從來翻覆手。
恍如一夢墮枕中、却見三賢起江右。
嗟君妙質皆瑚璉、願我虛名但箕斗。
明朝冠蓋蔚相望、共扈翠輦朝宣光。
武皇已老白雲鄉、正與群帝驂龍翔、獨留杞梓扶明堂。

■ 【08-2-022】 送錢承制赴廣西路分都監

當年我作表忠碑、坐覺江山氣未衰。
舞鳳尚從天目下、收駒時有渥窪姿。
踞牀到處堪吹笛、橫槊何人解賦詩。
知是丹霞破仙手、先聲已已懾群夷。

■ 【08-2-023】 次韻劉貢父省上

密雲今日破郊西、疏雨條條未作泥。
要及清閑同笑語、行看衰病費扶携。

花前白酒傾雲液、戶外青驄響月題。
不用臨風苦揮淚、君家自与竹林齊。

■ 【08-2-024】再和

當年曹守我膠西、共厭舖糟与汨泥。
自古赤丸成習俗、因公黃犢免提携。
生還各有青山興、病起猶能小字題。
莫怪歌呼數相和、曾將獄市寄全齊。

■ 【08-2-025】送顧子敦奉使河朔

我友顧子敦、軀膽兩俊偉。
便便十圍腹、不但貯書史。
容君數百人、一笑萬事已。
十年臥江海、了不見愠喜。
磨刀向豬羊、醜酒會隣里。
歸來如一夢、豐頰愈茂美。
平生批敕手、濃墨寫黃紙。
會當勒燕然、廊廟登劍履。
翻然向河朔、坐念東郡水。
河來吃不去、如尊乃勇耳。

■ 【08-2-026】諸公餞子敦、軾以病不往、復次前韻

君為江南英、面作河朔偉。

人間一好漢、誰似張長史。
上書苦留君、言拙輒報已。
置之勿復道、出處俱可喜。
攀輿共六尺、食肉飛万里。
誰言遠近殊、等呈朝廷美。
遙知送別處、醉墨爭淋紙。
我以病杜門、商頌空振履。
後會知何日、一飲如覆水。
善保千金軀、前言戲之耳。

■ 【08-2-027】 和張昌言喜雨

二聖憂勤忘寢食、百神奔走會風雲。
禁林夜直鳴江瀨、清洛朝回起縠紋。
夢覺酒醒聞好句、帳空簟冷發余薰。
秋來定有豐年喜、剩作新詩準備君。

■ 【08-2-028】 次韻劉貢父西省種竹

要知西掖承平事、記取劉郎種竹初。
旧德終呼名字外、後生誰統笑談余。
成陰障日行當見、取筍供庖計已疏。
白首林間望天上、平安時報故人書。

■ 【08-2-029】 答李方叔

■ 【08-2-030】 答龐安常

■ 【08-2-031】 次韻子由書李伯時所藏韓幹馬

潭潭古屋雲幕垂、省中文書如乱糸。

忽見伯時画天馬、朔風胡沙生落錐。

天馬西來從西極、勢与落日争分馳。

竇膺豹股頭八尺、奮迅不受人間羈。

元狩虎脊聊可友、開元玉花何足奇。

伯時有道真吏隱、飲啄不羨山梁雌。

丹青弄筆聊爾耳、意在万里誰知之。

幹惟画肉不画骨、而況失實空余皮。

煩君巧說腹中事、妙語欲遣黄泉知。

君不見韓生自言無所學、厩馬万匹皆吾師。

■ 【08-2-032】 軾以去歲春夏、侍立邇英、而秋冬之交、子由相繼入侍、次韻絕句四首、各述所懷

其一

瞳瞳日脚曉猶清、細細槐花暖自零。

坐閱諸公半廊廟、時看黄色起天庭。

其二

上尊初破早朝寒、茗碗仍沾講舌乾。

陛楯諸郎空雨立、故忝慚悔不儒冠。

其三

兩鶴催頹病不言、年來相繼亦乘軒。

誤聞九奏聊飛舞、可得徘徊為啄吞。

其四

微生偶脫風波地、晚歲猶存鐵石心。

定是香山老居士、世緣終淺道根深。

■ 【08-2-033】 送宋構朝散知彭州迎侍二親

東來誰迎使君車、知是丈人屋上烏。

丈人今年二毛初、登樓上馬不用扶。

使君負弩為前驅、蜀人不復談相如。

老幼化服一事無、有鞭不施安用蒲。

春波如天漲平湖、鞞紅照坐香生膚。

肴糲上壽白玉壺、公堂登歌鳳將雛。

諸孫歡笑爭挽鬚、蜀人画作西湖圖。

■ 【08-2-034】 郭熙画秋山平遠

玉堂昼掩春日閑、中有郭熙画春山。

鳴鳩乳燕初睡起、白波青嶂非人間。

離離短幅開平遠、漠漠疏林寄秋晚。

恰似江南送客時、中流回頭望雲巘。
伊川佚老鬢如霜、臥看秋山思洛陽。
為君紙尾作行草、炯如嵩洛浮秋光。
我從公遊如一日、不覺青山映黃髮。
為画竜門八節灘、待向伊川買泉石。

■ 【08-2-035】 次韻張昌言喜雨

千里黃流失故居、年來赤地到青徐。
遙聞爭誦十行語、無異親巡六尺輿。
精貫天人一言足、雲興嶽瀆萬靈趨。
愛君誰似元和老、賀雨詩成即諫書。

■ 【08-2-036】 和穆父新涼

家居妻兒号、出仕猿鶴怨。
未能逐什一、安敢搏九万。
常恐樗櫟身、坐纏冠蓋蔓。
受知如負債、粗報乃焚券。
但知眠牛衣、寧免刺虎圈。
清風來既雨、新稻香可飯。
紫螯已肥、白酒誰能勸。
君今崔蔡手、政比張趙健。
三公行可致、一語先自獻。
幸推江湖心、適我魚鳥願。

■ 【08-2-037】 晁補之所藏与可画竹三首

其一

与可画竹時、見竹不見人。

豈独不見人、嗒然遺其身。

其身与竹化、無窮出清新。

莊周世無有、誰知此凝神。

其二

若人今已無、此竹寧復有。

那将春蚓筆、画作風中柳。

君看断崖上、瘦節蛟蛇走。

何時此霜竿、復入江湖手。

其三

晁子拙生事、拳家聞食粥。

朝来又絕倒、諛墓得霜竹。

可憐先生盤、朝日照苜蓿。

吾詩固云爾、可使食無肉。

■ 【08-2-038】 戲用晁補之韻

昔我嘗陪醉翁醉、今君但吟詩老詩。

清詩咀嚼那得飽、瘦竹瀟灑令人飢。

試問鳳凰飢食竹、何如駑馬肥苜蓿。
知君忍飢空誦詩、口頰瀾翻如布穀。

■ 【08-2-039】 書皇親画扇

十年江海寄浮沈、夢繞江南黃葦林。
誰謂風流貴公子、筆端還有五湖心。

■ 【08-2-040】 書李世南所画秋景二首

其一

野水參差落漲痕、疎林欹倒出霜根。
扁舟一棹歸何處、家在江南黃葉村。

其二

人間斤斧日創夷、誰見鼉蛇百尺姿。
不是溪山曾獨往、何人解作掛猿枝。

■ 【08-2-041】 与李方叔

■ 【08-2-042】 書鄴陵王主簿所画折枝二首

其一

論画以形似、見与兒童隣。
賦詩必此詩、定非知詩人。
詩画本一律、天工与清新。

邊鸞雀写生、趙昌花伝神。
何如此兩幅、疏淡含精勻。
誰言一点紅、解寄無邊春。

其二

瘦竹如幽人、幽花如処女。
低昂枝上雀、搖蕩花間雨。
双翎決將起、衆葉紛自舉。
可憐採花蜂、清蜜寄兩股。
若人富天巧、春色入毫楮。
懸知君能詩、寄声求妙語。

■ 【08-2-043】 和張耒高麗松扇

可憐堂堂十八公、老死不入明光宮。
万牛不來難自獻、裁作团团手中扇。
屈身蒙垢君一洗、挂名君家詩集裏。
猶勝漢宮悲婕妤、網虫不見乘鸞子。

■ 【08-2-044】 故李承誡之待制六丈挽詞

青青一寸松、中有梁棟姿。
天驥墮地走、万里端可期。
世無阿房宮、下建五丈旂。
又無穆天子、西征燕瑤池。

才大古難用、老死亦其宜。
 丈夫恐不免、豈患莫已知。
 公如松与驥、少小称偉奇。
 俯仰自廊廟、笑談無羌夷。
 清朝竟不用、白首仍憂時。
 願斬橫行將、請烹乾沒兒。
 言雖不見省、坐折奸雄窺。
 嗟我去公久、江湖生白髭。
 歸來耆旧尽、零落存者誰。
 比公嵇中散、竜性不可羈。
 疑公李北海、慷慨多雄詞。
 淒涼五君詠、沈痛八哀詩。
 邪正久乃明、人今属公思。
 九原不可作、千古有余悲。

■ 【08-2-045】送張天覺得山字

西登太行嶺、北望清涼山。
 晴空浮五髻、晦霧卿雲間。
 余光入巖石、神草出茅管。
 何人相指似、稍稍落人寰。
 能令墮指兒、虬髯茁氷顏。
 祝君如此草、為民已恫瘝。
 我亦老且病、眼花腰脚頑。

念当勤致此、莫作河東慳。

■ 【08-2-046】 贈李道士、并叙

叙

駕部員外郎李君宗固、景祐中良吏也、守漢州。有道士尹可元、精練善画、以遺火得罪、当死。君緩其獄、会赦、獲免、時可元年八十一、自誓且死、必為李氏子以報。可元既死二十余年、而君子世昌之婦、夢可元入其室、生子曰得柔、小名蜀孫。幼而善画、既長、誦莊、老、喜之、遂為道士、賜号妙応、事母以孝謹聞。其写真、蓋妙絕一時云。

世人只数曹將軍、誰知虎頭非癡人。

腰間大羽何足道、頰上三毛自有神。

平生狎侮諸公子、戲著幼輿巖石裏。

故教世世作黃冠、布襪青鞋弄雲水。

千年鼻祖守關門、一念還為李耳孫。

香火旧緣何日尽、丹青余習至今存。

五十之年初過二、衰顏記我今如此。

他時要指集賢人、知是香山老居士。

（樂天為翰林學士、奉詔寫真集賢院。）

■ 【08-2-047】 次韻張舜民自御史出倅虢州留別

玉堂給札氣如雲、初喜湘累復佩銀。

樊口淒涼已陳跡、班心突兀見長身。

江湖前日真成夢、鄂杜他年恐卜隣。

此去若容陪坐嘯、故応客主尽詩人。

■ 【08-2-048】 書黃子思詩集後

■ 【08-2-049】 次韻王定国倅揚州

此身江海寄天遊、一落紅塵不易收。
未許相如還蜀道、空教何遜在揚州。
又驚白酒催黃菊、尚喜朱顏映黑頭。
火急著書千古事、虞卿応未厭窮愁。

■ 【08-2-050】 次韻米黻二王書跋尾二首

其一

三館曝書防蠹毀、得見來禽与青李。
秋蛇春蚓久相雜、野鷺家雞定誰美。
玉函金鑰天上来、紫衣敕使親臨啓。
紛綸過眼未易識、磊落掛壁空雲委。
歸來妙意独追求、坐想蓬山二十秋。
怪君何処得此本、上有桓玄寒具油。
巧偷豪奪古來有、一笑誰似癡虎頭。
君不見長安永寧里、王家破垣誰復修。

其二

元章作書日千紙、平生自苦誰与美。

画地为餅未必似、要令癡兒出饑水。
錦囊玉軸来無趾、粲然奪真疑聖智。
忍飢看書淚如洗、至今魯公余乞米。

■ 【08-2-051】次韻宋肇惠澄心紙二首

其一

詩老囊空一不留、百番曾作百金收。
知君也厭雕肝腎、分我江南数斛愁。

其二

君家家学陋相如、宜与諸儒論石渠。
古紙無多更分我、自忘給札奏新書。

■ 【08-2-052】郭熙秋山平遠二首

其一

目尽孤鴻落照边、遙知風雨不同川。
此間有句無人見、送与襄陽孟浩然。

其二

木落騷人已怨秋、不堪平遠發詩愁。
要看万壑争流处、他日終煩顧虎頭。

■ 【08-2-053】送歐陽弁監澶州酒

汗血駕鼓車、何從致千里。
 紛紛糟麴間、欲試賢公子。
 君家江南英、濯足滄浪水。
 却渡旧黄河、漲沙埋馬耳。
 由来付造物、倚伏何窮已。
 当念楚子文、三仕無愠喜。

■ 【08-2-054】 九月十五日、邇英講論語、終篇、賜執政講讀史官燕於東宮。又遣中使就賜御書詩各一首、臣軾得紫薇花絕句、其詞云、糸綸閣下文書靜、鐘鼓樓中刻漏長。独坐黄昏誰是伴、紫薇花对紫薇郎。翼日、各以表謝、又進詩一篇、臣軾詩云
 繡裳昼袞雲垂地、不作成王剪桐戲。
 日高黄繖下西清、風動槐螭舞交翠。
 壁中蠹簡今千年、漆書科斗光射天。
 諸儒不復憂吻燥、東宮賜酒如流泉。
 酒酣復拜千金賜、一紙驚鸞回鳳字。
 蒼顏白髮便生光、袖有驪珠三十四。
 歸來車馬已喧闐、争看銀鈎墨色鮮。
 人間一日伝万口、喜見雲章第一篇。
 玉堂昼掩文書靜、鈴索不搖鐘漏永。
 莫言弄筆数行書、須信時平由主聖。
 犬羊散尽沙漠空、捷烽夜到甘泉宮。
 似聞指揮築上郡、已覺談笑無西戎。
 文思天子師文母、終閉玉闥辞馬武。

小臣願対紫薇花、試草尺書招贊普。

■ 【08-2-055】 狄山論匈奴

■ 【08-2-056】 昨見韓丞相言王定国、今日玉堂独坐、有懷其人

昼臥玉堂上、微風拳輕紈。

銅瓶下碧井、百尺鳴飛瀾。

俯仰清夢余、愛此一掬寒。

似予平生友、苦語涼肺肝。

秀眉玉兩頰、矯矯如翔鸞。

置之江淮交、清詩洗江湍。

江鱗対白酒、信美非所安。

丞相功業成、還家酒杯寬。

人間有此客、折簡呼不難。

相將扣東閣、起舞尽余歡。

■ 【08-2-057】 上韓持国

韓氏三虎秉枢極、中有一虎似偉節。

端居隱几学無心、夙駕入朝常正色。

犯時独行太●▼、回天不忌真藥石。 [●は山の右に畏、▼は山の右に鬪]

輦致歸来荷二聖、推排使至有衆力。

吾儕小人但飽飯、不有君子何能国。

西湖醉臥春水船、如何為人作豊年。

■ 【08-2-058】 次韻韓康公置酒見留

庭下黃花一醉同、重來雪嶺已穹窿。
不応屢費譏安石、但使無多酌次公。
鐘乳金釵人似玉、鶻弦鉄撥坐生風。
少卿尚有車茵在、頗覺寬容勝弱翁。

■ 【08-2-059】 書雪堂義墨

■ 【08-2-060】 次韻王都尉偶得耳疾

君知六鑿皆為贅、我有一言能決疣。
病客巧聞牀下蟻、癡人強覷棘端猴。
聰明不在根塵裏、菜餌空為婢僕憂。
但試周郎看聾否、曲音小誤已回頭。

■ 【08-2-061】 跋南唐挑耳圖

■ 【08-2-062】 送喬仝寄賀君六首、并叙

叙

旧聞靖長官、賀水部、皆唐末五代人、得道不死。章聖皇帝東封、有謁於道左者、其謁云、晋水部員外郎賀亢、再拜而去、上不知也。已而閱謁、見之、大驚、物色求之不可得。天聖初、又使其弟子喻澄者詣闕進仏道像、直數千萬。張公安道与澄游、具得其事。又有喬仝者、少得大風疾、幾死、賀使學道、今年八十、益壯盛。人無復見賀者、而仝數見之。元祐二年十二

月、全來京師十許日。余留之、不可、曰、賀以上元期我於蒙山、又曰、吾師嘗游密州、識君於常山道上、意若喜君者。作是詩以送之、且作五絕句以寄賀。

其一

君年二十美且都、初得惡疾墮眉鬚。
紅顏白髮驚妻孥、覽鏡自嫌欲棄軀。
結茅窮山啖松腴、路逢逃秦博士盧。
方瞳照野清而癯、再拜未起煩一呼。
覺知此身了非吾、炯然蓮花出泥塗。
隨師東游渡濰州、山頭見我兩輪朱。
豈知仙人混屠沽、爾來八十胸垂胡。
上山如飛嗔人扶、東歸有約不敢渝。
新年當參老仙儒、秋風西來下雙鳧、得棗如瓜分我無。

其二

生長兵間早脫身、晚為元祐太平人。
不驚渤海桑田變、來看龜蒙漏沢春。

其三

曾謁東封玉輅塵、幅巾短褐亦逡巡。
行宮夜奏空名姓、悵望雲霞縹緲人。

其四

垂老區區豈為身、微言一發重千鈞。
始知不見高皇帝、正似商山四老人。

其五

旧聞父老晋郎官、已作飛騰變化看。
聞道東蒙有居處、願供薪水看燒丹。

其六

千古風流賀季真、最憐嗜酒謫仙人。
狂吟醉舞知無益、粟飯藜羹間養神。

■ 【08-2-063】送家安国教授歸成都

別君二十載、坐失兩鬢青。
吾道雖艱難、斯文終典型。
屢作退飛鷁、羞看乾死螢。
一落戎馬間、五見霜葉零。
夜談空說劍、春夢猶橫經。
新科復旧貫、童子方乞靈。
須煩凌雲手、去作入蜀星。
蒼苔高朕室、古柏文翁庭。
初聞編簡香、始覺鋒鏑腥。
岷峨有雛鳳、梧竹養修翎。
嗚呼忘嶮律、飛舞集虞廷。

吾儕便歸老、亦足慰余齡。

■ 【08-2-064】 与千之侄

■ 【08-2-065】 記樂天西掖通東省詩

■ 【08-2-066】 憲宗姜茶湯

■ 【08-2-067】 樂全先生文集叙

■ 【08-3-001】 和子由除夜元日省宿致齋三首

其一

江湖流落豈關天、禁省相望亦偶然。

等是新年未相見、此身忝坐不歸田。

其二

白髮蒼顏五十三、家人強遣試春衫。

朝回兩袖天香滿、頭上銀幡笑阿咸。

其三

當年踏月走東風、坐看春闈鎖醉翁。

白髮門生幾人在、却將新句調兒童。

■ 【08-3-002】 韓康公坐上侍兒求書扇

其一

窓揺細浪魚吹日、手弄黃花蝶透衣。
不覺南風吹酒醒、空教明月照人歸。

其二

一一窓扉面水開、更於何處覓蓬萊。
天香滿袖人知否、曾到旃檀小殿來。

■ 【08-3-003】 書試院中詩

■ 【08-3-004】 韓康公挽詞三首

其一

故国非喬木、興王有世臣。
嗟余後死者、猶及老成人。
德業經文武、風流表縉紳。
空余行樂地、处处泣遺民。

其二

再世忠清德、三朝翼贊勳。
功成不歸国、就訪敢忘君。
旧学嚴詩律、余威靖塞氛。

何当繼韓奕、故吏總能文。

其三

西第開東閣、初筵点後塵。

笙歌邀白髮、燈火樂青春。

扶路三更罷、回頭一夢新。

賦詩猶墨湿、把卷独沾巾。

■ 【08-3-005】 余与李薦方叔相知久矣、領貢舉事、而李不得第、愧甚、作詩送之

与君相從非一日、筆勢翩翩疑可識。

平時謾說古戰場、過眼終迷日五色。

我慚不出君大笑、行止皆天子何責。

青袍白紵五千人、知子無怨亦無德。

買羊沽酒謝玉川、為我醉倒春風前。

歸家但草凌雪賦、我相夫子非臆仙。

■ 【08-3-006】 和宋肇遊西池次韻

漢皇慈儉不開邊、尚教千艘下瀨船。

貪看艨艟飛鬪艦、不知鼉虺舞鈞天。

故山西望三千里、往事回思二十年。

自笑区区足官府、不如公子散神仙。

■ 【08-3-007】 僕領貢舉未出、錢穆父雪中作詩見及、三月二十日、同游金明池、始見其詩、

次韻為答

雪知我出已全消、花待君來未敢飄。
行避門生時小飲、忽逢騎吏有嘉招。
魚龍絕技來千里、斑白遺民數四朝。
知有黃公酒壚在、蒼顏華發自相逢。

■ 【08-3-008】 与李端伯寶文

■ 【08-3-009】 書艾宣畫四首

其一 竹鶴

此君何處不相宜、況有能言老令威。
誰識長身古君子、猶將縑布綠深衣。

其二 黃精鹿

太華西南第幾峰、落花流水自重重。
幽人只采黃精去、不見春山鹿養茸。

其三 杏花白鷗

天工剪刻為誰妍、抱蕊游蜂自作團。
把酒惜春都是夢、不如閑客此閑看。

其四 蓮龜

半脫蓮房露壓欹、綠荷深處有遊龜。

只應翡翠蘭苕上、獨見玄夫曝日時。

■ 【08-3-010】次許冲元韻送成都高士敦鈐轄

移中老監本虛名、懶作燕山万里行。

坐看飛鴻迎使節、歸來駿馬換傾城。

高才本不緣勲閥、余力還思治蜀兵。

西望雪山烽火尽、不妨樽酒寄平生。

■ 【08-3-011】跋宋漢傑画

■ 【08-3-012】又跋漢傑画山二首

■ 【08-3-013】謝宋漢傑惠李承晏墨

老松燒尽結輕花、妙法來從北李家。

翠色冷光何所似、牆東鬢髮墮寒鴉。

■ 【08-3-014】与李方叔

■ 【08-3-015】次韻子由五月一日同軫對

跪奉新書笏在腰、談王正欲伴耕樵。

晉陽豈為一門事、宣政聊同五月朝。

憂患半生聯出處、歸休上策早招要。

後生可畏吾衰矣、刀筆從來錯料堯。

■ 【08-3-016】 張士遜中孔道輔

■ 【08-3-017】 錄陶淵明詩

■ 【08-3-018】 与王慶源

■ 【08-3-019】 慶源宣義王文、以累舉得官、為洪雅主簿、雅州戶掾。遇吏民如家人、人安樂之。既謝事、居眉之青神瑞草橋、放懷自得。有書來求紅帶、既以遺之、且作詩為戲。請黃魯直學士、秦少游賢良各為賦一首、為老人光華

青衫半作霜葉枯、遇民如兒吏如奴。

吏民莫作官長看、我是識字耕田夫。

妻啼兒号刺史怒、時有野人來挽鬚。

扞衣自註下下考、芋魁飯豆吾豈無。

歸來瑞草橋邊路、獨遊還佩平生壺。

慈姥巖前自喚渡、青衣江畔上人爭扶。

今年蠶市數州集、中有遺民懷袴襦。

邑中之黔相指似、白髯紅帶老不癯。

我欲西歸卜隣舍、隔牆拊掌容歌呼。

不學山王乘駟馬、回頭空指黃公壚。

■ 【08-3-020】 次前韻送程六表弟

君家兄弟真連壁、門十朱輪家万石。
竹使猶分刺史符、上方行賜尚書舄。
前年持節發倉廩、到处壳刀收繭粟。
歸來閉口不論功、却走渡江誰復惜。
君才不用如澗松、我老得全猶社櫟。
青衫莫厭百僚底、白首上有千薪積。
憶昔江湖一釣舟、無数雲山供点筆。
未忘便障西風扇、只恐先移北山檄。
憑君寄謝江南叟、念我空見長安日。
浮江泝蜀有成言、江水在此吾不食。

■ 【08-3-021】 題崔布袋真儀

■ 【08-3-022】 跋盧鴻學士草堂圖

■ 【08-3-023】 送周正孺知東川

得郡書生榮、還家昔人重。
而況東西川、千騎許上冢。
里門下車入、父老自驚聳。
端如何武賢、不事長卿寵。
清時養材傑、杞梓方培擁。
未忘遺合抱、取用及把拱。
如君尚出麾、顧我宜耕壟。

先歸謝先手、求去悔不勇。
豈云慕廉退、實自知衰冗。
為君掃棠陰、画像或相踵。

■ 【08-3-024】 樂苦説

■ 【08-3-025】 虚飄飄

虚飄飄、画檐蛛結網、銀漢鵲成橋。
塵漬雨桐葉、霜飛風柳条。
露凝殘点紅日、星曳余光横碧霄。
虚飄飄、比浮名利猶堅牢。

■ 【08-3-026】 相国寺題名

■ 【08-3-027】 碣石庵戲贈湛庵主

保康橋上夜觀燈、碣石巖前夏飲水。
莫把山林笑朝市、老夫手裏有烏藤。

■ 【08-3-028】 和王晋卿題李伯時画馬

督郵有良馬、不為君所奇。
顧收紙上影、駿骨何由歸。
一朝見縈策、蟻封驚肉飛。
豈惟馬不遇、人已半生癡。

■ 【08-3-029】 題晁無咎藏画馬

■ 【08-3-030】 自跋石恪画維摩贊、魚枕冠頌

■ 【08-3-031】 跋送石昌言引

■ 【08-3-032】 送錢穆父出守越州絕句二首

其一

簿書常苦百憂集、杯酒今忘一笑開。

京兆從教思廣漢、會稽聊喜得方回。

其二

若耶溪水雲門寺、賀監荷花空自開。

我恨今猶在泥滓、勸君莫棹酒船回。

■ 【08-3-033】 西江月

莫歎平齊落落、

且忘去魯遲遲。

與君各記少年時、

須信人生如寄。

白髮千莖相送、

深杯百罰休辭。

拍浮何用酒為池。

我已為君德醉。

■ 【08-3-034】 答黃魯直

■ 【08-3-035】 書贈柳仲矩

■ 【08-3-036】 文驥字說

■ 【08-3-037】 送程七表弟知泗州

江湖不在眼、塵土坐滿顏。

繫舟清洛尾、初見淮南山。

淮山相媚好、曉鏡開烟鬢。

持此娛使君、一笑簿領間。

使君如天馬、朝燕暮荆蛮。

時無王良手、空老十二閑。

聊當出毫末、化服狡与頑。

勿謂無人知、古仙臨濤湾。

赤子視万類、流萍閱人寰。

但使此可人、余事真茅菅。

■ 【08-3-038】 送曹輔赴閩漕

曹子本儒俠、筆勢翻濤瀾。
往來戎馬間、邊風裂儒冠。
詩成橫槊裏、楯墨何曾乾。
一旦事遠遊、紅塵隔巖灘。
平生羊炙口、並海搜鹹酸。
一從荔枝飲、豈念苜蓿盤。
我亦江海人、市朝非所安。
常恐青霞志、坐隨白髮闌。
淵明賦歸去、談笑便解官。
今我何為者、索身良獨難。
憑君問清淮、秋水今幾竿。
我舟何時發、霜露日已寒。

■ 【08-3-039】 次韻王郎子立風雨有感

百年一俯仰、寒暑相主客。
稍增裘褐氣、已覺困扇厄。
不煩計榮辱、此喪彼有獲。
我琴終不敗、無攫故無醜。
後生不自牧、呻吟空挾策。
攬苗不待長、買菜苦求益。
此郎獨靜退、門外無行迹。
但恐陶淵明、每為飢所迫。
淒風弄衣結、小雪穿門席。

願君付一笑、造物亦戲劇。
朝來賦雲夢、筆落風雨疾。
為君裁春衫、高會開桂籍。

■ 【08-3-040】 書黃庭內景經尾、并叙

叙
余既書黃庭內景經、以贈葆光道師、而竜眠居士復為作經相其前、而画余二人像其後。筆勢雋妙、遂為希世之寶、嗟歎不足、故復贊之

太上虛皇出靈篇、黃庭真人舞胎仙。
髯耆兩脚相後前、卅妙夾持清且妍。
十有二神服銳堅、巍巍堂堂人中天。
問我何修果此緣、是心朝空夕了然、恐非其人世莫傳。
殿以二士蒼鵠鶩、南隨道師歷山淵。
山人迎笑喜我還、問誰遣化老竜眠。

■ 【08-3-041】 葆光法師真贊

■ 【08-3-042】 送蹇道士歸廬山

物之有知蓋恃息、孰居無事使出入。
心無天遊室不空、六鑿相攘婦爭席。
法師逃人入廬山、山中無人自往還。
往者一空還者失、此身正在無還間。

綿綿不絕微風裏、內外丹成一彈指。

人間俯仰三千秋、騎鶴歸來與子遊。

■ 【08-3-043】 李伯時画像跋

■ 【08-3-044】 興國寺浴室院六祖畫贊、并叙

■ 【08-3-045】 書魯直浴室題名後並魯直題

■ 【08-3-046】 乞郡劄子

■ 【08-3-047】 書出局詩

■ 【08-3-048】 書林次中所得李伯時歸去來、陽關二圖後

其一

不見何戡唱渭城、旧人空數米嘉榮。

鼉眠獨識殷勤處、画出陽關意外聲。

其二

兩本新圖寶墨香、樽前獨唱小秦王。

為君翻作歸來引、不學陽關空斷腸。

■ 【08-3-049】 臥病逾月、請郡不許、復直玉堂。十一月一日鎖院、是日苦寒、詔賜官燭法

酒、書呈同院

微霰疏疏点玉堂、詞頭夜下攬衣忙。
分光禦燭星辰爛、拜賜宮壺雨露香。
醉眼有花書字大、老人無睡漏声長。
何時却逐桑榆暖、社酒寒燈樂未央。

■ 【08-3-050】 送周朝議守漢州

茶為西南病、岷俗記二李。
何人折其鋒、矯矯六君子。
君家尤出力、流落初坐此。
謂當收桑榆、華髮看劍履。
胡為犯風雪、歲晚行未已。
念歸誠得計、顧自為謀耳。
吾聞江漢間、瘡痍有未起。
莫輕龔遂老、君王付尺箠。
召還當有詔、挽袖謝隣里。
猶堪作水衡、供張園林美。

■ 【08-3-051】 木山、并叙

叙

吾先君子嘗蓄木山三峰、且為之記与詩。詩人梅二丈聖俞見而賦之。今三十年矣、而猶子千乘又得五峰、益奇。因次聖俞韻、使並刻之其側。

木生不用回万牛、願終天年仆沙洲。
時來幸逢河伯秋、掀然見怪推不流。
蓬婆雪嶺巧雕鏤、蟄虫行蟻為豪酋。
阿咸大膽忽持去、河伯好事不汝尤。
城中古沼浸坤軸、一林瘦竹吾菟裘。
二頃良田不難買、三年榿木行可櫛。
会将白髮对蒼巘、魯人不厭東家丘。

■ 【08-3-052】送千乘、千能兩侄還鄉

治生不求富、誦書不求官。
譬如飲不醉、陶然有余歡。
君看龐德公、白首終泥蟠。
豈無子孫念、顧獨遺以安。
鹿門上冢回、牀下拜龍鸞。
躬耕竟不起、耆旧節獨完。
念汝少多難、冰雪落綺紈。
五子如一人、奉養真色難。
烹雞獨饋母、自饗苜蓿盤。
口腹恐累人、寧我食無肝。
西來四千里、敝袍不言寒。
秀眉似我兄、亦復心閑寬。
忽然舍我去、歲晚留余酸。
我豈軒冕人、青雲意先闌。

汝歸蒔松菊、環以青瑯玕。
檀陰三年成、可以掛我冠。
清江入城郭、小圃生微瀾。
相從結茅舍、曝背談金鑾。

■ 【08-3-053】 与蒲伝正

■ 【08-3-054】 題李伯時画趙景仁琴鶴図二首

其一

清献先生無一錢、故宖琴鶴是家伝。
誰知默鼓無弦曲、時向珠宮舞幻仙。

其二

醜石寒松未易親、聊將短曲調長人。
乘軒故自非明眼、終日傲傲舞爨薪。

■ 【08-3-055】 書別子開

■ 【08-3-056】 評詩人写物

■ 【08-3-057】 次韻王定国会飲清虚堂

何遜揚州又幾年、官梅詩興故依然。
何人可復問季孟、与子不妨中聖賢。

卜築君方淮上郡、歸心我已劍南川。
此身正似蠶將老、更盡春光一再眠。

■ 【08-3-058】興節侍宴前一日、微雪、與子由同訪王定國、小飲清虛堂。定國出數詩皆佳而、五言尤奇。子由又言昔與孫巨源同過定國、感念存沒、悲歎久之。夜歸、稍醒、各賦一篇、明日朝中以示定國也

天風淅淅飛玉沙、詔恩歸沐休早衙。
遙知清虛堂裏雪、正似蒼蘊林中花。
出門自笑無所詣、呼酒持勸惟君家。
踏水凌兢戰疲馬、扣門剝啄驚寒鴉。
羨君五字入詩律、欲與六出爭天葩。
頭風已倩檄手愈、背癢却得仙爪爬。
銀瓶瀉油浮蟻酒、紫碗鋪粟盤龍茶。
幅巾起作鸚鵡舞、疊鼓誰摻漁陽搥。
九衢燈火雜夢寐、十年聚散空咨嗟。
明朝握手殿門外、共看銀闕噉朝霞。

■ 【08-3-059】真宗信李沆

■ 【08-3-060】書王定國所藏煙江疊嶂圖

江上愁心千疊山、浮空積翠如雲煙。
山耶雲耶遠莫知、煙空雲散山依然。
但見兩崖蒼蒼暗絕谷、中有百道飛來泉。

縈林絡石隱復見、下赴谷口為奔川。
 川平山開林麓斷、小橋野店依山前。
 行人稍度喬木外、漁舟一葉江吞天。
 使君何從得此本、點綴毫末分清妍。
 不知人間何處有此境、徑欲往買二頃田。
 君不見武昌樊口幽絕處、東坡先生留五年。
 春風搖江天漠漠、暮雲卷雨山娟娟。
 丹楓翻鴉伴水宿、長松落雪驚醉眠。
 桃花流水在人世、武陵豈必皆神仙。
 江山清空我塵土、雖有去路尋無緣。
 還君此畫三歎息、山中故人宥有招我歸來篇。

■ 【08-3-061】王晉卿作煙江疊嶂圖、僕賦詩十四韻、晉卿和之、語特奇麗。因復次韻、不
 獨紀其詩畫之美、亦為道其出處契闊之故、而終之以不忘在莒之戒、亦朋友忠愛之義也
 山中拳頭望日邊、長安不見空雲烟。
 歸來長安望山上、時移事改應潸然。
 管弦去盡賓客散、惟有馬埒編金泉。
 渥洼故自千里足、要飽風雪輕山川。
 屈居華屋啖棗脯、十年俯仰竟旗前。
 却因病瘦出奇骨、塩車之厄寧非天。
 風流文采磨不盡、水墨自與詩爭妍。
 畫山何必山中人、田歌自古非知田。
 鄭虔三絕君有二、筆勢挽回三百年。

欲將巖谷亂窈窕、眉峰修嫵誇連娟。
人間何有春一夢、此身將老蚕三眠。
山中幽絕不可久、要作平地家居仙。
能令水石長在眼、非君好我當誰緣。
願君終不忘在莒、樂時更賦囚山篇。

■ 【08-3-062】 王晉卿所藏著色山二首

其一

縹緲營丘水墨仙、浮空出沒有無間。
邇來一變風流盡、誰見將軍著色山。

其二

犖確何人似退之、意行無路欲從誰。
宿雲解駁晨光漏、獨見山紅澗碧時。

■ 【08-3-063】 論周穉擅議配享自劾劄子

■ 【08-3-064】 夜直玉堂、携李之儀端叔詩百余首、讀至夜半書其後

玉堂清冷不成眠、伴直難呼孟浩然。
暫借好詩消永夜、每逢佳處輒參禪。
愁侵硯滴初含凍、喜入燈花欲鬪妍。
寄語君家小兒子、他時此句一時編。

■ 【08-3-065】 次韻王定国得晋卿酒相留夜飲

短衫压手氣橫秋、更著仙人紫綺裘。

使我有名全是酒、從他作病且忘憂。

詩無定律君應將、醉有真鄉我可侯。

且倒余樽尽今夕、睡蛇已死不須鉤。

■ 【08-3-066】 陳隋好樂

■ 【08-3-067】 范景仁墓誌銘

■ 【08-3-068】 祭古塚文

■ 【08-3-069】 書正信和尚塔銘後

■ 【08-3-070】 与弁才禪師

■ 【08-3-071】 次韻劉貢父春日賜幡勝

寬詔隨春出內朝、三軍喜氣挾狐貂。

鏤銀錯落翻斜月、剪彩繽紛舞慶霄。

臘雪強飛才到地、曉風偷轉不驚條。

脫冠徑醉忘歸臥、便腹從人笑老韶。

■ 【08-3-072】 次韻王晋卿惠花栽、栽所寓張退傅第中

坐來念念失前人、共向空中寓一塵。

若問此花誰是主、天教閑客管青春。

■ 【08-3-073】次韻王晉卿上元侍宴端門

月上九門開、星河繞露台。

君方枕中夢、我亦化人來。

光動仙毬綫、香余步輦回。

相從穿万馬、衰病若為陪。

■ 【08-3-074】王鄭州挽詞

羨君華髮起琳宮、右輔初還鼓角雄。

千里農桑歌子產、一時冠蓋慕蕭嵩。

那知聚散春糧外、便有悲歡過隙中。

京兆同僚幾人在、猶思對案筆生風。

■ 【08-3-075】書王定國所藏王晉卿畫著色山二首

其一

白髮四老人、何曾在商顏。

煩君紙上影、照我胸中山。

山中亦何有、木老土石頑。

正賴天日光、澗谷紛爛斑。

我心空無物、斯文定何闕。

君看古井水、万象自往還。

其二

君歸嶺北初逢雪、我亦江南五見春。
寄語風流王武子、三人俱是識山人。

■ 【08-3-076】 寄傲軒

先生英妙年、一掃千兔禿。
仕進固有余、不肯踐場屋。
通闡何所傲、傲名非傲俗。
定知軒冕中、享榮不償辱。
豈無自安計、得失猶軫轂。
先生獨揚揚、憂患莫能瀆。
得如虎挾乙、失若龜藏六。
茅檐聊寄寓、俯仰亦自足。
東坡無辺春、方寸盡藏蓄。
醉哦旁若無、獨侑一樽醪。
牀頭車馬道、殘月掛疏木。
朝客紛擾時、先生睡方熟。

■ 【08-3-077】 送呂昌朝知嘉州

不羨三刀夢蜀都、聊將八詠繼東吳。
臥看古仏凌雲閣、敕賜詩人明月湖。
得句會忘縁竹鶴、思歸寧復為蓴鱸。

橫空好在修眉色、頭白猶堪乞左符。

■ 【08-3-078】 記奪魯直墨

■ 【08-3-079】 書黃魯直惠郎奇筆

■ 【08-3-080】 書魯直所藏徐偃筆

■ 【08-3-081】 次韻黃魯直寄題郭明父府推穎州西齋二首

其一

樹頭啄木常疑客、客去而曠定不然。

脫轄已忘生井沫、解衣聊復起庖煙。

平生詩酒真相污、此去文書恐獨賢。

早晚西湖映華髮、小舟翻動水中天。

其二

寂寞東京月旦州、德星無復綴珠旒。

莫嗟平輿空神物、尚有西齋接勝流。

春夢屢尋湖十頃、家書新報橘千頭。

雪堂亦有思歸曲、為謝平生馬少游。

■ 【08-3-082】 書次韻王晉送梅花一首後

■ 【08-3-083】 和王晋卿送梅花次韻

東坡先生未歸時、自種来禽与青李。
五年不踏江頭路、夢逐東風泛蘋芷。
江梅山杏為誰容、独笑依依臨野水。
此間風物君未識、花浪翻天雪相激。
明年我復在江湖、知君对花三嘆息。

■ 【08-3-084】 書李伯時山莊圖後

■ 【08-3-085】 蜀公不与物同尽

■ 【08-3-086】 与家退翁

■ 【08-3-087】 跋邢敦夫南征賦

■ 【08-3-088】 范文正公文集叙

■ 【08-3-089】 題柳耆卿八声甘州